

靈界通信 小桜姫物語

浅野和三郎

青空文庫

舌代

本物語は謂わば家庭的に行われたる靈界通信の一にして、そこには些の誇張も夾雜物もないものである。が、其の性質上記の如きところより、之を発表せんとするに当りては、亡弟も可なり慎重な態度を採り。靈告による祠の所在地、並に其の修行場などを實地に踏査する等、いよいよ其の架空的にあらざる事を確かめたる後、始めて之を雜誌に掲載せるものである。

靈界通信なるものは、純真なる媒者の犠牲的行為によつてのみ信を措くに足るものが得らるるのであつて、媒者が家庭的である

か否かには、大なる関係がなさそうである。否、家庭的なものが寧ろ不純物の夾雑する憂なく、却つて委曲を尽し得べしとさえ考えらるるのである。

それは兎に角として、また内容価値の如何も之を別として、亡弟が心を籠めて遣せる一産物たるには相違ないのである。今や製本成り、紀念として之を座右に謹呈するに当たり、この由来の一端を記すこと爾り。

昭和十二年三月

浅野正恭

序

靈界通信——即ち靈媒の口を通じ或は手を通じて靈界居住者が現界の我々に寄せる通信、例を挙げれば Gerldine Cummins の *Beyond Human Personality* は所謂「自動書記」の所産である。此書中に含まるる論文は故フレデリク・マイヤーズ——詩人として令名があるが、特に心靈科学に多大の努力貢献をした人——が靈界よりカムミンスの手を仮りて書いたものと信ずる旨をオリバ・ロツヂ卿、ローレンス・チョンス卿が証言した。（昨年十二月十八日の “The Two Words” 所掲）

カムミンスの他の自動書記は是迄四五種ある。其文体は各々相違して居る。又彼の自著小説があるが、是は全く右数種の自動書記と相違している。心靈科学に何等の実験がなく、潜在意識の所産などと説く懷疑者の迷を醒ますに足ると思う。

小桜姫物語は解説によれば鎌倉時代の一女性がT夫人の口を借り数年に亘つて話たるものを浅野和三郎先生が筆記したのである。但し『T夫人の意識は奥の方に微かに残っている』から私の愚見に因れば多少の Fiction は或はあり得ぬとは保障し難い。

しかしこれらを斟酌しても本書は日本に於いては破天荒の著書である。是を完成し終った後、先生は二月一日突然発病し僅々三十五時間で逝いた。二十余年に亘り、斯学の為に心血を灑ぎ、

あまりの奮闘に精力を竭尽して斃れた先生は斯学における最大の偉勲者であることは曰う迄もない。

私は昨年三月二十二日、先生と先生の令兄浅野正恭中将と岡田熊次郎氏とに伴って駿河台の主婦の友社来賓室に於て九條武子夫人と語る霊界の座談会に列した。主婦の友五月号に其の筆記が載せられた。

日本でこの方面の研究は日がまだ浅い、この研究に従事した福来友吉博士が無知の東京帝大理学部排斥により同大学を追われたのは二十余年前である。英国理学の大家、エレクトロン首先研究者、クルクス管の発明者、ローヤル・ソサイティ会長の故クルクス、ソルボン大学教授リシエ博士（ノーベル勲章受領者）、

同じくローヤル・ソサイティ会長オリバ・ロツヂ卿……これら諸
大家の足許にも及ばぬ者が掛かる偉大な先進の努力と研究とのあ
るを全く知らず、先入が主となるので、井底の蛙の如き陋見から
心霊現象を或は無視し或は冷笑するのは気の毒千万である。浅野
先生が二十余年に亘る研究の結果の数種の著述心霊講座、神霊主
義と共に本書は日本に於ける斯学にとりて重大な貢献である。

仙台に於いて 土井晩翠

解説

——本書を繙かるる人達の為に——

浅野和二郎

本篇ほんぺんを集成しゅうせいしたるものは私わたくしであります、私自身わたくしじしんを
 その著者ちよしやというのはは当あたらない。私わたくしはただ入神にゅうしんちゆう中のT女じよの
 口くちから発はつせらるる言葉ことばを側はたで筆録ひつろくし、そして後あとで整理せいりしたとい
 うに過すぎません。

それなら本篇ほんぺんは寧ろT女じよの創作そうさくかというに、これも亦事實またじじつ

に^あ当てはま^{のこ}つていない。入^{にゆうしんちゆう}神中のT女の意識は奥^{おく}の方に^{ほう}微^{かす}

かに残^{のこ}つてはいるが、それは全然^{ぜんぜん}受身^{うけみ}の状^{じよう}態^{たい}に置^おかれ、そ

して彼女^{かのじよ}とは全然^{ぜんぜん}別個^{べつこ}の存在^{そんざい}——小桜姫^{こざくらひめ}と名告^{なのお}る他^たの人^{ひと}

格^{かく}が彼女^{かのじよ}の体軀^{たいく}を司配^{しはい}して、任意^{にんい}に口^{くち}を動^{うご}かし、又任意^{またにんい}に物^{もの}

を視^みせるのであります。従^{したが}つてこの物語^{ものがたり}の第一^{だいい}の責任者^{せきにんしゃ}は

むしろ右^{みぎ}の小桜姫^{こざくらひめ}かも知^しれないのであります。

つまるところ、本書^{ほんしよ}は小桜姫^{こざくらひめ}が通信者^{つうしんしゃ}、T女^{じよ}が受信者^{じゆしんしゃ}、

そして私が筆録者^{ひつろくしゃ}、総計^{そうけい}三人^{さんにん}がかりで出来上^{できあが}つた、一種特異^{しゆとくい}

の作品^{さくひん}、所謂^{いわゆる}靈界通信^{れいかい つうしん}なのであります。現在^{げんざい}欧米^{おうべい}の

出版界^{しゆつぱんかい}には、斯^こう言^いつた作品^{さくひん}が無数^{むすう}に現^{あら}われて居^おりますが、

本邦^{ほんぽう}では、翻訳書^{ほんやくしよ}以外^{いがい}にはあまり類例^{るいれい}がありません。

T女に斯うした能力が初めて起つたのは、実に大正五年の春の事で、数えて見ればモ一二十年の昔になります。最初彼女の起つた現象は主として靈視で、それは殆んど申分なきまでに的確明瞭、よく顕幽を突破し、又遠近を突破しました。越えて昭和四年の春に至り、彼女は或一つの動機から靈視の他に更に靈言現象を起すことになり、本人とは異つた他の人格がその口頭機關を占領して自由自在に言語を発するようになりました。『これで漸くトーキーができ上がった……』私達はそんな事を言つて歓んだものであります。『小櫻姫の通信』はそれから以後の産物であります。

それにしても右の所謂『小桜姫』とは何人か？ 本文

をお読みになれば判る通り、この女性こそは相州三浦新

井城主の嫡男荒次郎義光の奥方として相当世に

知られてゐる人なのであります。その頃三浦一族は小田原の北

條氏と確執をつづけていましたが、武運拙く、籠城三年

の後、荒次郎をはじめ一族の殆んど全部が城を枕に打死を遂

げたことはあまりにも名高き史的事蹟であります。その際小桜

姫がいかなる行動に出たかは、歴史や口碑の上ではあまり明

らかでないが、彼女自身の通信によれば、落城後間もなく

病にかかり、油壺の南岸、浜磯の仮寓でさびしく歸幽し

たらしいのであります。それかあらぬか、同地の神明社内に

は現げんに小桜神社こざくらじんじや（通称つうしよう 若宮様わかみやさま）という小社しょうしゃが遺のこつて居おり、今尚いまなお里人りじんの尊崇そんすうの標的まるとになつて居おります。

次つぎに当然とうぜん問題もんだいになるのは小桜姫こざくらひめとT女じよとの関係かんけいであり

ますが、小桜姫こざくらひめの告ぐる所ところによれば彼女かのじよはT女じよの守護靈しゆごれい、

言いわばその靈的れいてき指導者しどうしやで、両者りやうしやの間あいだが柄がらは切きつても切き

れぬ、堅かたき因縁いんねんの羈絆きずなで縛しばられているといふのであります。そ

れに就つきては本邦並ほんぽうならびに欧米おうべいの名ある靈媒れいばいによりて調査ちやうさを

すすめた結果けつかけ、ドーも事実じじつとして之これを肯定こうていしなければならぬ

ようであります。

尚なお面白おもしろいのは、T女じよの父ちちが、海軍将校かいぐんしょうこうであつた為ために、

はしなくも彼女かのじよの出生地しゆつしやうちがその守護靈しゆごれいと関係かんけい深ふかき三みうら

浦半島はんとうの一角かく、横須賀よこすかであつたことであります。更に彼女かのじよはその生涯しょうがいの最も重もつと要じゆうようなる時期じき、十七歳さいから三十三歳さいまでを三浦半島みうらはんとうで暮くらし、四百年前ねん彼女かのじよの守護靈しゆごれいが親める山河さんがに自分じぶんも親したしんだのであります。これは単なる偶然たんぐうぜんか、それとも幽冥ゆうめいの世界せかいからのとりなしか、神かみならぬ身みには容易よういに判断はんだんし得る限りではありません。

最後に一言さいごして置おきたいのは筆録ひつろくの責任者せきにんとしての私の態わたくした度いどであります。小桜姫こざくらひめの通信つうしんは昭和四年しやうわねん春はるから現在げんざいに至いたるまで足掛あしかけ八年ねんに跨またがりて現あらわれ、その分量ぶんりやうは相当そうとう沢山さんで、すでに数冊すうさつのノートを埋うずめて居おります。又その内容ないようも古今ここんに亘わたり、顕幽けんゆうに跨またがり、又或る部分またあぶぶんは一般的ぱんてき、又或る部

分は個人的と言った具合に、随分まちまちに入り乱れて居ります。従つてその全部を公開することは到底不可能で、私としては、ただその中から、心靈的に觀て参考になりそうな個所だけを、成るべく秩序を立てて拾い出して見たに過ぎません。で、材料の取捨選択の責は当然私が引受けなければなりません。しかし通信の内容は全然原文のまま、私意を加へて歪曲せしめたような箇所はただの一箇所もありません。その点は特に御留意を願いたいと存じます。

(十一、十、五)

一、その生立

修しゆぎよう行みじゆくも未熟しりよ、思慮たも足りない一人ひとりむかしの昔じよせいの女性おがおが
ましくもここにまかり出でる幕まくでないことはよく存ぞんじて居おりまする
が、斯こうも再さいさい々よお呼よび出だしに預あずかり、是非ぜひくわしい通つうしん信しんをと、
つづけざまにお催さいそく促うを受けましては、ツイその熱ねっしん心しんにほださ
れて、無む下げにおことわりもできなくなつて了しまつたのでございます。
それに又また神かみさまからも『折せ角かくであるから通つうしん信しんしたがよい』と
の思おぼしめし召めでございますので、今こんかい回かいいよいよ思おもい切きつてお言葉ことば
に従したがうことにいたしました。わたくし私わたしとしてはせいぜい古ふるい記き憶おくを辿たどり、

自分の知^しつてゐること、又自分の感^{かん}じたま^{また}まを、作^{つく}らず、飾^{かざ}らず、
 素直^{すなお}に申^{もう}述^しべることにいたします。それがいささかなりとも、
 現世^{げんせ}の方^{かた}々^{がた}の研^{けん}究^{きゆう}の資^た料^しともなればと念^{ねん}じて居^おります。何^ど
 うぞ卒^{うそ}あまり過^か分の期^の待^{ぞみ}をかけず、お心^{こころ}安^{やす}くおきき取^とりください
 ますように……。

ただ私^{わたくし}として、前^{まえ}以^{もつ}てこ^こに一^{ひと}つお断^{ことわ}りして置^おきたいことがご
 ざいます。それは私^{わたくし}の現^{げん}世^せ生^{せい}活^{かつ}の模^も様^{よう}をあまり根^ね掘^ほり葉^は掘^ほりお
 訊^{たず}ねにな^なられぬことでございます。私^{わたくし}にはそれが何^{なに}よりつらく、
 いまさらなん^{いまさらなん}と^{とりえ}え、昔^{むかし}の身^{みの}上^{うえ}など^{つゆ}を露^もほども物^{もの}語^{がた}りたくは
 今^{いま}更^{さら}何^{なん}の取^{とり}得^えもなき、
 ございませぬ。こ^せち^{かい}ら^ひの^き世^う界^つへ引^ひ移^{きうつ}つてから^わの私^{たくし}ど^もの第^{だい}一^いの
 修^{しゆ}行^{ぎよう}は、成^なるべく早^{はや}く醜^{みにく}い地^ち上^{じよう}の執^{しゆう}着^{ちやく}から離^{はな}れ、成^なる

べく速すみかに役やくにも立たぬ現世げんせの記憶きおくから遠とおざかることでございま
す。わたくし私どもはこれでもいろいろと工夫くふうの結果けつか、やつとそれができ
て参まゐつたのでございます。で、私どもに向むかつて身み上うへ嘶えをせい
と仰おほツしやるのは、言いわば辛かろうじて治なほりかけた心こころの古ふる疵きずを再ふたび
抉えぐり出すような、随ずい分ぶん惨むごたらしい仕打しうちなのでございます。幽ゆう
明いの交通こうつうを試こころみらるる人達ひとたちは常つねにこの事ことを念頭ねんとうに置いて
戴いたきとう存ぞんじます。そんな訳わけで、私わたくしの通信つうしんは、主おもに私わたくしがこちら
の世界せかいへ引移ひきうつつてからの経験けいけん……つまり幽界ゆうかいの生せい活かつ、修し
行ぎよう、見聞けんぶん、感かん想そうと言いつたような事柄ことがらに力ちからを入れて見みた
いのでございます。又またそれがこの道みちにたずさわる方々かたがたの私わたくしに期
待たいされるところかと存ぞんじます。むろん精せい神しんを統とう一いつして凝じつ乎と

深く考え込めば、どんな昔の事柄でもはつきり想い出すことが
 できないではありません。しかもその当時の光景までがそつ
 りそのまま形態を造つてありありと眼の前に浮び出てまいります。
 つまり私どもの境涯には殆んど過去、現在、未来の差別は
 ないのでございまして。……でも無理にそんな真似をして、足
 利時代の絵巻物をくりひろげてお目にかけて見たところで、
 大した価値はございません。現在の私としては到底そんな
 気分にはなりかねるのでございます。

と申しまして、私が今いきなり死んでからの物語を始めた
 のでは、何やらあまり唐突……現世と来世との連絡が少しも
 判らないので、取りつくしまがないように思われる方があろうか

と感かんぜられますので、甚はなはだ不本意ふほんいながら、私わたくしの現世げんせの経歴けいれきのホ
ンの荒筋あらすじ丈をかいつまんで申もうしあ上げることに致いたしましょう。乗の
りかけた船ふねとやら、これも現世げんせと通信つうしんを試こころみる者の免ものれ難まぬき運う
命んめい——業ごうかも知れませぬ……。

わたくし
私は——実じつは相そう州しゅう荒井あらいの城じょう主しゅ三浦道寸みうらどうすんの息そく、荒次あらじろ

郎う義光よしみつと申もうす者の妻つまだったものにございます。現世げんせの呼名よびなは

小桜姫こざくらひめ——時代じだいは足利時代あしかがじだいの末期まつき——今いまから約やく四百余年よねんむかしの昔

でございます。もちろんこちらの世界せかいには昼夜ちゅうやの区別くべつも、歳月つきひ

のけじめもありませぬから、私わたくしはただ神かみさまから伺うかがつて、成なるほ

どそうかと思おもう丈だけのことに過すぎませぬ。四百年ねんといえは現世げんせでは

相当そうとう長い星霜つきひでございますが、不ふ思議しぎなものでこちらではさほ

どにも感じませぬ。多分それは凝乎と精神を鎮めて、無我の状态をつづけて居る期間が多い故でございましょう。

わたくしさと私の生家でございますか——生家は鎌倉にありました。父の

名はおえひろのぶ——代々鎌倉の幕府に仕へた家柄で、父も

矢張りそこにとめて居りました。母の名は袈裟代、これは加納

家から嫁いでまいりました。両親の間には男の児はなく、た

った一粒種の女の児があつたのみで、それが私なのでございま

す。従つて私は小供の時から随分大切に育てられました。別

に美しい程でもありませんが、体軀は先ず大柄な方で、それに

至つて健康でございましたから、私の処女時代は、全く苦勞知

らずの、丁度春の小禽そのまま、楽しいのんびりした空気に浸

つていたのでございます。私の幼い時分には祖父も祖母もまだ存
命で、それはそれは眼にも入れたいほど私を寵愛してくれ
ました。好い日和の折などには私はよく二三の腰元どもに傳れ
て、長谷の大仏、江の島の弁天などにお詣りしたものでござ
います。寄せてはかえす七里ヶ浜の浪打際の貝拾いも私の何
より好きな遊びの一つでございました。その時分の鎌倉は武家
の住居の建ち並んだ、物静かな、そして何やら無骨な市街で、
商家と言つても、品物は皆奥深く仕舞い込んでありました。
そうそう私はツイ近頃不図した機会に、こちらの世界から一度
鎌倉を覗いて見ましたが、赤瓦や青瓦で葺いた小さな
家屋のぎっしり建て込んだ、あのけばけばしさには、つくづく呆

れて了しまいました。

『あれが私の生なれた同おなじ鎌倉かまくらかしら……。』私わたくしはひとりそうつぶやいたような次第しだいで……。

その頃ころの生活せいかつ状態じょうたいをもっと詳しく物語ものがたれと仰おつしやいますか——致いた方かたがございませぬ、お喋りしゃべの序ついでで、少しすこばかり想おもい出だして見みることにいたしましょう。もちろん、順じゆん序じよなどは少しすこも立たって居おりませぬから何卒どうぞそのおつもりで……。

二、その頃の生活

先まずその頃ころの私わたくし達たちの受うけた教育しつけにつきて申もう上しあげてみまし

ようか——時代が時代ゆえ、教育はもう至つて簡単なもの、
 学問は読書、習字、又歌道一と通り、すべて家庭で修めま
 した。武芸は主に薙刀の稽古、母がよく薙刀を使いましたの
 で、私も小供の時分からそれを仕込まれました。その頃は女でも
 武芸一と通りは稽古したものでございます。処女時代に受けた私
 の教育というのは大体そんなもので、馬術は後に三浦家へ嫁
 入りしてから習いました。最初私は馬に乗るのが厭でございま
 したが、良人から『女子でもそれ位の事は要る』と言われ、それ
 から教えてもらいました。実地に行つて見ると馬は至つて穏和し
 いもので、私は大へん乗馬が好きになりました。乗馬袴を
 穿いて、すっかり服装がかわり、白鉢巻をするのです。主に

城じょう内ないの馬場ばばで稽古けいこしたのですが、後のちには乗馬じようばで鎌倉かまくらへ実さ家とがえ歸かえりをしたこともございます。従じゆう者しやも男子だんしのみでは困こまりま
すので、一人ひとりの腰元こしもとにも乗馬じようばの稽古けいこを致いたさせました。その頃ころ
ちよつと外がい出しゆつするにも、少くとも四五人にんの従者ともは必かならずつ
たもので……。

今度こんどはその時分じぶんの物見遊山ものみゆさんのお話はなしなりといたしましうか。物もの
見遊山のみゆさんと申もうしてもそれは至いたつて単純たんじゆんなもので、普通ふつうはお花はな
見なみ、汐干狩しおひがり、神社仏閣詣じんじやぶつかくもうで……そんな事ことは只今ただいまと大たいした
相違そういもないでしようが、ただ当時とうじの男子だんしにとりて何なによりの娯樂たのしみ
は猪狩ししが、兎狩うさぎが、等などの遊びあそでございました。何れも手てに手てに弓矢ゆみや
を携たずさえ、馬うまに跨またがつて、大へんな騒さわぎで出掛でかけたものでございます。

父は武人ではないのですが、それでも山狩りが何よりの道楽な
のでした。まして筋骨の逞ましい、武家育ちの私の良人などは、
三度の食事を一度にしてもよい位の熱心さでございました。
『明日は大楠山の巻狩りじや』などと布達が出ると、乗馬の
手入れ、兵糧の準備、狩子の勢揃い、まるで戦争のような大
騒ぎでございました。

そうそう風流な、優しい遊びも少しはありました。それ
は主として能狂言、猿楽などで、家来達の中にそれぞれ
その道の巧者なのが居りまして、私達も時々見物した
ものでございます。けれども自分でそれをやった覚えはございま
せぬ。京とは異つて東国は大体武張った遊び事が流行つたも

のでございますから……。

衣服調度類いふくちようどるいでございますか——鎌倉かまくらにもそうした品物しなものを

売り捌くうりさば商人あきうどの店みせがあるにはありましたが、さきほど申したもう

通り、別に人目を引くひように、品物しなものを店頭てんとうに陳列ちんれつするよう

な事はあまりないようでございます。呉服物ごふくものなども、良い品よいし

物は皆特別みなとくべつに織おらせたもので、機織はたおりがなかなか盛さかんでござ

いました。尤ももつとごく高価こうかの品しなは鎌倉かまくらでは間まに合あわず、矢張りやはは

るばる京きように逃にあえたように記憶きおくして居おります。

それから食物しょくもつ……これは只今ただいまの世よの中なかよりずっと簡単かんたん

なように見受みうけられます。こちらの世界せかいへ来きてからの私達わたくしたちは

全然ぜんぜん飲食いんしょくをいたしませぬので、従したがってこまかいことは判わかり

ませぬが、ただ私の守護わたくししゆごしているこの女おんな（T夫人）の平生へいせいの様
子うすから考かんがえて見みますと、今いまの世よの調理法ちようりほうが大たいへん手数てすうのかかる
ものであることはうすうす想像そうぞうされるのでございます。あの大
そう甘あまい、白しろい粉こな……砂糖さとうとやら申もうすものは、もちろん私わたくし達たち
の時代じだいにはなかつたもので、その頃ころのお菓子かしというのは、主おもに米こめ
の粉こなを固かためた打菓子うちがしでございました。それでも薄うつりと舌したに甘あま
く感かんじたように覺おぼえて居おります。又物の調まもの味ちようみには、あの甘かん草ぞう
という薬草やくそうの粉末こなを少すこく加くわえましたが、ただそれは上流うえの人ひと
達ちの調ちようり理かぎに限かぎられ、一般ぱんに使用しようするものではなかつたように
記き憶おくして居おります。むろん酒さけもございしました……濁にごつては居おりま
せぬが、しかしそう透すきとお明めいつたものでもなかつたように覺おぼえて居お

ります。それから飲料いんりよう料りょうとしては桜さくらの花漬はなづけ、それを湯呑ゆのみに
入れて白湯さゆをさして客きやくなどにすすめました。

斯こう言いったお話はなしは、あまりつまらな過ぎすますので、何卒どうぞこれ位くらい
で切り上げさせて戴いたきましよう。私わたくしのようなあの世よの住人じゅうにんが
食物しょくもつや衣類いるいなどにつきて遠とおい遠とおい昔むかしの思おもい出語でがたりをいたすの
は何なにやらお門かどちが違ちがいをしているようで、何分なにぶんにも興きよう味みが乗のら
ないで困こまつてしまいます……。

三、興入れ

やがて私わたくしの娘時代むすめじだいにも終おわりを告つぐべき時節じせつがまいりました。

女おんなの一生しょうの大事だいじはいうまでもなく結婚けっこんでございまして、それが
 幸こう不幸ふこう、運うん不運ふうんの大きな岐路わかれみちとなるのでございしますが、
 私わたくしとてもその型かたから外はずれる訳わけにはまいりませんでした。私の三浦みうら
 へ嫁よめぎましたのは丁度ちやうど二十歳の春はるで山桜やまざくらが真盛まっさかりの時じぶん分ぶん
 でございしました。それから荒井城あらいじやうない内の十幾年いくねんの武家生活ぶけせいかつ
 ；随分ずいぶん楽たのしかった思おもい出での種子たねもないではございませぬが、何なに
 を申もうしてもその頃ころは殺伐さつぱつな空気の漲くうきつた戦国時代せんごくじだい、北條ほうじやうな
 某なにがしとやら申もうす老獪ずるい成上なりあがり者ものから戦闘たたかいを挑いどまれ、幾度いくたびか
 のはげしい合戦かつせんの挙句あげくの果はてが、あの三年ねんご越しの長の籠城ろうじやう、
 とうとう武運ぶうん拙たなく三浦みうらの一族ぞくは、良人おととをはじめとして殆んど全部ぜんぶ
 城しろを枕まくらに打うち死じしてしまいました。その時分じぶんの不安ふあん、焦燥しょうそう、無む

念、痛心……今でこそすっかり精神の平静を取り戻し、別に
 くやしいとも、悲しいとも思わなくなりましたが、当時の私ども
 の胸には正に修羅の業火が炎々と燃えて居りました。恥かしな
 がら私は一時は神様も怨みました……人を呪いもいたしました
 ……何卒その頃の物語り丈は差控えさせて戴きます……。
 大江家の一人娘が何故他家へ嫁いだか、と仰せでございます
 か……あなたの誘い出しのお上手なものにはほんとうに困つて了
 います……。ではホンの話の筋道だけつけて了うことに致しま
 しょう。現世の人間としては矢張り現世の話に興味を有たる
 るか存じませぬが、私どもの境涯からは、そう言つた地上
 の事柄はもう別に面白くも、おかしくも何ともないのでござ

います……。

わたくしみうらけ

私が三浦家への嫁入りにつきましては別に深い仔細はございま

せぬ。良人は私の父が見込んだのでございます。『たのもし

んぶつ

物じゃ。あれより外ほかにそちが良人と冊くべきものはない……』

ただそれっきりの事柄で、私はおとなしく父の仰せに服従

したまででございます。現代いまのよの人達ひとたちから頭脳あたまが古ふるいと思われ

るか存ぞんじませぬが、古ふるいにも、新あたらしいにも、それがその時代じだいの

女の道おんなみちだったのでございます。そして父ちちのつもりでは、私達わたくしたち

夫婦ふうふの間に男児あいだが生れたら、その一人ひとりを大江家の相續者おおえけに貫そうぞくい

受ける下した心こころだったのでございます。

見合みあいでございますか……それは矢張り見合みあいもいたしました。

良人おつとの方ほうから実家さとへ訪ねたずてまいったように記憶きおくして居おります。今いま
 も昔むかも同じことおな、私はわたくし両親りょうしんから召よばれて挨拶あいさつに出たのでござ
 います。その頃良人ころおつとはまだ若わこうございました。たしか二十五歳さい、
 横よこ縦たて揃そろった、筋骨きんこつの逞たくまましい大柄おおがらの男子おとこで、色いろは余あまり白しろい
 方ほうではありませなせん。目鼻立めはなだち尋常じんじょう、髭ひげはなく、どちらかとい
 えば面長おもながで、眼尻めじりの釣つつた、きりつとした容貌かおだちの人ひとでした。
 ナニ歴史れきしに八十人にんりき力の荒武者あらむしやと記しるしてある……ホホホ良人おつと
 はそんな怪物ばけものではございませなせん。弓馬きゆうばの道みちに身みを入いれる、武ぶ
 張ばった人ひとではございしましたが、八十人にんりき力りきなどというのは嘘うそでござ
 います。氣立きだても存外ぞんがい優やさしかつた人ひとで……。

見合みあいの時ときの良人おつとの服装ふくそうでございますか——服装ふくそうはたしか狩か

りぎぬはかまは衣に袴を穿いて、お定まりの大小二腰、そして手には中
ゆうけい啓を持つて居りました……。

婚禮こんれいの式しきのことは、それは何卒どうぞおきき下くださらないで……格かく

別わか變かわったこともございませぬ。調度類ちやうどるいは前まえ以もつて先方せんぽうへ送おく

り届とどけて置いて、後あとから駕籠かごにのせられて、大きな行列ぎやうれつを作つく

つて乗のり込んだまでの話はなしで……式しきはもちろん夜分やぶんに挙げたのでご

ざいます。すべては皆夢みなゆめのようで、今更いまさらその当時とうじを想おもい出だして

見たところみで何なんの興味きやうみも起おこりません。こちらの世界せかいへ引越ひきこして

了しまへば、めいめい向むきが異ちがつて、ただ自分じぶんの歩あゆむべき途みちを一心しん不

乱らんに歩あゆむ丈だけ、従したがつて親子おやこも、兄きやうだい弟だいも、夫婦ふうふも、こちらではめ

ったにつきあいをしているものではございませぬ。あなた方がた方もい

ずればこちらの世界へ引移ひきうつつて来こられるでしようが、その時ときになれば私わたくしどもの現在げんざいの心持こころもちがだんだんお判わかりになります。『そんな時代じだいもあつたかな……』遠とおい遠とおい現世げんせの出来事できごとなどは、ただ一片ぺんの幻影げんえいと化かしてしまいます。現世げんせの話はなしは大概たいがいこれで宜よろしいでしょう。早はやくこちらの世界せかいの物語ものがたりに移うつりたいと思おもいます。すが……。

ナニ私わたくしが死ぬしる前後ぜんごの事情じじょうを物語ものがたれと仰おつしやるか……。それではごく手短てみじかにそれだけ申もうしあ上げることに致いたしましょう。今こ度んどこそ、いよいよそれつきりでおしまいでございます……。。

四、落城から死

足掛三年に跨る籠城……月に幾度となく繰り返される夜
うち、朝、朝、矢合、切、切、切……どとどと起る喊の聲、空を焦
す狼火……そして最後に武運いよいよ尽きてのあの落城……
四百年後の今日思い出してみる丈でも気が滅入るように感
ず。

戦鬪が始まってから、女子供はむろん皆城内から出さ
れて居りました。私の隠れていた所は油壺の狭い入江を隔て
た南岸の森の蔭、そこにホンの形ばかりの仮家を建てて、一族
の安否を気づかいながら侘すまいをして居りました。只今私が
祀られているあの小桜神社の所在地——少し地形は異いま

したが、だいたい大体あの辺あたりだったのでございます。わたくし私はそこで対岸たいがんのお城しろに最後の火の手ひの挙あがるのを眺ながめたのでございます。

『お城しろもとうとう落おちてしまった……最早良人もはやおとともこの世よの人ひとではない……憎にくツくき敵てき……女おんなながらもこの怨うらみは……。』

その時ときの一念ねんは深く深く私の胸ふかに喰くい込んで、現世げんせに生いきてい
る時ときはもとよりのこと、死しんでから後のちも容易よういに私の魂わたくしから離はなれな
かつたのでございます。わたくし私がどうやらその後人ごひと並なみみの修しゆ行ぎよう
ができて神かみ心こころが湧わいてまいりましたのは、偏ひとえに神様かみさまのおさ
としと、それから私の為ために和なごやかな思念おもひを送おくつてくだされた、
親したしい人達ひとたちの祈願きがんの賜たまなのでございます。さもなければ私わたくしなど
はまだなかなか済すくわれる女じよせい性せいではなかったかも知れませぬ……。

と、兎にも角にも、落城後の私は女ながらも再^{さい}拳^{きん}を^{はか}図^{はか}るつもりで、僅^{わずか}ばかりの忠義^{ちゅうぎ}な従者^{じゆしや}に護^{まも}られて、あちこちに身^みを潜^{ひそ}めて居^おりました。領地^{りょうち}内の人民^{じんみん}も大^{たい}へん私^{わたくし}に對^{たい}して親切^{しんせつ}にかばつてくれました。――が、何^{なに}を申^{もう}しましても女^{おんな}の細腕^{ほそうで}、力^{ちから}と頼^{たの}む一族郎党^{ぞくろうとう}の数^{かず}もよくよく残り少^{すく}なになつて了^{しま}つたのを見^みましては、再^{さい}拳^{きん}の計^{けい}劃^{かく}の到^{とう}底^{てい}無益^{むやく}であることが次第^{しだい}次第^{しだい}に判^{わか}つてまいりました。積^つもる苦勞^{くろう}、重^{かさ}なる失^{しつ}望^{ぼう}、ひしひしと骨身^{ほねみ}に^{さび}しみる寂^{さび}しき……私^{わたくし}の軀^{からだ}はだんだん衰^{すい}弱^{じやく}してまいりました。幾^{いく}月^{つき}かを過^{すご}す中^{うち}に、敵^{てき}の監視^{みはり}もだんだん薄^{うす}らぎましたので、私は三崎^{わたくみさき}の港^{みなと}から遠^{とお}くもない、諸磯^{もろいそ}と申^{もう}す漁村^{ぎよそん}の方^{ほう}に出^でてまゐりましたが、モ―その頃^{ころ}の私^{わたくし}には世^よの中^{なか}が何^{なに}やら味氣^{あじけ}なく感^{かん}じ

られて仕ようがないのでした。

実家の両親は大へんに私の身の上を案じてくれまして、し

のびやかに私の自宅を訪れ、鎌倉へ帰れとすすめてくださ

るのでした。『良人もなければ、家もなく、又跡をつぐべき子供

とてもない、よくよくの独り身、兎も角も鎌倉へ戻つて、心

静かに余生を送るのがよいと思うが……。』いろいろな言葉を尽

してすすめられたのでありますが、私としては今更親元へも

どる気持ちにはドーあつてもなれないのでした。私はきつぱりと

断りました。――

『思召はまことに有難うございますが、一たん三浦家へ

嫁ぎました身であれば、再びこの地を離れたくは思いません。私

はどこまでも三崎に留まり、亡き良人をはじめ、一族の後を弔い

たいのでございます……。』

わたくしけっしんの飽あくまで固かたいのを見みて、両りやうしん親しんも無む下げに帰き家かをす

すめることもできず、そのまま空むなしく引取ひきとつて了しまれました。そ

して間まもなく、私わたくしの住宅すまいとして、海うみから二三丁引込んだ、小高こたかい

丘おかに、土塀どべいをめぐらした、ささやかな隠いん宅たくを建たててくださいま

した。私わたくしはそこで忠ちゆうじつ実けらいな家来こしもとや腰元あいてを相手よせいに余生おくを送り、

そしてそこでさびしくこの世よの氣息いきを引ひき取とつたのでございます。

落城らくじやうご後ごそれが何年なんねんになるかと仰おツしやるか——それは漸ようやく

一年ねん余あまり私わたくしが三十四歳さいとときの時ときでございました。まことに短命たんめいな、

つまらない一生しやうがい涯がいでありました。

でも、今から考えれば、私にはこれでも生前から幾らか霊れいかでも、今から考えれば、私にはこれでも生前から幾らか霊れいか覚くのようなものが恵めぐまれていたらしいのでございます。落城らくじよう後ご間まもなく、城跡しろあとの一部ぶに三浦一族みうらぞくの墓はかが築きずかれたので、私わたしは自分の住居じゆうきよからちよいちよい墓参ぼさんをいたしましたが、墓はかの前まえで眼めを瞑つむつて拝おがんで居おりますと、良人おとの姿すがたがいつもありありと眼めに現あらわれるのでございます。当時とうじの私わたしは別べつに深くは考かんえず、墓はかに詣まいれば誰だれにも見みえるものであろう位くらいに思おもっていました。私わたしが三浦みうらの土地とちを離はなれる気きがしなかつたのも、つまりはこの事ことがあつた為ためめでございます。当時とうじの私わたしに取りましては、死しんだ良人おとに逢あうのがこの世よに於おける、殆ほとんど唯ゆい一の慰安いあん、殆ほとんど唯ゆい一の希望きぼうだつたのでございます。『何なんとしても爰こゝから離はなれたくない……』

私は一図にそう思い込んで居りました。私は別に婦道が何うの、義理が斯うのと言つて、六ヶしい理窟から割り出して、三浦に踏みとどまつた訳でも何でもございませぬ。ただそうしたいからそうしたまでの話に過ぎなかつたのでございます。

でも、私が死ぬるまで三浦家の墳墓の地を離れなかつたという事は、その領地の人民の心によほど深い感動を与えたようでございました。『小桜姫は貞女の亀鑑である』などと、申しまして、私の死後に祠堂を立て神に祀つてくれました。それが現今も残っている、あの小桜神社でございます。でも右申上げたとおりに、私は別に貞女の亀鑑でも何でもございませぬ。私はただどこまでも自分の勝手を通した、一本気の女性だつた

に過ぎないのでございます。

五、臨終

気のすすまぬ現世時代の話も一と通り片づいて、私は何やら身が軽くなつたように感じます。そちらから御覧になつたら私達達の住む世界は甚だたよりのないように見えるかも知れませぬが、こちらから現世を振りかえると、それは暗い、せせこましい、空虚な世界——何う思い直して見ても、今更それを物語ろうという気分にはなり兼ねます。とりわけ私の生涯などは、どんなたのよりも一層つまらない一生だったのでございますから……。

え、まだ私の臨終の前後の事情がはつきりしていないと

仰つしやるか……そういえばホンにそうでございます。では致

方がございせん、これから大急ぎで、一と通りそれを申

上げて了うことに致しましょう。

前にも述べたとおり、私の軀はだんだん衰弱して来たので

ございます。床についてもさつぱり安眠ができない……箸を執

つても一向食物が喉に通らない……心の中はただむしやくし

や……、口惜しい、怨めしい、味気ない、さびしい、なさけない

……何が何やら自分にもけじめのない、さまざまの妄念妄想

が、暴風雨のように私の衰えた軀の内をかけめぐつて居るのです。

それにお恥かしいことには、持つて生れた負けずぎらいの気性、

内^{ない}実^{じつ}は弱^{よわ}いくせに、無^む理^りにも意^い地^じを通^とそうとして居^いるのでござ
 いますから、つまりは自分^{じぶん}で自分^{じぶん}の身^みを削^{けず}るようなもの、新^{あた}しい
 住^{じゆう}居^きに移^{うつ}つてから一年^{ねん}とも経^たたない中に、私^{わたくし}はせめてもの心^こ
 遣^{ころや}りなる、あのお墓^{はかまい}参^{まゐ}りさえもできないまでに、よくよく焦^{やみほ}
 悴^うけて了^{しま}いました。一^ひと口^{くち}に申^{もう}したらその時^{じぶん}分の私^{わたくし}は、消^きえか
 かつた青^{あお}松^{まつ}葉^ばの火^ひが、プスプスと白^{しろ}い煙^{けむり}を立て燻^{たて}つてくすぶ
 な塩^{あんばい}梅^{ばい}だつたのでございます。
 わたくしおもまくらつ
 私^{わたくし}が重^{おも}い枕^{まくら}に就^ついて、起^{たち}居^いも不^ふ自^じ由^{ゆう}になつたと聞^きいた時^{とき}に、第^{だい}
 一^{いち}に馳^はせつけて、なにくれと介^{かい}抱^{ほう}に手^てをつくしてくれました
 のは矢^や張^はり鎌^{かま}倉^{くら}の両^{りやう}親^{しん}でございました。『斯^こうかけ離^{はな}れて
 住^すんで居^いては、看^み護^とに手^てが届^{とど}かんで困^{こま}るのじゃが……。』めつき

り小鬢こびんに白いしろものが混まじるようになった父ちちは、そんな事ことを申もうして何なにやら深い思案ふか しあんに暮くれるのでした。大方内心おおかたないしんでは私の事わたくしことを今いまからでも鎌倉かまくらに連れ戻もどりたかつたのでございましたらう。氣性きしょうの勝かつた母ははは、口くちに出だしては別べつに何なんとも申もうしませんでした、それでも女おんなは矢張り女おんな、小蔭こかげへまわつてそつと涙なみだを拭ぬぐいて長太息といきを漏もらしているのでございました。

『いつまでも老おいたる両親りょうしんに苦勞くろうをかけて、自分じぶんは何なんといおやふこうものう親不孝おやふこうもの者ものであらう。いつそのことすべてをあきらめて、おとなしく鎌倉かまくらへ戻もどつて専心せんしん養生ようじようにつとめようかしら……。』

そんな素直すなおな考かんがえも心こころのどこかに囁ささやかないでもなかつたのですが、次つぎの瞬しゆん間かんには例れいの負まけぎらいが私の全ぜん身しんを包つつんで了しまうの

でした。『良人は自分の眼の前で打死したではないか……憎い
 のはあの北條……縦令何事があるうとも、今更おめおめ
 と親許などに……。』

鬼の心になり切った私は、両親の好意に背き、同時に又天
 をも人をも怨みつづけて、生甲斐のない日子を算えていましたが、
 それもそう長いことではなく、いよいよ私にとりて地上生活
 の最後の日が到着いたしました。

現世の人達から観れば、死というものは何やら薄気味のわる
 い、何やら縁起でもないものに思われるでございましょうが、私
 どもから観れば、それは一足の蛾が繭を破つて脱け出るのにも類
 した、格別不思議とも無気味とも思われない、自然の現象に過

ぎませぬ。従^{したが}つて私^{わたくし}としては割合^{わりあい}に平氣^{へいき}な氣持^{きもち}で自分^{じぶん}の臨^{りんじゆ}終^うの模様^{もよう}をお話^{はな}しすることができるのでございます。

四百年^{ねん いぜん}も以前^{いぜん}のことで、大變^{たいへん}記憶^{きおく}は薄^{うす}らぎましたが、ざっと私^{わたくし}のその時^{とき}の実感^{じつかん}を述べますと——何^{なに}よりも先^まず目^め立^だつて感^{かん}じられるのは、氣^きがだんだん遠^とくなつて行くこと^ゆで、それは丁^{ちよう}度^ど、あのうたた寝^ねの氣持^{きもち}——正氣^{せいき}のあるよう^な、又^{また}無^ないよう^な、何^なんとも言^いえぬうつらうつらした氣分^{きぶん}なのでござい^ます。傍^{そば}から^のぞけば、顔^{かお}が痙攣^{ひきつれ}たり、冷^{つめ}たい脂^{あぶら}汗^{あせ}が滲^{にじ}み出^でたり、死^しぬ^る人^{ひと}の姿^{すがた}は決^{けつ}して見^みよいものではござい^ませぬが、実^{じつ}際^{さい}自分^{じぶん}が死^しんで見^みると、それは思^{おも}ひの外^{ほか}に樂^{らく}な仕事^{しごと}でござい^ます。痛^{いた}いも、痒^{かゆ}いも、口惜^{くや}しいも、悲^{かな}しいも、それは魂^{たましい}がまだしつかりと軀^{からだ}の

内部に根を張っている時のこと、臨終が近づいて、魂が肉の
 お宮を出たり、入ったり、うろろうろするようになりましては、そ
 れ等の一切はいつとはなしに、何所かえ消える、というよりか、
 寧ろ遠のいて了います。誰かが枕辺で泣いたり、叫んだりする
 時にはちよつと意識が戻りかけますが、それとてホンの一瞬の間
 で、やがて何も彼も少しも判らない、深い深い無意識の雲霧の中
 へとくぐり込んで了うのです。私の場合には、この無意識の期間
 が二三日つづいたと、後で神さまから教えられました。どちら
 かといえ二三日というのは先ず短い部類で、中には幾年幾十
 年と長い長い睡眠をつづけているものも稀にはあるのでございま
 す。長いにせよ、又短かいにせよ、兎に角この無意識から眼をさ

ました時ときが、私わたくしたちの世界せかいの生活せいかつの始まりはじで、舞台ぶたいがすっかりかわるのでございます。

六、幽界の指導者

いよいよこれから、こちらの世界せかいのお話はなしになりますが、最初さいしよはまだ半はん分ぶん足を現世げんせにかけているようなもので、矢張やはり娑婆しやば臭くさい、おきき苦くるしい事こと実じつばかり申もう上あげることになりそうでございます。——ナニその方ほうが人間にんげん味みがあつて却かえつて面白おもしろいと仰おつしやるか……。御冗談ごじやうだんでございましょう。話はなすもの身みになれば、こんな辛つらい、恥はづかしいことはないのです……。

これは後で神様からきかされた事でございますが、私は矢張り、自力で自然に眼を覚ましたというよりか、神さまのお力で眼を覚まして戴いたのだそうでございます。その神さまというのは、おおくにぬしのかみさま
 大國主神様のお指図を受けて、新しい帰幽者の世話を
 して下さる方なのでございます。これにつきては後で詳しく申
 上げますが、兎に角新たに幽界に入つたもので、斯う言つた
 神の神使、西洋で申す天使のお世話に預からないものは一人
 もございませんで……。

幽界で眼を覚ました瞬間の気分でございますか——それ
 はうつとりと夢でも見ているような気持、そのくせ、何やら心の
 奥の方で『自分の居る世界はモ―異つている……。』と言つた、

微かな自覚があるのです。四辺は夕暮の色につつまれた、いかにも森閑とした、丁度山寺にでも臥て居るような感じでございます。

そうする中に私の意識は少しづつ回復してまいりました。

『自分はどうとう死んで了ったのか……。』

死の自覚が頭脳の内部ではつきりすると同時に、私は次第に激しい昂奮の暴風雨の中にまき込まれて行きました。私が先ず何よりつらく感じたのは、後に残した、老いたる両親のことでした。散々苦勞ばかりかけて、何んの報ゆるところもなく、若い身上で、先立ってこちらへ引越して了った親不孝の罪、こればかりは全く身を切られるような思いがするのです。『済みま

せぬ済すみませぬ、どうぞどうぞお許ゆるしくださいませ……『何回なんかい

私わたくしはそれを繰くり返かえして血ちの涙なみだに咽むせんだことでしよう！

そうする中うちにも私わたくしの心こころは更さらに他ほかのさまさまの暗くらい考かんえに搔かき乱みだされました。『親おやにさえ背そむいて折角せつかく三浦みうらの土地とちに踏ふみとどまり

ながら、自分じぶんは遂ついに何なんの仕出しでかしたこともなかった！ 何んとい

う腑甲斐ふがいなさ……何んという不運ふうんの身みの上うえ……口惜くやしい……悲かなし

い……情なさけない……。『何なにが何なにやら、頭脳あたまの中なかはただごちやごち

やするのみでした。

そうかと思おもえば、次つぎの瞬しゆん間かんには、私わたくしはこれから先さきの未み

知ちの世界せかいの心こころ細ほそさに慄ふるい戦おのっているのです。『誰人だれも迎むかえ

に來きてくれるものはないのかしら……。『私わたくしはまるで真暗闇まっくらやみの

底無しの井戸の内部へでも突き落されたように感ずるのでした。

ほとんど気でも狂うかと思われました時に、ひよくりと私の枕

辺に一人の老人が姿を現しました。身には平袖の白衣を

着て、帯を前で結び、何やら絵で見覚えの天人らしい姿、そし

て何んともいえぬ威厳と温情との兼ね具った、神々しい表

情で凝乎と私を見つめて居られます。『一体これは何誰かし

ら……』心は千々に乱れながらも、私は多少の好奇心を催さ

ずに居られませんでした。

このお方こそ、前に私がちよつと申上げた大国主神様

からのお神使なのでございます。私はこのお方の一と方ならぬ導

きによりて、辛くも心の闇から救い上げられ、尚おその上に天

眼通めとおその他の能のうりよく力を仕込まれて、ドーやらこちらの世界せかいで
 ひとりひとりだ一人立ちができるようになったのでございます。これは前まえにもの
 べた通り、決して私わたしにのみ限かぎったことではなく、どなたでも皆神みなか
 みさま様のお世話せわになるのでございますが、ただ身魂みたまの因縁いんねんとでも
 申しましようか、めいめいの踏むべき道筋みちすじは異なります。私など
 は随分ずいぶんきびしい、険しい道みちを踏まねばならなかった一人ひとりで、苦
 ろうろうひとひともお多おほかつたかわりに、幾分いくぶんか他の方よそかたより早く明はるい世あか
 界かいに抜ぬけ出ることにもなりました。ここで念ねんの為ために申上もうしあげて
 置おきますが、私を指導わたくしどうしてくださいました神様かみさまは、お姿は普通ふつどの老
 人しよりすがたとの姿を執とつて居おられますが、実は人間じんげんではございませぬ。
 つまり最初さいしよから生いき通とおしの神かみ、あなた方がたの自然靈しぜんれいというもの

なのです。斯^こう言^いつた方^{かた}のほうが、新^{あた}らしい帰^き幽^{ゆう}者^{しや}を指^し導^{どう}するの^に、ま^なつ^る何^{なん}の情^{じよう}実^{じつ}もなくて、人^{じん}霊^{れい}よりもよほど具^ぐ合^{あい}が宜^{よろ}しいと申^{もう}すこと^でござ^いいます。

七、祖父の訪れ

わたくし^{つかい}が^{かみ}お^{さま}神^{まつ}使^さの^き神^{まつ}様^さから^い真^ま先^つき^きに^い言^いき^きか^きさ^きれた^いお^{こと}言^{こと}葉^はは、^{いま}今^{いま}では^{おほ}あまり^およく^お覺^おえても^お居^おり^おませ^おぬ^おが、^{だい}大^{だい}体^{たい}こ^{だい}ん^{たい}な^{たい}よう^{たい}な^{たい}意^い味^みの^いもの^いで^いござ^いいま^いした。――

『そ^{さつ}な^{さつ}た^{さつ}は^{さつ}し^{さつ}き^{さつ}りに^{さつ}先^{さつ}刻^{さつ}から^{さつ}現^{げん}世^せの^{さつ}事^{こと}を^{さつ}思^{おも}い^{おも}出^だして、^ひ悲^ひ嘆^{たん}の^ひ涙^{なみだ}に^なく^なれ^なて^ない^なる^なが、^{なに}何^{なに}事^{こと}が^なあ^なり^なて^なも^な再^ふた^たび^ふ現^{げん}世^せに^ふ戻^{もど}る^{もど}こ^{もど}と^{もど}だけ^{もど}は^{もど}協^かわ^な

ぬのじや。そんなことばかり考かんえていると、良よい境涯ところへはとても
進すすめぬぞ！ これから俺わしがそなたの指導しどう役やく、何事なにごともよくき
きわけて、尊とうい神かみさまの裔孫みすえとしての御名みなを汚けさぬよう、一時じも
はやく早く役やくにもたため現世げんせの執しゅう着ちやくから離はなれるよう、しつかりと修し
ゆぎよう行ぎやうをして貰もらいますぞ！ 執着しゅうじやくが残のこっている限り何事なにごともだめ
じや……。』

が、その場合ばあいの私わたしには、斯こうした神様かみさまのお言葉ことばなどは殆ほとんど
耳みみにも入はいりませんでした。私わたしはいろいろの難題なんだいを持ち出だしてさ
んざん神様かみさまを困こまらせました。お恥はづかしいことながら、罪滅つみほろぼ
しのつもりで一つ二つここで懺悔ざんげいたして置おきます。

私わたしが持ちかけた難題なんだいの一つは、早はやく良人おととに逢あいたいという註ち

ゆうもん

文でございました。『現世で怨みが晴らせなかつたから、良

人と二人力を合わせて怨霊となり、せめて仇敵を取り殺して

やりたい……。』——これが神さまに向つてのお願いなのでござ

いますから、神さまもさぞ呆れ返つて了われたことでしょう。も

ちろん、神様はそんな註文に應じてくださる筈はございま

せぬ。『他人を怨むことは何より罪深い仕業であるから許すこと

はできぬ。又良人には現世の執着が除れた時に、機会を見て逢わ

せてつかわす……。』いとも穏かに大體そんな意味のことを諭

されました。もう一つ私が神様にお願ひしたのは、自分の遺骸

を見せて呉れとの註文でございました。当時の私には、せめ

て一度でも眼前に自分の遺骸を見なければ、何やら夢でも見て

居いるような氣持きもちで、あきらめがつかなくて仕方しかたがないのでした。
 神かみさまはしばし考かんえていられたが、とうとう私わたくしの願ねがいを容いれて、
 あもろの諸磯もろいその隠宅いんたくの一ひと間まに横よこたわつたままの、私わたくしの遺骸いがいをま
 ざまざと見みせてくださいました。ああの瘦やせた、蒼白あおしろい、まるで
 幽霊ゆうれいのような醜みにくい自じ分の姿すがた——私わたくしは一ひと目め見てぞつとして了しま
 いました。『モ―結けつ構こうでございます。』覺おぼえずそう言いつて御免ごめん
 を蒙こうむつて了しまいましたが、この事ことは大たいへん私わたくしの心こころを落おちつかせるのに
 効能ききめがあつたようでした。

まだ外ほかにもいろいろありますが、あまりにも愚おろかしい事ことのみで
 ございますので、一ひと先まずこれで切きり上あげさせて戴いたきます。現げん
 在いの私わたくしとて、まだまだ一向こうだめ駄眼だめでございますが、歸幽当座きゆうとうざの私わたくし

などはまるで醜みにく執着しゆうじやくの凝塊かたまり、只今ただいま想おもい出だしても顔かおが緒あから
んで了しまいます……。

と 兎かくに角神かみさま様も斯こんなきわけのない私わたくしの処置しよちにはほとほとお
手てを焼やかれたらしく、いろいろと手てをかえ、品しなをかえて御指導ごしどうの
労ろうを執とつてくださいましたが、やがて私わたくしの祖父じい……私わたくしより十年ほ
ど前まえに歿なくなりました祖父じいを連つれて来きて、私わたくしの説諭せつゆを仰おおせつけられま
した。何なにしろとても逢あわれないものと思おもい込こんでいた肉親にくしんの
祖父じいが、元もとの通とおりの慈愛じあいに溢あふれた温容おんようで、泣なき悶もだえている私わたくしの
枕辺まくらべにひよつくりとその姿すがたを現あらわしたのですから、その時ときの私わたくし
のうれしさ、心こころ強つよさ！

『まあお爺じいさままでございますか！』私わたくしは覺おぼえず跳とび起おきて、祖父じい

の肩かたに取り縋すがつて了しまいました。帰幽きゆう後わたくし私の暗くらい暗くらい心こころ胸こころに一点てんの
 光明あかりが射さしたのは実じつにこの時ときが最さい初しょでございしました。

祖父じじはさまざまに私わたくしをいたわり、且かつ励はげましてくれました。――

『そなたも若いわかのに歿なくなつて、まことに氣きの毒どくなことであるが、
 世よの中なかはすべて老ろう少しょう不ふ定じよう、寿じゆ命みようばかりは何なんとも致いたし
 方たがない。これから先さきはこの祖父じじも神かみさまのお手て伝ついとして、
 そなたの手引てびきをして、是非ぜひともそなたを立派りっぱなものに仕上しあげて
 見みせるから、こちらへ来きたとて決けつして決けつして心こころ細ほそいことも、
 又また心しん配ぱいなこともない。請合うけあつて、他ほかの人ひと達たちよりも幸福しあわせなも
 のにしてあげる……。』

祖父じじの言葉ことばには格別かくべつこれと取り立てていうほどのこともない
のですが、場合ばあいが場合ばあいなので、それは丁度ちやうどしとすると降おる春はる
雨めの乾かわいた地面じべたに浸しみるように、私わたくしの荒たくしんだ胸むねに融とけ込んで行ゆ
きました。お蔭かげで私わたしはそれから幾いく分ぶんの落おち付きつきを取り戻もどし、神かみ
さまの仰おほせにもだんだん従したがうようになりました。人ひとを見て法ほうを説と
けとやら、こんな場合ばあいには矢張やはり段違だんちがいの神様かみさまよりも、お馴な
染じみみの祖父じじの方が、却かえつて都合つごうのよいこともあるものと見みえます。
私わたくしの祖父じじの年齢としでございますか——たしか祖父じじは七十余あまりで歿なくな
りました。白哲いろしろで細面ほそおもての、小柄こがらの老人ろうじんで、齒はは一本ほんなしに
抜ぬけて居いました。生前せいぜんは薄うすい頭髪かみを茶筌ちやせんに結ゆつていましたが、
幽界こちらで私わたくしの許もとを訪とずれた時ときは、意外いがいにもすつかり頭顱あたまを丸まるめて居おり

ました。^{わたくしちが}私と異つて祖父は熱心な^{ねっしん}仏教の^{ぶつきよう}信仰者だつた為^{しんこうしゃ}めでございましょう……。

八、岩窟

はなしすこ^{あと}あと、^{もと}話が少し後に戻りますが、この^{へん}辺で一つ^{ひと}取りま^ととめて私の最^{わたくしさいし}初の^よ修行場、つまり、^{しゆぎようば}私が^{わたくし}こちらの^{せかい}世界で真^ま先きに^{まつさ}置かれま^おした^{きようがい}境涯^ひにつきて、^{とお}一と通り^{もうしの}申述べて置く^おことに^{いた}致したい^{ぞん}と存じます。実は^{じつ}私^{わたくし}自身^{しん}も、^{はじ}初めて^{せかい}こちらの^め世界に^さ眼を覚^さました^{とうざ}当座は、^{ただいちず}只一^{くや}図に^{かな}口惜しいやら、^{むね}悲しいやらで^{ちゆうい}胸が^い一ぱいで、^お自分の^お居る^{ばしよ}場所が^{ところ}どんな^{こと}所かという^{ちゆうい}ような^い事に、^い注意^いするだけ

このころ、よゆうの心の余裕とてもなかったのでございます。それに四辺あたりが妙に薄みようく、暗くらくて気が滅入きめいるようで、誰だれしもあんな境遇きようぐうに置かれたら、恐おそらくあまり朗かな気分にはなれそうもないかと考えられるのでございます。

が、その中うち、あの最初さいしよの精神の暴風雨あらしが次第しだいに収まるにつれて、私の傷けられた頭脳あたまにも少しづつ人心地ひとごころが出てまいりました。

た。うとうとしながらも私は考えました。――

『私わたくしは今斯いまこうして、たつた一人法師ひとりぼっちで寝ねているが、一たいここは
 何どんな所ところかしら……。私が死んだものとすれば、ここは矢張り冥途やめ
 とやらに相違そういないであろうが、しかし私は三途わたくしの川かわらしいものを渡わたった覚えおぼはない……。閻魔様えんまさまらしいものに逢あつた様子ようすもない

……何が何やらさっぱり腑に落ちない。モー少し光明が射してくれと良いのだが……。』

私は少し枕から頭部を擡げて、覚束ない眼つきをして、あち

こち見 したのでございます。最初は、何やら濛気でもかかつ

ているようで、物のけじめも判りかねましたが、その中不図何所

からともなしに、一条の光明が射し込んで来ると同時に、自分の

置かれてゐる所が、一つの大きな洞穴——岩屋の内部であるこ

とに気づきました。私は、少なからずびつくりしました。――

『オヤオヤ！ 私は不思議な所に居る……。私は夢を見ているのか

しら……。それとも爰は私の墓場かしら……。』

私は全く途方に暮れ、泣くにも泣かれないような気持で、ひし

と枕まくらに噛かりつくより外ほかに詮せん術すべもないのでした。

その時とき不意ふいに私の枕まくら辺べ近くお姿すがたを現あらわして、いろいろと難ありが

有たい慰なぐさめのお言葉ことばをかけ、又何またくれと詳くわしい説せつ明めいをしてくだ

されたのは、例れいの私の指し導どう役やくの神様かみさまでした。痒かゆい所ところへ手てが届とど

くと申もうしましうか、神様かみさまの方ほうでは、いつもチャーンとこちら

の胸むねの中なかを見みすかしていて、時ときと場合ばあいにぴったり当あてはまった事こと

を説とききかせてくださるのでございますから、どんなに判わかりの悪わる

い者ものでも最後しまいにはおとなしく耳みみを傾かたむけることになつて了しまいます。

私わたくしなどは随ずい分ぶん我執がしゆうの強つよい方ほうでございますが、それでもだんだ

ん感かん化かされて、肉身にくしんのお祖父様ぢいさまのようにお慕したい申もう上げ、勿もつた

体いないとは知しりつつも、私わたくしはいっしかこの神様かみさまを『お爺じいさま』

とお呼びよ申もうしあ上げるようになって了しまいました。前まえにも申もうしあ上げた
 とおり私わたくしのようものな者がドーやら一人前にまへのものになることができま
 したのは、偏ひとえにお爺じいさまのお仕し込みの賜たまものでございます。全まったく世よの
 なかなかかみさま中なかに神様かみさまほど難ありがた有あいものはございませぬ。善よきにつけ、悪あし
 きにつけ、影身かげみに添そいて、人知ひとしれず何彼なにかとお世話せわを焼やいてくださ
 るのでございます。それがよく判わからないばかりに、兎角とかくにんげん人間じんは
 わが俣まが出でたり、慢心まんしんが出でたりして、飛とんだ過失あやまちをしでかす
 ことにもなりますので……。これはこちらの世界せかいに引越ひっこして見みる
 と、だんだん判わかつてまいります。

うつかりつまらぬ事ことを申もうしあ上げてお手間てまを取とらせました。私わたくしは
 急いそいで、あの時とき、神様かみさまが幽界ゆうかいの修しゆぎよう行ことの事こと、その他たに就つい

わたくしに言いきかせて下されたお話の要点を申上げることには
しましよう。それは大体斯うでございました。――

『そなたは今岩屋の内部に居ることに気づいて、いろいろ思い惑
つて居るらしいが、この岩屋は神界に於いて、そなたの修
行の為に特にこしらえてくだされた、難有い道場であ
るから、当分比所でみつしり修行を積み、早く上の境
涯へ進む工夫をせねばならぬ。勿論ここは墓場ではない。墓
は現界のもので、こちらの世界に墓はない……。現在そなた
の眼にはこの岩屋が薄暗く感ずるであろうが、これは修行
が積むにつれて自然に明るくなる。幽界では、暗いも、明るい
もすべてその人の器量次第、心の明るいものは何所に居ても明

るく、心の暗いものは、何所へ行つても暗い……。先刻そなたは
 三途ずの川かわや、閻魔えんま様の事ことを考かんえていたらしいが、あれは仏者ぶつしや
 の方便ほうべんである。嘘うそでもないが又事実またじじつでもない。あのようなもの
 を見みせるのはいと容易たやすいがただ我國わがくにの神かみの道みちとして、一切方さいほうべ
 便んは使つかわぬことにしてある……。そなたはただ一人この道場どうじやう
 に住すむことを心こころ細ほそいと思おもうてはならぬ。入口いりぐちには注連繩しめなわ
 が張はつてあるので、惡魔外道あくまげどうの類たぐいは絶對ぜつたいに入はいることはできぬ。
 又たまたとえ何事なにごとが起おこつても、神かみの眼まなこはいつも見張みはつているから、
 少すこしも不安ふあんを感じかんずるには及およばぬ……。すべて修行場しゆぎやうばは人ひとにより
 てめいめい異ちがう。家屋かおくの内部なかにに置おかるるものもあれば、山やまの中なかに
 置おかるる者ものもある。親子夫婦おやこふうふの間あいだから 柄しらでも、一所しよには決けつして住す

むものでない。その天分なり、行状なりが各自異うからである。但し逢おうと思えば差支ない限りいつでも逢える……

。『

一応お話が終った時に、神様はやおら私の手を執つて、扶け

起こしてくださいました。『そなたも一つ元氣を出して、歩るい

て見るがよい。病氣は肉体のもので、魂に病氣はない。これ

から岩屋の模様を見せてつかわす……。』

私はついふらふらと起き上りましたが、不思議にそれつきり病

人らしい氣持が失せて了い、同時に今迄敷いてあつた寢

具類も烟のように消えて了いました。私はその瞬間から現

在に至るまで、ただの一度も寢床の上に臥たいと思つた覚えは

ございませぬ。

それから私は神様に導かれて、あちこち歩いて見て、すつか

り岩屋の内外の模様を知ることができました。岩屋は可なり巨

きなもので、高さとはばは凡そ三四間、奥行は十間余りもござ

いまいしうか。そして中央の所がちよつと折れ曲つて、斜めに

外に出るようになって居ります。岩屋の所在地は、相当に高

い、岩山の麓で、山の裾をくり抜いて造つたものでございまし

た。入口に立つて四辺を見ると、見渡す限り山ばかりで、海も

川も一つも見えません。現界の景色と比べて別に格段の相違

もありませぬが、ただこちらの景色の方がどことなく浄らかで、

そして奥深い感じが致しました。

岩屋いわやの入口いりぐちには、神様かみさまの言いわれましたとおり、果たはたして新あたしい注連縄しめなわが一筋ひとすじ張はつてありました。

九、神鏡

一ひとと通り見物けんぶつが済すむと、私わたくし達たちは再び岩屋いわやの内部なかへ戻もどつて来きました。すると神様かみさまは私わたくしに向むかひ、早速さつそく修行しゆぎようのことにつきて、嚙かんでくくめるようにいろいろと説ときさとしてくださるのでした。

『これからのそなたの生活せいかつは、現世げんせのそれとはすっかり趣おもむきが変かわるから一時じも早くはやそのつもりになつてもらわねばならぬ。現世げんせの

生活せいかつにありては、主おもなるものが衣食住いしょくじゅうの苦勞くろう、大概たいがいの人に
 間まはただそれっきりの事ことにあくせくして一生しょうすごを過しまして了しまうので
 あるが、こちらでは衣食住いしょくじゅうの心配しんぱいは全然ぜんぜんない。大体肉だいたいにく
 体たいあつての衣食住いしょくじゅうで、肉体にくたいを棄すてた幽界ゆうかいの住人じゅうにんは、
 できる丈ただはや早くそうした地上ちじょうの考かんがえを頭腦あたまの中なかから払いのける工く
 夫ふうをせなければならぬ。それからこちらの住人じゅうにんとして何なにより
 慎つつしまねばならぬは、怨うらみ、そねみ、又またもろろの欲望よくぼう……そう
 言いつたものに心こころを奪うばわれるが最後さいご、つまりは幽界ゆうかいの亡者もうじやとし
 て、いつまで経たつても浮うかぶ瀬せはないことになる。で、こちらの世せ
 界かいで、何なによりも大切たいせつな修しゆぎ行ぎやうというのは精神せいしんの統一とういつで、
 精神せいしん統一とういつ以外いがいには殆ほとんど何物なにものもないといえる。つまりこれ

は一心不乱しんからんに神様かみさまを念じ、神様かみさまと自分とを一体たいにまとめしまて了
つて、他の一切ほかの雑念ざうねん妄想もうそうを払いはらのける工夫くふうなのであるが、
じつちや実地じつちに行つて見ると、これは思おもいの外ほかに六ヶむつかしい仕事しごとで、少すこしの
ゆだん油断ゆだんがあれば、姿すがたはいかに殊勝しゆしようらしく神様かみさまの前まえに坐すわつてい
ても、心こころはいつしか悪魔あくまの胸むねに通かよつてゐる。内容なかによりも外形うわべを尚
ぶ現世げんせの人の眼ひとまなこは、それで結構けつこうくらませることができて、こ
ちらの世界せかいではそのごまかしはきかぬ。すべては皆神みなかみの眼めに映うつり、
またあていどたがいめうつ又或程度またあていどお互の眼めにも映うつる……。で、これからそなたも早速さつそく
この精神せいしん統一とういつの修行しゆぎようにかからねばならぬが、もちろん最さ
いしょ初はつから完全まったきを望のぞむのは無理むりで、従したがつて或程度あていどの過失あやまちは見
逃のがしもするが、眼めにあまる所ところはその都度つどきびしく注意ちゆういを与あたえる

から、そなたもその覚悟かくごで居いてもらいたい。又何またなにぞ望みがあるなら、今いまのうちに遠慮えんりよなく申出もうしでるがよい。無理むりのないことである

ならすべて許ゆるすつもりであるから……。

ようやねどこはな
漸く寢床を離れたと思えば、モーすぐこのようなきびしい修しゆぎ

行ようのお催促さいそくで、その時の私は随分辛いことだ、と思いまし

た。その後ごこちらで様子ようすを窺うかがつて居おりますと、人ひとによりては随ずいぶ

分寛んゆうやかな取とりあつか扱ういを受け、まるで夢ゆめのような、吞氣のんきらしい

生活せいかつを送おくっているものも沢たくさん山見受みうけられますが、これはドー

いう訳わけか私わたくしにもよく判りませぬ。私などはとりわけ、きびしい修し

行ゆぎようを仰おおせつけられた一人ひとりのようで、自分じぶんながら不思議ふしぎでなり

ませぬ。矢張やはりこれも身魂みたまの因縁いんねんとやら申もうすものでございまし

ようか……。

それは兎も角も、私は神様から何ぞ望みのものを言えと言われ、いろいろと考え抜いた末にたった一つだけ註文を出しました。

『お爺さま、何うぞ私に一つの御神鏡を授けて戴き度う存じます。私はそれを御神体としてその前で精神統一の修行を致そうと思ひます。何かの目標がないと、私にはとても神様を拜むような気分になれそうもございませぬ……。』

『それは至極尤もな願ひじや、直ちにそれを戴いてつかわす。』
お爺さまは快く私の願ひを入れ、ちよつとあちらを向いて黙
禱されましたが、モ―次ぎの瞬間には、白木の台座の附い

た、一体の御鏡がお爺さまの掌に載っていました。右の御鏡は早速岩屋の奥の、程よき高さの壁の凹所に据えられ、私の礼拝の最も神聖な目標となりました。それからモー四百余年、わたくしきようがいはいもつとしんせいもくひよう私の境涯はその間に幾度も幾度も変わりましたが、しかし私は今も尚おその時戴いた御鏡の前で静座黙禱をつづけて居るのでございます。

十、親子の恩愛

参考の為に少し幽界の修行の模様をききたいと仰つしやいますか……。宜しうございます。私の存じていることは何

なりとお話し^{はな}致^{いた}しますが、しかし現^{げん}界^{かい}で^や行^やるのと格^{かく}別^{べつ}の相違^{そう}い
もございますまい。私^{わたくし}達^{たち}とて矢張^{やは}り御神^{ごしん}前^{ぜん}に静座^{せいざ}して、心
に天照大御神^{あまてらすおみ}様^{さま}の御名^{みな}を唱^{とな}え、又八百万^{またやおよろず}の神々^{かみがみ}に願^{ねが}いし
て、できる丈^{だけ}きたない考^{かんが}えを払^{はら}いのける事^{こと}に精神^{こころ}を打^うち込^こむので
ございます。もとより肉体^{にくたい}はないのですから、現世^{げんせ}で^や行^やるような、
齋戒沐浴^{さいかいもくよく}は致^{いた}しませぬ。ただ齋戒沐浴^{さいかいもくよく}をしたと同一^{どういつ}の
浄^{きよ}らかな氣持^{きもち}になればよいのでございまして……。

それで、本^{ほん}当^{とう}に深^{ふか}い深^{ふか}い統^{とう}一^{いつ}状^{じょう}態^{たい}に入^{はい}ったとなりますと、
私^{わたくし}ども^{すがた}の姿^{すがた}はただ一^{ひと}つの球^{たま}になりま^{たま}す。こ^こが現^{げん}世^せの修^{しゆぎ}行^{よう}と
幽^{ゆう}界^{かい}の修^{しゆぎ}行^{よう}との一^めば^だん目^め立^だった相違^{そうい}点^{てん}か^そも知^しれ^れませぬ。
人^{にん}間^{げん}ではど^{ふか}んなに深^{とう}い統^{いつ}一^{はい}に入^{はい}つても、軀^{からだ}が残^{のこ}ります。い^いか

に御本人ごほんにんが心こころで無むと観かんじましても、側そばから観みれば、その姿すがたはチ
 ヤーンと其所そこに見みえて居おります。しかるに、こちらでは、真実ほんとう
 の精神せいしん統一とういつに入はいれば、人間にんげんらしい姿すがたは消きえ失うせて、側そばから
 のぞいても、たつた一つひとの白しろっぽい球たまの形かたちしか見みえませぬ。人にんげ
 間まらしい姿すがたが残のこつて居おるようでは、まだ修しゆぎ行ぎやうが積つんでいな
 い何なによりの証しょうこ拠こなのでございます。『そなたの、その醜みにくるしい
 姿すがたは何なんじや！ 』まだ執着しゆうじやくが強過つよぎるぞ……。『私は何度わたくしなんども醜みにくるしい
 姿すがたをお爺様じいさまに見みつけられてお叱言こゝとを頂戴ちやうだいしたか知しれませぬ。
 自分じぶんでも、こんな事ことでは駄目だめであると思おもい返かえして、一生しやうけん懸命めい神か
 様さまを念ねんじて、飽あくまで浄きよらかな気分きぶんを続つづけようとあせるのでござ
 います。あせればあせるほど、チラリチラリと暗くらい影かげが射さして

来て統一きとういつを妨さまたげて了しまいます。私の岩屋いわやの修しゆぎ行ようというのは、つまり斯こうした失しつぱい敗ばいとお叱こつ言ごんの繰くりかえしで、自分じぶんながらほとほと愛あい想そうが尽つきる位くらいでございました。私わたくしというものはよくよく執しゆうじやくつよ着ちやくの強つよい、罪つみの深ふかい、女じよせい性せいだつたのでございましょう。――この生せい活かつが何なん年ねん位くらい続つづいたかとのお訊たずねでございしますか：。自分じぶんでは一切さいむちゆう夢む中で、さほどに永ながいとも覚おぼえませんでした。が、後あとでお爺じいさまから伺うかがいますと、私わたくしの岩屋いわやの修しゆぎ行ようは現世げんせの年数ねんすうにして、ざつと二十年ねんあま余あまりだつたとの事ことでございします。現世げんせ的てき執着しやくちやくの中で、私わたくしにとりて、何なによりも断たち切きるのに骨ほねが折おれましたのは、前申まえもうすとおり矢張やはり、血ちを分わけた両りやう親しんに對たいする恩愛おんあいでございました。現世げんせで何なに一つ孝行こうこうらしい事こともせ

ず、ただ一人先立つてこちらの世界に引越して了ったのかと考え
 ますと、何ともいえずつらく、悲しく、残り惜しく、相済まなく、
 坐ても立つても居られないように感ぜられるのでございました。
 人間何がつらいと申しても、親と子とが順序をかえて死ぬ
 るほど、つらいことはないように思われます。無論私には良人に
 対する執着もございました。しかし良人は私よりも先きに歿なつ
 て居り、それに又神さまが、時節が来れば逢わしてもやると申さ
 れましたので、そちらの方の断念は割合早くつきました。た
 だ現世に残した父母の事はどうあせりましてもあきらめ兼ねて悩
 み抜きました。そんな場合には、神様も、精神統一も、ま
 るきりあつたものではございませぬ。私はよく間近の岩へ齧りつ

いて、悶え泣きに泣き入りました。そんな真似をしたところで、一たん死んだ者が、とても現世へ戻れるものでない事は充分承知しているのですが、それで矢張り止めることができないのでございます。

しかも何より困るのは、現世に残っている父母の悲嘆が、ひしと幽界まで通じて来ることでございました。両親は怠らず、私の墓へ詣でて花や水を手向け、又十日祭とか、五十日祭とか申す日には、その都度神職を招いて鄭重なお祭祀をしてくださるのです。修行未熟の、その時分の私には、現界の光景こそ見えませんでした。しかし両親の心に思っていることは、はつきりとこちらに感じて参るばかりか、

『姫ひめや姫ひめや！』と呼よびながら、絶たえ入いるばかりに泣なき悲かなしむ母ははの
 音おん 声じよう までも響ひびいて来くるのでございます。あの時じふん分のことは今いま
 想おもい出だしても自おのずと涙なみだがこぼれます……。

斯こう言いった親おや子の情じよう 愛あいなどと申もうすものは、いつまで経たつて
 もなかなか消きえて無なくなるものではないようで、私わたくしは現げん在ざいでも
 矢張やはり父ちちは父ちちとしてなつかしく、母ははは母ははとして慕したわしく感かんじます。
 が、不ふ思し議ぎなもので、だんだん修しゆ 行ぎようが積つむにつれて、ドーや
 ら情念こころの発作ほつさを打消うちけして行ゆくのが上じよう手ずになるようでございます。
 それがつまり向こう 上じようなのでございましょうかしら……。

十一、守刀

からだ 軀がなくなつて、こちらの世界に引移つて来ても、現世の執
ゆうじやく ようい と 着が容易に除れるものでない事は、すでに申上げましたが、
ついでにもう少しここで自分の罪過を申上げて置くことに致しま
しよう。口頭ですつかり悟つたようなことを申すのは何でもあ
りませぬが、実地に當つて見ると思ひの外に心の垢の多いのが人
んげん 間の常でございます。私も時々こちらの世界で、現世生
ちゆう 活中に大へん名高かつた方々にお逢いすることがございます
が、そうきれいに魂が磨かれた方ばかりも見当りませぬ。『あんな
めいそうちしき うた な名僧知識と謳われた方がまだこんな薄暗い境涯に居るのかし
ら……。』時々意外に感ずるような場合もあるのでございます。

さてお約束やくそくの懺悔ざんげでございしますが、私わたくしにとりて、何なにより身みに
 しみているのを一つお話しはなし致いたしましょう。それは私の守まもりがたな
 物の語ものがたりでございます。忘れわすれもしませぬ、それは私が三浦家へ嫁よ
 入りする折おりのこととでございしました、母はははひとふりの懐剣かいけんを私わたくしに
 手渡わたし、

『これは由緒ゆいしよある御方おかたから母ははが拝領はいりやうの懐剣かいけんであるが、そ
 なたの一生しやうの慶事よろこびの紀念きねんに、守まもりがたな刀やとしてお譲ゆずります。肌は
 身離だみさず大切たいせつに所持しよじしてもらいます……。』

両眼りやうがんに涙なみだを一ぱい溜ためて、赤心まごころこめて渡わたされた紀念きねんの懐
 剣いけん——それは刀身ななみといい、又装具またつくりといい、まことに申分もうしぶんの
 ない、立派りっぱなものでございましたが、しかし私わたくしに取りましては、

懐劍かいけんそのものよりも、それがなつかしい母ははの形見かたみであることが、
 他ほかの何物なにものにもかえられぬほど大切たいせつなのでございました。私は
 一生しょうがい涯がいその懐劍かいけんを自分の魂じぶんたましいと思つて肌身はだみに附つけて居たので
 した。

いよいよ私の病勢びょうせいが重おもつて、もうとても難むずかしいと思われま
 した時ときに、私は枕辺まくらべに坐すわつて居られる母ははに向むかつて頼たのみました。
 『私の懐劍かいけんは何卒どうぞこのまま私わたくしと一緒にしょ棺かんの中なかに納おさめて戴いたきとう
 ございますか……。』すると母ははは即座そくざに私の願ねがいを容いれて、『その
 通とおりにしてあげますから安心あんしんするように……。』と、私の耳みみ
 元もとに口くちを寄よせて力ちからづよ強く囁ささやいてくださいました。
 私わたくしがこちらの世界せかいに眼めを覚さました時に、私は不図ふとみぎ右ことの事柄がらを

おも 想い出しました。『母はあんなに固く請合つてくだされたが、果
 して懐剣が遺骸と一緒に墓に収めてあるかしら……。』そう思
 うと私はどうしてもそれが気懸りで気懸りで耐らなくなりました。
 とうとう私はある日指導役のお爺様に一伍一什を物語り、
 『若しもあの懐剣が、私の墓に収めてあるものなら、どうぞこ
 ちらに取寄せて戴きたい。生前と同様あれを守刀に致し
 度うございます……。』とお依みました。今の世の方々には
 守刀などと申しても、或は頭に力強く響かぬかも存じま
 せぬが、私どもの時代には、守刀はつまり女の魂、自分の生
 命から二番目の大切な品物だったのでございます。

かみさま 神様もこの私の願を無理からぬ事と思召めされたか、快くお

ひきう
引受けしてくださいました。そして例のとおりに、ちよつと精神
の統一をして私の墓を透視されましたが、すぐにお判りになつ
たものと見え『フムその懐剣なら確かに彼所に見えている。宜
しい神界のお許しを願つて、取寄せてつかわす……。』
そう言われたかを見ると、次ぎの瞬間には、お爺さまの手
の中に、私の世にも懐かしい懐剣が握られて居りました。無論
それは言わば刀の精だけで、現世の刀ではないのでございましょ
うが、しかしいかに調べて見ても、金粉を散らした、濃い朱塗
りの装具といい、又それを包んだ真紅の錦欄の袋といい、生
前現世で手慣れたものに寸分の相違もないのでした。私は心
からうれしくお爺様に厚くお礼を申し上げました。

わたくしみぎ
私は右の懐剣を現在とても大切に所持して居ります。そして修しゆぎ行ぎやうの時ときにはいつも之これを御鏡みかがみの前まえへ備そなえることにして居おるのでございます。

これなどは、一段だんも二段だんも上うへの方かたから御覧ごらんになれば、やはり一種しゆじゆうじやくいの執着しやくと言いわるるかも存ぞんじませぬが、私わたくしどもの境涯きやうがいでは、どうしてもまだ斯こうした執着しゆうじやくからは離れ切れないのでございます。

十二、愛馬との再会

岩屋いわやの修しゆぎ行ぎやう中ちゆうに、モ一ひとつちよつと面白おもしろい話はなしがござい
ますから、序ついででに申もうしあ上げることに致いたしましょう。それは私わたくしが、

こちらで自分の愛馬に再会したお話でございます。

まえ

前にもお話し致しましたが、私は三浦家へ嫁入りしてから初め

ばじゅつ

けいこ

て馬術の稽古をいたしました。最初は馬に乗るのが何やら薄

すきみわる

気味悪いように思われましたが、行つて居ります内にだんだんと

じようば

す

乗馬が好きになつたと言うよりも、寧ろ馬が可愛くなつて来た

のでございます。乗り馴らした馬というものは、それはモー不

ぎ

かわい

の

な

うま

けいけん

かた

議なほど可愛くなるもので、事によると経験のないお方には、

ほんとう あじわ

その真実の味いはお判りにならぬかも知れません。

わたくしあいば もう

私の愛馬と申しますのは、良人がいろいろと搜した上に、最後

に、

みた

て

く

れた

ほどの

ことが

ござ

まして、

それはそれは優さしい、美事な牡馬でございました。背材はそう

高くはございませぬが、総体の地色は白で、それに所々にくろまだらまじうつく黒の斑点の混った美しい毛並は今更自慢するではございませぬが、全く素晴らしいもので、私がそれに乗って外出をした時には、みちゆものあしと感心して見惚れる位でございました。ナ道行く者も足を停めて、私にみとくらひ二乗者に見惚れたのではないかと仰つしやるか……。御冗談ばかり、そんな酔狂な者は只の一人だつてございません。私の馬に見惚れたのでございます……。

そうそうこの馬の命名につきましては、良人と私との間に、なかなかの悶着がございました。私は優さしい名前がよいとおも思ひまして、さんざん考え抜いた末にやつと『鈴懸』という名を思いついたのでございます。すると良人は私と意見が違いまし

て、それは余り面白くない、是非『若月』にせよと言ひ張つて、何と申しても肯き入れないのです。私は内心不服でたまりませんでしたが、もともと良人が見立ててくれた馬ではあるし、とうとう『若月』と呼ぶことになつて了いました。『今度は私が負けて置きます。しかしこの次ぎに良い馬が手に入つた時はそれは是非鈴懸と呼ばせていただきます……。』私はそんなことを良人に申したのを覚えて居ります。しかしそれから間もなく、あの北條との戦鬪が起つたので、私の望みはどうとう遂げられずに終りました。

とに角名前につきては最初斯んないきさつがありましたもの、私は若月が好きで好きで耐らないのでした。馬の方でも亦

私わたくしによく馴染なじんで、私の姿すがたが見えようものなら、さもうれしいと
 言いつた表ひようじよう情じようをして、あの巨おおきな軀からだをすり附つけて来るのでした。
 落城らくじよう後わたくし私わたくしがあちこち流浪るろうをした時ときにも、若月わかつきはいつも私わたくしに
 附添つきそつて、散々さんざん苦勞くろうをしてくれました。で、私の臨終りんじゆうが近ちか
 づきました時ときには、私は若月わかつきを庭前にわさきへ召よんで貰もらつて、この世よ
 の訣別わかれを告つげました。『汝おまえにもいろいろ世話せわになりました……。』
 心こころの中なかでそう思おもつた丈だけでしたが、それは必かならず馬うまにも通つうじたこと
 であらうと考かんがえられます。これほど可愛かわいがつた故せいでもございまし
 よう、私わたくしが岩屋いわやの内部なかで精神せいしん統一とういつの修しゆぎ行ぎやうをしてときいる時に、
 ある時とき思おもいも寄よらず、若月わかつきの姿すがたが私の眼めにはつきりと映うつつたの
 でございます。

『事ことによると若わか月つきは最もう死しんだのかも知しれぬ……。』

そう感かんじましたので、お爺じいさまにお訊たずねして見みますと、果はたこちらの世せ界かいに引越ひきこして居いるとの事ことに、私わたくしは是非ぜいひ一ひと目昔めかしの愛馬あいばに逢あつて見みたくて耐たまらなくなりました。

『甚はなはだ勝手かつてなお願ねがいながら、一度若わか月つきの許もとへ連つれて行いつてくださる訳わけにはまいりますまいか……。』

『それはいと易やすいことじや。』と例れいの通とおりお爺じいさまは親切しんせつに答こたへてくださいました。『馬うまの方ほうでもひどくそなたを慕したっているから一度は逢あつて置おくがよい。これから一しよ緒つに連つれて行いつて上あげる……。』

幽界ゆうかいでは、何所どこをドとー通とつて行ゆくのか、途と中ちゆうのことは殆ほとん

ど判りませぬ。そこが幽界の旅と現世の旅との大した相違点
 でございますが、兎も角も私達は、瞬く間に途中を通り抜
 けて、或る一つの馬の世界へまいりました。そこには見渡す限り
 馬ばかりで、他の動物は一つも居りません。しかし不思議なこ
 とには、どの馬もどの馬も皆逞ましい駿馬ばかりで、毛並みの
 もじやもじやした、イヤに脚ばかり太い駄馬などは何処にも見
 けないのでした。

『私の若月も爰に居るのかしら……。』

そう思い乍ら、不図向うの野原を眺めますと、一頭の白馬が群
 れを離れて、飛ぶが如くに私達の方へ馳け寄つてまいりまし
 た。それはいうまでもなく、私の懐かしい、愛馬でございました。

『まア若月……汝、よく来てくれた……。』
 わたくしころ
 私は心から嬉しく、しきりに自分にまつわり附く愛馬の鼻を、
 うれしげな面持……私は覚えぬ涙ぐんで了つたのでございまし
 た。

しばらく馬と一緒に遊んで、私は大へん軽い氣持になつて戻つ
 て来ましたが、その後二度と行つて見る氣にもなれませんでした。
 人間と動物との間の愛情にはいくらあつさりしたところ
 があるものと見えます……。

十三、母の臨終

岩屋いわやの修しゆ行ぎやう中ちゆうに誰だれかの臨りん終じゆうに出会であつたことがあるか、

とのお訊たずねでございますか。——それは何度なんども何度なんどもあります。

わたくもちはは私の父ははも、母ははも、それから私わたくしの手元てもとに召使めしつていた、忠ちゆう実じつな

ひとりひとりの老僕ろうぼくなども、私わたくしが岩屋いわやに居おる時ときに前後ぜんごして歿ぼつしまして、

その都度つね私わたくしはこちらから、見舞みまいに参まゐつたのでございます。何れあ

なたとしては、幽界ゆうかいから觀みた臨終りんじゆうの光景ありさまを知しりたいと仰おツ

しやるのでございましょう。宜よろしうございます。では、標本みほんのつ

もりで、私の母ははの歿おつた折おりの模様もようを、ありのままにお話はなし致いたしま

しょう。わざわざ査しらべるのが目的もくてきで、行やつた仕事しごとではないので

すから、むろんいろいろ見落みおとしはございましょう。その点てんは充じゆう

ぶん お含みを願つて置きます。機会がありましたら、誰かの臨
 終の 実 況を査べに出掛て見ても宜しうございます。ここに
 申上げるのはホンの当時の私が観たまま感じたままのお話でこ
 ざいます。

それは私が歿つてから、最うよほど経つた時……かれこれ二十
 年近くも過ぎた時でございましょうか、ある日私が例の通り御
 神前で修行して居りますと、突然母の危篤の報知が胸に
 感じて参つたのでございます。斯うした場合には必らず何等かの
 方法で報知がありますもので、それは死ぬる人の思念が伝わる
 場合もあれば、又神様から特に知らせて戴く場合もあります。
 その他にもまだいろいろあります。母の臨終の際には、

私は自力でそれを知ったのでございました。

わたくし

私はびっくりして早速鎌倉の、あの懐かしい実家へと飛ん

で行きましたが、モ―その時はよくよく臨終が迫つて居りま

は

たましい

は

にくたい

はんぶん

で

りんじゆう

は

はい

お

る最中でございました。人間の眼には、人の臨終とい

さいちゆう

は

は

は

は

は

は

は

は

は

うものは、ただ衰弱した一つの肉体に起る、あの悲惨な光

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

景しか映りませぬが、私にはその外にまだいろいろの光景が見

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

えるのでございます。就中一番目立つのは肉体の外に靈魂

え

え

え

え

え

え

え

え

え

え

――つまりあなた方の仰つしやる幽体が見えますことで……。

ご

ご

ご

ご

ご

ご

ご

ご

ご

ご

御承知でもございましょうが、人間の靈魂というものは、

ご

ご

ご

ご

ご

ご

ご

ご

ご

ご

全然肉体と同じような形態をして肉体から離れるのでございま

ぜん

ぜん

ぜん

ぜん

ぜん

ぜん

ぜん

ぜん

ぜん

ぜん

す。それは白^{しろ}つぽい、幾^{いくぶん}分^{ぶん}ふわふわしたもので、そして普通^{ふつう}は裸^{はだか}体^{たい}でございます。それが肉^{にく}体^{たい}の真^ま上^{うへ}の空^{くう}中^{ちゆう}に、同^{おな}じ姿^{しせい}勢^{せい}で横^{おう}臥^がしている光^{あり}景^{さま}は、決^{けつ}してあ^みまり見^みよいものではございませぬ。その頃^{ころ}の私^{わたくし}は、も^{いく}う幾^{たび}度^{だい}も経^{けい}験^{けん}があ^ありますので、さほ^さどにもおも^{おも}いませ^はんでしたが、初^はめて人^{にん}間^{げん}の臨^{りん}終^{じゆう}に出^{であ}会^つした時^{とき}は、何^{なん}とま^{へん}ア変^{へん}怪^{かい}なものかしらんと驚^{おどろ}いて了^{しま}いました。最^もう一^{ひと}つおか^{ばん}しいのは肉^{にく}体^{たい}と幽^{ゆう}体^{たい}との間^{あい}に紐^{ひも}がついて居^いるこ^{ちよう}とで、一^{ばん}番^{ばん}太^{はら}いのが腹^{はら}と腹^{はら}とを繋^{つな}ぐ白^{しろ}い紐^{ひも}で、それは丁^{ちよう}度^ど小^こ指^{さし}位^ゐの太^{ふと}さでございます。頭^{あたま}部^ぶの方^{ほう}にもモ一^{ぼん}本^み見^みえますが、それ^{つな}は通^{つう}例^{れい}前^{まえ}のよ^ほりもよ^ほど細^{ほそ}いよう^で……。無^む論^{ろん}斯^こうして紐^{ひも}で繋^{つな}がれてい^きるのは、ま^ぜだ絶^{ぜつ}息^{そく}し切^きらない時^{とき}で、最^{さい}後^ごの紐^{ひも}が切^き

れた時ときが、それがいいよその人の死しんだ時ときでございます。

前申まえもうすとおり、私が母ははの枕辺まくらべに参まいりましたのは、その紐ひもが切き

れる少すこし前まえでございました。母はははその頃ころモ―七十位ぐらわたくしさいご、私が最後さいごに

お目めにかかった時ときとは大たい変へんな相違そういで、見みる影かげもなく、老おいさら

ぼいて居おりました。私わたくしはすぐ耳元みみもとに近ちかづいて、『私わたくしでございま

す……』と申もうしましたが、人間にんげん同志どうしで、枕元まくらもとで呼びかわす

のとは異ちがい、何なにやらそこに一重隔ひとえへだてがあるようで、果はたしてこちら

の意思おもいが病びよう床しょうの母ははに通つうじたか何どうかと不安ふあんに感かんじられました。

――尤もつともこれは地ち上じようの母ははに就ついて申もう上しあげることことで、肉にく体たいを棄す

てて了しまつてからの母ははの靈魂たましいとは、むろん自由自在じゆうじざいに通つうじたので

ございます。母ははは帰幽きゆう後間ごまもなく意い識しきを取とりもどし、私わたくしとは幾いくた

度も幾度も逢つて、いろいろ越し方の物語に耽りました。

母は、死ぬる前に、父や私の夢を見たと言つて居りましたが、も

ちろんそれはただの夢ではないのです。つまり私達の意思が

夢の形式で、病床の母に通じたものでございましょう……。

それは兎に角、あの時私は母の断末魔の苦悶の様を見るに見

兼ねて、一生懸命母の軀を撫でてやったのを覚えています。こ

れは只の慰めの言葉よりも幾分かききめがあつたようで、母は

それからめつきりと楽になつて、間もなく氣息を引きとつたので

ございました。すべて何事も赤心をこめて一心にやれば、必

らずそれ丈の事はあるもののようにでございます。

母の臨終の光景について、モー一つ言い残してならないの

は、私の眼に、現世の人達と同時に、こちらの世界の見舞者の
 姿が映ったことでございます。母の枕辺には人間は約十人余
 り、何れも眼を泣きはらして、永の別れを惜んでいましたが、そ
 れ等の人達の中で私が生前存じて居りましたのはたった二人
 ほどで、他は見覚えのない人達ばかりでした。それからこちら
 の世界からの見舞者は、第一が、母よりも先きへ歿った父、つづ
 いて祖父、祖母、肉身の親類縁者、親しいお友達、それ
 から母の守護霊、司配霊、産土の御神使、……一々数えた
 らよほどの数に上ったでございましょう。兎に角現世の見舞者よ
 りはずつと賑かでございます。第一、双方の気分がすつかり
 異います。一方は自分達の仲間から親しい人を失うのでござい

ますから、沈み切つて居りますのに、他方は自分達の仲間に親しき人を一人迎えるのでございますから、寧ろ勇んでいるような、陽気な面持をしているのでございます。こんな事は、私の現世生活中には全く思いも寄らぬ事柄でございまして……。

他にも気づいた点がまだないではありませんせぬが、拙な言葉でも言い尽せぬように思われますので、母の臨終の物語は、一と先ずこれ位にして置きましょう。

十四、守護霊との対面

第一期の修行中に経験した、重なる事柄につきては、

以上いじようで大体だいたい申もう上げたつもりでございしますが、ただもう一つ
 ここでは是非ぜひとも言い添そえて置おかねばならないと思おもいますのは私わたくしの
 守護しゆご霊れいの事ことでございます。誰だれにも一人ひとりの守護しゆご霊れいが附ついて居おる
 ことは、心しん霊れいに志こころざす方かた々がたの御承知ごしやうちの通とおりでございしますが、
 わたくしもちろんひとり私わたしにも勿論もちろん一人ひとりの守護しゆご霊れいが附ついて居おり、そしてその守護しゆご霊れい
 との関係かんけいはただ現世げんせのみに限かぎらず、肉にく体たいの死し後ごも引ひきつづいて、
 切きつても切きれぬ因縁いんねんの絆きずなで結むすばれて居いるのでございします。もつ
 とも、そうした事柄ことがらがはつきり判わかりましたのはよほど後の事のちのことで、
 歸幽きゆう当時とうじの私わたしなどは、自分じぶんに守護しゆご霊れいなどと申もうすものが有あるか、
 無ないかさえも全然ぜんぜん知しらなかつたのでございします。で、私わたくしがこち
 らの世界せかいで初はじめて自分じぶんの守護しゆご霊れいにお目めにかかつた時ときは、少すくな

らず意外に感じまして、従つてその時の印象は今でもはつきりと頭脳に刻まれて居ります。

ある日私が御神前で、例の通り深い精神統一の状态に入つて居た時でございます、意外にも一人の小柄の女性がすぐ眼の前に現われ、いかにも優さしく、私を見てにつこりと微笑まれるのです。打見る所、年齢は二十歳余り、顔は丸顔の方で、緻致はさしてよいとも言われませぬが、何所となく品位が備わり、雪なす富士額にくつきりと黛が描かれて居ります。服装は私の時代よりはやや古く、太い紐でかがった、広袖の白衣を纏い、そして下に緋の袴を穿いて居るところは、何う見ても御所に宮仕えして居る方のように窺われました。

意外いがいなのは、この時とき初めてお目めに懸かつたばかりの、全然ぜんぜん未知みちのお方かたなのにも係かわらず、私の胸むねに何なんともいえぬ親したしみの念ねんがむくむくと湧わいて出たこと……。それにその表ひよう情じよう、物ものごしがいかにも不思議……。先方せんぼうは丸顔まるがお、私は細面ほそおもて、先方せんぼうは小柄こがら、何どわたくしもおがらがいけい、私わたしは大柄おおがら、外形けいはさまざま、共通きようつうの個所かしよがないにも係かわらず、何ど所ことも知しれず二人ふたりの間に大變たいへん似たところがあるのです。つまりは外面うわべはあまり似にないくせに、底そこの方ほうでよく似にて居いると言いった、よほど不思議ふしぎな似方にかなのでございいます。

『あの、どなた様さまでございいますか……。』

漸ようく心やを落おちつけて私わたしの方ほうから訊たずねました。すると先方せんぼうは不あ相い変かにこやかに――

『あなたは何も知らずに居られたでしょうが、実は自分はあるあなた
 の守護霊……あなたの一身上の事柄は何も彼も良う存じて居るものなのです。時節が来ぬ為めに、これまで蔭に控えて居
 ましたが、これからは何事も話相手になつて上げます。』
 わたくしうれ 私は嬉しいやら、恋しいやら、又不思議やら、何が何やらよく
 は判らぬ複雑な感情でその時初めて自分の魂の親の前に自
 身を投げ出したのでした。それは丁度、幼い時から別れ別れに
 なつていた母と子が、不図どこかでめぐり合つた場合に似通つた
 ところがあるかも知れませぬ。何れにしてもこの一事は私にとり
 てまことに意外な、又まことに意義のある貴い経験でございま
 した。

激しい昂奮から冷めた私は、もちろん私の守護霊に向つて
 いろいろと質問の矢を放ち、それでも尚お腑に落ちぬ個所があ
 れば、指導役のお爺様にも根掘り葉掘り問いつめました。お
 かげわたくししゅごれい
 蔭で私の守護霊の素性はもとより、人間と守護霊の関
 係、その他に就きて大凡の事が漸く会得されるようになりま
 した。——あの、それを残らず爰で物語れと仰つしやるか……宜
 しい
 しょうございます。何も御道の為めとあれば、私の存じて居る限り
 は逐一申上げて了いましょう。話が少し堅うございまして、
 なに
 何やら青表紙臭くなるかも知じませぬが、それは何卒大目に
 見逃がして戴きます。又私の申上げることどんな誤謬があ
 るかも計りかねますので、そこはくれぐれもただ一つの参考
 には
 さんこう

とどめて戴いたきたいのでございます。わたくし私はただ神様かみさまやら守護靈しゅごれい様まからきかされたところをお取次とりつぎするのですから、これが誤あや謬まりのないものだとは決けつして言い張はるつもりはございませぬ……。

十五、生みの親魂の親

なるなる成るべく話はなしの筋道すじみちが通とおるよう、これからすべてを一と纏まとめに
して、私わたくしが長い年とし月の間あいだにやつとまとめ上げた、守護靈しゅごれいにかん
するお話を順はなし序じゆんじよよく申もうし上げて見みたいと存ぞんじます。それにつ
きては、少すこし奥おくの方ほうまで溯さかのつて、神様かみさまと人間にんげんとの関かん係けいから
申もうし上げねばなりませぬ。

むかしことわざ 昔の諺に『人は祖に基き、祖は神に基く』とやら申して居りますが、私はこちらの世界へ来て見て、その諺の正しいことに氣づいたのでございます。神と申しますのは、人間がまだ地上に生れなかつた時代からの元の生神、つまりあなたの方の仰つしやる『自我の本体』又は高級の『自然霊』なのでございませう。畏れ多くはございますが、我國の御守護神であらせられる邇々藝命様を始め奉り、邇々藝命様に随つて降臨された天児屋根命、天太玉命などと申す方々も、何れも皆そうした生神様で、今も尚お昔と同じく地の神界にお働き遊ばしてお出でになられます。その本来のお姿は白く光つた球の形でございますが、余ほど真剣な氣持で深い統一

状態うたいはいに入らなければ、私わたくしどもにもそのお姿すがたを拝はいすることはでき

ませぬ。まして人間にんげんの肉眼にくがんなどに映うつる氣きづかいはございませ

ぬ。尤もっともこの球たまの形かたちは、凝じつとお鎮しずまり遊あそばした時ときの本ほん来らいのお姿すがた

でございまして、一たんお働はたらきかけ遊あそばしました瞬しゅん間かんには、

それぞれ異ことなつた、世よにも神こう々ごうしい御姿おすがたにお変かわり遊あそばします。

更さらに又何またなにかの場合ばあいに神々かみがみがはげしい御力おちからを發揮はつきされる場合ばあいには

莊嚴そうごんと言いおうか、雄大ゆうだいと申もうそうか、とても筆紙ひつしに尽つくされぬ、

あの怖おそろしい竜姿りゅうしをお現あらわしになられます。一つすがたの姿すがたから他たの

姿すがたに移かわり変かはることの迅はやさは、到底とうてい造つくり附つけの肉体にくたいで包つつまれた、

地上ちじようの人間にんげんの想像そうぞうの限かぎりではございませぬ。

無論むろんこれ等らの元もとの生神様いきがみさまからは、沢山たくさんの御分靈ごぶんれい……つま

おこさま
 り御子様がお生れになり、その御分霊ごぶんれいから更に又御分霊ごぶんれいが生
 れ、神界しんかいから靈界れいかい、靈界れいかいから幽界ゆうかいへと順々じゆんじゆんに階段かいだん
 がついて居おります。つまりすべてに亘わたりて連絡れんらくはとれて居おり乍なら、
 しかしそのお受持うけもちがそれぞれ異ちがうのでございます。こちらの世せ
 界かいをたつた一つの、無差別むさべつの世界せかいと考えることは大變たいへんな間違まちがい
 で、例たとえば邇々ええ藝命ぎめい様に於おかれましても、一番奥ばんおくの神界しんかい
 に於おてお指図遊さしずあそばされる丈だけで、その御命令ごめいれいはそれぞれの世界せかいの
 代だい表者ひようしや、つまりその御分霊ごぶんれいの神々かみがみに伝つたわるのでございます。
 おこがましい申分もうしぶんかは存ぞんじませぬが、その点てんの御理解ごりかいが充じゆう
 分ぶんでない、地上ちじように人類じんるいの発はつ生せいした径路いきさつがよくお判りわか
 にならぬと存ぞんじます。稀薄きはくで、清浄せいじようで、殆ほとんど有あるか無なきか

の、^{ひかり}光の凝塊^{かたまり}と申^{もう}上^{しあ}げてよいようなお形態^{からだ}をお有^もち遊^{あそ}ばされ
 た^{たか}高い神様^{かみさま}が、一足^{そくと}跳びに濃^こく鈍^{にぶ}い物質^{ぶつしつ}の世界^{せかい}へ、その御^ご
 分^{れい}霊^うを植^うえ附^つけることは到底^{とうてい}できません。神界^{しんかい}から靈界^{れいかい}、
 靈界^{れいかい}から幽界^{ゆうかい}へと、だんだんにそのお形態^{からだ}を物質^{ぶつしつ}に近^{ちか}づけ
 てあつたればこそ、ここに初^{はじ}めて地^ち上^{じよう}に人^{じん}類^{るい}の発^{はつ}生^{せい}すべき
 段^{だん}取^{どり}に進^{すす}み得^えたのであると申^{もう}すことでございます。そんな面^{めん}
 倒^うな手^て続^{つづ}きを踏^ふんであつてさえも、幽^{ゆう}から頭^{けん}に、肉^{にく}体^{たい}のないも
 のから肉^{しん}体^{またもと}のあるものに、移^{うつ}り変^{かわ}るには、実^{じつ}に容^{よう}易^いならざる御^ご苦^く
 心^{しん}と、又^{また}殆^{ほと}んど数^{かず}えることのできない歳^{とし}月^{つき}を閲^けしたということ
 ございます。一^{ばん}番^{こま}困^{こま}るのは物^{ぶつ}質^{しつ}というものの兎^{とか}角^{かく}崩^{くず}れ易^{やす}いこと
 で、いろいろ工^く夫^{ふう}して造^{つく}つて見^みても、皆^{みな}半^{はん}途^とで流^{なが}れて了^{しま}い、立^り派^{っぱ}

たましいやどに魂の宿になるような、完全な人体は容易に出来上らなかつた
 そうでございます。その順序、方法、又發生の年代等に就きても、或る程度まで神様から伺つて居りますが、只今それを申上げてゐる違はございませぬ。いずれ改めて別の機会に申上げることによしましう。

兎に角、現在の人間と申すものが、最初神の御分霊を受けて地上に生れたものであることは確かでございます。もつとくわしくいうと、男女両柱の神々がそれぞれ御分霊を出し、その二つが結合して、ここに一つの獨立した身魂が造られたのでございます。その際何うして男性女性性の區別が生ずるかと申すことは、世にも重大なる神界の秘事でござい

ますが、要するにそれは男女何れかが身魂の中、柩を受持つ
かできまる事だそうで、よく氣をつけて、天地の二神誓約の段に
示された、古典の記録を御覧になれば大体の要領はつかめ
るとのことでございます。

さて最初地上に生れ出でた一人の幼児——無論それは力
も弱く、智慧もとぼしく、そのまま無事に生長し得る筈は
ございませぬ。誰かが傍から世話をしてくれなければとても三日
とは生きて居られる筈はございませぬ。そのお世話掛がつまり
守護靈と申すもので、蔭から幼児の保護に当るのでございま
す。もちろん最初は父母の靈、殊に母の靈の熱心なお手伝
もありますが、だんだん生長すると共に、ますます守護靈

はたらきの働はたらきが加くわわり、最後しまいには父母ふぼから離はなれて立派りっぱに一本立ほんだちの身みとなつて了しまいます。ですから生うまれた子供こどもの性せい質しつや容よう貌ぼうは、或ある程て度いどりようしん兩りやう親しんに似にて居いると同どう時じに、又また大たい変へんに守しゅ護ご靈れいの感かん化かを受うけ、時ときとすれば殆ほとんど守しゅ護ご靈れいの再さい来らいと申もうしても差さ支しかえない位くらいのものも少すくくないのでございませう。古こ事じ記きの神しん代だいの巻まきに、豊と玉たま姫ひめからお生うまれになられたお子こ様さまを、妹いもうとの玉たま依より姫ひめが養よう育いくされたとあるのは、つまりそう言いった秘ひ事じを暗あん示じされたものだうけたまはと承うけたまはります。

申もうすまでもなく子供こどもの守しゅ護ご靈れいになられるものは、その子供こどもの肉にく親しんと深ふかい因いん縁ねんの方かた……つまどうり同いつ一けい系とう統けいの方かたでございまして、男だん子しには男だん性せいの守しゅ護ご靈れい、女じょ子しには女じょ性せいの守しゅ護ご靈れいが

附くのでございます。人類が地上に発生した当初は、専
 ら自然靈が守護靈の役目を引き受けたと申すことでございま
 すが、時代が過ぎて、次第に人靈の数が加わると共に、守護
 靈はそれ等の中から選ばれるようになりました。むろん例外
 はありましようが、現在では数百年前乃至千年二千年前に
 帰幽した人靈が、守護靈として主に働いているように見受け
 られます。私などは帰幽後四百年余りで、さして新らしい方
 も、又さして古い方でもございませぬ。
 こんな複雑った事柄を、私の拙い言葉でできる丈簡単にか
 いつまんで申上げましたので、さぞお判りにくい事であろうか
 と恐縮して居る次第でございますが、わたくしの言葉の足り

ないところは、何卒あなたの方でよきようにお察しください。
うお願い致します。

十六、守護霊との問答

岩屋の修行中に私が自分の守護霊と初めて逢ったお話を申し上げたばかりに、ツイ斯んな長談議を致してしまいました。斯んな拙い話が幾分たりともあなた方の御参考になればこの上もなき僥倖でございます。

ついで、その際私と私の守護霊との間に行われた問答の一部を一応お話し致して置きましょう。

格別面白くもございません

ぬが、私にとりましてはこれでも忘れ難い思い出の種子なのでございます。

問『あなたが私の守護霊であると仰つしやるなら、何故もつと早くお出ましにならなかつたのでございますか？ 今迄私はお爺様ばかりを杖とも柱とも依りにして、心細い日を送つて居りましたが、若しもあなたのような優しい御方が最初からお世話をして下さつたら、どんなにか心強いことであつたでございましてらう……。』

答『それは一応尤もなる怨言であれど、神界には神界の掟というものがあるのです。あのお爺様は昔から産土神のお神使として、新たに帰幽した者を取り扱ふことにかけてはこ

の上もなくお上手で、とても私などの足元にも及ぶことではありませぬ。わたくし私などは修しゆぎよう行も未熟、それに人情味と言ったようなものが、まだまだ大へんに強過ぎて、思い切つてきびしい躰を施す勇気のないのが何よりの欠点なのです。あなたの帰幽当時の、あの烈しい狂乱と執着……とても私などの手に負えたものではありません。うつかりしたら、お守もりや役の私までが、あの昂奮の渦の中に引き込まれて、徒らに泣いたり、怨んだりすることになったかも知れませぬ。かたがわたくしとしては態とさし控えて蔭から見守つて居る丈にとどめました。結局けつきよくそうした方があなたの身の為めになったのです

……。

』

問 『では今までただお姿を見せないという丈で、あなた様は私の
 狂乱の状態で、お姿を隠すからすっかり御覧になつては居られま
 したので……。』

答 『それはもちろんのことです。あなたの一身の
 事柄は、現世に居た時のことも、又こちらの世界に移つて
 からの事も、一切知り抜いて居ります。それが守護霊とい
 うものの役目で、あなたの生活は同時に又大体私の生活
 でもあつたのです。私の修行が未熟なばかりに、随分
 あなたにも苦勞をさせました……。』

問 『まあ勿体ないお言葉、そんなに仰せられますと私は穴へも
 入りたい思いがいたします……。それにしてもあなた様は何と

仰つしやる御方で、そしていつ頃の時代に現世にお生れ遊され

ましたか……。』

答『改めて名告るほどのものではないのですが、斯うした深い因縁の絆で結ばれている上からは、一と通り自分の素性を申上げ置くことに致しましょう。私はもと京の生れ、父は粟屋左兵衛と申して禁裡に仕えたものでございます。私の名は佐和子、二十五歳で現世を去りました。私の地上に居った頃は朝廷が南と北との二つに岐れ、一方には新田、楠木などが控え、他方には足利その他東国の武士どもが附き随い、殆んど連日戦鬭のない日とてもない有様でした……。私の父は旗色の悪い南朝方のもので、従つて私どもは生

前に随分数々の苦勞辛酸を嘗めました……。』

問『まあそれはお氣の毒なお身の上……私の身に引きくらべて、

心からお察し致します……。それにしても二十五歳で歿なられ

たとの事でございますが、それまでずっとお独身で……。』

答『独身で居りましたが、それには深い理由があるので……。』

実は……今更物語るのもつらいのですが、私には幼い時から

許嫁の人がありました。そして近い内に黄道吉日を択

んで、婚礼の式を挙げようとしていた際に、不図起りました

のがあの戦乱、間もなく良人となるべき人は戦場の露と

消え、私の若き日の楽しい夢は無残にも一朝にして吹き散らさ

れてしまいました……。それからの私はただ一個の魂の脱けた生

きた骸……丁度蝕まれた花の蕾のしほむように、次第に元氣
むくろ ちようぶしほ はなつぼみ
 を失つて、二十五の春に、さびしくポタリと地面に落ちて了つ
うしな はる じべた おしま
 たのです。あなたの生涯も随分つらい一生ではありまし
しょうがい ずいぶん しょう
 たが、それでも私のにくらぶれば、まだ遙かに花も実もあつて、
わたくし はる はな み
 どれ丈幸福だったか知れませぬ。上を見れば限りもないが、
だけしあわせ うえ み かぎ
 下を見ればまだ際限もないのです。何事も皆深い深い因
した さいげん なにごと みなふか ふか いんね
 縁の結果とあきらめて、お互に無益の愚痴などはこぼさぬこ
けん けつか たがい むやく ぐち こ
 とに致しましょう。お爺様の御指導のお蔭で近頃のあなた
いた じいさま ごしどう かげ ちかごろ
 はよほど立派にはなりましたが、まだまだあきらめが足りない
りつぱ
 ように思います。これからは私もちよいちよい見まわりにまい
おも わたくし み
 り、ともども向上を図りましょう……。』
こうじよう はか

その日の問答は、大体斯んなところで終りましたが、斯うした一人のやさしい指導者が見つかったことは、私にとりて、どれだけの心強さであつたか知れませぬ。その後私の守護霊はやく束のとおり、しばしば私の許に訪れて、いろいろと有難い援助を与えてくださいました。私は心から私のやさしい守護霊に感謝して居るものでございます。

十七、第二の修行場

わたくしさいしよの最初の修行場——岩屋の中での物語は、一と先ずこの辺でくぎりをつけまして、これから第二の山の修行場の方に

移うつることに致いたしましょう。修行場しゆぎやうばの変へん更こうなどと申もうしますと、
 現世式げんせしきに考かんえれば、随分ずいぶん億劫おつくうな、何なにやらどさくさした、う
 るさい仕事しごとのように思おもわれましょうが、こちらの世界せかいの引越ひきこしは
 至極しごくあつさりしたものでございます。それは場所ばしよの変へん更こうと申もう
 よりは、むしろ境涯きやうがいの変へん更こう、又は気分きぶんの変へん更こうと申もうもの
 かも知れませぬ。現げんにあの岩屋いわやにしても、最初さいしよは何なにやら薄暗うすぐらい
 陰鬱いんうつな処ところのように感かんぜられましたが、それがいつとはなしにだ
 んだん明あかるくなつて、最後しまいには全然ぜんぜん普通ふつうの明あかるさ、些すこしも穴あなの
 内部なかという感かんじがしなくなり、それに連つれて私自身わたくしじしんの気持きもちも
 ずっと晴はれやかになり、戸外そとへ出掛でかけて漫歩そぞろあるきでもして見みたい
 というような風ふうになりました。たしかにこちらでは気分きぶんと境きやうが

涯いとがびツたり一致ちしているもののようかんに感ぜられます。

ある日わたくし私がいつになく統一とういつの修しゆぎ行ように倦あきて、岩屋いわやの入いりぐ

口ちまで何なんとはなしに歩あゆみ出でた時ときのことでごございました。ひよつ

くりそこへ現あらわれたのが例れいの指導しどう役やくのお爺じいさんでした。――

『そなたは戸外そとへ出でたがつていようじやナ。』

図星ずぼしをさされて私わたくしは少すこしきまりが悪わるく感かんじました。

『お爺じいさま、何どういうものか今日けふは氣きが落付おちつかないで困こまるのでご

ざいます……私わたくしはどこかへ遊あそびに出掛でかけたくなりまし』た。』

『遊あそびに出でたい時ときには出でればよいのじや。俺わしがよい場所ばしょへ案内あんない

してあげる……。』

お爺じいさんまでが今日けふはいつもよりも晴は々はしい面持おもちで誘さそつて

くだ
下さいますので、私わたくしも大へんうれしい気分きぶんになつて、お爺じいさんの
あとあとについて出掛でかけました。

岩屋いわやから少し参りますと、モーそこはすぐ爪先つまさき上りになつて、
みぎひだり すぎまつ
右も左も、杉や松や、その他たの常盤木ときわぎのしんしんと茂しげつた、相そうと
うけわ やま
当険うけんしい山でございます。あの、現界げんかいの景色けしきと同一どういつかと仰おつ

ツしやるか……左様さようでございます。格別かくべつ異つても居おりませぬが、

ただ現界げんかいの山やまよりは何なにやら奥深く、神かみさびて、ものすくくはな
いかと感かんじられる位くらいのものでございます。私わたくし達たちの辿たどる小路こみちの

すぐ下したは薄暗うすぐらい谿谷たにになつて居いて、樹叢しげみの中なかをくぐる水音みずおとが、
かすかにさらさらと響ひびいていましたが、気きの故せいか、その水音みずおとま
でが何なんとなく沈しずんで聞きこえました。

『モ―少し行つた所に大へんに良い山の修行場がある。』とお爺さんは道々私に話しかけます。

『多分そちの氣に入るであろうと思うが、兎も角も一応現場へ行つて見るとうしうか……。』

『何卒お願い致します……。』

私はただちよつと見物する位のつもりで軽く御返答をしたのでした。

間もなく一つの険しい坂を登りつめると、其処はやや平坦な崖地になっていました。そして四辺にはとても枝ぶりのよい、見上げるような杉の大木がぎっしりと立ち並んで居りましたが、その中の一番大きい老木には注連縄が張つてあり、そしてその

傍に白木造りの、小さい建物がありました。四方を板囲い
 にして、僅かに正面の入口のみを残し、内部は三坪ばかり
 の板敷、屋根は丸味のついたこけら葺き、どこにも装飾ら
 しいものはないのですが、ただすべてがいかにも神さびて、屋根
 にも、柱にも、古い苔が厚く蒸して居り、それが塵一つなき、飽
 まで淨らかな環境として作り融け合つて居りますので、実
 何ともいえぬ落付きがありました。私は覚えず叫びました。
 『まあ何という結構な所でございましょう！ 私、こんなところ
 で暮しとうございます……。』
 するとお爺さんは満足らしい微笑を老顔に湛へて、徐ろに
 言われました。――

『実はここがそちの修行場なのじゃ。モ一別に下の岩屋に帰るにも及ばぬ。早速内部へ入つて見るがよい。何も彼も一切取り揃えてあるから……。』

私はうれしくもあれば、また意外でもあり、言わるるままに急いで建物の内部へ入つて見ますと、中央正面の白木の机の上には果して日頃信仰の目標である、例の御神鏡がいつの間にか据えられて居り、そしてその側には、私の母の形見の、あのつかしい懐剣までもきちんと載せられてありました。

私はわれを忘れて御神前に拝跪して心から感謝の言葉を述べたことでございました。

大體これが岩屋の修行場から山の修行場へ引越した時の

実況じつきようでございます。

現世げんせの方かたから見れば一片ぺんの夢物語ゆめものがたりの

ように聴きこえるでございましょうが、そこが現世げんせと幽界ゆうかいとの相違そうい

なのだから何なんとも致いたしかた方がございませぬ。私わたくしどもとても、幽ゆうか

界いはいに入はいったばかりの当座とうざは、何なにやらすべてがたよりなく、又飽またあ

気つけなく思おもわれて仕方しかたがなかつたもので……。しかしだんだん慣なれ

て来くると矢張やはりこちらの生せい活かつの方ほうが結けつ構こうに感かんじられて来きまし

た。僅わずか半里はんりか一里りの隣となりの村むらに行くのにさえ、やれ従者ともだ、興の

物ものだ、御召換おめしがえだ……。半日はんいちもかかつて大騒おおさわぎをせねばな

らぬような、あんな面倒臭めんどうくさい現世げんせの生せい活かつを送おくりながら、よく

も格別かくべつの不ふ平へいも言いわずに暮くらせたものである……。私わたくしはだんだ

んそんな風ふうに感かんずるようになったのでございます。何いずれ、あなた

方^{がた}にも、その味^{あじ}がやがてお判^{わか}りになる時^{とき}が参^{まい}ります……。

十八、竜神の話

山^{やま}の修行場^{しゆぎようば}へ移^{うつ}つてからの私^{わたくし}は、何^{なん}とはなしに氣分^{きぶん}がよほど晴^はれやかになつたらしいのが自分^{じぶん}にも感^{かん}ぜられました。主^{おも}なる仕事^{しごと}は矢張^{やは}り御神^{ごしん}前に静座^{せいざ}して精神^{せいしん}統一^{とういつ}をやるのでございませうが、ただ合間^{あいま}合間^{あいま}に私^{わたし}はよく室外^{そと}へ出て、四辺^{あたり}の景色^{けしき}を眺^{なが}めたり、鳥^{とり}の声^{こえ}に耳^{みみ}をすませたりするようになりました。

前^{まえ}にも申^{もうし}上げた通り^{とお}、私の修行場^{しゆぎようば}の所在^{しよざい}地^ちは山^{やま}の中^{ちゆうふ}腹^くの平坦^{たいち}地^ちで、崖^{がけ}の上^{うへ}に立^たつて眺^{なが}めますと、立木^{たちき}の隙間^{すきま}からず

つと遠方えんぼうが眼めに入り、なかなかの絶景ぜっけいでございます。どこにも平野へいやらしい所ところはなく、見渡みわたすかぎり山又山やまやま、高いたかのも低いひくのも、又色またいろの濃いこのも淡いうすのも、いろいろありますが、どれも皆樹木みなじゆもくの茂しげった山ばかり、尖とがった岩山いわやまなどはただのひと一つも見えません。それ等らが十重二十重とえはたえに重なり合あつて絵巻物えまきものをくり拡ひろげているところは、全く素晴すばらしい眺めながで、ツイうつとりと見とれて、時の経たつのも忘れて了わすう位しまくらでございます。

それから又あちこちの木々きぎの茂みしげの中に、何ともいえぬ美しい鳥とりの音ねが聴きこえます。それは、昔鎌倉むかしがまくらの奥山おくやまでよくきき慣なれたほととぎす時とき鳥とりの声こえに幾分いくぶん似たところもあります。しかしそれよりはもツと冴さえて、賑にぎやかで、そして複雑こみいった音色ねいろでございます。た

ひとり^{ひひとり}はな^{はな}あ^あいて^{いて}
 だ一人の話相手とてもない私^{わたし}はどれ丈^{だけ}この鳥^{とり}の音^ねに慰^{なぐさ}められたか
 知^しれませぬ。どんな種^{しゅるい}類^{るい}の鳥^{とり}かしらと、或^ある時^{とき}念^{ねん}の為^{ため}にお爺^{じい}
 さん^{うかが}に伺^みつて見^みましたら、それはこち^{せかい}らの世界^{かい}でもよほど珍^{めず}らし
 い鳥^{とり}で、現^{げん}界^{かい}には全^{ぜん}然^{ぜん}棲^すんでい^いないと申^{もう}すこと^{こと}でございまし
 た。尤^もも音^{おと}色^{いろ}が美^{うつく}しい割^{わり}に毛^け並^{なみ}は案^{あん}外^{がい}つま^{つま}らない鳥^{とり}で、ある時^{とき}
 不^ふ図^{とち}近^{ちか}くの枝^{えだ}にとま^まつてい^いるところを^みると、大^{おほ}きさは鳩^{はと}位^{ぐらい}、
 幾^{いく}分^{ぶん}現^{げん}界^{かい}の鷹^{たか}に似^にて、頸^{けい}部^ぶに長^{なが}い毛^けが生^はえていま^いした。幽^{ゆう}
 界^いの鳥^{とり}でも矢^や張^はり声^{こえ}と毛^け並^{なみ}とは揃^{そろ}わぬものかしらと感^{かん}心^{しん}した
 こと^{こと}でございま^いした。

もう一^{ひと}つ爰^{こゝ}の景^け色^{しき}の中^{なか}で特^{とく}に私^{わたし}の眼^めを惹^ひいたものは、向^むつて右^み
 手^{ぎて}の山^{やま}の中^{ちゆう}腹^{ふく}に、青^{おほ}葉^ばがく^くれにち^みらち^{ひと}ら見^みえる一^{ひと}つの丹^に塗^{ぬり}の

お宮みやでございました。それはホンの三尺四方位の小さい社やしろなのですが、見渡みわたす限りただ緑かぎの一色みどりしかない中なかに、そのお宮みや丈だけがくツきりと朱あかく冴さえているので大たいへんに目立めだつのでございます。わたくしは次第しだいに、そのお宮みやにひきつけられるようになりました。で、ある日ひお爺じいさんが見舞みまわれた時とき私は訊きこねました。――

『お爺じいさま、あそこに大たいそう美うつくしい、丹塗にぬりのお宮みやが見みえますが、あれはどなた様さまをお祀まつりしてあるのでございますか。』

『あれは竜神りゅうじん様さまのお宮みやじゃ。これから俺わしにばかり依たよらず、直接じかに竜神りゅうじん様さまにもお依たのみするがよい……。』

『竜神りゅうじん様さまでございますか？』私わたくしは大たいへん意外いがいに感かんじまして、

『一体たいそれは何どういう神様かみさまでございますか？』

『そろそろそちも竜神との深い関係を知つて置かねばなるまい。よほど奥深い事柄であるから、とても一度で腑には落ちまいが、その中だんだん判つて来る……。』

お爺さんはあたかも寺子屋のお師匠さんと言つた面持で、いろいろ講釈をしてくださいました。お爺さまは斯んな風に説き出されました。――

『竜神というのは一と口に言えば元の活神、つまり人間が現世に現われる前から、こちらの世界で働いている神々じや。ときとして竜の姿を現わすから竜神には相違ないが、しかしいつもあんな恐ろしい姿で居るのではない。時と場合でやさしい神の姿にもなれば、又一つの丸い球にもなる。現に俺なども竜の姿にもなれば、又一つの丸い球にもなる。現に俺なども竜の姿にもなれば、又一つの丸い球にもなる。現に俺なども竜の姿にもなれば、又一つの丸い球にもなる。』

神しんの一人ひとりであるが、そちの指導役しどうやくとして現あらわれる時は、いつ
 も斯このような、老人ろうじんの姿すがたになつてゐる……。ところで、この竜りゅうじん
 神しんと人間にんげんとの関係かんけいであるが、人間にんげんの方ほうでは、何も知しら
 ずに、最初さいしよから自分じぶん一つの力ちからで生うれたもののように思おもつて居いる
 が、実じつは人間にんげんは竜りゅうじん神しんの分ぶん霊れい、つまりその子孫しそんなのじや。
 ただ竜りゅうじん神しんはどこまでもこちらの世界せかいの者もの、人間にんげんは地ちの世界せかい
 の者ものであるから、幽ゆうから顕けんへの移うつりかわりの仕事しごとはまことに困こん
 難なんで、長い長い歲月ながながとしつきを経て漸ようくのことでもモノになつたのじや。
 詳くわしいことは後あとで追々おいおい話はなすとして、兎とに角かく人間にんげんは竜りゅうじん神しんの
 子孫しそん、汝そちとても元もとへ溯さかのぼれば、矢張やはりさる尊とうい竜りゅうじん神しん様さまの御末裔みすえ
 なのじや。これからよくその事ことを弁わきま、あの竜りゅうじん神しん様さまのお

みやへお詣りせねばならぬ。又機会を見て竜宮界へも案内し、乙姫様にお目通りをさしてもあげる。』

お爺さんのお話は、何やらまわりくどいようで、なかなか當時の私の腑に落ち兼ねたことは申すまでもありますまい。殊におかしかったのが、竜宮界だの、乙姫様だのと申すことで、私は思わず笑い出してしまいました。――

『まあ竜宮などと申すものが實際この世にあるのでございますか。――あれは人間の仮構事ではないでしようか……。』
『決してそうではない。』とお爺さんは飽まで真面目に、『人間界に伝わる、あの竜宮の物語は實際こちらの世界で起った事実が、幾分尾鰭をつけて面白おかしくなっている

までじゃ。そもそも竜宮と申すのは、あれは神々のおくつろぎ遊ばす所……言わば人間界の家庭の如きものじゃ。前にものべた通り、こちらの世界は造りつけの現界とは異り、場所も、家屋も、又姿も、皆意思のままにどのようなにもかえられる。で、竜宮界のみを竜神の世界と思うのは大きな間違で、竜神の働く世界は、他に限りもなく存在するのである。が、しかし神々にとりて何よりもうれしいのは矢張りあの竜宮界である。竜宮界は主に乙姫様のお指図で出来上った、家庭的理想境なのじゃ。』

『乙姫様と仰ツしやると……。』

『それは竜宮界で一番上の姫神様で、日本の昔の物語にほんむかしものがたり』

に豊玉姫とよたまひめとあるのがつまりその御方おかたじや。神々のお好みこのがある

ので、他ほかにもさまざまの世界せかいがあちこちに出来てはいるが、それ

等なかの中で、何なんと申しても一番立ち優まさつてゐるのは矢張りこの竜りゅう

宮界ぐうかいじや。すべてがいかに清きよらかで、優雅ゆうがで、そして華美はで

な中なかに何ともいえぬ神々こうこうしいところがある。とても俺わしの口で述

べ尽つくせるものではない。そちも成なるべく早く修しゆぎ行ようを積つんで、

実地じつちに竜宮界りゅうぐうかいへ行いつて、乙姫様おとひめさまにもお目通めとおりを願ねがうがよい

……』

『私わたくしのようなものにもそれが協かないましょうか……。』

『それは勿論もちろん協かなう……イヤ協かなわねばならぬ深い因縁いんねんがある。

何を隠かくそう汝そちはもともと乙姫様おとひめさまの系統すじを引ひいてゐるので、そち

の竜宮行は言わば一種の里歸りのようなものじゃ……。』

お爺さんの述べる所はまだしっくり私の胸にはまりませんでし

たが、しかしそれが一ト方ならず私の好奇心をそそつたのは事

実でございました。それから私は絶えず竜宮界の事、乙

姫様の事ばかり考え込むようになり、私の幽界生活に一の

大切な転換期となりました。

が、私の竜宮行きはそれからしばらく過ぎてからの事でござい

ました。

十九、竜神の祠

順序じゆんじよとして、これからポツポツ竜宮界のお話を致さね

ばならなくなりましたが、もともと口の拙くちない私が、私よりも

っと口の拙くちない女の口を使つかつて通信つうしんを致いたすのでございますから、

さぞすべてがつまらなく、一向こうに多愛たあいのない夢物語ゆめものがたりになつて

しまし、いいそうで、それが何なにより氣きがかりでございます。と申もうして、こ

の話を省はないて了しまえば私の幽界生活ゆうかいせいかつの記録きろくに大きな孔あなが開あくこ

とになつて筋道すじみちが立たなくなるおそれがございます。まあ致いたし

方かたがございませぬ、せいぜい氣きをつけて、私の実地じつちに觀みたまま、

感かんじたままをそっくり申もうし上げることに致いたしましょう。

ここでちよつと申もうし添そえて置おきたいのは、私の修行場しゆぎやうばの右手みぎて

の山やまの半腹はんぷくに在ある、あの小ちいさい竜神りゆうじんの祠やしろのことでございます

す。私は竜宮行をする前に、所中そのお祠へ参拝したのでございますが、それがつまり私に取りて竜宮行の準備だったのでございました。私はそこで乙姫様からいろいろ有難い教訓やら、お指図やら、又おやさしい慰めのお言葉やらを戴きました。お蔭で私は自分でも気がつくほどめきめきと元氣が出てまいりました。『その様子なら汝も近い内に乙姫様のお目通りができそうじゃ……。』指導役のお爺さんもそんなことを言つて私を励ましてくださいました。

ここで私が竜神様のお祠へ行つて、いろいろお指図を受けたなどと申しますと、現世の方々の中には何やら異様にお考えになられる者がないとも限りませぬが、それは現世の方々が、

まだ神社じんじやというものの性質せいしつをよく御存ごぞんじない為ためかと存ぞんじま
 す。お宮みやというものは、あれはただお賽銭さいせんを上げあげて、拍手かしわでを
 打うつて、首かうべを下さげて引きさがる為ために出来できている飾物かざりものではな
 いようでございます。赤心まごころ籠めて一生懸命しょうけんめいに祈願きがんをすれば、
 それが直ただちに神様かみさまの御胸みむねに通つうじ、同時に神様かみさまからもこれに對たい
 するお応答こたえが降り、時ときとすればありありとそのお姿すがたまでも拝おがませ
 て戴いたけるのでございます……。つまり、すべては魂たましと魂たましの交通こうつう
 を狙ねらったもので、こればかりは実に何ともいえぬほど巧うまい仕組しくみに
 なつて居いるのでございます。私わたくしが山の修行場しやまじゆぎやうじやうおに居わりながら、何どう
 やら竜宮界りゆうぐうかいの模様もようが少すこしづつ判わかりかけたのも、全まったくこの難あり
 有たい神社参拜じんじやさんぱいの賜たまものでございました。もちろん地上ちじやうの人間にんげん

は肉にく体たいという厄やっ介かいなものに包つつまれて居おりますから、いかに神じん社しゃの前まえで精せい神しんの統とう一いつをなされても、そう容よう易いに神か様みさまとの交こう通つうはできすまいが、私わたくしどものように、肉にく体たいを棄すててこちらせかいの世界せかいへ引越ひきこしたのになりますと、殆ほとんどすべての仕し事ごとはこの仕掛しかけのみによりて行おこわれるのでございます。十二人にん間の世せ界かいにも近ちか頃ごろ電でん話わだの、ラヂオだのという、重ちよう宝ほうな機き械かいが発はつ明めいされたと仰おつしやるか……それは大たいへん結けつ構こうなこととでございませう。しかしそれなら尚な更おさ私わたくしの申もう上しあげる事ことがよくお判わかりの筈はずで、神じん社しゃの装そう置ちもラヂオとやらの装そう置ちも、理り窟くつは大だい体たい似にたものかも知しれぬ……。

まあ大たいへんつまらぬ事ことを申もう上しあげて了しまいました。では早さつ速そくこ

れから 竜宮行の模様をお話しさせて戴きます……。

二十、竜宮へ鹿島立

こちらの世界の仕事は、何をするにも至極あつさりしてしまし
て、すべてが手取り早く運ばれるのでございますが、それでもい
よいよこれから 竜宮行と決つた時には、そこに相当の準
備の必要がありました。何より肝要なのは齋戒沐浴……
つまり心身を浄める仕事でございます。もちろん私どもには肉
体はないのでございますから、人間のように実地に水などを
かぶりは致しませぬ。ただ水をかぶつたような清浄な気分

なればそれで宜よろしいので、そうすると、いつの間にか服み装なりまでも、自然しぜんに白びやく衣いにかわ變かつて居いるのでございませう。心こころと姿すがたとがいつもぴつたり一致いちするのが、こちらの世界せかいの掟おきてで、人間界にんげんかいのようこころに心こころと姿すがたとを別々べつべつに使つかい分わけることばかりはとてもできないのでございませう。

兎とも角かくも私わたくしは白びやく衣い姿すがたで、先まず御神前ごしんぜんに端坐たんざ祈願きがんし、それからあの竜神様りゅうじんさまのお祠やしろへ詣もつで、これから竜宮界りゅうぐうかいへ参まいらせいただて戴おきますと御報告ごほうこく申もう上げしあしました。先方せんぽうから何なんとか返答へんじがあつたかと仰おつしやるか……それは無論むろんありました。『飲よろこんであなたのお出いでをお待まちして居おります……。』とそれはそれは鄭重ていじうちゆうな御挨拶ごあいさつでございました。

りゆうじんさま
竜神様のお祠やしろから自分の修行場へ戻かへつて見ると、もう指しどう

導役やくのお爺さんじいが、そこでお待ちになつて居おられました。

『準備じゆんびができたらずぐに出掛でかけると致いたそう。俺わしが竜宮りゆうぐうの入いりく

口ちまで送おくつてあげる。それから先さきは汝そちひとで行くのじゃ。何なに

も修しゆぎ行ようの為ためである。あまり俺わしに依たよる氣になつては面白おもしろう

ない……。』

そう言いわれた時ときに、私わたくしは何なんやら少すこし心こころ細ほそく感かんじましたが、

それでもすぐきとに氣を取り直なおして旅仕度たびじたくを整ととのえました。私わたくしの時とき

の旅姿たびがたでございますか……。それは現世げんせの旅姿たびすがたそのまま、言い

わばその写うつしでございます。かねて竜宮界りゆうぐうかいは世よにも奇麗きれいな、

華美はでなところと伺うかがつて居おりますので、私わたくしもそのつもりになり、白び

やくい うえ わたくし せいぜん ばんす
衣の上に、私の生前一番好きな色模様の衣裳を重ねまし
た。それは綿の入った、裾の厚いものでございますので、道
中は腰の所で紐で結えるのでございます。それからもう一つ道
中 ゆうすがた な 姿に無くてはならないのが被衣……私は生前の好みで、
しろ かつぎ 白の被衣をつけることにしました。履物は厚い草履でございま
す。

お爺さん じい わたくし は私の姿を見て、にこにこしながら『なかなか念の入
った道中 どうちゆうすがた 姿じゃナ。乙姫様 おとひめさま もこれを御覧 ごらん なされたらさぞ
お歓び よろこ になられるであろう。俺 わし などはいつも一張羅 ちやうら じゃ……。』
そんな軽口 かるくち をきかれて、御自身 ごじしん はいつもと同一 どう の白衣 びやくい に白
ずきん の頭巾 ずきん をかぶり、そして長い長い一本 いっぽん の杖 つえ を持ち、素足 すあし に白鼻 しろはな

緒おの藁わら草履ぞうりを穿はいて私の先わたくしきに立たたれたのでした。序ついででにお
 爺じいさんの人相にんそう書がきをもう少すこしくわしく申もう上げますなら、年とし齡れいの
 ころおおよくらしいとうはつまつしろ鼻び下かから顎あごにかけてのお髭ひげも真ま
 頃つしろは凡おおよそ八十位くらしい、頭髪まつげは真ま白しろ、鼻下びかから顎あごにかけてのお髭ひげも真ま
 白しろ、それから睫毛まつげも矢張やはり雪ゆきのように真ま白しろ……すべて白しろづく
 めでございます。そしてどちらかと云いへば面長おもながで、眼鼻立めはなだちの
 よく整ととのった、上じよう品ひんな面差おもざしの方ほうでございます。私わたくしはまだ仙せん
 人にんというものをよく存ぞんじませぬが、若もし本ほん当とうに仙せん人にんがある
 としたら、それは私わたくしの指導しどう役やくのお爺じいさんのような方かたではなかる
 うかと考かんがえるのでございます。あの方かたばかりはどこからどこまで、
 きれいに枯かれ切きつて、すっかりあくぬけがして居おられます。
 やましゆぎようばあと 山の修行場わたくしたちを後あとにした私達ずいぶんは、随分あいだわ長い間やまみ険あしい山

道をば、下へ下へ下へと降つてまいりました。道はお爺さんが
 先きに立て案内して下さるので、少しも心配なことはありません
 せぬが、それでもところどころ危つかしい難所だと思つたこと
 もございました。又道中どこへ参りましても例の甲高い霊
 鳥の鳴声が前後左右の樹間から雨の降るように聴えました。
 お爺さんはこの鳥の声がよほど好きと見えて、『こればかりは
 現界ではきかれぬ声じや。』と御自慢をして居られました。
 ようややまおきおも　漸く山を降り切つたと思うと、たちまちそこに一つの大きな湖
 水が現われました。よほど深いものと見えまして、湛えた水は藍
 を流したように蒼味を帯び、水面には対岸の鬱蒼たる森
 林の影が、くろぐろと映つて居ました。岸はどこもかしこも皆

割^わつたような巖^{いわ}で、それに松^{まつ}、杉^{すぎ}その他の老^{ろう}木^{ぼく}が、大^{だい}蛇^{じや}のよ
うに垂^たれ下^{さが}つているところは、風^ふ情^{ぜい}が良^よいというよりか、寧^{むし}ろも
の凄^{すこ}く感^{かん}ぜられました。

『どうじゃ、この湖^こ水^{すい}の景^け色^{しき}は……汝^{そち}は些^ちと氣^きに入^いらんであろう
が……。』

『私^{わたくし}はこんな陰^{いん}氣^きくさい所^{ところ}は厭^{いや}でございます。でもここは何^{なん}ぞ縁^い
由^{われ}のある所^{ところ}でございますか?』

『ここはまだ若^{わか}い、下^{かき}級^{ゆう}の竜^{りゅう}神^{じん}達^{たち}の修^{しゆ}行^{ぎよう}の場^ば所^{しょ}なのじ
や。俺^{わし}は時^{とき}々^{とき}見^みまわりに来^くるので、善^ようこの池^{いけ}の勝^{かつ}手^てを知^しつて
いる。何^{なに}も修^{しゆ}行^{ぎよう}じや、汝^{そち}もここでちよつと統^{とう}一^{いつ}をして見^み
る。沢^{たく}山^{さん}の竜^{りゅう}神^{じん}達^{たち}の姿^{すがた}が見^みえるであらう……。』

あまり良い氣持きもちは致いたしませんでしたが、修しゆぎよう行ぎやうとあれば辞いなむ
 こともできず、私わたくしはとある巖いわの上うえに坐すわつて統とう一いつ状じやう態たいに入はいつて
 見みますと、果はたして湖こ水すいの中なかは肌はだの色いろの黒くろっぽい、あまり品ひんの良よく
 ない竜りゆうじん神かみさんでぎつしり填つまつていました。角つののあるもの、無な
 いもの、大おおきなもの、小ちいさなものの、眠ねむっているもの、暴あばれている
 もの……。初はじめてそんな無ぶ氣き味みな光あり景さまに接せつした私わたくしは、覚おぼえずびつ
 くりして眼めを開あけて叫さけびました。――
 『お爺じいさま、もう沢たく山さんでございます。何どうぞもつと晴はれやかな
 所ところへお連つれ下くださいませ……。』

二十一、竜宮街道

しばらく湖水こすいの畔へりを伝つたつて歩あるいて居いる中うちに、山やまがだんだん低ひくくなり、やがて湖水こすいが尽つきると共に山ともも尽つきて、広ひろ々びろとした、少すこしうねりのある、明あかるい野原のほらにさしかかりました。私わたくし達は
その野原のほらを貫つらぬく細道ほそみちをどこまでもどこまでも先さきへ急いそぎました。
やがて前面ぜんめんに、やや小高い砂丘すなやまの斜面しやめんが現あらわれ、道みちはそ
の頂辺てっぺんの所ところに登のぼつて行ゆきます。『何なにやら由井ゆいヶ浜はまらしい景色けしきで
ある……。』私わたくしはそんなことを考かんえながら、格別かくべつ険つけしくもない
その砂丘すなやまに登のぼりつめました。さてそこから前面ぜんめんを見渡みわたした
時ときに、私わたくしはあまりの絶景ぜっけいに覺おぼえずはつと氣息いきづまりました。砂す
丘なやまのすぐ真下ましたが、えも言いわれぬ美うつくしい一ツひとつの入江いりえになっている

のではありませんせぬか！

刷毛はけで刷はいたような弓ゆみなりになつた広い浜ひろはま……のたりのたりと

音おともなく岸きしべ辺よに寄よせる真青まつさおな海うみの水みず……薄絹うすぎぬを拵ひろげたような、

はてしもなくつづく浅霞あさかすみ……水みずと空そらとの融とけ合あうあたりにほ

のぼのと浮うく遠山とおやまの影かげ……それはさながら一幅ぶくの絵巻物えまきものをく

りひろげたような、実じつに何なんとも言いえぬ絶景ぜっけいでございました。

明あけても暮くれても、眼めに入いるものはただ山やまばかり、ひたすら修し

行ゆき三昧さんまいに永ながい歳とし月つきを送おくつた私わたくしでございますから、尚なお更さらこ

の海うみの景色けしきが気きに入いつたのでございましょう、しばらくの間あわだくし私は

全まったくすべてを打忘うちわすれて、砂丘すなやまの上うへに立たち尽つくして、つくづくと

見惚みとれて了しまつたのでございました。

『どうじや、なかなかの良い眺めであろうが……。』

そう言われて私はやつと自分に戻りました。

『お爺さま、わたくし、こんななごやかな、良い景色は、まだ一度も見たためしがございませぬ……。ここは何と申すところであ

ございますか？』

『これが竜宮界の入口なのじや。ここから竜宮はそう

遠くない……。』

『竜宮は矢張り海の底にあるのでございますか？』

『イヤイヤあれは例によりて人間どもの勝手な仮構事じや。

乙姫様は決して魚族の親戚でもなければ又人魚の叔母様でも

ない……。が、もともと竜宮は理想の別世界なのであるか

ら、造ろうと思えば海の底にでも、又その他の何処にでも造れる。そこが現世の造りつけの世界と大へんに異う点じや……。』

『左様でございますか……。』

何やらよくは腑に落ち兼ねましたが、私はそう御返答するより外に致方がないのでした。

『さて』とお爺さんは、しばらく経つてから、いと真面目な面持で語り出しました。『俺の役目はここまで汝を案内すれば

それで済んだので、これから先きは汝一人で行くのじや。あれ、

あの入江のほとりから、少し左に外れたところに見ゆる真平

な街道、あれをどこまでも辿つて行けば、その突き

当りがつまり竜宮で、道を間違えるような心配は少しもな

い……。又また竜りゅうぐう宮みやへ行いつてからは、どなたにお目めにかかるか知しれぬが、何いずれにしても、ただ先せんぼう方のお話はなしを伺かう丈だけでは面おも白しろうない。氣きのついたこと、腑ふに落おちぬことは、少すこしの遠えん慮りもなく、どしどしお訊たずねせんければ駄だ目であるぞ。すべて神しん界かいの掟おきてとして、こちらもとの求もとめる丈だけしか教おしえられぬものじや。で、何なに事ごとも油ゆ断だんなく、よくよく心こころの眼まなこを開あけて、乙おと姫ひめ様さまから愛あい想そをつかさねることのないよう心こころ懸かけてもらいたい……。では俺わしはこれで帰かえりますぞ……。』

そう言いつて、つと立たち上あつたかと思おもうと、もうお爺じいさんの姿すがたはどこにも見みえませんでした。

例れいによりてその飽あ気けななき加か減げんと言いつたらありません。私わたくしはちよ

つと心さびしく感じましたが、それはほんの一瞬間のことで
 ございました。私は斯んな場合にいつも肌から離さぬ、例の母の
 紀念の懷劍を、しっかりと帶の間にさし直して、急いで砂丘
 を降りて、お爺さんから教えられた通り、あの竜宮街道を真
 直に進んだのでした。

その後私も幾度となくこの竜宮街道を通りましたが、何
 度通つて見ても心地のよいのはこの街道なのでございます。そ
 れは天然の白砂をば何かで程よく固めたと言つたような、踏み
 心地で、足触りの良さと申したら比類がありません。そして何
 所に一点の塵とてもなく、又道の両側に程よく配合つた大
 小さまざまの植込も、実に何とも申上げかねるほど奇麗に

出来て居り、とても現世ではこんな素晴らしい道路は見られませ
 ぬ。その街道が何の位続いているかとお訊ねですか……さアど
 れ位の道程かは、ちよつと見当がつきかねますが、よほど遠い
 こと丈は確かでございます。街道の入口の辺から前方を眺
 めても、霞が一带にかかつていて、何も眼に入りませぬが、しば
 らく過ぎると有るか無きかのようになり、薄つすりと山の影らしいも
 のが現われ、それから又しばらく過ぎると、何やらほんのりと丹
 塗りの門らしいものが眼に映ります。その辺からでも竜宮の
 御殿まではまだ半里位はたつぷりあるのでございます……。
 何分絵心も何も持ち合わせない私の力では、何のとりとめた
 お話もできないのが、大へんに残念でございます。あの美しい

道^{どうちゆう} 中の眺め^{なが}の、せめて十分^{ぶん}の一なりとも皆様^{みなさま}にお伝え^{つた}した
いのでございしますが……。

二十二、唐風^{からふう}の御殿

しばらくしてから私^{わたくし}はどうとう 竜宮^{りゆうぐう}界^{かい}の御門^{ごもん}の前^{まえ}に立^たつて
いましたが、それにしても私は四辺^{わたくしあたり}の光景^{ありさま}があまりにも現実^{げんじつ}的^{てき}
なのをむしろ意外^{いがい}に思^{おも}つたのでございました。お爺^{じい}さんの御話^{おはなし}
から考^{かんが}えて見^みしても、 竜宮^{りゆうぐう}はドウやら一^{ひとつ}の蜃氣楼^{しんきろう}、乙^{おとひ}
姫様^{めさま}の思召^{おぼしめし}でかりそめに造^{つく}り上^{あげ}げられる一^{ひとつ}の理想^{りそう}の世界^{せかい}ら
しく思^{おも}われますのに、実地^{じっち}に当^{あた}つて見^みますと、それはどこにあぶ

なげのない、いかにもがツしりとした、正^{しょう}真^{しん}正^{しょう}銘^{めい}の現実^{げんじつ}の世界^{せかい}なのでございます。『若^もしもこれが蜃^{しん}氣^き楼^{ろう}なら世^よの中^{なか}に蜃^{しん}氣^き楼^{ろう}でないものは一つもありはしない……。』私^{わたくし}は心^{こころ}の中^{うち}で

そう考^{かん}えたのでございました。

竜^{りゅう}宮^{ぐう}界^{かい}の大^{だい}体^{たい}の見た感^{かん}じでございですが——さア一^ひと口^{くち}

に申^{もう}したら、それはお社^{やしろ}と言^いうよりかも、寧^{むし}ろ一^{ひと}つの大^{おお}きな御^ご殿^{てん}

と言^いった感^{かん}じ、つま^{にんげん}り人^{じん}間^{げん}味^みが、たつぷりしてゐるのでござい

ます。そして何^{どこ}処^こやらに唐^{から}風^{ふう}なところがあります。先^まずその御^ご

門^{もん}でござい^えますが、屋^や根^ねは両^{りょう}端^{たん}が上^う方^えにしやくれて、大^{たい}そう

光^{つや}沢^ざのある、大^{おお}型^{がた}の立^り派^{っぱ}な瓦^{かわら}で葺^ふいてあります。門^{もん}柱^{ちゅう}その

他^たはすべ^べて丹^に塗^ぬり、別^{べつ}に扉^{びら}はなく、その丸^{まる}味^みのついた入^い口^{ぐち}から

は自由じゆうに門内もんないの模様もようが窺うかがわれます。あたりには別べつに門衛もんえいらし
 いものも見掛みかけませんでした。

で、私は思わたくしおもい切きつてその門もんをくぐつて行ゆきましたが、門内もんないは
 見事みごとな石畳いしだたみの舗道ほどうになつて居おり、あたりに塵ちり一つ落おちて居おり
 ませぬ。そして両側りようがわの広々ひろびろとしたお庭にわには、形かたちの良い松まつそ
 の他たが程ほどよく植うえ込こみになつて居おり、奥おくはどこまであるか、ちよ
 っと見当けんとうがつかぬ位くらいでございます。大体だいたいは地上ちじようの庭園ていえんとさ
 したる相違そういもございませぬが、ただあんなにも冴さえた草木そうもくの色いろ、
 あんなにも香かんばしい土つちの匂においは、地上ちじようの何所どこにも見受みうけること
 はできません。こればかりは実地じつちに行いつて見みるより外ほかに、描えがくべ
 き筆ふでも、語かたるべき言葉ことばもあるまいと考かんがえられます。

御門ごもんから御殿ごてんまではどの位くらいありましようか、よほど遠とおかつたように思おもわれます。御殿ごてんの玄関げんかんは黒塗くろぬりりの大きな式しきだいづく台造り、そして上方うえの庇ひさし、柱はしら、長押ながしなどは皆眼みなめのさめるような丹塗にぬり、又また壁かべは白塗しろぬりでございますから、すべての配合はいごうがいかにも華美はでで、ほがらか明朗めいろうで、眼めがさめるように感じかんられました。わたくし私はそこですっかり身みづくろいを直なおしました。むろん心こころでただそう思おもいさえすればそれで宜よろいので、そうすると今いままでの旅たびし装束ようぞくがその場ばできちんとした謁見おめみえの服装ふくそうに変わるのかわでござい
ます。そんな事ことでもできなければ、たッた一人ひとりで、腰元こしもとも連つれずに、竜宮りゅうぐうの乙姫おとひめさまをお訪たずねすることはできはしませぬ。

『御免ごめんくださいませ……。』

わたくしおも

私は思おもい切きつてそう案内あんないを乞こいました。すると、年としの頃ころ十五

くらいみ

ひとり

かわい

こむすめ

あら

位いに見える、一人の可愛らしい小娘こむすめがそこへ現あらわれました。服ふ

くそう

つつそでしき

ももいろ

きもの

かみ

さゆう

わ

うしろ

ほう

装しょうは筒袖つつそで式の桃色ももいろの衣服きもの、頭髪かみを左右さゆうに分わけて、背部うしろの方ほう

でくるくるとまるめて居いるところは、何どう見みても御国風みくにふうよりは

からふう

ちか

わたくし

かえつ

みよう

ごてん

つくり

唐風からふうに近いもので、私はそれが却かえつて妙みように御殿ごてんの構造つくりにしつく

りと当あてはまつて、大へん美うつくしいように感かんぜられました。

わたくし

こぎくら

もう

たい

うつく

かん

おくがた

め

『私は小櫻こぎくらと申もうすものでございますが、こちらの奥方おくがたにお目

どお

おとひめさま

よう

もう

なに

あらた

す

かん

かみさま

の

通とおりをいたし度たく、わざわざお訪たずねいたしました……。』

おとひめさま

よう

もう

なに

あらた

す

かん

かみさま

の

乙姫様おとひめさまとお呼よび申もうすのも何やらおかしく、さりとして神様かみさまの

御名みなを申もう上あぐるのも、何なにやら改あらたまり過すぎるように感かんじられ、ツ

御名みなを申もう上あぐるのも、何なにやら改あらたまり過すぎるように感かんじられ、ツ

御名みなを申もう上あぐるのも、何なにやら改あらたまり過すぎるように感かんじられ、ツ

伊うっかり奥方おくがたと申上もうしあげて了しまいました。こちらへ来きても矢張やはわたくしは現世時代げんせいじだいの呼び癖よくせがついてまわつて居たものと見えみます。それでも取次とりつぎの小娘こむすめには私の言葉がよく通つうじたらしく、『承し知致ししました。少々しょうしょうお待ちくださいませ。』と言いつて、踵きびすをかえして急いそいで奥おくへ入はいつて行ゆきました。

『乙姫様おとひめさまに首尾しゆびよくお目通めどおりが叶かなうかしら……。』
私わたしは多少わたくしの不安ふあんを感じながら玄関前げんかんまえに佇たたずみました。

二十三、豊玉姫と玉依姫

間まもなく以前いぜんの小娘こむすめが再び現あらわれました。

『何うぞおあがりくださいませ……。』

言われるままに私は小娘に導かれて、御殿の長い長い廊下を

幾曲り、ずっと奥まれる一と間に案内されました。室は十畳

許りの青畳を敷きつめた日本間でございましたが、さりとして

日本風の白木造りでもありません。障子、欄間、床柱

などは黒塗り、又縁の欄干、庇、その他造作の一部は丹塗り、

と言った具合に、とてもその色彩が複雑で、そして濃艶な

のでございます。又お床の間には一幅の女神様の掛軸がかつ

て居り、その前には陶器製の竜神の置物が据えてありま

した。その竜神が素晴らしい勢で、かつと大きな口を開けて

居たのが今も眼の前に残って居ります。

あはな 開け放つた障子の隙間からはお庭もよく見えましたが、それが又手数の込んだ大そう立派な庭園で、樹草泉石のえも言われぬ配合は、とても筆紙につくせませぬ。京の銀閣寺、金閣寺の庭園も数奇の限りを尽した、大そう贅沢なものとかねてきき及んで居りますので、或る時私はこちらからのぞいて見たことがございますが、竜宮界のお庭に比べるとあれなどはとても段違ひのように見受けられました。いかに意匠をこらしても、矢張り現世は現世だけの事しかできないものと見えます……。

ナニそのお室で乙姫様にお目にかかったか、と仰ツしやるか——ホホホ大そうお待ち兼ねでございますこと……。ではお庭の

話などはこれで切り上げて、早速乙姫様にお目通りをしたお
 話に移りましょう。——尤も私がその時お目にかかりましたのは、
 玉依姫様の方で、豊玉姫様ではございません。申すまで
 もなく竜宮界で第一の乙姫様と仰ツしやるのが豊玉姫
 様、第二の乙姫様が玉依姫様、つまりこの両方は御姉
 妹の間柄ということになつて居るのでございますが、何分
 にも竜宮界の事はあまりにも奥が深く、私にもまだ御両方
 の関係がよく判つて居りませぬ。お二人が果して本当に御
 姉妹の間柄なのか、それとも豊玉姫の御分霊が玉依
 姫でおりになるのか、何うもその辺がまだ充分私の腑に
 落ちないのでございます。ただしそれが何うあろうとも、この御

ふたかた
二方が切つても切れぬ、深い因縁の姫神であらせられるこ
とは確かでございます。私は其の後幾度も竜宮界に参り、
そして幾度も御両方にお目にかかつて居りますので、幾分
その辺の事情には通じて居るつもりでございます。

この豊玉姫様と言われる御方は、第一の乙姫様として竜
宮界を代表遊ばされる、尊い御方だけに、矢張りどこと
なく貫禄がございます。何となく、竜宮界の女王様と言
った御様子が自然にお軀に備わつて居られます。お年齢は二十七
八又は三十位にお見受けしますが、もちろん神様に實際のお
年齢はありません。ただ私達の眼にそれ位に拝まれるという
だけで……。それからお顔は、どちらかといえ下ぶくれの面

長、眼鼻立ちめはなだの中で何所どこかが特とくに取り立てて良よいと申もうすのでは
 なしに、どこもかしこもよく整ととのつた、まことに品位ひんいの備そなわつた、
 立派りっぱな御標致ごきりよう、そしてその御物越おんものごしは至いたつてしとやか、私わたくしど
 もがどんな無様ぶしつけな事柄ことがらを申上もうしあげましても、決してイヤな色いろ
 一つひとお見みせにならず、どこまでも親切しんせつに、いろいろと訓おしえてく
 ださいます。その御同情ごどうじようの深ふかいこと、又またその御氣性ごきしょうの素直すなおな
 ことは、どこの世界せかいを捜さがしても、あれ以上いじようの御方おかたが又またであろう
 とは思おもわれませぬ。それでいて、奥おくの方ほうには凜りんとした、大たいそうお
 強つよいところも自おのずと備そなわつているのでございます。

第二だいの乙姫様おとひめさまの方は、豊玉姫様とよたまひめさまに比くらべて、お年齢としもずつ
 とお若わかく、やつと二十一か二か位くらいに思おもわれます。お顔かおはどちらか

といえは円顔、見るからに大そうお陽気で、お召物などはい
 つも思い切った華美造り、丁度桜の花が一時にぱつと咲き出で
 たというような趣がございます。私が初めてお目にかかった時の
 お服装は、上衣が白の薄物で、それに幾枚かの色物の下着
 を襲ね、帯は前で結んでダラリと垂れ、その外に幾条かの、ひ
 らひらした長いものを捲きつけて居られました。これまで私ども
 の知っている服装の中では、一番弁天様のお服装に似て居る
 ように思われました。
 と 兎に角この両方は竜宮界切つての花形であらせられ、
 お顔もお気性も、何所やら共通の所があるのでございます
 が、しかし引きつづいて、幾代かに亘りて御分霊を出して居

られる中^{うち}には、御性質^{ごせいしつ}の相違^{そうい}が次第次第^{しだいしだい}に強^{つよ}まって行き、末^{すえ}の人間界^{にんげんかい}の方^{ほう}では、豊玉姫系^{とよたまひめけい}と玉依姫系^{たまよりひめけい}との区別^{くべつ}が可^かなりはつきりつくようになって居^おります。概^{がい}して豊玉姫^{とよたまひめ}の系統^{けいとう}を引いたものは、あまりはしやいだところがなく、どちらかといえ
 ばしとやかで、引込思案^{ひっこみじあん}でございます。これに反^{はん}して玉依姫^{たまよりひめ}系統^{けいとう}の方は至^{いた}つて陽氣^{ようき}で、進^{すす}んで人中^{ひとなか}にも出^でかけてまいります。ただ人並^{ひとなみ}みすぐれて情義^{なさけ}深いことは、お両方^{ふたかた}に共^き通^うの美点^{みてん}で、矢張り御姉妹^{やばい}の血筋^{ごきようだい}は争^{ちすじ}われないように見^み受けられます……。

あれ、又^{また}しても話^{はなし}が側路^{わきみち}へそれて先走^{さきばし}つて了^{しま}いました。これから後^{あと}へ戻^{もど}つて、私^{わたくし}が初^{はじ}めて玉依姫^{たまよりひめ}様^{さま}にお目^めにかかつた時^{とき}

の概況がいきようを申上げることに致いたしましょう。

二十四、なさけの言葉

先刻さつぎも申上げたとおうしあり、私は小娘わたくしこむすめに導みちびかれて、あの華麗きれいな日本間にほんまに通とおされ、そして薄絹製うすぎぬせいの白しろの座布団ざぶとんを与あたえられて、それへ坐すわつたのでございますが、不図ふと自分の前面まへのところを見ると、そこには別べつに一枚まいの花模様はなもようの厚い座布団あつざぶとんが敷しいてあるのに氣きづきました。『きつと乙姫様おとひめさまがここへお坐すわりなさるのであらう。』
——わたくし私はおもそう思おもいながら、乙姫様おとひめさまに何なんと御挨拶ごあいさつを申もうしあ上げてよいか、いろいろと考かんがえ込んで居おりました。

と、何^{なに}やら人^{ひと}の気配^{けはい}を感じ^{かん}ましたので頭^{あたま}をあげて見^みますと、天^{てん}
 から降^ふったか、地^ちから湧^わいたか、モーいつの間^まにやら一人^{ひとり}の眩^{まばゆ}
 ほど美^{うつく}しいお姫^{ひめ}様^{さま}がキチンと設^{もう}けの座布団^{ざぶとん}の上^{うえ}にお坐^{すわ}りになら
 れて、にこやかに私^{わたくし}の事^{こと}を見守^{みまも}ってお出^いでなさるのです。私^{わたくし}はこ
 の時^{とき}ほどびつくりしたことはめつたにございませぬ。私^{わたくし}は急^{いそ}いで
 座布団^{ざぶとん}を外^{はず}して、両^{りょう}手^てをついて叩^お頭^しをしたまま、しばらくは何^{なん}
 と御挨拶^{ごあいさつ}の言葉^{ことば}も口^{くち}から出^でないのです。
 しかし、玉依姫^{たまよりひめ}様^{さま}の方^{ほう}では何所^{どこ}までも打解^{うちと}けた御様子^{ごようす}で、
 尊^{とう}い神様^{かみさま}と申^{もう}上げるよりはむしろ高貴^{こうき}の若奥方^{わかおくがた}と言^いったお
 物越^{ものごこ}しで、いろいと優^{やさ}しいお言葉^{ことば}をかけくださるのでした。――

『あなたが竜宮へお出でなさることは、かねてからお通信がありましたので、こちらでもそれを楽しみに大へんお待ちしていました。今日はわたくしが代つてお逢いしますが、この次ぎは姉君様が是非お目にかかるとの仰せでございます。何事もすべてお心易く、一切の遠慮を棄てて、訊くべきことは訊き、語るべきことは語つてもらいます。あなた方が地の世界に降り、いろいろと現界の苦勞をされるのも、つまりは深き神界のお仕組で、それがわたくし達にも又となき良い學問となるのです。きけばドウやらあなたの現世の生活も、なかなか楽なものではなかつたようで……。』

いかにもしんみりと、溢るるばかりの同情を以て、何くれ

と話しかけてくださいますので、いつの間^まにやら私の方でも心^{こころ}の
 遠慮^{えんりよ}が除^とり去^さられ、丁度^{ちやうど}現世^{げんせ}で親^{した}しい方^{かた}と膝^{ひざ}を交^{まじ}えて、打解^{うちと}
 けた気分^{きぶん}でもやまの物^{ものがたり}語^{ふけ}に耽^{ふけ}ると言^いつたようなことになる
 ました。帰幽^{きゆう}以来^{いらい}何^{なん}十年^{ねん}かになります^{わたくしこ}が、私^{わたくし}が斯^こんな打^{うち}寛^{くつろ}
 だ、なごやかな氣持^{きもち}を味^{あじ}わつたのは実^{じつ}にこの時^{とき}が最^{さい}初^{しよ}でござい
 ました。

それから私^{わたくし}は問^とわれるま^まに、鎌倉^{かまくら}の実家^{じつか}のこと、嫁入^{よめい}りし
 た三浦^{みうら}家のこと、北^{ほう}條^{じよう}との戰^{たた}鬪^{かい}のこと、落城^{らくじやう}後の佗住^{わびすま}
 居^いのことなど、有^ありのま^まにお話^{はな}しました。玉依姫^{たまよりひめ}様^{さま}は
 一々^{うなづ}首肯^{くふん}しながら私^{わたくし}の物^{ものがたり}語^{ふけ}に熱心^{ねっしん}に耳^{みみ}を傾^{かたむ}けてくだされ、
 最後^{さいご}に私^{わたくし}が独^{ひとり}りさびしく無念^{むねん}の涙^{なみだ}に暮^くれながら若^{わか}くて歿^{なく}ったこと

を申上げますと、あの美しいお顔をばいとど曇らせて涙さえ浮べられました。――

『それはまアお氣毒な……あなたも随分つらい修行をなさいました……。』

たつた一言ではございますが、私はそれをきいて心から難有いと思ひました。私の胸に積り積れる多年の鬱憤もドウやらその御一言できれいに洗い去られたように思ひました。

『斯んなお優しい神様にお逢いすることができて、自分は何と幸福な身の上であらう。自分はこれから修行を積んで、斯んな立派な神様のお相手をしてもらひ恥かしくないように、一時も早く心の垢を洗い浄めねばならない……。』

わたくし^{そこ}ころ^{そこ}で^{かた}固く^{けつしん}そう決心^ししたのでした。

二十五、竜宮雑話

ひ^ととおわたくし^{みのうえ}ばなし^す
 一と通り私の身上^{とき}が^{こと}済んだ時に、今度は私の方^{たまよ}から玉^{りひめさま}
 依姫様^{はつのは}にいろいろの事^{こと}をお訊^{たず}ねしました。何しろ^{なに}竜宮界^{りゅうぐうかい}
 の初^{はつのは}上^なり、何^{なに}一つ弁^{わきま}えてもい^ふない不束^{ふつつか}者の^{もの}こと^{こと}でございま^しま
 すから、随分^{ずいぶん}つまらぬ事^{こと}も申^{もう}上^あげ、あちらではさぞ笑^{しょう}止^しに^{いま}
 おほしめ思^{おも}召^めされたこと^{こと}でござい^{いま}ましたろう。何^{なに}をお訊^{たず}ねしたか、今^{いま}で
 はもう大分^{だいぶ}忘れて了^{しま}いましたが、標本^{みほん}のつも^なり^なで一つ二つ想^{おも}い出^だ
 して見る^みこと^{こと}に致^{いた}しまし^しょう。

真ま先つきに私わたくしが訊たずねしたのは浦島太郎の昔むかし噺ばなしのことでござ

いました。――

『人間にんげんの世界せかいには、浦島太郎うらしまたろうという人ひとが竜宮りゅうぐうへ行いつて乙お

とひめ

姫むすめさまのお婿むこ様さまになつたという名高なだかいお伽とき噺ばなしがございま

すが、あれは実際じつさいあつた事柄ことがらなのでございましょうか……。』

すると玉依姫たまよりひめ様さまはほとお笑い遊あそばしながら、斯こう訓おしえて

くださいました。――

『あの昔むかし噺ばなしが事實じじつそのままでないことは申もうすまでもなければ、

さりとして全まったく跡あと方かたもないというのではありませぬ。つまり天津あまつ

ひつぎ

日繼みこの皇子ひこ彦火ほ々ひこほ出で見み命こと様さまが、姉君あねぎみの御婿おんむこ君ぎみになら

せられた事實じじつを現世げんせの人達ひとたちが漏もれきいて、あんな不思議ふしぎな浦うらし

島太郎のお伽ときばなし 噺つゝに作り上げたのでございましょう。最後に
 出て来る玉手箱たまてばこの話はなし、あれも事実ではありませぬ。別にこの竜
 宮ゆうぐうに開ければ紫の煙むらさきけむりが立ちのぼる、玉手箱たまてばこと申すようなも
 のはありませぬ。あなたもよく知るとおり、神の世界かみ せかいはいつまで
 経つても、露つゆかわりのない永遠えいえんの世界せかい、彦火々ひこほで出見み命こと
 様さまと豊玉姫とよたまひめ様は、今も昔いまむかしと同じく立派な御夫婦おんあいだがの御間柄
 でございます。ただ命みこと様には天津日繼あまつひつぎの大切な御用ごようがお
 ありになるので、めつたに御夫婦揃つてこの竜宮界りゆうぐうかいにお寛ぎ
 遊ばすことはありませぬ。現げんに只今も命みこと様には何かの御用ごようを
 帯びて御出ましになられ、乙姫様おとひめさまは、ひとりさびしくお不在るすを
 預あずかつて居おられます。そんなところが、あのお伽噺ときばなしのつらい

夫婦ふうふの別離わかれという趣向しゅこうになったのでございました……。」

そう言いつて玉依姫たまよりひめには心持こころもちお顔かおを赧あかく染めそられました。

それから私わたくしは斯こんな事こともお訊ききました。――

『斯こうして拝見はいけん致しますと竜宮りゅうぐうは、いかにもきれいで、の

んきらしく結構けつこうに思おもわれますが、矢張やはり神様かみさまにもいろいろつ

らい御苦労ごくろうがおりなさるのでございましょう?』

『よい所ところへお氣きがついてくれました。』と玉依姫様たまよりひめさまは大たいそう

よろこお歡よろこびになつてくださいました。

『寛くつろいひとで他あにお逢ときいする時ときには、斯こんな奇麗きれな所ところに住すんで、斯こん

な奇麗きれな姿すがたを見みせて居おれど、わたくし達たちとていつも斯こうしてのみ

はいないのです。人間にんげんの修しゆぎ行ようもなかなか辛つらくはあろうが、

竜神りゆうじんの修しゆ行ぎようとて、それにまさるとも劣おとるものではありま
 せぬ。現世げんせには現世げんせの執着しゆくじやくがあり、靈界れいかいには靈界れいかいの苦勞くろうがあ
 ります。わたくしなどは今いまが修しゆ行ぎようの真最中まつさいちゆう、寸時いつときもう
 かうかと遊あそんで居おりませぬ。あなたは今斯いまこうしている私の姿わたくしがたを
 見みて、ただ一人ひとりのやさしい女性じよせいと思おもうであろうが、実はこれじつは
 人間にんげんのお客きやく様さまを迎むかえる時ときの特とく別べつの姿すがた、いつか機おり会あひがあつ
 たら、私の本わたくしほん当とうの姿すがたをお見みせすることもありましよう。兎とに角かく
 私達わたくしたちの世界せかいにはなかなか人間にんげんに知しられない、大おおきな苦勞くろうが
 あることをよく覺おぼえていてもらいます。それがだんだん判わかつてく
 れば、現世げんせの人間にんげんもあまり我俣わがままを申まうさぬようになりましよう

……
 』

こんな真面目なお話をなさる時には、玉依姫様のあの美し

いお顔がきりりと引きしまつて、まともに拝むことができないほ

ど神々しく見えるのでした。

私がその日玉依姫様から伺ったことはまだまだ沢山ござ

います、それはいつか別の機会にお話しすることにして、ただ

爰では是非附け加えて置きたいことが一つございます。それは玉

依姫の靈統を受けた多くの女性のの中に弟橘姫が居ら

れることでございます。『あの人はわたくしの分靈を受けて生

まれたものであるが、あれが一ばん名高くなつて居ります……。』

そう言われた時には大そうお得意の御模様が見えていました。

一と通りおききしたいことをおききしてから、お暇乞いをい

たしますと『又是非何うぞ近い中に……。』という有難いお言葉
 を賜たまりました。私は心から朗かな気分になつて、再び例の小
 娘めみちびに導かれて玄関げんかんに立ち出で、そこからはただ一氣きに途とちゆう中
 を通過つうかして、無事ぶじに自分の山の修行場じぶんやましゆきようばに戻もどりました。

二十六、良人との再会

前ぜん回かいの竜宮行りゆうぐうゆきのお話はなしはなんじぶんにも氣乗きのりがいたし
 ましたが、今度こんどはドーも億劫おつくうで、氣おくれがして、成なろうことな
 ら御免ごめんを蒙こうむりたいように感じかんられてなりませぬ。帰幽きゆう後ご生せい前ぜんの
 良人おつととの初対面しよたいめんの物もの語がたり……婦女おんなの身みにとりて、これほどの

難題なんだいはめつたにありませぬ。さればとて、それが話はなしの順序じゆんじよ

であれば、無理むりに省はぶいて仕舞しまう訳わけにもまいりませず、本ほん当とうに困こま

つて居いるのでございまして……。十二成なるべく詳くわしく有ありのまま

を話はなせと仰おほつしやるか。そんなことを申まうされると、尚なお更さら談話はなしが

し難にくくなつて了しまいます。修行しゆぎ未よう熟みじな、若わかい夫婦ふうふの幽界ゆうかいに於お

ける初はじめての会かい合ごう——とても他人ひとさまに吹ふい聴ちようするほど立派りつぱ

なものでないに決きまつて居おります。おきき苦くるしい点てんは成なるべく発はつ発ぴ

表ようなさらぬようくれぐれもお依たのみして置おきます……。。

いつかも申もう上しあげた通とおり、私わたくしがこちらの世せ界かいへ参まいりましたのは、

良人おととよりも一年余ねあまり遅おくれて居おりました。後あとで伺うかが

んだことはすぐ良人おととの許もとに通知しらせがあつたそうでございますが、何な

にぶんとうじおつと
 分当時良人はきびしい修しゆぎよう行ぎやうの真最中まつさいちゆうなので、自分じぶんの妻つまが死しんだとて、とてもすぐ逢あいに行くゆくというような、そんな女々めめしい気分きぶんにはなれなかつたそうでございます。私は又私わたくしまたくしで、何なにより案あんじられるのは現世げんせに残のこして置おいた両りやう親しんのことばかり、それに心こころを奪うばわれて、自分じぶんよりも先さきへ死しんで了しまっている良人おつとのことなどはそれほど気きにかからないのでした。『時節じせつが来きたら何れ良お人いずにも逢あえるであろう……。』そんな風ふうにあつさり考かんえていたのでした。

みぎ
 右みぎのような次第しだいで、帰幽きゆうご後随ごずい分永ぶんながい間あいだ、私わたくし達たち夫婦ふうふは分わかれわになつたきりでございました。むろん、これがすべての男だんじ女よに共き通ようつうのことなのか何どうかは存ぞんじませぬ。これはただ私わたくし

くしたち
達 がそうであつたと申す丈のことで……。

そうする中に私は岩屋の修行場から、山の修行場に進み、

やがて竜宮界の訪問も済んだ頃になりますと、私のような

執着の強い婦女にも、幾分安心ができて来たらしいのが

自覚されるようになりました。すると、こちらからは別に何とも

お願いした訳でも何でもないのに、ある日突然神様から良人

に逢わせてやると仰せられたのでございます。『そろそろ逢つて

もよいであろう。汝の良人は汝よりもモ一少し心の落付きができ

て来たようじゃ……。』指導役のお爺さんが、いとどまじめく

さつてそんなことを言われるので、私は気まりが悪くて仕方がな

く、覚えず顔を真紅に染めて、一たんはお断りしました。――

『そんなことはいつでも宜よろしうございます。修しゆぎよう行ぎやうの後あと戻もどり

がすると大たい変へんでございますから……。』

『イヤイヤ一度どは逢あわせることに、先方むこうの指し導どう霊れいとも手は筈はずをきめて置おいてある。良人おつとと逢あつた位くらいのことで、すぐ後あと戻もどりするよ
うな修しゆぎよう行ぎやうなら、まだとても本物ほんものとは言いわれぬ。斯こんなこと
をするのも、矢張やはり修しゆぎよう行ぎやうの一つひとつじや。神かみとして無理むりにはす
めぬから、有ありのままに答こたえるがよい。何どうじや逢あつて見みる気きは
ないか?』

『それでは、宜よろしきようにお願ねがいいたします……。』
とうとう私わたくしはお爺じいさんにそう御返答ごへんとうをしてしまいました。

二十七、会合の場所

わたくししゆぎようばすこしたおやまはんぷく
 私の修行場を少し下へ降りた山の半腹に、小ぢんまりとし
 ひとへいち
 た一つの平地がございます。周囲には程よく樹木が生えて、丁
 ようどおきいし
 度置石のように自然石があちこちにあしらつてあり、そし
 めん
 て一面にふさふさした青苔がぎつしり敷きつめられて居るので
 わたくしたちふうふ
 す。そこが私達夫婦の会合の場所と決められました。
 あなたも御承知の通り、こちらの世界では、何をやるにも、
 てまひま
 手間暇間は要りません。思い立ったが吉日で、すぐに実行に
 うつ
 移されて行きます。

はなしきま
 『話が決つた上は、これからすぐに出掛けるとしよう……。』

お爺じいさんは眉まゆ一つ動うごかされず、済すまし切きつて先さきに立たたれます
 ので、私わたくしも黙だまつてその後あとについて出掛でかけましたが、しかし私わたくしの胸むね
 の裡うちは千々ちぢに砕くだけて、足あしの運びはこびが自然しぜん遅おくれ勝がちでございました。
 もう申もうすまでもなく、十幾いくねん年の間現世あいげんで仲なかよく連れ添つそった良人おとと、
 久ひさしぶりで再さい会かいするといふのでございしますから、私わたくしの胸むねには、
 夫婦ふうふの間あいだならでは味あじわれぬ、あの一しゅ種とく特べつ別べつのうれしさが急きにこ
 み上あげて来きたのは事じ実じつでございします。すべて人にん間げんというものは
 死しんだからと言いつて、別べつにこの夫婦ふうふの愛あい情じように何なんの変かわりがある
 もものではございませぬ。変かわつてゐるのはただ肉にく体たいの有う無むだけ、そ
 して愛あい情じようは肉にく体たいの受う持けではないらしいのでございします。
 が、一方ほうにかくうれしさがこみあぐると同時どうじに、他方たほうには何なにや

ら空^{そら}恐^{おそ}ろしいような感^{かん}じが強^{つよ}く胸^{むね}を打^うつのでした。何^なにしろこ

こは幽^{ゆう}界^{かい}、自^じ分^{ぶん}は今^{いま}修^{しゆ}行^{ぎやう}の第^{だい}一^{いち}歩^ぽをすませて、現^{げん}世^せの執^{しゆう}

じやくようや

着^{すこ}が漸^{うす}くのことです。少^{すこ}しばかり薄^{うす}らいだというまでのよくよくの

未^み熟^{じゆく}者^{もの}、これ^{いく}が幾^{ねん}十^{ねん}年^{ねん}ぶりで現^{げん}世^せの良^{おと}人^とに逢^あつた時^{とき}に、果^{はた}し

て心^{こころ}の平^{へい}静^{せい}が保^{たも}てるであらうか、果^{はた}して昔^{むかし}の、あ^みの醜^{みにく}い愚^ぐ痴^ち

や^みら未^{れん}練^{れん}や^{こう}らが首^{もと}を擡^たげぬであらうか……何^どう考^{かん}えて見^みても自^じ分^{ぶん}

な^あがら危^{あぶ}ッ^なかしく感^{かん}じられてならないのでした。

そうかと思^{おも}うと、私^{わたくし}の胸^{むね}のど^なこや^きらには、何^{なん}やら氣^きま^りがわ^る

くてし^ひようのな^さいところもある^ぶのでした。久^{ひさ}し振^ふり^おで良^{おと}人^とと顔^{かお}を

合^あわ^きせるのも氣^きま^りがわ^るい^が、それ^それ^しより^かも一^{そう}層^{はう}恥^{はず}かし^いのは神^{かみ}

さまの手^て前^{まえ}で^{した}。あ^そんな素^そ知^しら^かぬ顔^おを^{して}居^おられても、一^いから

十まで人の心の中を洞察ひとこのころなかみぬかるる神様かみさま、『この女はまだ大分娑婆おんなだいぶんしゃばの臭くさみが残のこっているナ……。』そう思おもつていらはせぬかと考かんえると、私わたくしは全まったく穴あなへでも入はいりたいほど恥はずかしくてならないのでした。

それでも予定よていの場所ばしょに着つく頃ころまでには、少すこしは私の肚わたが据すつてまいりました。『縦令何事たとえなにことありとも涙なみだは出だすまい。』——私わたくしは固かたくそう決心けっしんしました。

先方むこうへついて見みると、良人おととはまだ来きて居おりませんでした。

『まあよかつた……。』その時私わたくしはそう思おもいました。いよいよよとなると、矢張やはりまだ気きおくれがして、少すこしでも時刻じこくを延のばしたいのでした。

お爺さんじいはと見れば何所どこに風かぜが吹くと言いった面持おももちで、ただ黙も々くもくとして、あちらを向むいて景色けしきなどを眺ながめていました。

二十八、昔語り

良人おっとがいよいよ来らい着ちやくしたのは、それからしばしの後あとで、私わたしが不図ふと側見わきみをした瞬しゆん間かんに、五十余あまりと見みゆる一人ひとりの神様かみさまにつきそ附つ添そわれて、忽こつぜん然ぜんとして私わたしのすぐ前まえ面に、ありし日ひの姿すがたを現あらわしたのです。

『あツ矢張やはり元もとの良人おっとだ……。』
わたくしいまさら私わたしは今更いまさらながら生せい死しの境さかいを越こえて、少すこしも変かわつていない良人おっと

すがたに驚嘆の眼を見張らずにはいられませんでした。服装
 までも昔ながらの好みで、鼠色の衣裳に大紋打った黒の
 羽織、これに袴をつけて、腰にはお定まりの大小二本、大へ
 んにきちんと改めた扮装なのでした。

これが現世での出来事だったら、その時何をしたか知れませぬ
 が、さすがに神様の手前、今更取り乱したところを見られる
 のが恥かしうございますから、私は一生懸命になつて、平気な
 素振をしていました。良人の方でも少しも弱味を見せず、落付
 った様子をしていました。

しばし沈黙がつづいた後で、私から言葉をかけました。――
 『お別れしてから随分長い歳月を経ましたが、図らずも今ここ

でお目にかかることができまして、心から嬉しうございます。』

『まいったこんにち おも
『全く今日は思い懸けない面会であつた。』と良人もやがて

武人らしい、重い口を開きました。

『あの折は思いの外の乱軍、訣別の言葉一つかわす隙もなく、

あんな事になつて了い、そなたも定めし本意ないことであつたで

あろう……。それにしてもそなたが、斯うも早くこちらの世界へ

来るとは思わなかつた。いつまでも安泰に生き長らえて居てく

れるよう、自分としては陰ながら祈願していたのであつたが、し

かし過ぎ去つたことは今更何とも致方がない。すべては運

命とあきらめてくれるよう……。』

飾気のない良人の言葉を私は心からうれしいと思ひました。

『昔むかしの事ことはモ―何なんとも仰おつしやつてくださいますな。あたにお別わかれしてからの私わたくしは、お墓はかまい参まゐりが何なによりの楽たのしみでございましたが、
 矢張やはり 寿じゆみ 命みよと見みえて、直じきにお後あとを慕したうことになりました。一
 時じの間あいだこそ随ずい分ぶんくやしいとも、悲かなしいとも思おもいましたが、近ちか頃ころは、ド―やらあきらめがつきました。そして思おもいがけな
 日ようのお目め通とおり、こんなうれい事ことはございませぬ……。』
 かれこれと語かたり合あつていうちる中うちにも、お互たがいの心こころは次第しだい次第しだいに融とけ
 合あつて、さながらあの思おもいでおお 出み多うき三み浦うの館やかたで、主ある人じと呼よび、妻つまと
 呼よばれて、楽たのしく起居おきふしを偕ともにした時代じだいの現げん世せらしい気き分ぶんが復ふ活かつ
 して来きたのでした。

『いつまで立たち話はしでもなからう。その辺へんに腰こしでもかけるとしよ

うか。』

『ほんにそうでございました。丁度ここに手頃の腰掛けがござ

います。』

わたくしたち

私達は三尺ほど隔てて、右と左に並んでいる、木の切株

に腰をおろしました。そこは監督の神様達もお気をきかせて、

あちらを向いて、素知らぬ顔をして居られました。

対話はそれからそれへとだんだん滑かになりました。

『あなたは生前と少しもお変りがないばかりか、却って少しお若くなりはしませぬか。』

『まさかそうでもあるまいが、しかしこちらへ来てから何年経つても年齢を取らないというところが不思議じゃ。』と良人は打

ちわら
笑い、『それにしてもそなたは些と老けたように思うが……。』

『あなたとお別れしてから、いろいろ苦勞をしましたので、自然
やつれで
寔が出たのでございましょう。』

『それは大へん気の毒なことであつた。が、斯うなつては最早苦
ろう
勞のしようもないから、その中自然元氣が出て来るであらう。早
くそうなつてもらいたい。』

『承知致しました。みつちり修 行を積んで、昔よりも若
しやうちいた
々しくなつてお目にかけます……。』

さして取りとめのない事柄でも、斯うして親しく語り合つて
居りますと、私達の間には言うに言われぬ楽しさがこみ上げ
て来るのでした。

二十九、身上話

ここで一つ変ひとかわっているのは、私わたくし達たちが殆ほとんど少しも現世時代げんせいだいの思おもい出話でなしをしなかつたことで、若もしひよつとそれを行やろうとすると、何なにやら口くちが填つまつて了しまうように感かんじられるのでした。

で、自然私しぜんわたくし達たちの対話はなしは死しんでから後のちの事こと柄がらに限かぎられることになりました。私わたくしが真先まっさきに訊きいたのは良人おとの死後しごの自覚じかくの模も様ようでした。――

『あなたがこちらでお氣きがつかれた時ときはどんな塩梅あんばいでございましたか？』

『俺わしは実はそなたの声こえで眼めを覚さましたのじや。』と良人おととはじつと
 わたくみなも私わたしを見守り乍ならポツリポツリ語かたり出だしました。『そなたも知しる通とお
 り、俺わしは自尽じじんして果はてたのじやが、この自殺じさつということは神界しんかい
 おきての掟おきてとしてはあまりほめたことではないらしく、自殺者じさつしやは大たい
 抵い皆みな一たんは暗い所くらところへ置おかれるものらしい。俺わしも矢張りその仲な
 間かまで、死しんでからしばらくの間何事あいだなにことも知らずは無我夢中むがむちゆうで日ひ
 過すごした。尤も俺わしのは、敵てきの手にかからない為ための、言いわば武士ぶしの
 作法さほうに協かなつた自殺じさつであるから、罪つみは至いたつて輕かるかつたようで、従したがつ
 て無自覚むじかくの期間きかんもそう長ながくはなかつたらしい。そうする中うちにある
 日ひ不ふ図とそなたの声こえで名なを呼よばれるように感かんじて眼めを覚さましたのじ
 や。後あとで神様かみさまから伺うかえば、これはそなたの一心不乱しんふらんの祈願きがんが、

首尾よく俺の胸に通じたものじゃそうで、それと知った時の俺のうれしさはどんなであつたか……。が、それは別の話、あの時は何をいうにも四辺が真暗でどうすることもできず、しばらく腕を拱いてぼんやり考え込んでいるより外に道がなかつた。が、そのうちの中うつすりと光明がさして来て、今日送つて来てくださった、あのお爺さんの姿が眼に映つた。ドーじゃ、眼が覚めたか？——

そう言葉をかけられた時のうれしさ！ 俺はてつきり自分を救つてくれた恩人であろうと思つて、お名前は？ と訊ねると、お爺さんはにつこりして、汝は最早現世の人間ではない。これから俺の申すところをきいて、十分に修行を積みねばならぬ。

俺は産土の神から遣わされた汝の指導者である、と申しきか

された。その時俺ははつとして、これは最う愚図愚図していられないと思つた。それから何年になるか知れぬが、今では少し幽界の修行も積み、明るい所に一軒の家屋を構えて住わして貰つてゐる……。』

わたくしおつと　そぼく　ものがたり　たい　きようみ　もつ
私は良人の素朴な物語を大へんな興味を以てききました。
ことわたくし　せいぞんちゆう　こころ　きがん　しゆび　ゆうめい　さかい
殊に私の生存中の心ばかりの祈願が、首尾よく幽明の境を
こ　おつと　じかく
越えて良人の自覚のよすがとなつたというのが、世にもうれしい
こと　かぎ
事の限りでした。

い　かわ　こんど　おつと　ほう　わたくし　けいれき
入れ代つて今度は良人の方で、私の経歴をききたいというこ
とになりました。で、私は今丁度あなたに申上げるように、
きゆうご　ものがた　わたくし　わたくし
帰幽後のあらましを物語りました。私が生きている時から霊視が

きくようになり、今では坐つたままでも見えると申しますと、
 『そなたは何と便利なものを神様から授つているであらう！』
 おつと良人は大へんに驚きました。又私がこちらで愛馬に逢つた話を
 すると、『あの時は、そなたの希望を容れないで、勝手な名前を
 つけさせて大へんに済まなかつた。』と良人は丁寧に詫びまし
 た。その外さまざまの事がありますが、就中良人が非常に
 おどろ驚きましたのは私の竜宮行の物語でした。『それは飛ん
 でもない面白い話じや。ドーもそなたの方が俺よりも資格がず
 っと上らしいぞ。俺の方が一向ぼんやりしているのに、そなたは
 いろいろ不思議なことをしている……。』と言つて、大そう私を
 羨ましがりました。私も少し気の毒気味になり、『すべては靈魂

の關係かんけいから役目やくめが異ちがうだけのもので、別べつに上じやう下げの差さがあるわけ訳
ではないでしょう。』と慰なぐさめて置おきました。

私わたくし達たちはあまり対話はなしに身みが入はいって、すっかり時刻ときの経たつのも
忘わすれていましたが、不図ふと氣きがついて見みると何處どこへ行ゆかれたか、二
人たりの神かみさん達たちの姿すがたはその辺あたりに見み当あたらないのでした。
私わたくし達たちは期きせずして互たがいに眼めと眼めを見み合あわせました。

三十、永遠の愛

思おもい切きつて私わたくしはここに懺悔ざんげしますが、四辺あたりに神かみさん達たちの眼めが見み
張はつていないと感付かんづいた時ときに、私わたくしの心こころが急きゆうにむらむらとあらぬ方ほ方

うこう
向へ引きづられて行つたことは事実でございます。

ひき
『久しぶりでめぐり合つた夫婦の仲だもの、せめて手の先尖位
ふ
は触れても見たい……。』

わたくしむね

私の胸はそうした考えで、一ぱいに張りつめられて了いました。

ものがた

おつと ほう
物堅い良人の方でも、うわべはしきりに耐え耐えて居りながら、

あたま

なか やは
頭脳の内部は矢張りありし昔の幻影で充ち充ちているのがよく

わか

判るのでした。

こら

とうとう堪えきれなくなつて、私はいつしか切株から離れ、

じしゃく

あたかも磁石に引かれる鉄片のように、一歩良人の方へと近

づいたのでございます……。

しゅんかん

が、その瞬間、私は急に立ち止つて了いました。それは今

まではつきりと眼に映っていた良人の姿が、急にスーツと消えなかったのに驚かされたからでございます。

『この眼がどうかしたのかしら……。』

そう思つて、一歩退いて見直しますと、良人は矢張り元の通りはつきりした姿で、切株に腰かけて居るのです。

が、再び一歩前へ進むと、又もやすぐに朦朧と消えかかる：

。。。

二度、三度、五度、幾度くりかえしても同じことなのです。いよいよ駄目と悟つた時に、私はわれを忘れてその場に泣き伏してしまいました……。

×

×

×

×

『何うじや少しは悟れたであろうが……。』

わたくしかたて 私なみだの肩かおに手をかけて、そう言われる者があるもので、びつくりして涙の顔をあげて振り返つて見ますと、いつの間に戻られたやら、それは私の指導役のお爺さんなのでした。私はその時穴があつたらいはい入りたいように感じました。

『最初さいしよから申しきかせた通り、一度逢つた位ですぐ後あと戻りする修しゆ行ぎやうはまだ本物ほんものとは言われない。』とお爺じいさんは私わたくし達たち夫婦ふうふに向つて諄々じゆんじゆんと説ききかせて下さるのでした。『汝そち達たちには、姿すがたはあれど、しかしそれは元の肉体もとにくたいとはまるつきり異ちがつたものじや。強しいて手てと手てを触ふれて見みたところで、何なにやらかさ

かきとした、丁度張子細工のような感じがするばかり、そこに
 現世で味わったような甘味も面白味もあつたものではない。尚
 お汝は先刻、良人の後について行つて、昔ながらの夫婦生活で
 も営みたいように思つたであらうが……イヤ隠しても駄目じや、
 神の眼はどんなことでも見抜いているから……しかしそんな考え
 は早くすてねばならぬ。もともと二人の住むべき境涯が異つ
 ているのであるから、無理にそうした真似をしても、それは丁
 度鳥と魚と一緒に住おうとするようなもので、ただお互に苦
 しみを増すばかりじや。そち達は矢張り離れて住むに限る。――
 が、俺が斯う申すのは、決して夫婦間の清い愛情までも棄
 てよというのではないから、その点は取り違いをせぬように……。

陰陽いんようの結びむすは宇宙うちゅう万有ばんゆうの切きつても切れぬとうと貴きい御法則みのり、いか
 に高たかい神々かみがみとてもこの約束やくそくからは免まぬれない。ただその愛あい情じよう
 はどこまでも浄きよめられて行ゆかねばならぬ。現世げんせの夫婦ふうふなら愛あいと欲よく
 との二筋ふたすじで結むすばれるのも止やむを得えぬが、一たん肉体にくたいを離はなれた上うえ
 は、すっかり欲よくからは離はなれて了しまわねばならぬ。そち達たちは今いま正まさに
 その修しゆぎ行ようの真最中まつさいちゆう、少すこし位くらいのことは大目おおめに見逃みのがしても
 やるが、あまりにそれはしに走はしつたが最後さいご、結局けつきよく幽界ゆうかいの落伍らくご
 者やとして、亡者もうじや扱あつかいを受うけ、幾百年いくねん、幾千年いくねんの逆ぎやく戻もどり
 をせねばならぬ。俺達わしたちが受持うけもつてゐる以い上じよう、そち達たちに断だんじて
 そんな見苦みくるしい真似まねわさせられぬ。これからそち達たちはどこまでも
 愛あいし合あつてくれ。が、そち達たちはどこまでも浄きよい関係かんけいをつづけて

くれ……。』

×

×

×

×

それから少^{しばらく}時の後^{のち}、私^{わたくし}達^{たち}はまるで生^うれ変^かつたような、世^よにもうれしい、朗^{ほがら}かな氣分^{きぶん}になつて、右^{みぎ}と左^{ひだり}とに袂^{たもと}を別^{わか}つたこと
でございました。

ついでながら、私^{わたくし}と私^{わたくし}の生^{せい}前^{ぜん}の良人^{おと}との関^{かん}係^{けい}は今^{いま}も尚^なお依^い然^{ぜん}として続^{つづ}いて居^おり、しかもそれはこのまま永^{えい}遠^{えん}に残^{のこ}るのではないかと思^{おも}われます。が、むろんそれが互^{たが}に許^{ゆる}し合^あつた魂^{たま}と魂^{たま}との淨^{きよ}き関^{かん}係^{けい}であることは、改^{あらた}めて申^{もう}上^{しあ}げるまでもないと存^{ぞん}じます。

三十一、香織女

良^{おつと}人との再^{さいかい}会^{かい}の模^{もよう}様^{よう}を物^{もの}語^{がた}りまし^{ついで}た序^{おな}に、同^{こゝろ}じ頃^{わたくし}私^{わたし}がこち^{こちら}ら
 で面^{めん}会^{かい}を遂^とげ^{えん}た二^に三^{さん}の^{ひとたち}人^{ひと}達^{たち}のお話^{はなし}をつづ^{はなし}けること^{こと}に致^{いた}しまし
 よう。縁^{えん}もゆかりも^{いま}ない今^{いま}の世^よの^{ひとたち}人^{ひと}達^{たち}には、さ^{きようみ}して興^{きようみ}味^みもあ
 るまいと思^{おも}いますが、私^{わたし}自^じ身^{しん}には、な^{わす}かなか忘^{わす}れ^{わす}れ^{わす}られない事^{こと}
 とが^{とが}ら柄^{がら}だ^{がら}つたのでご^ござ^ざい^います。

そ^{ひと}の^{ひと}一^{ひと}つ^つは私^{わたし}が^{わたくし}ま^まだ実^{さと}家^かに居^いた頃^{ころ}、腰^{こし}元^{もと}の^{よう}に^にし^{して}て可^{かわ}愛^{あい}が
 つて居^いた、香^か織^{おり}とい^いう一^{ひと}人^りの女^{じよ}性^{せい}と^との会^{かい}合^{ごう}の物^{もの}語^{がたり}で^でご^ござ
 います。香^か織^{おり}は私^{わたし}よ^よりは年^{とし}齢^{れい}が二^につ三^{さん}つ若^{わか}く、顔^か立^{たち}はあ^あま^まり良^よ

が、ただ私が現世を離れる前に、香織から心からの厚い看護を受
 けた事ことだけは、今でも深く深く頭腦の底に刻みつけられて居ります。
 かのじよわたくしはは彼女は私の母と一緒に、例の海岸の私の隠れ家に詰め切つて、
 それはそれは親身しんみになつてよく尽してくれ、私の病氣が早く治
 るようにと、氏神様へ日参までしてくれるのでした。
 ある日などは病床で香織から頭髮を解いて貰つたこともご
 ざいました。私の頭髮は大へんに沢山で、日頃母の自慢の種で
 ございましたが、その頃はモー床に就き切りなので、見る影もな
 くもつれて居ました。香織は櫛で解かしながらも、『折角こう
 してきれいにしてあげても、このままつくねて置くのが惜しい。』
 と言つてさんざんに泣きました。傍で見ていた母も、『モー一度

治なつて、晴衣はれぎを着きせて見みたい……。』と言いつて、泣なき伏ふして了しまいました。斯こんな話はなしをしていいると、私わたくしの眼めには今いまでもその場ばの光ありさ景まが、ままぎままぎと映うつつてままいります……。』

いいよいよ最もう駄目だめと観かん念ねんししました時ときに、私わたくしは自分じぶんが日頃ひごろ一ひばん大たい切せつにしてりいた一襲かさねの小袖こそでを、形見かたみとして香織かおりにくれました。香織かおりはそれりを両手りやうでにささげ、『たたとえお別わかれしても、いつまでもいつまでも姫ひめさまの紀か念たみに大たい切せつに保ほ存ぞんいたしします……。』と言いいながら、声こえも惜おしまず泣なき崩くずれました。が、私わたくしの心こころは、モーその時分じぶんには、思おもいの外ほかに落付おちついて了しまつて、現世げんせに別わかれるのがかなそう悲かなしくもなく、黙だまつて眼めを瞑つぶると、却かえつて死しんだ良人おととの顔かおがスーツと眼がんぜん前あらに現あらわれて来くるのでした。

兎とに角かくこんなにまで深いふか因縁いんねんのあつた女性じよせいでございますか
 ら、こちらの世界せかいへ来ても矢張り私わたしのことを忘れない筈はずでござい
 ます。ある日ひ私が御神前ごしんぜんで統一とういつの修行しゆぎようをして居おりますと、
 急きゆうに軀からだがぶるぶると慄ふるえるように感じました。何気なにげなく背後うしろを振ふ
 り返かえつて見ると、年としの頃ころやや五十許ばかりと見ゆる一人ひとりの女性じよせいが坐すわつ
 て居おりました。それが香織かおりだったのでございます。

三十二、無理な願

『何なにやら昔むかしの香織かおりらしい面影おもかげが残のこつて居おれど、それにしては随ず
 分いぶん老ふけ過すぎている……。』私わたしが、そう考かんえて躊躇ちゆうちよして居おり

ますと、先方では、さも待ち切れないと言った様子で、膝をすり寄せてまいりました。――

『姫さまわたくしをお忘れでございますか……香織でございます……』

『矢張りそうであつたか。――私はそなたがまだ息災で現世に暮して居るものとばかり思つていました。一たいいつ歿つたのじや……。』

『もう、かれこれ十年位にもなるでございましょう。私のようなつまらぬものは、とてもこちらで姫さまにお目にかかれまいとあきらめて居りましたが、今日図らずも念願がかない、こんなうれしいことはございませぬ。よくまア御無事で……些ツとも姫さ

まは往時^{むかし}とお変り^{かわ}りがございませぬ。お懐かし^{なつ}う存じます……。

現世^{げんせ}らしい挨拶^{あいさつ}をのべながら、香織^{かおり}はとうとう私の軀^{わたくしからだ}にしがみ

ついて、泣き^な入りました。私も^{わたくし}そうされて見^みれば、そこは矢張^{やは}り

人^{にん}情^{じょう}で、つい一緒^{しよ}になつて泣^ないて了^{しま}いました。

心^{こころ}の昂奮^{たかぶり}が一応鎮^{おしず}まつてから、私^{わたくし}達^{たち}の間^{あいだ}には四方八^{よもやま}方の物^{もの}

語^がが一^{ひと}しきりはずみました。――

『そなたは一^{ひと}たい、何処^{どこ}が悪^{わる}くて歿^{なくな}つたのじや?』

腹部^{おなか}の病氣^{びようき}でございました。針^{はり}で刺^さされるようにキリキリと

毎^{まい}日^{にち}悩^{なや}みつづけた末^{すえ}に、とうとうこんなことになりました……

。』

『それは氣^きの毒^{どく}であつたが、何^どうしてそなたの死^しぬことが、私^{わたくし}の

ほう 方へ通じなかつたのであろう……。普通なら 臨終の思念が感

じて来ない筈はないと思うが……。』

『それは皆わたくしの不心得の為めでございます。』と香織は
めんぼく 面目なげに語るのかた

かたみ 形見の小袖を着せてもらつて、すぐお側に行つてお仕えするのだ

などと、口癖のように申していたのでございますが、いざとな

つてさッぱりそれを忘れて了つたのでございます。どこまでも執

ゆうじやく つよわたくし 着の強い私は、自分の家族のこと、とりわけ二人の子供のこ

とが氣にかかり、なかなか死切れなかつたのでございます。こん

な心懸の良くない女子の臨終の通報が、どうして姫さまのお

許にとどく筈がございましょう。何も彼も皆私が悪かつた為め

「ございます。」

しょうじきもの

正直者の香織は、涙ながらに、臨終に際して、自分の

こころがけ

心懸の悪かったことをさんざん詫びるのでした。しばらくし

かのじよ

て彼女は言葉をつづけました。――

『それでもこちらへ来て、いろいろと神様からおさとしを受け

たお蔭で、わたくしの現世の執着も次第に薄らぎ、今では修

行も少し積みました。が、それにつれて、日ましに募つて来る

ひい

のは姫さまをお慕い申す心で、こればかりは何うしても我慢がし

きれなくなり、幾度神様に、逢わせていただきたいとお依みし

たか知れませぬ。でも神さまは、まだ早い早いと仰せられ、なか

なかお許しが出ないのでございます。わたくしはあまりのもどか

しさに、よくないことと知りながらもツイ神様^{かみさま}に喰^くつてかかり、さんざん悪口^{あくこう}を吐^ついたことがございました。それでも神様^{かみさま}の方^{ほう}では、格別^{かくべつ}お怒^{いか}りにもならず、内々^{ないないひい}姫さまのところをお調^{しら}べになつて居^おられたものと見えまして、今度^{こんど}いよいよ時節^{じせつ}が来^きたとなりますと、御自身^{ごじしん}で私^{わたくし}を案内^{あんない}して、連^つれて来^きて下^{くだ}すつたのでございます。――姫^{ひい}さま、お願い^{ねが}いでございます、これから、どうぞお側^{そば}にわたくしを置^おいてくださいませ。わたくしは、昔^{むかし}のとおり姫^{ひい}さまのお身^みのまわりのお世話^{せわ}をして上げ^あげたいのでございます……。」

そう言^いつて香織^{かおり}は又^{また}もや私^{わたくし}に縋^{すが}りつくのでした。

これには私^{わたくし}もほとほと持^もちあつかいました。

『神界しんかいの掟おきてとしてそればかりは許ゆるされないのであるが……。』

『それは又何またどういう訳わけでございますか？ わたくしは是非ぜひこちら

へ置おいて戴いたきたいのでございます。』

『それは現世げんせですること、こちらの世界せかいでは、そなたも知しる通とお

り、衣服きものの着きがえにも、頭髪おぐしの手入ていれにも、少すこしも人手ひとでは要いらぬで

はないか。それに何なんとも致いたし方かたのないのはそれぞれの靈魂みたまの因い

縁んねん、めいめいきちんと割わり当あてられた境涯とくろがあるので、たとえ

親おや子こ夫婦ふうふの間あいだ柄がらでも、自分勝手じぶんかつてに同棲どうせいすることはできませ

ぬ。そなたの芳こころざし志おもはうれしく思いますが、こればかりはあき

らめてたもれ。逢あおうと思おもえばいつでも逢あえる世界せかいであるから何ど

処こに住すまなければならぬということはない筈はずじゃ。それほど私わたくしの

ことを思おもつてくれるのなら、そんな我わが侘ままを言いうかわりに、みつ
 しり身相みそう応おうの修しゆぎ行ようをしてくれるがよい。そして思おもい出だした
 らちよいちよい私わたくしの許ところに遊あそびに來きてたもれ……。』
 最さい初しよの間あいだ、香か織おりはなかなか腑ふに落おちぬらしい様よう子すをしていま
 したが、それでも漸ようくききわけて、尚なおしばらく語かたり合あつた上うえで、
 その日ひは暇いとまを告つげて自じ分ぶんの所ところへ戻もどつて行ゆきました。
 今いまでも香か織おりとは絶たえず通つう信しんも致いたしまするし、又またたまには逢あい
 も致いたします。香か織おりはもうすっかり明あかるい境きよう涯がいに入いり、顔かおなど
 も若わかがえ返がえつて、自じ分ぶんにふさわしい神かみ様さまの御ご用ようにいそしんで居おり
 ます。

三十三、自殺した美女

こんど今度は入れ代つて、或る事情の為に自殺を遂げた一人の女性との会見のお話を致しましょう。少々陰気くさい話で、おききになるに、あまり良いお気持はしないでございましょうが、斯う言つた物語も現世の方々に、多少の御参考にはなるうかと存じます。

その方は生前私と大へんに仲の良かったお友達の一りで、名前は敦子……あの敦盛の敦という字を書くのでございます。生家は畠山と言つて、大そう由緒ある家柄でございます。その畠山家の主人と私の父とが日頃別懇にしていた関係か

ら、私と敦子さまとの間も自然親しかつたのでございます。お年としは敦子さまの方が二つばかり下でございました。

お母さまが大へんお美しい方であつた為め、お母さま似の敦子あつこ

さまも眼の覚めるような御縹緲で、殊にその生際などは、慄ふる

えつくほどお綺麗でございました。『あんなにお美しい御縹緲ごきりよう

に生れて敦子さまは本当に仕合せだ……。』そう言つてみんなうま

が羨ましがったものでございますが、後で考えると、この御縹ごきりよう

緲が却つてお身の仇となつたらしく、矢張り女は、あまり醜いみにく

のも困りますが、又あまり美しいのもどうかと考えられるのでごこま

ざいます。

敦子さまの悩みは早くも十七八の娘むすめざか盛りから始まりました。

諸方しよほうから雨あめの降ふるようにかかつて来る縁談えんだん、中なかには随分ずいぶんこ
 れはというのもあつたそうでございですが、敦子さまは一つなし
 に皆断みなとわつて了しまうのでした。これにはむろん訳わけがあつたのでござい
 ます。親戚しんせきの、幼馴染おきななじみの一人ひとりの若人わこうど……世間せけんによくあること
 でございですが、敦子さまは早くから右みぎの若人わこうどと思おもい思おもわれる
 仲なかになり、末すえは夫婦めおとと、内々ないない二人ふたりの間に堅かたい約束やくそくができてい
 たのでございました。これが望のぞみどおり円満えんまんに収おさまれば何なんの世せ
 話わはないのでございですが、月つきに浮雲むらくも、花はなに風かぜとやら、何か両
 方ようけあいたじよう家あの間に事情じじようがあつて、二人ふたりは何どうあつても一緒しよになること
 ができないのでした。

こんな事ことで、敦子あつこさまの婚期こんきは年ねん一いち年ねんと遅おくれて行ゆきました。

敦子さまは後にはすっかり棄鉢気味になつて、自分には行かないなどと言ひ張つて、ひどく御両親を困らせました。ある日敦子さまが私の許へ訪れましたので、私からいろいろ言ひきかせてあげたことがございました。『御自分同志が良いの結構であるが、斯ういうことは、矢張り御両親のお許諾を得た方がよい……。』どうせ私の申すことはこんな堅苦しい話に決つて居ります。これをきいて敦子さまは別に反対もしませんでした。が、さりとて又成る程と思ひかえしてくれる模様も見えないのでした。

それでも、その後幾年か経つて、男の方があきらめて、何所からか妻を迎えた時に、敦子さまの方でも我が折れたらしく、と

うとう 両親りようしんの勧めすすに任せてまか、幕府ばくふへ出仕しゅししている、ある歴れきれ々の武士ぶしの許もとへ嫁とつぐことになりました。それは敦子あつこさまがたしか二十四歳さいときの時ときでございました。

縁談えんだんがすっかり整ととのった時にとき、敦子あつこさまは遥はるばる三浦みうらまで御ご

挨拶あいさつに来こられました。その時とき私の良人よめもお目めにかかりましたが、

後あとで、『あんな美人びじんを妻つまに持つ男子だんしはどんなに仕合しあわせなことで

あろう……。』などと申もうした位くらいに、それはそれは美しい花嫁姿はなよめがた

でございました。しかし委細いさいの事情じじょうを知しって居いる私わたしには、あの

美しいお顔かおの何所どこやらに潜ひそむ、一種しゅの寂さびしさ……新婚しんこんを歡よろこぶと

いうよりか、寧むしろつらい運命うんめいに、仕方しかたなしに服従ふくじゆうしてい

ると言いったような、やるせなさがどことなく感かんじられるのでした。

と 兎も角^{かく}こんな具合^{ぐあい}で、敦子^{あつこ}さまは人妻^{ひとつま}となり、やがて一人^{ひとり}の男^{おとこ}の児^{うま}が生^うれて、少^{すく}くとも表面^{うわべ}には大^{たい}そう幸福^{こうふく}らしい生^{せい}活^{かつ}を送^{おく}つていました。落城^{らくじょう}後^ご私^{わたし}があ^らの諸磯^{もろいそ}の海^{うみ}辺^べに佗^わ住^{びず}居^{まい}をして居^いた時^じ分^{ぶん}などは、何^{なん}度も何^{なん}度も訪^{おとず}れて来^きて、何^{なに}かと私^{わたし}に力^{ちから}をつけてくれました。一^ど度は、敦子^{あつこ}さまと連^つれ立^だちて、城^{しろ}跡^{あと}の、あ^{おと}と良^は人^かの墓^もに詣^{もう}でたこと^{こと}がございました^{のこ}が、その道^{みち}すがら敦子^{あつこ}さまが言^いわれたこと^{こと}は今^{いま}も私^{わたし}の記^き憶^{おく}に残^{のこ}つて居^おります。――

『一^こたい恋^{こい}しい人^{ひと}と別^{わか}れるの^のに、生^{いき}別^{わか}れと死^し別^{わか}れとではどち^ちらがつらいもの^{もの}でしょう^うか……。事^{こと}によると生^{いき}別^{わか}れの方^{ほう}が^うつらくはない^{ない}でしょう^うか……。あな^あたの現^{げん}在^{ざい}の^のお身^み上^うも^のお察^{さつ}し致^{いた}します^すが、少^{すこ}しは私^{わたし}の身^みの上^うも^の察^{さつ}してくだ^くさいませ^せ。私^{わたし}は一^{ひと}つの

生いきた屍しかばね、ただ一人ひとりの可愛かわいい子供こどもがあるばかりに、やつとこの世よに生いきていられるのです。若もしもあの子供こどもがなかつたら、私わたくしなどは夙とうむかしの昔むかしに……。』

現世げんせに於おける私わたくしと敦子あつこさまとの関係かんけいは大體だいたいこんなところでお判りわかかと存ぞんじます。

三十四、破れた恋

それから程ほど経へて、敦子あつこさまが死しんだこと丈だけは何かなにの機おり会わに私わたくしに判わかりました。が、その時ときはそう深ふかくも心こころにとめず、いつか逢あえるであろう位くらいに輕かるく考かんえていたのです。それより又何またなんねん年ねん経たちま

したか、或る日私が統一の修行を終えて、戸外に出て、四
 辺の景色を眺めて居りますと、私の守護霊……この時は指導
 役のお爺さんでなく、私の守護霊から、私に通信がありま
 した。『ある一人の女性が今あなたを訪ねてまいります。年
 頃は四十余りの、大そう美しい方でございます。』私は誰かしら
 と思いましたが、『ではお目にかかりましょう。』とお答えしま
 すと、程なく一人のお爺さんの指導霊に連れられて、よく見
 えるのある、あの美しい敦子さまがそこへひよつくりと現われま
 した。

『まあお久しいことでございました。とうとうあなたと、こちら
 でお会いすることになりましたか……。』

わたくしちか
私が近づいて、そう言葉をかけましたが、敦子さまは、ただ会
しやく
釈をしたのみで、黙つて下方を向いた切り、顔の色なども何所
くら
やら暗いように見えました。私はちよつと手持無沙汰に感じまし
た。

すると案内のお爺さんが代つて簡単に挨拶してくれまし
た。――

『この人は、まだ御身に引き合わせるのには少し早過ぎるかとは
おも
思われたが、ただ本人が是非御身に逢いたい、一度逢わせても
きもち
らえば、氣持が落ついて、修行も早く進むと申すので、御身
しゅごれい
の守護霊にも依んで、今日わざわざ連れてまいったような次第
おみ
……御身とは生前又となく親しい間柄のように聞き及んで

いるから、いろいろとよく言いきかせて貰いたい……。』

そう言ってお爺さんは、そのままプイと帰つて了いました。私

はこれには、何ぞ深い仔細があるに相違ないと思ひましたので、

敦子さまの肩に手をかけてやさしく申しました。――

『あなたと私とは幼い時代からの親しい間柄……殊にあなた

が何回も私の佗住居を訪れていろいろと慰めてくだされた、

あの心尽しは今もうれしい思い出の一つとなつて居ります。

その御恩がえしというのでもありませんが、こちらの世界で私の

力に及ぶ限りのことは何なりとしてあげます。何うぞすべてを打

明けて、あなたの相談相手にしていただきます。兎も角もこち

らへお入りくださいませ。ここが私の修行場でございます……

。

『

敦子さまは最初はただ泣き入るばかり、とても話をするとこ

ろではなかったのですが、それでも修行場の内部へ入って、そ

この森とした、淨らかな空氣に浸っている中に、次第に心が落つ

いて来て、ポツリポツリと言葉を切るようになりました。

『あなたは、こんな神聖な境地で立派な御修行、私などはと

ても段違いで、あなたの足元にも寄りつけはしませぬ……。』

こんな言葉をきっかけに、敦子さまは案外すらすらと打明

話をするようになりましたが、最初想像したとおり、果し

て敦子さまの身の上には、私の知っている以上に、いろいろこ

み入った事情があり、そして結局飛んでもない死方――

自殺^{じさつ}を遂^とげて了^{しま}ったのでした。敦子^{あつこ}さまは、斯^こんな風^{ふう}に語^{かた}り出^いで

ました。――

『生^{せい}前^{ぜん}あなたにも、あるところまでお漏^もらししたとおり、私^{わたくし}たち夫婦^{ふうふ}の仲^{なか}というものは、うわべとは大^{たい}へんに異^{ちが}い、それは暗^{くら}い、冷^{つめ}たいものでございました。最^{さい}初^{しよ}の恋^{こい}に破^{やぶ}れた私^{わたくし}には、もともと他^{よそ}所^{えん}へ縁^{きもち}づく氣持^{すこ}などは少^{すこ}しもなかつたのでございましたが、ただ老^おいた両^{りやう}親^{しん}に苦^く勞^{ろう}をかけては済^すまないと思^{おも}つたばかりに、死^しぬるつもりで軀^{からだ}だけは良^{おつと}人にささげましたものの、しかし心^{こころ}は少^{すこ}しも良^{おつと}人^{ひと}のものではないのでした。愛^{あい}情^{じやう}の伴^{ともな}わぬ冷^{つめ}たい夫婦^{ふうふ}の間^{あいだ}柄^{がら}……他人^{ひと}さまのことは存^{ぞん}じませぬが、私^{わたくし}にとりて、それは、世^よにも浅^{あさ}ましい、つまらないものでございま

した……。嫁入りしてから、私は幾度自害しようとしたか知れ
 ませぬ。わたくしが、それもえせずに、どうやら生き永らえて居
 りましたのは、間もなく私が身重になった為めで、つまり私とい
 うものは、ただ子供の母として、惜くもないその日その日を送つ
 ていたのでございました。』

『こんな冷たい妻の心が、何でいつまで良人の胸にひびかぬ筈が
 ございましょう。ヤケ気味になつた良人はいつしか一人の側室を
 置くことになりました。それから私の達の間には前にもまし
 て、一層大きな溝ができて了い、夫婦とはただ名ばかり、心と心
 とは千里もかけ離れて居るのでした。そうする中にポツクリと、
 天にも地にもかけ換のない、一粒種の愛児に先立たれ、そのま

わたくし
 ま私はフラフラと気がふれたようになって、何の前後の考もなく、
 懐剣かいけんで喉のどを突ついて、一瞬すに小供こどもの後あとを追おったのでございました

……。』

敦子あつこさまの談話はなしをきいて居おりますと、私わたくしまでが氣きが変へんになりそ
 うに感かんぜられました。そして私わたくしには敦子あつこさまのなされたことが、
 一応おも尤もなところもあるが、さて何なにやら、しつくり腑ふに落おちない
 ところもあるように考かんえられて仕方しかたがないのでした。

三十五、辛い修行

それから引ひきつづいて敦子あつこさまは、こちらの世界せかいに目覚めめてか

らの一伍一什いちぶしじゅうを私わたくしに物語ものがたつてくれましたが、それは私達わたくしたちの

ような、月つき並なみな婦女おんなの通とつた路みちとは大たいへんに趣おもむきが異ちがひまして、

随ずい分ぶん苦勞くろうも多く、又また變化へんかにも富とんで居いるものでございしました。

私わたくしは今いまここでその全部ぜんぶをお漏もしする訳わけにもまいりませんが、せめ

て現世げんせの方に多た少しょう参さん考こうになりそうなどころだけは、成なるべく

漏もれなくお伝つたえしたいと存ぞんじます。

敦子あつこさまが、こちらで最さい初しよ置おかれた境きよう涯がいは随ずい分ぶんみじめ

なもののようにございしました。これが敦子あつこさま御自身ごじしんの言葉ことばでござ

います。――

『死し後わたくし私はしばらくは何事なにことも知らずに無自覚むじかくで暮くらしました。従したが

つてその期あいだ間だがどれ位くらいつづいたか、むろん判わかる筈はずもございませぬ。

その中不図誰かに自分の名を呼ばれたように感じて眼を開きまし
 たが、四辺は見渡すかぎり真暗闇、何が何やらさっぱり判らな
 いのでした。それでも私はすぐに、自分はモ―死んでいるな、と
 思いました。もともと死ぬる覚悟で居ったのでございますから、
 死ということは私には何でもないものでございましたが、ただ四
 辺の暗いのはほとほと弱つて了いました。しかもそれがただの
 暗さとは何となく異うのでございます。例えば深い深い穴蔵の
 奥と言ったような具合で、空氣がしつとりと肌に冷たく感じられ、
 そして暗い中に、何やらうようよ動いているものが見えるのです。
 それは丁度悪夢に襲われているような感じで、その無気味さと
 申したら、全くお話しになりませぬ。そしてよくよく見つめると、

その動うごいて居いるものが、何いずれも皆異様みないようの人間にんげんなのでございます。
 — 頭かみ髪みを振ふり乱みだしているもの、身みに一糸しを纏まとわない裸体はだかのもの、
 血ちみどろに傷きずつて居いるもの……ただの一人ひとりとして満足まんぞくの姿すがたをし
 たものは居おりませぬ。殊ことに気味きみの悪わるかつたのは私のすく傍そばに居おる、
 ひとりひとりの若い男わかおとこで、太ふとい荒縄あらなわで、裸身はだかみをグルグルと捲まかれ、ち
 つとも身動みうごきがでさなくされて居おります。すると、そこへ瞋いなじり
 を釣つり上あげた、一人ひとりの若い女わかおんなが現あらわれて、口惜くやしい口惜くやしいとわ
 めきつづけながら、件くだんの男おとこにとびかかつて、頭かみ髪みをむしつたり、顔か
 面おを引ひつかいたり、足あしで蹴けつたり、踏ふんだり、とても乱暴らんぼうな真ま
 似ねをいたします。私わたくしはその時とき、きつとこの女ひとはこの男おとこの手てにかか
 って死しんだのであろうと思おもいましたが、兎とに角かくこんな苛責かしやくの光あ

りさま
景を見るにつけても、自分の現世で犯した罪惡がだんだん怖く
なつてどうにも仕方なくなりました。私のような強情なものが、
ドーやら熱心ねっしんに神様かみさまにお縋りすがする気持きもちになりかけたのは、偏
にこの暗闇くらやみの内部なかにの、世にもものすごい懲戒みせしめの賜たまものでございま
した……。』

敦子さまの物語ものがたりはまだいろいろありましたが、だんだんき
いて見ると、あの方が何より神様かみさまからお叱りしかを受けたのは、自
殺さつそのものよりも、むしろそのあまりに強情かたくなな性質せいしつ……一た
ん斯うと思えば飽あまでそれを押し通とおそうとする、我侘わがままな気性きしょう
の為ためであつたように思われました。敦子さまはこんな事も言
いました。――

わたくしせいぜんなにこと
『私は生前何事も皆氣随氣俣に押しとおし、自分の思いが協
わなければこの世に生甲斐がないように考えて居りました。一生
あいぢわたくしじぶんむねなかあていどうちあかんが
の間に私が自分の胸の中を或る程度まで打明けたのは、あなたお
ひとりくらい
一人位のものです、両親はもとよりその他の何人にも相
談一つしたことはございませぬ。これが私の身の破滅の基だつ
たのでございます。その性質はこちらの世界へ来てもなかなか
脱けず、御指導の神様に対してさえ、すべてを隠そう隠そうと
いた致しました。すると或時神様は、汝の胸に懷いていること位
は、何も彼もくわしく判っているぞ、と仰せられて、私が今まで
極秘にして居った、ある一つの事柄……大概お察しでござい
ましようが、それをすつぱりと言ひ当てられました。これにはさ

すがの私も我慢の角を折り、とうとう一切を懺悔してお恕しを願
 いました。そのために私は割合に早くあの地獄のような境地か
 ら脱け出ることができました。尤も私の先祖の中に立派な善行
 のものが居ったお蔭で、私の罪までがよほど軽くされたと申すこ
 とで……。何れにしても私のような強情な者は、現世に居つて
 は人に憎まれ、幽界へ来ては地獄に落され、大へんに損でござ
 います。これにつけて、私は一つ是非あなたに折入つてお詫びし
 なければならぬことがございます。実はこのお詫をしたいばかり
 に、今日わざわざ神様にお依みして、つれて来て戴きましたよ
 うな次第で……。『

敦子さまはそう言つて、私に膝をすり寄せました。私は何事

かしらと、襟えりを正ただしましたが、案外あんがいそれはつまらないことでございまして。――

『あなたの方ほうで御記憶ごきおくがあるかドーかは存ぞんじませぬが、ある日私わたくしがお訪たずねして、胸むねの思おもいを打ちあけた時とき、あなたは私わたくしに向むかい、自分じぶん同志どうしが良いのも結構けつこうだが、斯こういうことは矢張りやは両親りょうしんの許諾ゆるしを得る方ほうがよい、と仰おつしやいました。何を隠かくしましう、私わたくしはその時とき、この人ひとには、恋こいする人ひとの、本ほん当とうの気持きもちは判わからないと、心こころの中うちで大へんにあなたを輕視みおろしたのでございます。

――しかし、こちらの世界せかいへ来きて、だんだん裏面うらから、人間にんげんの生活せいを眺ながめることが、できるようになつて見みると、自分じぶんの間違まちがつていたことがよく判わかるようになりました。私わたくしは矢張りやは惡魔あくまに魅み

れて居たのでございました。——私は改めてここでお詫びを致します。何うぞ私の罪をお恕し遊ばして、元のとおりこの不束な女を可愛がつて、行末かけてお導きくださいますよう……。』

×

×

×

×

この人の一生には随分過失もあつたようで、従つて歸幽後の修行には随分つらいところもありましたが、しかしもともとしっかりした、負けぬ氣性の方だけに、一歩一歩と首尾よく難局を切り抜けて行きまして、今ではすっかり明るい境涯に達して居ります。それでも、どこまでも自分の過去をお忘れなく、『自分は他人さまのように立派な所へは出られない

。』と仰おほつしやつて、神様かみさまにお願いして、わぎと小さな岩窟いわやの
 ような所ところに籠こもつて、修しゆぎ行ようにいそしんで居おられます。これなど
 は、むしろ私わたくしどもの良い亀鑑てほんかと存ぞんじます。

三十六、弟橘姫

あまりに平へい凡ぼんな人達ひとたちの噂うわさばかりつづきましたから、その埋う
 合めあせといふ訳わけではございませぬが、今こん度はわが国くにの歴史れきしにお名な
 前まえが立派りっぱに残のこっている、一人ひとりの女性じよせいにお目めにかかつたお話を致はなしした
 しましう。外ほかでもない、それは大和武尊やまとたけるのみこと様のお妃きさきの弟おと
 橘ち姫ばな様でございます……。

わたくしたち あいだ 私達の間をつなぐ れいてき 靈的因縁は別と致 いた しても、不思
 議 ぎ に在世中 ざいせちゆう から私は弟橘姫様 あき と浅からぬ関係 かんけい を有 も つて
 居 お りました。御存じ ごぞん の通り姫のお祠 ひめ やしろ は相模の走水 さがみ はしりみず と申 もう すところ
 にあるのですが、あそこは私の縁 わたくしえん づいた三浦家の領地 みうらけ りやうちない 内 ない の
 でござ みうらけ います。で、三浦家 みうらけ ではいつも社殿 しゃでん の修理 しゅうり その他 たこころ に心
 をくばり、又お祭 またまつり でも催 もよお される場合 ばあい には、必ず使者 かならししや を立て た て幣 へいは
く ささ 帛 な を献 おんな げました。何 かがみ にしろ婦女 おんな の亀鑑 かみかん として世 よ に知 し られた御方 おかた
れいじよう の靈場 みうらけ なので、三浦家 みうらけ でも代々 だいだい あそこを大切 たいせつ に取扱 とりあつか
い っ ちゆう て居 い たらしいのでござ みうらけ います。そして私 わたくし 自身 じしん もたしか在 ざい
なんかい 世中 せちゆう に何回 はしりみず か走水 やしろ のお祠 さんぱい に参拜 さんぱい 致 いた しました……。

ナニその時分 じぶん の記憶 きおく を物語 ものがた れと仰 お っしやるか……随分 ずいぶん 遠 とお い遠 とお

い昔むかしのことで、まるきり夢ゆめのような感じかんがするばかり、とてもま
とまったことは想おもい出だせそうもありませぬ。たしか走はしり水みづとい
ところところうらが
う所ところは浦賀うらがの入江いりえからさまで遠とおくもない、海うみと山やまとの迫せり合あつた
狭せまい漁村ぎよそんで、そして姫ひめのお祠やしろは、その村むらの小高こだかい崖がけの半腹はんぷくに
建たつて居おり、石段いしだんの上うえからは海うみを越こえて上総房州かずさぼうしゅうが一と目ひめ
に見渡みわたされたように覺おぼえて居おります。

そうそういつか私わたくしがお詣まいりしたのは丁度春ちやうどはるの半ばで、あちこ
ちの山やまや森もりには山桜やまざくらが満開まんかいでございました。走水はしりみずは新
井にいの城しろから三四里りばかりも隔へだつた地点ところなので、私わたくしはよく騎馬きばで参まい
つたのでした。馬うまはもちろん例れいの若月わかつきで、従者じゆうしやは一人ひとりの腰こ
元しもとの外ほかに、二三人にんの家来けらいが附ついて行いつたのでございます。道みちは

みうら 三浦の ひがしかいがん 東海岸に沿った かいどう 街道で、たしか たけやま 武山とか申す、可
 な たかひと 成り高い一つの山の すそ 裾をめぐって行くのですが、その日は ひおり 折よく
 そらは あが 晴れ上つていましたので、馬 ばじょう 上から なが 眺むる海と山との けしき 景色
 は、まるで えまきもの 絵巻物をくり ひろ 拡げたように うつく 美しかったことを いま 今でも
 きおく 記憶して居ります。 まった 全くあの三浦の土地は、海 うみ の中に なかつ 突き出た半
 島 けしき だけに、景色にかけては何処 どこ にもひけは取りませぬようで：
 。。 もつと 尤もそれは げんせ 現世での はなし 話で ござ ございます。 せかい こちらの世界には りゆう 竜
 宮 ぐうかい 界のようなきれいな所 ところ がありまして、三浦半島 みうらはんとう の けしき 景色が
 いかに よ 良いと申しても、とてもくらべものにはなりませぬ。
 領 りようしゅ 主の奥 おく 方が ごつうか 御通過というので ひやくしやう 百姓などは どげざ 土下座で
 もしたか、と仰 お つしやるか……ホホまさかそんなことは ござ ございま

せぬ。すれ違ちがう時ときにちよつと道端みちばたに避よけて首くびをさげる丈だけでござ
います。それすら私わたくしには氣きづまりに感かんじられ、ツイ外そとへ出るのが
億劫おっくうで仕方しかたがないのでした。幸さいわいこちらの世界せかいへ参まいつてから、
その点てんの氣苦勞きくろうがすっかりなくなつたのは嬉うれしいございしますが、
しかしこちらの旅たびはあまり、あつけなくて、現世げんせでしたように、
ゆるゆると道どうちゆう中の景色けしきを味あじわうような面白味おもしろみはさつぱりあ
りませぬ……。

こんな夢物語ゆめものがたりをいつまで続つづけたとて致いたしかた方がございませ
ぬから、良い加減よかげんに切り上あげますが、兎とに角かくおとたちばなひめさまたいに對
する敬慕けいぼの念ねんは在世中ざいせちゆうから深く深く私の胸ふかに宿ふかわたくしむねつて居やどたことは
事實じじつでございました。『尊みことのお身代りみがわりとして入にゆうすい水みづされた時ときの

姫ひめのお心持こころもちはどんなであつたろう……。『祠前しぜんに額ぬかづいて昔むかしを偲しのぶ時ときに、私わたくしの両眼りょうがんからは熱あつい涙なみだがとめどなく流れ落ちるのでした。

ところがいつか竜宮界りゅうぐうかいを訪おとずれた時ときに、この弟橘姫様おとたちばなひめさまが玉依姫たまよりひめ様の末裔みすえ——御分靈ごぶんれいを受うけた御方おかたであると伺うかがいましたので、私わたくしの姫ひめをお慕したい申もうす心こころは一層強いつそうつよまってまいりました。『是非ぜひとも、一度いちどお目めにかかつて、いろいろお話を承はなり、又またお力ちからを願ねがわねばならぬ……。』——そう考かんがえると矢も楯もたままらぬようになり、とうとうその旨むねを竜宮界りゅうぐうかいに願ねがいすると、竜宮界りゅうぐうかいでも大たいそう歓よろこばれ、すぐその手続てつづきをしてくださいました。

わたくし
私わたしがこちらで弟橘姫様おとたちばなひめさまにお目通りめどおすることになったのは
こんな事情じじょうからでございます。

三十七、初対面

りゆうぐうかい
竜宮界りゆうぐうかいからかねて詳しい指図さしずを受けて居おりましたので、そ
ときわたくしおも
の時の私は思い切きつてたつた一人ひとりで出掛でかけました。初対面しよたいめんのこ
ゆえ ふくそう
と故、服装ふくそうなども失礼しつれいにならぬよう、日頃好みひごろこのの礼装れいそうに、
れい かつき はおり
例の被衣れいを羽織かつきました。

どこ
ブーツと何処どこまでもつづく山路やまじ……大へん高い峠たかとうげにかかったか
おも
と思うと、今度は降り坂くださかになり、右に左みぎひだりにくねくねとつづらに折お

れて、時に樹木の間から蒼い海原がのぞきます。やがて行き
 ついた所はそそり立つ大きな巖と巖との間を削りとつたような狭
 い峽路で、その奥が深い深い洞窟になつて居ります。そこが弟
 とちちばなひめさま ひごろ この ぐしゆぎようば どうくつ いりぐち
 橘姫様の日頃お好みの御修行場で、洞窟の入口には
 チャーンと注連縄が張られて居りました。むろん橘姫様は
 いつもここばかりに引籠つて居られるのではないのです。現世
 に立派なお祠があるとおり、こちらの世界にも矢張りそう言つた
 ものがあり、御用があればすぐそちらへお出ましになられるそう
 で……。

『ごめんあそ 御免遊ばしませ……。』

口にごそ出しませんが、私は心でそう思つて、会釈して洞窟

の内部へ歩み入りますと、早くもそれと察して奥の方からお出ま
 しになられたのは、私が年来お慕い申していた弟橘姫様
 でした。打ち見るところお年齢はやつと二十四五、小柄
 で細面の、大そう美しい御縹緖でございますが、どちらか
 といえは少し沈んだ方で、きりりとやや釣り気味の眼元には、す
 ぐれた御気性がよく伺われました。御召物は、これは又私ど
 もの服装とはよほど異いまして、上衣はやや広い筒袖で、色
 合いは紫がかった居りました、下衣は白地で、上衣より二三寸下
 に延び、それには袴のように襷が取つてありました。頭髮は頭の
 頂辺で輪を造つたもので、ここにも古代らしい匂が充分に
 漂つて居りました。又お履物は黒塗りの靴見いなものですが、

それは木の皮か何ぞで編んだものらしく、そう重そうには見えませんでした……。

『私は斯ういうものでございますが、現世に居りました時から深くあなた様をお慕い申し、殊に先日乙姫さまから委細を承りましてから、一層お懐かしく、是非一度お目通りを願わずには居られなくなりました、一向何事も弁えぬ不束者でございますが、これからは末長くお教えを受けさせて戴きとう存じます……。』

『かねて乙姫様からのお言葉により、あなたのお出でを心待ちにお待ち申して居りました。』とあちら様でも大そう歓んで私を迎えてくださいました。『自分とて、ただ少し早くこちらの世

界へ引移ったという丈、これからはともどもに手を引き合つて、

修行すること致しよう。何うぞこちらへ……。』

その口数の少ない、控え目な物ごしが、私には何より有難く

おも思われしました。『矢張り歴史に名高い御方だけのことがある。』

私は心の中で独りそう感心しながら、誘わるるままに岩屋の奥

深く進み入りました。

私自身も山の修行場へ移るまでは、矢張り岩屋住いをいたし

ましたが、しかし、ここはずっと大がかりに出来た岩屋で、両

側も天井も井ももの凄いいほどギザギザした荒削りの巖になつ

て居ました。しかし外面から見たのとは違つて、内部はちつとも

暗いことはなく、ほんのりといかにも落付いた光りが、室全体

に漲みなぎつて居おりました。『これなら精神統せいしんとう一がうまくできるに
相違そういない。』餅屋もちやは餅屋もちやと申もうしますか、私わたくしは矢張りそんなことを
考かんがえるのでした。

ものの二丁ちようばかりも進すすんだ所が姫の御修行ごしゆぎようの場所ばしょで、床一ゆかいち
面めんに何なにやらふわつとした、柔かい敷物しきものが敷しきつめられて居おり、
そして正面しょうめんの棚見たなみたいにできた凹所くぼみが神床かんどこで、一つの円まるい
御神鏡ごしんきようがキッチンと据すえられて居いるばかり、他ほかには何なに一つ装そうし
飾よくらしいものは見当みあたりませんでした。

私達わたくしたちは神床かんどこの前ぜん面めんに、左と右に向き合あつて座ざを占しめま
した。その頃ころの私わたくしは最だいう大分幽界おうれいの生せい活かつに慣なれて来きていまし
たものの、兎とに角自分かくじぶんより千年せんねんあまりも以前いぜんに帰幽きゆうせられた、

史上しじょうに名高なだかい御方おかたと斯こうして膝ひざを交まじえて親したしく物語ものがたるのかと思おもうと、何なにやら夢ゆめでも見て居みるよういに感かんじられて仕方しかたがないのでした。

三十八、姫の生立

私わたくし達たちの間あいだには、それからそれへと、物語ものがたりがとめどなくはずみました。靈みたまの因縁いんえんと申もうすものはまことに不思議ふしぎな力を有もつているものらしく、これが初対面しよたいめんであり乍ながら、相互おたがいの間あいだの隔へだての籬かきはきれいに除とり去さられ、さながら血ちを分わけた姉妹きょうだいのよういに、何なにも彼かもすつかり心こころの底そこを打うち明あけたのでございました。

わたくし 私というものは御覧の通り何の取柄もない、短かい生涯を送ったものでございませうが、それでも弟橘姫様は私の現世時代の浮沈に対して心からの同情を寄せて、親身になつてきいてくださいました。『あなたも随分苦労をなさいました……。』

『そう言つて、私の手を執つて涙を流された時は、私は忝いやら、難有いやらで胸が一ぱいになり、われを忘れて姫の御膝に縋りついて了いました。』

が、そんな話はただ私だけのことで、あなた方には格別面白くも、又おかしくもございませうが、ただ其折弟橘姫様御自身の口づから漏された遠き昔の思い出話——これはせめてその一端なりとここでお伝えして置きたいと存じます。何

にしろ日本にほんの歴史れきしを飾る第一だいいちの花形はながたといえ、女性じよせいでは弟おとちちばなひめさま 又男まただんせい性では大和武尊やまとたけるのみこと様でございます。こ
橘たちばな姫ひめ様、ふたり又男まただんせい性では大和武尊やまとたけるのみこと様でございます。こ
のお二人ふたりにからまる事蹟じせきが少しでも現世げんせの人達ひとたちに伝つたわることに
なれば、私の拙わたくしき通信つうしんにも初めてはじめて幾いくらかの意義いぎが加くわわる訳わけでござ
います。私わたくしにとりてこんな冥加みよがし至極ごくなことはございませぬ。
尤も私の申もうし上あぐるところが果はたして日本にほんの古ふるい書物しょもつに載のせてあ
ることと合あつてゐるか、いないか、それは私わたくしにはさっぱり判わかりま
せぬ。私わたくしはただ自分じぶんが伺うかがいましたままをお伝つたえする丈だけでございま
すから、その点てんはよくよくお含ふくみの上うえで取拾しゆしやして戴いたき度どう存ぞんじ
ます。

それからもう一つひとこ爰ここでくれぐれもお断ことわりして置おきたいのは、私わたくし

がお取次とりつぎすることが、決して姫御自身ひめごじしんのお言葉ことばそのままではなく、
 ただ意味いみだけを伝えることつたでございます。当時とうじの言語ことばは含蓄がんちくが
 深いふかと申しますか、そのままではとても私わたくしどもの腑ふに落ちかぬる
 ところがあり、私わたくしとしては、不躰ふしつけと知りつつも、何度なんども何度なんども
 問といかえして、やつとここまで取りまとめたのでございます。で、
 多少たしょうは私のきき損そこね、思い違おもちがいがないとも限かぎりませぬから、そ
 の点てんも何卒なにとぞ充分じゅうぶんにお含ふくみ下さいますよう……。

『あなた様さまの御生立おんおいたちを伺うかがして戴いたき度だう存ぞんじまするが……。』
 機会きかいを見て私はそう切り出きだしました。すると姫ひめはしばらく凝じつ乎
 と考え込かんがまれ、それから漸ようやく唇ちびるを開ひらかれたのでございました。――

『いかにも遠い昔のこと、所の名も人の名も、急には胸に浮びませぬ。——私の生れたところは安芸の国府、父は安藝淵真佐臣：代々この国の司を承つて居りました。尤も父は時の帝から召し出され、いつもお側に仕える身とて、一年の大部は不在勝ち、くにもと国元にはただ女小供が残つて居るばかりでございました……。』

『御きようだいもおありでございましたか。』

『自分は三人のきようだいの中なかの頭かしら、他は皆男子でございました。』

『いつもお国元くにもとのみにお暮らしでございましたか？』

『そうのみとも限りませぬ。偶には父のお伴をして大和やまとにのぼり、帝のお目通りめどおをいたしたこともございます……。』

『アノ 大和武尊様とも矢張り大和の方でお目にかかられたのでございまするか?』

『そうではありませぬ……。 国元くにもとの館やかたで初めてお目めにかかりました……。』

山間さんかんの湖水こすいのように澄すみ切きった、気高けだかい姫ひめのお顔かおにも、さすがにこの時ときは情思こころの動きが薄うすい紅葉もみじとなつて散ちりました。私わたくしは構かまわず問といつづけました。――

『何卒なにとぞその時ときの御模様おんもようをもう少すこしくわしく伺うかがわせていただく訳わけにはまいりますまいか? あれほどまでに深ふかい深ふかい夫婦めおとの御縁ごえんが、ただかりそめの事ことで結むすばれる筈はずはないと存ぞんじますか……。』

『さア……。何所どこから話はなしの糸口いとぐちを手繰たぐり出だしてよいやら……。』

姫ひめはしばらくさし俯うづむいて考かんがえ込こんで居おりましたが、その中次うちし第だいにその堅かたくい唇くちびるが少すこしづつ綻ほこびてまいりました。お話はなしの前ぜん後ごをつづり合あわせると、大だい体たいそれは次つぎのような次第しだいでございました……。

三十九、見合い

それはたしかに、ある年としの夏なつの初はじめ、館やかたの森もりに蟬せみ時とき雨ぐれが早はや瀬せを走はしる水みづのようきこに、喧かましく聞きこえている、暑あつい真ま昼ひる過すぎのことであつたもうと申もうします——館やかたの内部うちは降ふつて湧わいたような不ふ時じの来らい客きやくに、午ひる睡ねする人ひと達たちもあわててとび起おき、上うえを下したへの大おお騒さわぎを

演じたのも道理、その来客と申すのは、誰あろう、時の帝の
 珍の皇子、当時筑紫路から出雲路にかけて御巡遊中の小碓
 命様なのでございました。御随行の人数は凡そ五六十人、い
 れも命の直属の屈強の武人ばかりでございました。序で
 にちよつと附け加えて置きますが、その頃命の直属の部下と
 申しますのは、いつもこれ位の小人数でしかなかったそうで、
 いざ戦鬪となれば、何れの土地に居られましても、附近の武
 人どもが、後から後から馳せ参じて忽ち大軍になったと申し
 ます。『わざわざ遠方からあまたの軍兵を率いて御出征になら
 れるようなことはありません。』橘姫はそう仰つしやつ
 て居られました。何所へまいるにもいつも命の御随伴をした橘

なひめ

姫なひめがそう申もうされることでございますから、よもやこれに間違まちがは

あるまいと存ぞんじます。

それは兎とに角かく、不意ふいの来らい客きやくとしては五六十人にんはなかなかの

おおにんずう

大人数おとなかずでございます。ましてそれが日本にほん国こく中ちゆうにただ一人ひとりあ

ふたり

つて、二人ふたりとはない、軍いくさの神様かみさまの御同勢ごどうせいとありましては大たいへ

んでございます。恐おそらく森もりの蟬時雨せみしぐれだつて、ぴつたり鳴なき止やん

だことでございましょう。ただその際何さいなにより好都合こうつごうであつたの

ひめ ちちぎみ めず

は、姫ひめの父君ちちぎみが珍めずらしく国元くにもとへ歸かえつて居おられたことで、御自ごじ

しんぎはい

身采配しんさいはいを振ふつて家人がじんを指図さしずし、心こころ限かぎりの歓待もてなしをされた為ため

すこ

めに、少すこしの手落ておちもなかつたそうでございます。それについて姫ひめ

すこ

は少すこしくお言葉ことばを濁にごして居おりましたが、何どうやら小碓命おうすのみこと様さま

のその日の御立寄は必らずしも不意打ではなく、かねて時の帝
 から御内命ごないめいがあり、言わば橘姫様とお見合みあいの為ために、そ
 れとなくお越こしになられたらしいのでございます。

何れにしても姫はその夕、両親に促がされ、盛装してお
 側にまかり出で、御接待に当られたのでした。『何分にも年

若き娘のこととて恥かしさが先立ち、格別のお取持もでき

なかった……。』姫はあつきりと、ただそれつきりしかお口には

出されませんでした。が、何やらお二人の間を維いだ、切つても切

れぬ固い縁の糸は、その時に結ばれたらしいのでございます。実

際又何れの時代をさがしても、この御二人ほどお似合の配偶は

めつたにありそうにもございませぬ。申すもかしこけれど、お婿

さま様は百代に一人と言われる、すぐれた御器量の日の御子、又
お妃は、しとやかなお姿の中に凛々しい御気性をつつまれた絶
世の佳人、このお二人が一と目見てお互にお氣に召さぬような
ことがあつたら、それこそ不思議でございます。お年輩も、た
しか命はその時御二十四、姫は御十七、どちらも人生の花盛
りなのでございました。

これは余談でございますが、私がこちらの世界で大和武尊
様に御目通りした時の感じを、ここであつと申上げて置き
たいと存じます。あんな武勇絶倫の御方でございますから、お
目にかからぬ中は、どんなにも怖い御方かと存じて居りましたが、
実際はそれはそれはやさしい御風貌なのでございます。むろ

ん御筋骨ごきんこつはすぐれて逞たくましうございますが、御顔おかおは色白いろしろの、至いた
 っってお奇麗きれいな細面ほそおもて、そして少し釣気味すこ 釣りきみのお目元めもとにも、又またきり
 りと引きしまったお口元くちもとにも、殆んど女性ほと じよせいらしい優やさしみを
 湛たたえて居おられるのでございます。『成なるほどこの方かたなら少女姿おとめすがた
 に仮装つくられてもさして不思議ふしぎはない筈はず……。』失礼しつれいとは存ぞんじな
 がら私わたくしはその時心ときころうちの中でそう感かんじたことでございしました。
 それはさて置きおき、命みことはその際さいは二晩ふたばんほどお泊りとまになつて、そ
 のままお帰かえりになられましたが、やがて帝みかどのお裁可ゆるしを仰あおぎて再ふたた
 安芸あきの国くににお降くだり遊あそばされ、その時ときいよいよ正式せいしきに御婚儀ごこんぎを挙あ
 げられたのでございました。尤も軍務多端もつと ぐんむたんの際さいとて、その式しきは至いた
 って簡かん単たんなもので、ただ内輪うちわでお杯さかずき事ことをされただけ、間まも

なく新婚しんこんの花嫁様はなよめさまをお連れになつて征途せいとに上られたとのこと
 でございました。『斯こういう場合ばあいであるから何所いずくへまいるにも、
 そちを連れつる。』命みことはそう仰おおせられたそうで、又姫まなひめの方ほうでも、い
 としき御方おんかたと苦勞くろう艱難かんなんを共にするのおんなつとが女の勤めと、固く固く覺かく
 悟くごされたのでした。

四十、相摸の小野

いくとせ 幾年またがかに跨またがる賊徒征伐ぞくとせいばつの軍の旅路いくさたびじに、さながら影かげの形かたちに伴ともな
 ごとく、ただの一日いちにちとして脊せの君きみのお側そばを離はなれなかつた弟おとたち橘はなび
 姫めの涙なみだぐましい犠牲ぎせいの生活せいかつは、実じつにその時ときを境界さかいとして始はじめ

られたのでした。或る年の冬は雪沓を穿いて、吉備国から出
 ずものくに雲国への、国境の險路を踏み越える。又或る年の夏には焼
 くような日光を浴びつつ阿蘇山の奥深くぐぐり入りて賊の巢
 窟をさぐる。その外言葉につくせぬ数々の難儀なこと、危険
 なことに遇われましたそうで、歳月の経つと共に、そのくわしい
 記憶は次第に薄れては行つても、その時胸にしみ込んだ、感じの
 みは今も魂の底から離れずに居るとの仰せでございました。
 こんな苦しい道中のことでございますから、御服装なども
 それはそれは質素なもので、足には藁沓、身には筒袖、さし
 て男子の旅装束と相違していませんでした。なれども、姫は
 最初から心に固く覚悟して居られることとて、ただの一度も愚

痴めきたことはお口に出されず、それにお体も、かぼそいながら
 至つて御丈夫であつた為め、一行の足手纏いになられるよう
 なことは決してなかつたと申すことでございます。

かかる艱苦の旅路の裡にありて、姫の心を支うる何よりの誇り
 は、御自分一人がいつも命のお伴と決つて居ることのようでした。

『日本一の日の御子から又なきものに愛しまれる……。』そう思

う時に、姫の心からは一切の不満、一切の苦勞が煙のように消え

て了うのでした。当時の習慣でございますから、むろん命の

御身辺には夥多の妃達がとりまいて居られました。それ等

の中には橘姫よりも遙かに家柄の高いお方もあり、又縹

緞自慢の、それはそれは艶麗な美女も居ないので

した。が、それ等は言わば深窓を飾る手活の花、命のお寛ぎになられた折の軽いお相手にはなり得ても、いざ生命懸けの外のお仕事にかかられる時には、きまり切つて橘姫にお声がかかる。これでは『仮令死んでも……』という考が橘姫の胸の奥深く刻み込まれた筈でございましょう。

だんだん伺つて見ると、数限りもない御一代中で、最大の御危難といえ、矢張り、あの相摸国での焼打だったと申すこととでございます。姫はその時の模様丈は割合にくわしく物語られました。――

『あの時ばかりは、いかに武運に恵まれた御方でも、今日が御最後かと危まりました。自分は命のお指図で、二人ばかりの従者に

まもられて、とある丘の頂辺に避けて、命の御身の上を案じわび
 て居りましたが、その中四方から急にめらめらと燃え広がる野火、
 やがて見渡す限りはただ一面の火の海となつて了いました。折か
 ら猛しい疾風さえ吹き募つて、命のくぐり入られた草叢の方へ
 と、飛ぶが如くに押し寄せて行きます。その背後は一帶の深い沼
 沢で、何所へも退路はありません。もうほんの一と煽りですべ
 ては身の終り……。そう思うと私はわれを忘れて、丘の上から駆
 け降りようとしてしまいましたが、その瞬間、忽ちゴーツと耳もつぶ
 れるような鳴動と共に、今までとは異つて、西から東へと向きを
 かえた一陣の烈風、あなやと思う間もなく、猛火は賊の隠れた
 反対の草叢へ移つてまいりました……。その時たちまち、右

ぎてたか、手に高く、御秘蔵の御神剣を打ち翳し、漆の黒髪を風に靡か
 せながら、部下の軍兵どももよりも十歩も先んじて、草原の内
 か部から打って出でられた命の猛き御姿、あの時ばかりは、女子の
 身でありながら覚えず両手を空にさしあげて、声を限りにわあ
 ツと叫んで了いました……。後で御伺いすると、あの場合、命
 が御難儀を脱れ得たのは、矢張りあの御神剣のお蔭だったそう
 で、燃ゆる火の中で命がその御鞘を払われると同時に、風向き
 が急に変わったのだと申すことでございます。右の御神剣と申す
 のは、あれは前年わざわざ伊勢へ参られた時に、姨君から授
 けられた世にも尊い御神宝で、命はいつもそれを錦の袋に納め
 て、御自身の肌身につけて居られました。私などもただ一度しか

おが
拝まして戴いたことはございましたね……。』

これが大体姫のお物語りでございます。その際命には、火焰
の中に立ちながらも、しきりに姫の身の上を案じわびられたそう
で、その忝ない御情意はよほど深く姫の胸にしみ込んで居ら
しく、こちらの世界に移つて、最う千年にも余るといふのに、
今でも当時を想い出せば、自ずと涙がこぼれると言つて居られま
した。

かくまで深いお二人の間でありながら、お兎様としては、若
建王と呼ばれる御方がただ一人——それも旅から旅へといつ
も御不在勝ちであつたために、御自分の御手で御養育はできな
かつたと申すことでございました。つまり橘姫の御一生はす

べてを脊せの君きみに捧ささげつくした、世よにも若わか々わかしい花はなの一生しょうなので
ございました。

四十一、海神の怒り

わたくしちかが
私が伺うかがった橘たちばな姫ひめのお物ものがたり語なの中には、まだいろいろお伝つた
えしたいことがございますが、とても一度どに語かたりつくすことはで
きませぬ。何いれ又また良い機おり会ありましましたら改あらためてお漏もらしすること
として、ただあの走はしりみず水うみの海うみで御入水ごにゆうすい遊あそばされたお話はなしだけは、
何どうあつても省はぶく訳わけにはまいますまい。あれこそはひとりこの
御夫婦ごふうふの御一代ごだいを飾かざる、尤も美しい事蹟じせきであるばかりでなく、又また

にほんの歴史の中での飛び切りの美談と存じます。私は成るべく姫のお言葉そのままをお取次ぎすることに致します。

『わたくし達が海辺に降り立ったのはまだ朝の間のことです。風は少し吹いて居りましたが、空には一点の雲もなく、五六里もあろうかと思わるる広い内海の彼方には、総の国の低い山々が絵のようにぽっかりと浮んで居りました。その時の私達たぐしたちの人数はいつもよりも小勢で、かれこれ四五十名も居ったでございましょうか。仕立てた船は二艘、どちらも堅牢な新船でございしました。

『一同が今日の良き船出を寿ぎ合つたのもほんの束の間、やや一里ばかりも陸を離れたと覺しき頃から、天候が俄かに不穩の模

ようかわにしま變つて了しまいました。西北せいほくの空そらからどつと吹ふき寄よせる疾風はやて、
 見る見る船ふねはグルリと向むきをかえ、人々ひとびとは滝たきなす飛沫しぶきを一いぱい
 に浴あびました。それにあの時ときの空模そらもよう様の怪あやしさ、赭黒あかぐろい雲くもの
 峰みねが、右みぎからも左ひだりからも、もくもくと群むらがり出いでて満天まんてんに折おり
 重かさなり、四辺あたりはさながら真夜中まよなかのような暗くらさに鎖とぎされたと思おもう間
 もなく、白刃しらはを植うえたような稲妻いなづまが断間たえまなく雲間あいだに閃ひらめき、それ
 につれてどつと降ふりしきる大粒おおつぶの雨あめは、さながら礫つぶてのように人ひ
 とびとおもてう々きみの面おもてを打ちました。わが君きみをはじめ、一同どうはしきりに舟子達かこたち
 を励はげまして、暴あれ狂くるう風浪ふうろうと闘たたかいましたが、やがて両三人りやうにんは浪
 に呑のまれ、残余のこりは力ちからつきて船底ふなぞこに倒たおれ、船ふねはいつ覆くつがえるか判わからな
 くなりました。すべてはものの半刻はんときと経たたぬ、ほんの僅わずかの間ま

のことでございました。

『かかる場合にのぞみて、人間の依むところはただ神業ばかり……』

私は一心不乱に、神様にお祈禱をかけました。船のは

げしき動揺につれて、幾度となく投げ出さる私の軀——そ

れでも私はその都度起き上りて、手を合せて、熱心に祈りつづ

けました。と、忽ち私の耳にはつきりとした一つの囁き、『これ

は海神の怒り……今日限り命の生命を奪る……』覚えずは

つとして現実にかえれば、耳に入るはただすさまじき浪の音、風

の叫び——が、精神を鎮めると又もや右の怪しき囁きがはつきり

と耳に聞えてまいります……。

『二度、三度、五度……幾度くりかえしてもこれに間違のない

ことが判つた時に、私はすべてを命に打ち明けました。命は日頃
 の、あの雄々しい御氣性とて「何んの愚かなこと！」とただ一
 言に打ち消して了われましたが、ただいかにしても打ち消し得な
 いのは、いつまでも私の耳にきこゆるあの不思議の囁きでござい
 ました。私はとうとう一存で、神様にお縋りました。「命は
 御国にとりてかけがえのない、大切の御身の上……何卒この数な
 らぬ女の生命を以て命の御生命にかえさせ玉え……。」二度、
 三度この祈りを繰り返して居る内に、私の胸には年来の命の
 御情思がこみあげて、私の両眼からは涙が滝のように溢れ
 ました。一首の歌が自ずと私の口を突いて出たのもその時でござ
 います。真嶺刺し、相摸の小野に、燃ゆる火の、火中に立ちて、

と
問 い し 君 は も ……。

『右の歌を歌い終ると共に、いつしか私の軀は荒れ狂う波間に跳
つて居りました、その時ちらと拝したわが君のはつと愕かれた御
面影——それが現世での見納めでございました。』

×

×

×

×

橘 姫の御物語はひと先ずこれにて打ち切りといたしま

すが、ただ私として、ちよつとここで申添えて置きたいと思

ますのは、海神の怒りの件でございます。大和武尊さま

のような、あんな御立派なお方が、何故なれば海神の怒りを買

われたか？——これは恐らくどなたも御不審の点かと存じます

が、実は私もこれにつきて、指導役のお爺さんじどうやく おじいにその訳わけを伺うかつたことがあるのでございます。その時ときお爺さんじいは斯こう答こたえられました。――

『それは斯こういう次第しだいじゃ。すべて物ものには表おもてと裏うらとがある。命みことが日本国にほんこくにとりて並ならびなき大恩人だいおんじんであることはいうまでもなけれど、しかし殺ころされた賊徒ぞくとの身みになつて見みれば、命みことほど、世よにも憎にくいものはない。命みことの手にかかつて滅ほろぼされた賊徒ぞくとの数かずは何万とも知しれぬ。で、それ等らが一団だんの怨おんりよう霊ようとなつて隙すきを窺うかがい、たまたま心こころよからぬ海神かいじんの援たすけけを獲えて、あんな稀有けうの暴風雨あらしをまき起おこしたのじゃ。あれは人霊じんれいのみでできる仕業しわざでなく、又海神みづかみのみであつたら、よもやあれほどのいたずらはせなかつたで

であろう。たまたま斯うした二つの力が合致したればこそ、あのよ
 うな災難さいなん きゆうが急に降つて湧いたのじや。当時の橘姫たちばなひめにはもと
 よりそうした詳しい事情じじようの判ろう筈はずもない。姫ひめがあれをただ海か
 神いじんの怒りいかとのみ感じたのはいささか間違つて居るが、それはそ
 うとして、あの場合ばあいの姫ひめの心胸むねにはまことに涙ぐましい真剣しんけんさ
 が宿つていたやど。あれほどの真心まごころが何ですぐ神々の御胸みむねに通ぜぬ
 ことがあるう。それが通じたればこそ大和武尊やまとたけるのみことには無事に
 あの災難さいなんを切りぬけることが出来たのじや。橘姫たちばなひめは矢張り
 稀まれに見るすぐれた御方おかたじや。』
 私わたくしはこの説明せつめいが果してすべてを尽つくしているか否かは存ぞんじませ
 ぬ。ただ皆みなさまの御参考ごさんこうまでに、私の伺わたくしつたところを附つけ加くわえ

て置くだけでございます。

四十二、天狗界探検

あまり面会談ばかりつづいたようでございますから、今度は少し模様をかえて、その頃修 行の為に私がこちらで探検に参りました、珍しい境地のお話をすることにいたしました。こちらの世界には、現世とは全く異つた、それはそれは変つたものが住んで居るところがあるのでございます。それがあまりにも飛び離れ過ぎていきますので、あなた方は事によると半信半疑、よもやとお考えになられるか存じませぬが、これが事実であつて

見れば、自分の考で勝手に手加減を加える訳にもまいりませぬ。
 あなた方がそれを受け入れるか、入れないかは全く別として、兎
 も角も私の眼に映じたままを率直に述べて見ることに致しま
 す。

『今日は天狗の修行場に連れて行く……。』

ある日例の指導役のお爺さんが私にそう言われます。私には
 天狗などというものを別に見たいという考もないのでございまし
 たが、それが修行の為めとあればお断りするのもドーかと思
 い、浮かぬ気分です、黙ってお爺さんの後について、山の修行場
 を出掛けました。

いつもとは異なり、その日は修行場の裏山から、奥へ奥へ

奥へとどこまでも險阻な山路を分け入りました。こちらの世界では、どんな山坂を登り降りしても格別疲労は感じませぬが、しかし何やらシーンと底冷えのする空気に、私は覚えぬ総毛立つて、軀がすくむように感じました。

『お爺さま、ここはよほどの深山なのでございましょう……私
はぞくぞくしてまいりました……』

『寒く感ずるのは山が深いからではない。ここはもうそろそろ天
狗界に近いので、一帯の空氣が自ずと異つて來たのじゃ。大
体天狗界は女人禁制の場所であるから汝にはあまり氣持
が宜しくあるまい……。』

『よもや天狗さんが怒つて私を浚つて行くようなことはございま

すまい……。』

『その心配しんぱいは要いらぬ。今日きょうは神界しんかいからのお指図さしずを受けて尋ねるのであるから、立派りっぱなお客きやく様さま扱あつかいを受けるであろう。二度と斯どこうした所ところに来ることもあるまいから、よくよく氣きをつけて天狗界てんぐかいの状況ようすをさぐり、又不審またふしんの点てんがあつたら遠慮えんりよなく天狗てんぐの頭目かしらに訊たずねて置くがよいであろう……。』

やがて古い古い杉木立ふる ふる すぎこたちがぎつしりと全山ぜんざんを蔽おおいつくして、昼ひる尚なお暗くらい、とてもものすごい所ところへさしかかりました。私わたくしはますます全身ぜんしんに寒氣さむけを感じかん、心こころの中では逃にげて歸かえりたい位くらいに思おもいました。たが、それでもお爺さんじいが一向平氣こうへいきでズンズン足あしを運はこびますので、漸やつとの思おもいでついで参まいりますと、いつしか一軒けんの家屋かおくの前まえへ出でま

した。それは丸太^{まるた}を切り組^きんで出来^{でき}た、やつと雨露^{うろ}を凌^{しの}ぐだけの、
 極めてぎつとした破屋^{あばらや}で、広^{ひろ}さは畳^{たたみ}ならば二十畳^{じゅうじよう}は敷^しける位^{くらい}で
 ございましょう。が、もちろん畳^{たたみ}は敷^しいてなく、ただ荒削^{あらけず}りの
 厚板^{あついたば}張^はりになつて居^おりました。

『ここが天狗^{てんぐ}の道場^{どうじよう}じゃ。人間^{にんげん}の世界^{せかい}の剣術^{けんじゆつ}道場^{どうじよう}に
 よく似^にて居^いるであらうが……。』

そんなことを言^いつてお爺^{じい}さんは私^{わたくし}を促^{うなが}して右^{みぎ}の道場^{どうじよう}へ歩^{あゆ}み
 入^いりました。

と見^みると、室内^{しつない}には白^{びやく}衣^{くい}を着^きた五十余^{よそひ}歳^{さい}と思^{おも}わるる一人^{ひとり}の
 修験^{しゆけん}者^{じゃ}らしい人物^{じんぶつ}が居^いて、鄭^{てい}重^{ちゆう}に腰^{こし}をかがめて私^{わたくし}達^{たち}
 を迎^{むか}えました。

『良^ようこそ……。かねてのお達^{たつ}しで、あなた方^{がた}のお出^いでをお待^まち受^うけて居^おりました。』

わたくしただ私^{わたし}は直^{ちく}ちにこれ^{これ}が天狗^{てんぐ}さんの頭目^{かしら}であるな、と悟^{さと}りましたが、かねて想^{そう}像^{ざう}して居^いたのとは異^{ちが}つて、格^{かく}別^{べつ}鼻^{はな}が高^{たか}い訳^{わけ}でもなく、ただ体^{たい}格^{かく}が普^ふ通^{つう}人^{じん}より少^{すこ}し大^{おお}きく、又^{また}眼^めの色^{いろ}が人^{ひと}を射^いるよう^{よう}に強^{つよ}い位^{くらい}の相違^{そうい}で、そしてその総^{そう}髪^{はつ}にし^した頭^{あたま}の上^{うへ}には例^{れい}の兜巾^{とぎん}がチヨコンと載^のつて居^おりました。

『女^{にょ}人^{にん}禁^{きん}制^{せい}の土^ど地^ち柄^{がら}、格^{かく}別^{べつ}のおもてなしとてでき申^{もう}さぬ。

ただいささか人^{にん}間^{げん}離^りれ^なのした、一^{いっ}風^{ふう}変^{かわ}つてい^いるところがこ^この世^せ界^{かい}の御^ご馳^ち走^{そう}で……。』

案^{あん}外^{がい}にさばけた挨^{あい}拶^{さつ}をして、笑^え顔^がを^を見^みせてくれ^{くれ}ましたので、

わたくしたい 私も大へんに心こころが落おちつき、天狗さんというものは割わり合あいにやさし
い所ところもあるものだと悟さとりました。

『今日こんにちはとんだお邪魔じやまを致いたします。では御免遊ごめんあそばしませ：
…』

わたくしは履物はきものを脱ぬいで、とうとう天狗さんの道場どうじやうに上あがり込こ
でしまりました。

四十三、天狗の力業

斯こんな風ふうに物語ものがたると、すべてがいかにも人間界にんげんかいの出来事できごとのよ
うに見みえて、をかしなものでございますが、もちろんこの天狗てんぐさ

んは、私達に見せる為めに、態と人間の姿に化けて、そして人間らしい挨拶をして居たのでございます。道場だつて同じこと、天狗さんに有形の道場は要らない筈でございますが、種がなくては掴まえどころがなさ過ぎますから、人間の剣術の道場のようなものを仮りに造り上げて私達に見せたのでございましょう。すべて天狗に限らず、幽界の住人は化るのが上手でございしますから、あなた方も何卒そのおつもりで、私の物語をきいて戴き度う存じます。さもないと、すべてが一篇のお伽噺のように見えて、さっぱり値打がないものになりそうでございします。

それはそうと、私達がその時面会した天狗さんの頭目と

いうのは、仲間なかもでもなかなか力ちからのある傑物えらものだそうでございました、お爺さんじいが何か一つ不思議な事ことを見せてくれと依たのみますと、早速二つ返事で承諾しょうだくしてくれました。

『われわれの芸げいと申もうすは先ずざつと斯こんなもので……。』

言うより早く天狗てんぐさんは電光いなづまのように道場どうじょうから飛び出だし

たと思う間おももなく、忽ちたちまするすると庭前ていぜんに聳そびえている、一本ぽんの杉すぎ

の大木たいぼくに駆け上あがりました。それは丁度ちやうど人間にんげんが平地へいちを駆け

と同じく、指端ゆびさき一つ触れずひとふに、大木たいぼくの幹みきをば蹴けつて、空そらへ向む

けて駆け上あがるのでございますが、その迅はやさ、見事みごとさ、とても筆ふでや

言葉ことばにつくせる訳わけのものではありませんなせぬ。私は覚わえず坐席ざせきから立た

ち上あがつて、呆あきれて上方うへを見上みあげましたが、その時はモ一天狗てんぐさん

の姿が頂^{すがた}辺^{てっぺん}の枝^{えだ}の茂^{しげ}みの中^{なか}に隠^{かく}れて了^{しま}つて、どこに居^いるやら判^{わか}らなくなつて居^いました。

と、やがて梢^{こずえ}の方^{ほう}で、バリバリという高^{たか}い音^{おと}が致^{いた}します。

『木の枝^{きえだ}を折^おつてゐるナ……。』

お爺^{じい}さんがそう言^いわれてゐる中^{うち}に、天狗^{てんぐ}さんは直^{ちよく}徑^{けい}一^{いつ} 丈^{しゃ}

尺^くもありそうな、長^{なが}い大^{おお}きな杉^{すぎ}の枝^{えだ}を片^{かた}手^てにして、二三十丈^{じゅう}の

虚空^{こくう}から、ヒラリと身^みを躍^{おど}らして私^{わたくし}の見^みてゐる、すぐ眼^めの前^{まえ}に降^お

り立^たちました。

『いかがでござる……人^{にん}間^{げん}よりも些^ちと腕^{うで}ぶしが強^{つよ}いでござろう

が……。』

いとど得意^{とく}な面^{おも}持^{もち}で天狗^{てんぐ}さんはそう言^いつて、つづいて手^てにせ

る枝をば、あたかもそれが芋いも殻がらでもあるかのように、片かた端っぱしからいきむし つては棄すて、引ひきむし つては棄すて、すつかり粉こな々ごなにししまて了しまいました。

が、私わたくしとしては天狗てんぐさんの力りきりよう量おどろに驚おどろくよりも、寧むしろその飽あくまで天真てんしんらんまん爛漫むじやきな無邪氣かんぶくさに感服かんぷくして了しまいました。

『あんな鹿しか爪つめらしい顔かおをしているくせに、その心こころの中なかは何なんといいう可愛かわいいものであろう！ これなら神様かみさまのお使者つかいとしてお役やくに立たつ筈はずじゃ……。』

私わたくしは心こころの裡うちでそんなことを考かんがえました。私わたくしが天狗てんぐさんを好きすになつたのは全まったくこの時ときからでございます。尤もつとも天狗てんぐと申もうしましてしも、それには矢張やはり沢山たくさんの階段かいだんがあり、質たちのよくない、修しゆぎ

行^{よう}未^み熟^{じゆく}の野^の天^{てん}狗^ぐなどになると、神^{かみ}様^{さま}の御^ご用^{よう}どころか、つま
 らぬ人^{にん}間^{げん}を玩^{おも}具^{ちや}にして、どんなに悪^{いた}戯^{ずら}をするか知^しれませぬ。
 そんなのは私^{わたくし}としても勿^{もちろ}論^ん大^{だい}嫌^{いき}いで、皆^{みな}様^{さま}も成^なるべくそん
 な悪^{あく}性^{せい}の天^{てん}狗^ぐにはかかり合^あわれぬことを心^{こころ}から願^{ねが}い致^{いた}します。
 が、困^{こま}ったことに、私^{わたくし}どもがこちらから人^{にん}間^{げん}の世^せ界^{かい}を覗^{のぞ}きます
 と、つまらぬ野^の天^{てん}狗^ぐの捕^{とり}虜^こになつている方^{かた}々^{がた}が随^{ずい}分^{ぶん}沢^{たく}山^{さん}居^お
 られますようで……。大^{おお}きなお世^せ話^わかは存^{ぞん}じませぬが、私^{わたくし}は蔭^{かげ}な
 がら皆^{みな}様^{さま}の為^{ため}に心^{こころ}を痛^{いた}めて居^おるのでございます。くれぐれも
 天^{てん}狗^ぐとお交^{つき}際^{あい}になるなら、できるだけ強^{つよ}い、正^{ただ}しい、立^り派^{っぱ}な天^て
 狗^ぐをお選^{えら}びなさいませ。まごころから神^{かみ}様^{さま}にお願^{ねが}いすれば、き
 っとすぐれたのをお世^せ話^わして下^{くだ}さるものと存^{ぞん}じます……。

四十四、天狗の性来

さてこの天狗てんぐと申すものの性来せいらい——これはどこまで行つても
 私わたくしどもには一つひとの大きな謎なぞで、查しらべれば查しらべるほど腑ふに落ちなく
 なるようなところがございます。兎とも角かく、私わたくしがあの時とき、天狗てんぐの頭か
 目しらに就ついて問といたしたところに基もとづき、ざつとそのお話しはなしを致いたし
 て見みることにしましょう。

先まず天狗てんぐの姿すがたから申もうし上げましよう。前まえにものべた通り、天狗てんぐ
 は時ときと場合ばあいで、人にんげん間げんその他たいろいろなもの姿すがたに上じようず手に化ばけ
 ます。かく申もうす私わたくしなども最さいしよ初しよはうっかりその手てに乗のせられまし

たもので……。しかし近頃ではもうそんな拙な真似はいたしません。天狗がどんな立派な姿に化けていても、すぐその正体を看破してしまいます。大体に於て申しますと、天狗の正体は人間よりは少し大きく、そして人間よりは寧ろ獸に似て居り、普通全身が毛だらけでございます。天狗の中のごくごく上等のもののみが人間に近い姿をして居りますようで……。但しこれは姿のある天狗に就いて申したのでございます。天狗の中には姿を有たないのもございます。それは青味がかった丸い魂で、直径は三寸位でございましょうか。現に私も天狗界の修行場に居った時にも、三つ四つ樹の枝にひっついて光つて居りました。

『あれはモーすつかり修しゆぎ行ようが積つんで、姿すがたを棄すてた天狗達てんぐたちでござる……。』

天狗てんぐの頭目かしらはそう私わたくしに説明せつめいしてくれました。

天狗てんぐの姿すがたも不思議ふしぎでございますが、その生立おいたちは一層不思議ふしぎで

ございます。天狗てんぐには別べつに両親りやうしんというものがなく、人間にんげんが

地上ちじように発生はっせいした、遠い遠い原始時代げんしじだいに、斯うこいうものも必ひつず

要うであろうという神様かみさまの思召おもほしめしで言いわば一種しゆの副産物ふくさんぶつと

して生うれたものだと申もうすこととでございます。天狗てんぐの頭目かしらも『自じぶん

分達たちは人間にんげんになり切きれなかつた魂たましいでござる……。』と、あつ

さり告白こくはくして居おりました。私わたくしはそれをきいた時ときに、何なにやら天狗てんぐ

さんたいに對たいして氣きの毒どくに感かんじられたのでございました。

とかくこ てつづ うま
 兎も角も斯んな手続きで生れたのでございますから、天狗とい
 うものは全部中 性……つまり男性でも、又女性でもない
 のでございます。これでは天狗の氣持が容易に人間にのみ込め
 ない筈でございます。人間の世界は、主 従、親子、夫婦、
 きようだい 兄弟、姉妹等の複雑った關係で、色とりどりの綾模様
 を織り出して居りますが、天狗の世界はそれに引きかえて、どん
 なにも一本調子、又どんなにも殺風景なことでございまして
 う。天狗の生活に比べたら、女人禁制の禪寺、男子禁
 制の尼寺の生活でも、まだどんなにも人情味たつぷりな
 ものがありましょう。『全く不思議な世界があればあるもの……
 』私はつくづくそう感じたのでございました。

斯かく天狗てんぐは本来ほんらい中ちゆう性せいではありますが、しかし性質せいしつから
 いえば、非常ひじょうに男らしく武張ぶばうつたのと、又非常またひじょうに女らしく優や
 さしいのとの区別くべつがあり、化ばる姿すがたもそれに準じゆんじて、或あるいおとこは男になつ
 たり、或あるいおんなは女になつたりするとのことでございます。日本にっぽんと申もう
 くにこらいしようぶくのきしようとくにがらく柄がらである為ため、武芸ぶげい、偵て
 察さつ、戦争いくさの駆引かけひき等とうにすぐれた、つまり男性的だんせい的てきの天狗てんぐさんは
 殆ほとんど全部ぜんぶこの国くにに集あつまつて了しまい、いざとなれば目覚めざましい働はたらきを
 してくれまですので、その点大てんたいそう結構けつこうでございますが、ただ愛あい
 とか、慈悲じひとか言いつたような、優やさしい女性じよせい式しきの天狗てんぐは、あま
 りこの国くにには現あらわれず、大部分だいぶぶん外国がいこくの方ほうへ行いつて了しまっている
 ようでございます。西洋せいようの人ひとが申もうす天使てんし——あれにはいろいろ

等差とうさがあり、偶たまには高こう級きゆうの自然靈しぜんれいを指さしている場合ばあいもあり
ますが、しかしちよいちよい病びよう床しょうに現あらわれたとか、画家えかきの眼め
に映うつったとかいうのは、大たいてい女性化じよせいした天狗てんぐさんのようでご
ざいます。

大だい体たい天狗てんぐの働はたらきはそう大おおきいものではないらしく、普通ふつうは人
間んげんに憑かかつて小こ手先てさききの仕し事ごとをするのが何なにより得とく意いだと申もうすこと
でございます。偶たまには局きよく部ぶ的てきの風かぜ位くらいは起おこせても、大おおきな自
然ぜん現象げんしょうは大たい抵たい皆みな竜りゆう神じんさんの受うけ持もちにかかり、とても天
狗てんぐにはその真ま似ねがでまできないと申もうすこととでございます。

最後さいごに私わたしがあときの天狗てんぐさんの頭目かしらからきかされた、人ひと浚さらいの
秘伝ひでんをおつたえして置おきましよう。

『ひとさら
人を浚う』

ほんとう

にできるものでございますか？』

わたくしたず
そう私が訊ねますと、

てんぐ

天狗の頭目はいとど

得意の面持で、

おももち

斯こ

んな風に

せつめい
説明して

くれたのでした。

――

『あれは本
ほんとう
当といえ

ば本
ほんとう
当、ゴマ

カシといえ
ばゴマカシで

ざる。われわれは肉体ぐるみ人間を遠方へ連れて行くことは

めつたにござらぬ。

にくたい
肉体は通

例附近の

もりかげ
森蔭や

やしろ
神社の

ゆかした
床下な

どに隠し置き、

かく
ただ引き

ひぬ
抽いた

たましい
魂のみを

えんぼう
遠方に

つだ
連れ出

すもので

ござる。

にんげん
人間とい

うものは案

あんがい
外感

にぶ
じの鈍い

もので、自

が体から出たり、

からだ
入つたり

はい
することに

き
気づかず、

たましい
魂のみで

けいけん
経験

したことを、

あた
宛かも

にくたい
肉体ぐる

み実地に

けんぶん
見聞した

ように勘違

して、得意になつて居るもので……。

わき
側で

それを見るのはよほど

滑稽な感じがするものでござる……。』

四十五、竜神の修行場

天狗界の探検に引きつづいて、私は指導役のお爺さんから、竜神の修行場の探検を命ぜられました。――

『いつかは竜宮界への道すがら、ちよつと竜神の修行場をのぞかしたこともあるが、あれではあまりにあっけなかつた。もう一度汝を彼所へ連れて行くでしょう。あの修行場にはひとりの老練な監督者が居るから、不審の点は何なりとそれについて訊ねるがよい。』

『そのお方も矢張り竜神さんでございますか……。』

『無論そうじゃ。が、俺と同様、人間と面会する時は人間の姿に化けて居る……。』

一度行つたことのある境地でございますから、道中の見

物は一切ヌキにして、私達は一と思いに、あのものすべ

い竜神の湖水の辺へ出て了いました。こちらの世界では遅く

ある、速く歩くも、すべて自分の勝手に、そこはまことに便利

でございます。

と見ると、水辺の、とある巨大な巖の上には六十前後と見ゆ

る、一人の老人が、佇んで私達の来るのを待つて居りました。

服装その他大体は私の案内役のお爺さんに似たり寄つた

り、ただいくらか肉附にくづきがよく、年輩ねんばいも二つ三つ若いように見え
ました。それが監督かんとくの竜りゅうじん 神さんであることはここに断ことわ
までもありますまい。

一応簡単おうかんたんな挨拶あいさつを済すませてから、私は早速右の監督かんとくの
お爺じいさんに話はなしかけました。――

『修行場しゆぎようばの模様もようはいつか拝見はいけんさせて戴いたきましたので、今日きようは
むしろ竜りゅうじん 神さんの生活せいかつにつきて、いろいろ腑ふに落おちかねる
点てんを伺うかがいたいののでございますが……。』

『何なになりと訊たずねて貰もらいます。研究けんきゆうの為ためとあれば、俺わしの方ほうで
もそのつもりで、差支さしかえなき限り何なにも彼かも打ち明あけて話はなすこと
にしましょう。竜りゅうじん 神せかいの世界にんげんかいは人間界だいふとは大分かに勝手かつてが異ちがう

から、訊く方でも成るべくまごつかぬように……。』

あつさりときばけた態度で、そう言われましたので、私の方でもすつかり安心して、思い浮ぶまま無遠慮にいろいろな事をおききました、その時の問答の全部をここでお伝えする訳にもまいり兼ねますが、ただあなた方の御参考になりそうな箇所は、成るべく洩なく拾い出しましょう。

問『竜神の子供は現在でも矢張り生れているのでござい
すか?』

答『人間の世界で子供が生れるように、こちらでもズンズン殖

えます……。』

問『生れたての若い竜神の軀はどんな軀でございますか?』

答『別べつに變かわつた軀からだでもないが、しかし人間にんげんからいえばつまり一

の幽ゆう体たい、もちろん肉にく眼がんで見みることはできぬ。大おおききは普ふ通つう三

尺じやくもあろうか……

しかし伸しん縮しゆくは自由じゆう自在じざいであるから、言いわ

ば大おおききが有あつて無ないようなものじゃ……。』

問『蛇へびとは何どう異ちがいますか？』

答『蛇へびはもともと地ち上じやうの下かき級ゆう動どう物ぶつ、形かたちも、性せい質しつも、資し格かく

も竜りゆう神じんとは全まったく別べつ物ものじゃ。蛇へびがいかに功こう勞ろう経かうたところ

で竜りゆう神じんにななれる訳わけのものでない……。』

問『竜りゆう神じんさんは矢やは張はり人にん間げんの御ご先せん祖ぞなのでございますか？』

答『左さ様やう、先せん祖ぞといいええば先せん祖ぞであるが、寧むしろ人にん間げんの遠えん祖そ、人にんげ

間んの創つくり造ぬし者しと言いつたがよいであらう。つまり竜りゆう神じんがそ

のまま人間にんげんに変化へんげしたのではない。竜りゅうじん神じんがその分ぶん霊れいを

地上ちじょうに降くだして、ここに人類じんるいという、一つひとの新あたらしい生物いきもの

をつくり出したのじゃ。』

問『只今ただいまでも竜りゅうじん神じんさんはそう言いったお仕事しごとをなさいますか

？』

答『イヤこれは最初さいしよ人類じんるいを創造つくり出す時ときの、ごく遠とおい大古たいこの

神業かみわざであつて、今日こんにちでは最早もはやその必要ひつようはなくなつた。そ

なたも知しるとおり人間にんげんの男女だんじよは立派りつぱに人間にんげんの子こを生うんで居い

るであらうが……。』

そう言いつてお爺じいさんはにつこりともせず、正しょう面めんから私わたくしに鋭とど

い一瞥いちべつを与あたえられました。

四十六、竜神の生活

わたくし
私はひるまず質問をつづけました。――

問『竜神にも人間のように死ぬことがございますか？』

答『人間界にて考えているような、所謂死というものはもち

ろんない。あれは物質の世界のみに起る、一つのうるさい手

つづき
続なのじゃ。――が、竜神の軀にも一つの変化が起るの

は事実である。そなたも知る蛇の脱殻――丁度あれに似た

うすうす
薄い薄い皮が、竜神の軀から脱けて落ちるのじゃ。竜

神は通例しツとりした沼地のような所でその皮を脱ぎすて

る……。』

問『竜りゅうじん 神じんさんの分ぶん霊れいが人体じんたいに宿やどることは、今日きょうでは絶ぜった

対たいに無いなのでございますか？』

答『竜りゅうじん 神じんの分ぶん霊れいが直接ちよくせ人体じんたいに宿やどつて、人間にんげんとして生うま

るということは絶ぜつ対たいにないと言いつてよい……。が、一人ひとりの幼お

児こが母胎ぼたいに宿やどつた時ときに、同一どういつ系統けいとうの竜りゅうじん 神じんがその幼お

児この守護しゅご霊れい又は司配しはい霊れいとして働はたらくことは決して珍めづらしい

ことでもない。それが竜りゅうじん 神じんとして大たい切せつな修しゆぎ業ぎやうのひと一つ

でもあるのじや……。』

問『竜りゅうじん 神じんにも成せい年ねん期きがございますか。』

答『それはある。竜りゅうじん 神じんとて修しゆぎ行ぎやうを積つまねば一人いちにん前まえには

なれない……。』

問『大体だいたい成年せいねん期きは何歳いくつぐらい位くらいでございますか？』

答『これはいかにも無理むりな質問しつもんじゃ。本来ほんらいこちらの世界せかいに年ねん

齡いはないのじゃから……。が、人間にんげんの年齡ねんれいに直なおして見たら、

はつきりとは判わからぬが、凡およそそ五六百年ねんぐらい位くらいのところであろう

か……。』

問『矢張やはり人間にんげんのように婚こん礼れいの式しきなどもございますもので：

……。』

答『人間界にんげんかいの儀式ぎしきとは異ちがうが、矢張やはり夫婦めおとになる時ときには定きまつ

た礼儀れいぎがあり、そして上うえの竜神りゆうじん様さまからのお指図さしずを受ける：

……。』

問 『矢張り一夫一婦が規則でございますか？』

答 『無論それが規則じゃ。修行の積んだ、高い竜神とな

れば、決してこの規律に背くようなことはせぬ。しかし乍ら靈格の低い竜神の間にはそののみも言われぬ節がある……

。』

問 『生れるのは矢張り一体づつでございますか？』

答 『一体が普通じゃ、双生児などはめつたにない……。』

問 『お産ということもありますもので……。』

答 『妊娠する以上お産もある。その際、女性の竜神は

大抵どこかに姿を隠すもので……。』

問 『一對の夫婦の間に生れる子供の数はどれ位でございましょう

か？』

答『それは判らぬ。通例よほど沢山で、幾人と勘定は

しかねるのじや。』

問『年齢を取れば矢張り子供を生まぬようになるものでございま

すか？』

答『年齢を取るからではない、浄化するから子供を生まぬよう

になるのじや……。』

問『浄化したのと、浄化しないのとの区別は、何うして見分

けられますか？ 矢張り色でございますか？』

答『左様、色で一番よく判る。最初生れたての竜神は皆茶

ツぽい色をして居る。その次ぎは黒、その黒味が次第に薄れて

けしずみいろ 消炭色になり、そして蒼味あおみが加くわつて来る。そなたも知る通とお

り、多く見受ける 竜りゅうじん 神は大たいてい蒼黒あおくろい色いろをして居おるであ

ろうが……。それが一段向だんこうじょう 上うすると浅黄あさぎ色いろになり、更さらに

又向またこうじょう 上うすると、あらゆる色いろが薄うすらいで了しまつて、何なんともいえ

ぬ神々こうごうしい純白じゆんぱく 色いろになつて来る。白はくりゆう 竜りゅう になるのに

は大たいへんな修しゆぎ行よう、大たいへんな年ねん代だいを重かさねねばならぬ……。』

問『夫婦めおとになるのは大たいていどの辺へんの色いろでございますか？』

答『色いろには抛よらぬ。黒くろは黒同くろどう志しで夫婦めおとになり、そしていつまで

経たつても黒くろが脱ぬけないのも少すくくない……。』

問『男女だんじよの区別くべつは主おもに何処どこで判わかりますか？』

答『角つのが一番ばんの目標めじるじや。角つののあるのは男おとこ、角つののないのは女おんな……

。』

問 『夫婦めおとの竜りゅうじん神しんは矢張り同棲どうせいするものでございますか？』

答 『竜りゅうじん神しんにとりて、一いつ緒しよに棲すむ、棲すまぬは問題もんだいでない。

竜りゅうじん神しんの生活せいかつは自由自在じゆうじざい、人間にんげんのように少しも場所ばしょなど

には縛しばられない。』

問 『生うまれたばかりの子供こどもは何どうして居おりまするか？』

答 『しばらくは母親ははおやの手元てもとに置おかれるが、やがて修業場しゆぎやうばの方ほう

で引取ひきとるのじや。』

問 『何どういふ訳わけで池いけを修行場しゆぎやうばにしてあるのでございますか？』

答 『池いけは一種しゆの行場ぎやうばじや。人間界にんげんかいの御禊みそぎと同おなじく、水みずで浄きよめ

られる意味いみにもなつて居いるのでナ……。』

四十七、竜神の受持

へだ
 いか^{たず}に訊ねても訊ねても、竜^{りゆうじん}神^{しん}の生^{せい}活^{かつ}は何^{なに}やら薄^{うす}い幕^{まく}を
 隔^{へだ}てたよう^{うとうなが}で、シツクリとは腑^ふに落^おちない個^こ所^{ところ}がございます。相^そ
 当^{うとうなが}長^あい間^{いだ}こち^せらの世^{かい}界^{かい}に住^すんで居^いる私^{わたくし}達^{たち}ですらそう感^{かん}ずる
 のでございますから、現^{げん}世^せの方^{かた}々^{がた}として^なは尚^な更^{さら}のこ^よで、容^{よう}
 易^{うい}に竜^{りゆうじん}神^{しん}の存^{そん}在^{ざい}が信^{しん}じ^{しん}られない筈^{はず}だとお察^{さつ}し^{さつ}することがで
 きます。――と申^{もう}して竜^{りゆうじん}神^{しん}さん^{しん}の物^{もの}語^{がたり}を握^{にぎ}りつ^{にぎ}ぶせば、
 私^{わたくし}として虚^{うそ}欺^その通^{つう}信^{しん}を送^{おく}ることになり、それ^きも氣^きがとがめてな
 りませぬ。で、皆^{みな}さまの信^{しん}ずる、信^{しん}じないはしば^{べつ}らく別^{べつ}として、

もう少し私がその時監督のお爺さんからきかされたところを物もののがた語らせていただきます。――

問『竜りゅうじん 神じんさんのお仕事しごとというのは大体だいたいどんなものでござい
ますか?』

答『竜りゅうじん 神じんの受持うけもちはなかなか大きく、広ひろく、そして複雑ふくざつで、
とてもそのすべてを語りつくすことはできぬ。ごく大まかに言い
つたら、人間にんげんの世界せかいで天然現象てんねんげんしょうと称となえて居いるものは、悉ことごと
く竜りゅうじん 神じんの受持うけもちであると思おもえばよいであろう。すべて竜りゅう
神じんには竜りゅうじん 神じんとしての神聖しんせいな任務つとめがあり、それが直ちよくせ
接つ人間界にんげんかいの利益ためになろうが、なるまいが、どうあつても遂すい
行こうせねばならぬことになっている。風雨ふうう、寒暑かんしょ、五穀こくの豊ほう

きよう

凶、ありとあらゆる天変地異……それ等の根抵には悉く竜

うじんかい

神界の氣息がかかつて居るのじゃ……。』

うぶすなのかみ

ほか

ごさいしん

みなりゆうじんさま

問『産土神その他の御祭神は皆竜神様でございますか？』

おくかた いず

りゆうじん

かた

答『奥の方は何れも竜神で固めてある……。』

がいこく

うぶすな

問『外国にも産土はあるのでございますか？』

むろんがいこく

ただ外国には

がいこく

うぶすな やしろ

答『無論外国にもある。ただ外国には産土の社がないまで

のこじや。

うぶすな

かみ

の神があつて、

せいし

疾病、

しよしゆ

さ

いなんとう

しゆご

あた

産土の神があつて、

せいし

疾病、

しよしゆ

さ

難等の守護に

あた

あつてくれればこそ、

ちじよう

地上の人間は初めて

ちじよう

にんげん

はじ

はじ

その日その日の生活が営めるのじや。』

ひ

ひ

せい

いかつ

いとな

のじや。

』

問『各神社には竜神様の外にもいろいろ眷族があるので

かくじんじや

りゆうじんさま

の外にも

ほか

いろいろ

けんぞく

があるの

で

ございますか？』

答『むろん沢山たくさんの眷族けんぞくがある。人霊じんれい、天狗てんぐ、動物霊どうぶつれい……

ひつよう 必要ひつように應じていろいろ揃そろえてある……。』

問『産土神うぶすなのかみは皆男おとこの神様かみさまでございますか？』

答『産土うぶすなの主宰神しゅさいしんは悉ことごとく男性だんせいに限かぎるようじゃ。しかし幼児ようじ

の保姆ほほなどにはよく女性じよせいの人霊じんれいが使つかわれるようで……。』

問『仏教ぶつぎようの信者しんじやなどは死後しごど何うなるのでございますか？』

答『いかなる教おしえしんを信じても産土うぶすなの神かみの司配しはいを受うけることに変かわり

はないが、ただ仏ほとけの救すくいを信じ切きつて居るものは、その迷夢まよいの

覚さめるまで、しばらく仏教ぶつぎようの僧侶そうりよなどに監督かんとくを任まかせる

こともある。——イヤしかしそなたの質問とひは大分だいぶん俺わしの領分りやうぶん

外の事柄ことがらに亘わたつて来きた。産土うぶすなのことなら、俺わしよりもそな

たの指導しどう役やくの方が詳ほうしいであらう。俺わしには成なるべく竜神りゅうじんの修行場しゅぎやうばのことだけ訊きいてもらいたいのじゃが……。』

問『ツイいろいろの事ことをお訊たずねして相済あいすまぬことでございました。実は平生じつ へいせい指導役しどうやくのお爺様じいさまからも、いろいろ承うけたまわつて居おるの
でございしますが、何なにやら腑ふに落ちかねるところもありますの
で、丁度ちやうど良い折おりと考かんがえて念ねんを押おして見たみたような次第しだいで……。』

答『それも悪いわるとは申もうさぬが、しかし一升しやうの櫛くしには一升しやうの分ぶん
量うしか入はいらぬ道理どうりで、そなたの器量うつつわ おおが大きくならぬ限り、い
かにあせつてもすべてが腑ふに落ちるといふ訳わけには参まいらぬ。今日きやう
はしばらくこの辺へんでとどめて置いては何どうじゃナ?』

問『又またとないよい機おり会かいでございますから、最もう一つ二つ訊たずねさせ

ていただき度うございます。——あの弁財天と申上げ

るのは、あれは皆女性の竜神様でございますか?』

答『その通り……。神に祀られている以上、何れも皆立派に修

ゆぎよう

行の積める女神ばかりで、土地の守護もなされば、又人

間の願事も、それが正しいことであれば、飲んで協えて

くださる……。』

問『水天宮と申すのも矢張り……。』

答『あれは海上を守護される竜神……。』

問『最後にもう一つ伺わせて戴きます。あなた様はどんなお身分

の御方で……。』

答『俺か……。俺は妻もなく、又子もなく永久に独身の老い

たる 竜神^{りゅうじん} じゃ……。竜神^{りゅうじん} の中^{なか}には斯^こう言^いつた変^{かわ}り者^{もの}も
 時^{とき}としてないではない。現^{げん}にそなたの指^し導^{どう}役^{やく}の老^{ろう}人^{じん}なども
 やは^{やは}わし^{わし}のお仲^{なか}間^まじゃ。——どりゃ一^お応^う修^{しゆ}行^{ぎやう}場^{ばう}の^お見^みり^{まわ}をす
 矢張^{やば}り俺^{わし}のお仲^{なか}間^まじゃ。——どりゃ一^お応^う修^{しゆ}行^{ぎやう}場^{ばう}の^お見^みり^{まわ}をす
 ると致^{いた}そう。今日^{きよう}はこれまで……。』
 言^いいも終^{おわ}らずこの白^{びやく}衣^いの老^{ろう}人^{じん}の姿^{すがた}はスーッ^{こすい}と湖^こ水^{すい}の底^{そこ}に幻^{まほろし}
 のように消^きえて行^ゆきました。

四十八、妖精の世界

竜神^{りゅうじん}界^{かい}、天^{てん}狗^ぐ界^{かい}と、まるきり人^{にん}間^{げん}には見^{けん}当^{とう}のとれそう
 もない、別^{べつ}世^せ界^{かい}のお話^{はなし}を致^{いた}した序^{ついで}に、一^{ひと}つ思^{おも}い切^きつてもつと

見^{けん}当^{とう}のとれない或^ある世界^{せかい}の物^{もの}語^{がたり}をさせていただきましょう。
 外^{ほか}でもない、それは妖精^{ようせい}の世界^{せかい}のお話^{はなし}でございます。
 『研究^{けんきゅう}の爲^{ため}に汝^{そち}に見^みせてやらねばならぬ不思議^{ふしぎ}な世界^{せかい}がまだ残^{のこ}っている。』と、或^ある日^ひ指導^{しどう}役^{やく}のお爺^{じい}さんが私^{わたくし}に申^{もう}されま
 した。『人間^{にんげん}は草^{くさ}や木^きをただ草^{くさ}や木^きとのみ考^{かん}えるから、矢鱈^{やたら}に
 花^{はな}を撈^{むし}つたり、枝^{えだ}を折^おつたり、甚^{はなは}だしく心^{こころ}なき真似^{まね}をするのであ
 るが、実^{じつ}を言^いうと、草^{くさ}にも木^きにも皆精^{みなせい}……つまり魂^{たましい}があるのじや。
 精^{せい}があればこそあんなにも生^{せい}を楽^{たの}しみ、あんなにも美^{うつく}しい姿態^{すがた}を
 造^{つく}りて、限^{かぎ}りなく子孫^{しそん}を伝^{つた}えて行^ゆくのじや。今日^{きょう}は汝^{そち}を右^{みぎ}の妖^{よう}
 精^{せい}達^{たち}に引^ひき合^あわせてやるから、成^なるべく無邪氣^{むじゃき}な氣持^{きもち}で、彼等^{かれら}
 に逢^あつてもらいたい。妖精^{ようせい}というものは姿^{すがた}も可^{かわい}愛^{あい}らしく、心^{こころ}も

稚く、少しくこちらで敵意でも示すと、皆怖がつて何所とも知れ
 ず姿を消して了う。人間界で妖精の姿を見る者が、大てい無
 邪気な小児に限るのもその故じや。今日の見物は天狗界や
 竜神界の大きかりな探検とはよほど勝手が異うぞ……。』
 斯んな事を話してくれながら、お爺さんは私を促して山の修
 行場を出掛けたと思うと、そのまま一気に途中を飛び越して、
 忽ち一望眼も遥かなる、広い広い野原に出て了いました。見れば
 そこら中が、きれいな草地で、そして恰好の良いさまざまの樹
 草……松、梅、竹、その他があちこちに点綴して居るのでし
 た。

『ここは妖精の見物には詭向きの場所じや。大ていの種

類ゆゑいが揃そろつて居いるであらう。よく氣きをつけて見みるがよい。』

そう注ちゆう意いされて居いる中うちに、もう私わたくしの眼めには蝶ちよう々ちようのような

羽は翼ねをつけた、大おおきさはやつと二三寸ずんから三四寸すん位の、可愛かわいら

しい小こ人びとの群むれがちらちら映うつつて来きたのでした。

『まあ何なんという不思議ふしぎな世界せかいがあればあつたものでございまして

う！』と私わたくしはわれを忘わすれて、夢むちゆう中うちになつて叫さけびました。『お爺じい

さま、彼所あそこに見みゆる十五、六歳位さいらいの少しょう女じよは何なんと品位ひんの良よい様よう

子うすをして居いることとでございましょう。衣裳いしやうも白しろ、羽根はねも白しろ、そ

して白しろい紐ひもで額ひたいに鉢巻はちまきをして居おります……。あれは何なんの精せいでござ

いますか？』

『あれは梅うめの精せいじや。若木わかきの梅うめであるから、その精せいも矢張やはり少しょう

女の姿すがたをして居いる……。』

『木の精せいでも矢張り年とし齡せいをとりまするか？』

『年とし齡せいをとるのは妖精ようせいも人間にんげんも同どう一いつじや。老木ろうぼくの精せいは、形かたちは小さくとも、矢張り老ろう人じんの姿すがたをして居いる……。』

『そして矢張り男女やにんじよの区別くべつがありまするか？』

『無論男女むろなんじよの区別くべつがあつて、夫婦生活ふうふせいを営いむのじや……。』

『そう言いつて居うちる中なに、件くだんの梅うめの精せいは、しばらく私わたくし達たちの方ほうを珍めづらしそうに眺ながめて居いましたが、こちらに害意がいがないと知しつて安あ心しんしたもののか、やがてスーッと、丁度蜻蛉ちやうどとんぼのように、空そらを横よ切きつて、私の足元わたくしあしもとに飛とび来きたり、その無邪気むじやきな、朗ほがらかな顔かおに笑えみを湛たたえて、下したから私わたくしを見上みあげるのでした。』

不^ふ図^と氣^きがついて見^みると、その小^こ人^{びと}の躰^{からだ}中^{ちゆう}から発^{はつ}散^{さん}する、何^{なん}ともい^いえぬ高^{こう}尚^{しよう}な香^{にお}氣^い！ 私^{わたくし}はいっしかうつとりしてしま^{しま}いました。

『もしも梅^{うめ}の精^{せい}さん、あなたは何^{なん}とまあ良^よい香^{にお}を立てていなさるのです……。』

そう言^いいながら、私^{わたくし}は成^なるべく先^む方^{こう}を驚^{おどろ}かさないうちに、徐^{しず}かに腰^{こし}を降^{おろ}して、この可^{かわ}愛^いい少^{しょう}女^{じょ}とさし向^むいになりました。

四十九、梅の精

梅うめの精せいは思おもいの外ほかわるびれた様子ようすもなく、私わたくしの顔かおをしげしげ凝み視つめて佇たつて居おります。

『梅うめの精せいさん、あなた、お年とし齡れいはおいくつでございます?』
 生せい前ぜんの癖くせで、私わたくしは真ま先ききにそんことな事きを訊きいて了しまいました。

『年とし齡れい? わたしそんなものは存ぞんじませぬ……。』

梅うめの精せいは銀ぎんの鈴すずのようこえなきれいな声こえで、そう答こたえてキョトンと

しました。

私わたくしは自分じぶんながら拙へたなことを訊きいたとすぐ後こう悔かいしましたが、し
 かしこれで妖よう精せいとすらすら談話はなしのできるこわかが判わかつて、嬉うれしく
 てなりませんでわたくしした。私わたくしはつづいて、いろいろ話はなしかけました。

『ホンに、あなた^{がた}方に年齢^{とし}などはない筈^{はず}でございました……。でもあなた^{がた}方にも矢張り、両^{りょう}親^{しん}もあれば兄^{きょうだい}妹^いもあるのでしようね?』

『私^{わたくし}のお母^かアさまは、それはそれはやさしい、良いお母^かアさまでございます……。兄^{きょうだい}妹^いは、あんまり沢^{たく}山^{さん}で数^{かず}が分^{わか}りませぬ……。』

『あなたはよく怖^{こわ}がらずに、私^{わたくし}の所^{ところ}へ来^きてくれましたね。』

『でも姨^{おば}さまは私^{わたくし}を可愛^{かわい}がつてくださいますもの……。』

『可愛^{かわい}がつてくれる人^{ひと}と、くれない人^{ひと}とが判^{わか}りますか?』

『はつきり判^{わか}ります。私^{わたくし}達^{たち}は氣^きの荒^あらい、惨^{むご}い人^{にんげん}間^が大^{だい}嫌^き

いでございます。そんな人^{にんげん}間^{かん}だと私^{わたくし}達^{たち}は決^{けつ}して姿^{すがた}を見

せませぬ。だつて、格別かくべつ用事ようじもないのに、折角せつかく私達わたくしたちが咲

かした花はなを枝えだごと折おつたり、何かなにするのですもの……。』

そう言いつて、梅うめの精せいはそのきれいな眉まゆに八はちの字じを寄よせましたが、
私わたくしにはそれが却かえつて可愛かわいらしくてなりませんでした。

『でも、人間にんげんは、この枝振えだぶりが氣きに入いらないなどと言いつて、時とき

々きどほさみ鋏はさみでチョンチョン枝えだを摘つむことがあるでしょう。そんな時ときに
あなた方がたは矢張やはり腹はらが立たちますか？』

『別べつに腹はらが立たちもしませぬ……。枝振えだぶりを直なおす為ために伐きるのと、
悪いたずら戲きで伐きるのとは、氣持きもちがすつかり異ちがいます。私達わたくしたちにはそ

の氣持きもちがよく判わかるのです……。』

『では花瓶かびんに活いける為ために枝えだを伐きられても、あなた方がたはそう氣きま

ずくは思おもわないでしよう?』

『それは思おもいませぬ……。私わたくしたち達こころを心かわいから可愛かわいがつてくださる

人間にんげんに枝えだの一本ほんや二本ほん飲のんでさしあげます……。』

『果実みを採とられる気持きもちも同じおなじですか?』

『私わたくしたち達たんせいが丹精つくして作つくったものが、少すこしでも人間にんげんのお役やくに

立たつと思おもえば、却かえつてうれしうございます……。』

『木きによつては、根元ねもとから伐り倒たおされる場合ばあいもありますが、その

時ときあなた方がたは何どうなさる?』

『そりやよい気持きもちは致いたしませぬ。しかし伐きられるものを、私わたくし

達たちの力ちからで何どうすることもできませぬ。すぐあきらめて、木きが倒たお

れる瞬しゅん間かんにそこを立たちのいて了しまいます……。』

『あなた方がたの中なかにも、人間にんげんが好きなものと嫌きらいなもの、又性またせい質しつのさびしいものと陽気ようきなものと、いろいろ相違そういがあるでしよ

うね?』

『それは様々さまざまでございます。中なかには随分ずいぶんひねくれた、氣むつかしい性質たちのものがあ、り、どうかすると人間にんげんを目的めの仇かたきに致いたします……。』

何なんと申もうしましても、人間にんげんと妖精ようせいとは、距離きよりが大分だいぶんかけ離はなれていて、談話はなしがしつくりと腑ふに落ちないところもございしますが、それでも、こうしている中うちに、幾分いくぶんか先方むこうの心こころ持もちが呑み込のこめたように思おもわれてまいりました。それから私わたくしはよきほどに梅うめの精せいとの対話はなしを切り上あげ、他ほかの妖精達ようせいたちの査しらべにかかりましたが、

人間にんげんから観みれば何いずれも大同小異だいどうしょういの妖あやしい小人こびとというのみで、
 一々こま細かいことは判わかりかねました。標本みほんとして私わたくしはそれ等らの中で
 少すこし毛色けいろの異かわつたものの人相書にんそうがきを申もうしあ上げて置おくことにいたし
 ましよう。

梅うめの精せいの次つぎに私わたくしが目めをとめたのは、松まつの精せいで、男松おまつは男おとの姿すがた、
 女松めまつは女おんなの姿すがた、どちらも中ちゅう年ねん者しやでございしました。梅うめの精せいより
 かも遙はるかに威嚴いげんがあり、何所どこやらどつしりと、きかぬ氣き性しょうを具そな
 えているようでございました。しかし、その大おおきは矢張やはり五寸許ごすんかり、
 蒼味あおみがかった茶ちやっぽい唐服からふくを着きて、そしてきれいな羽根はねを生はや
 して居いるのでした。

松まつや梅うめの精せいに比くらべると竹たけの精せいはずつと瘦やせぎすで、何なにやら少すこし貧ひ

相そうらしく見みえましたが、しかし性せい質しつはこれが一番ばん穏おと和なしいよ
うでございました。で、若もし松しょう竹ちく梅ばいと三さんつ並ならべて見みたら、強つよ
いのと弱よわいのとの両りょう極きよく端たんが松まつと竹たけとで、梅うめはその中ちゆう間かん
に位くらいして居いるようでございます。

それから堇すみれ、蒲たん公ぽ英きき、桔き梗きよう、女おみ郎なえし花きく、菊きく……一ねん年せい生くの草
花さばなの精せいは、何いずれも皆みな小こ供どもの姿すがたをしたものばかり、形なり態ごがらは小こ柄がらで、
眼めのさめるような色いろ模も樣ようの衣い裳しようをつけて居おりました。それ等らが
大おおきな群むれを作つくつて、大おお空ぞら狭せましと乱みだれ飛とぶところは、とて地ち小じよ
上うでは見みられぬ光あり景さまでございます。中なかでどれが一ばん番ばんきれいかと
仰おつしやるか……さあ草くさ花ばなの精せいの中なかでは矢や張はり菊きくの精せいが一ばん品ひん
位んがよく、一ばん巾げんをきかしているようでございました……。

五十、銀杏の精

ひととおのはら
一と通り野原の妖精見物を済ませますと、指導役のお爺
さんは、私に向つて言われました。――

『この辺に見掛ける妖精達は概して皆年齢の若いものばかり、
性質も無邪気で、一向多愛もないが、同じ妖精でも、五百年、
千年と功労経たものになると、なかなか思慮分別もあり、う
っかりするとへたな人間は敵わぬことになる。例えばあの鎌
倉八幡宮の社頭の大銀杏の精――あれなどはよほど老成
なものじゃ……。』

『お爺さま、あの 大銀杏おおいちようならば私も生前わたくしせいぜんによく存ぞんじて居おります。何どうぞこれからあそこへお連れ下くださいませ……。一度どその大銀杏おおいちようの精せいと申もうすのに逢あつて置おき度とうございます。』

『承知しょうち致いたした。すぐ出掛でかけると致いたそう……。』

どこを何どう通過つうかしたか、途中とちゆうは少しも判わかりませぬが、私わたくし

達たちは忽たちまちあの懐なつかしい鎌倉かまくら八幡宮はちまんぐうの社前しゃぜんに着つきました。

巾はばの広い石段いしだん、丹塗にぬりの楼門ろうもん、群むらがる鳩はとの群むれ、それからあの大きな瘤こぶだらけの銀杏いちようの老木ろうぼく……チラとこちらから覗のぞいた光ありさ

景まは、昔むかしとさしたる相違そういもないように見受みうけられました。

私わたくし達たちは一応参拜おうさんはいを済すませてから、直ただちに目的もくてきの銀杏いちよう

の樹きに近寄ちかよりますと、早はやくもそれと氣きづいたか、白茶色しろちやいろの衣いしよ

の樹きに近寄ちかよりますと、早はやくもそれと氣きづいたか、白茶色しろちやいろの衣いしよ

裳うをつけた一人ひとりの妖精ようせいが木蔭こかげから歩み出あゆいで、私達わたくしたちに近ちかづ
 きました。身みの丈たけは七八寸すん、肩かたには例れいの透とう明めいな羽根はねをはやして居お
 りましたが、しかしよくよく見れば顔かおは七十余あまりの老人ろうじんの顔かおで、
 そして手てに一条じようの杖つえをついて居おりました。私わたくしは一と目見めて、これ
 が銀杏いちようの精せいだと感かんづきました。
 『今日きようはわざわざこれなる女性じよせいを連つれて来きました。』と指し導どう
 役くのお爺じいさんは老妖精ろうようせいに挨拶あいさつしました。『御手数おてかずでも、何なに
 かと教おしえてあげてください……。』

『ようこそ御出おいでください。』と老妖精ろうようせいは笑顔えがおわたくしむか
 くれました。『そなたは氣きづかなかつたであらうが、実じつはそなた
 がまだ可愛かわいらしい少女しょうじよ姿すがたでこの八幡宮はちまんぐうへ御詣おまいりなされた当時とうじか

ら、俺わしはようそなたを存ぞんじて居おる……。人間にんげんの世界せかいと申もうすものは瞬またたく間まに移うつり変かわれど、俺わしなどは幾いく年ねん経たつても元もとのままじや：

…。

枯かれた、落おち附ついた調ちよう子しでそう言いつて、老おいたる妖よう精せいはつくづくと私わたくしの顔かおを打うちまもるのでございました。私わたくしも何なにやら昔むか馴しな染じみの老ろう人じんにでもめぐり逢あつたような氣きがして、懷なつかしさが胸むねにこみ上あげて来くるのでした。

老ろう妖よう精せいは一層そうしんみりとした調ちよう子しで、談はなし話わをつづけました。『実じつを申もうすと俺わしはこの八幡宮はちまんぐうよりもつと古ふるく、元もとはここからさして遠とおくもない、とある山さん中ちゆうに住すんで居いたのじや。然しかるに
ある年とし八幡宮はちまんぐうがこの鶴つる岡がに勸かん請じようされるにつけ、その神し

んぼく 木として、俺が数ある銀杏の中から選び出され、ここに移し
 植えられることになったのじゃ。それから数えてももうずいぶん
 つきひの星霜が積つたであらう。一たん神木となつてからは、勿体
 なくもこの通り幹の周圍に注連縄が張りまわされ、誰一人手さ
 え触れようとせぬ。中には八幡宮を拝むと同時に俺に向つて手
 を合わせて拝むものさえもある……。これと申すも皆神様の御
 かご加護、お蔭で他所の銀杏とは異なり、何年経ても枝も枯れず、
 みき幹も朽ちず、日本国中で無類の神木として、今もこの通り
 さか栄えて居るような次第じゃ。』
 『長い歲月の間には随分いろいろの事を御覧になられたでござ
 いましよう……。』

『それは覽みました……。そなたも知らるる通り、この鎌倉かまくらと申もうすところは、幾度いくどとなく激はげしい合戦かつせんの巷ちまたとなり、時にはこの銀杏ぎんぎょうの下で、御神前ごしんぜんをも憚はばからぬ一人ひとりの無法者むほうものが、時の将軍しやうぐんに對して刃傷沙汰にんじようさたに及んだ事こともある……。そうした場合ばあい、人間にんげんというものはさてさて惨いむごことをするものじやと、俺わしはどんなに歎なげいたことであらう……。』

『でもよくこの銀杏ぎんぎょうの樹きに暴行ぼうこうを加えるものがなかったもの
でございます……。』

『それは神木しんぼくである御蔭おかげじや。俺わしの外ほかにこの銀杏ぎんぎょうには神様かみさま
の御眷族ごけんぞくが多数おおぜい附ついて居おられる。若もしいささかでもこれに暴行ぼうこう
を加えようものなら、立所たちどころに神罰しんばつが降くだるであらう。こ

ここで非命に斃れた、かの実朝公なども、今はこの樹に憑つて、
 守護に當つて居られる……。イヤ丁度良い機会じゃ。そなたも
 一応それ等の方々にお目にかかるがよいであろう。何れも爰に
 お揃いになつて居られる……。』
 そう言われて驚いて振り返つて見ると、甲冑を附けた武
 將達だの、高級の天狗様だのが、数人樹の下に佇みて、
 笑顔で私達の様子を見守つて居られました。中でも強く私
 の眼を惹いたのは、世にも気高い、若々しい実朝公のお姿で
 した……。

×

×

×

×

さなきだに不思議な妖精界の探検に、こんな意外の景物までも添えられ、心から驚き入ることのみ多かつた故か、その日わたしはいつに無く疲労を覚え、夢見心地でやつと修行場へ引き上げたことでもございました。

五十一、第三の修行場

わたくしやま私の山の修行は随分長くつづきましたが、やがて又この修行場にも別れを告ぐべき時節がまいりました。『汝の修行もここで一段落ついたようじゃ。これから別の修行場へ連れてまいる……。』

或る日指導役のお爺さんからそう言い渡されましたが、実を
 いうと私の方でも近頃はそろそろ山に倦が来きて、どこぞ別の
 ところへ移つて見たいような気分がして居たのでございました。
 私は二つ返事でお爺さんの言葉に従いました。
 引越しは例によつて至極お手軽でございました。私が自身で持
 参したのはただ母の形見の守刀だけで、いざ出発と決つ
 た瞬間に、今まで住んで居た小屋も、器具類もすうつと消え
 失せ、その跡には早くも青々とした蘇苔が隙間なく蒸して居る
 のでした。何があつけないと申して、斯んなあつけない仕事はめ
 ったにあるものでなく、相当幽界の生活に慣れた私でさえ、
 いささか物足りなさを感ぜない訳にもまいりませんでした。

が、お爺さんの方では、何処に風が吹くと言った面持で、振り向きもせず、ずんずん先きへ立つて歩るき出されたので、私も黙つてその後あとに跟着ついてまいりますと、いつしか道が下り坂になり、くねくねした九十九折をあちらへ繞り、こちらへまわつている中に、何所ともなくすぎまじい水音が響いてまいりました。

『お爺さま、あれは瀑布の音でございますか？』

『そうじゃ。今度の修行場はあの瀑布のすぐ傍にあるのじゃ。』

『まあ瀑布の修行場……。どんなに結構なところでございましょう。私も、何所か水のある所で修行したいような気分になつて居りました。』

『それだから今度の瀑布の修行場となつたのじゃ。汝も知る通

り、こちらの世界の掟にはめつたに無理なところはない……。』

そう話合っている中に、いつしか私達は飛沫を立てて流る

る、二間ばかりの溪流のほとりに立っていました。右も左も削

つたような高い崖、そこら中には見上げるような常盤木が茂つて

居り、いかにもしつとりと気分の落ちついた場所でした。

不図気がついて見ると、下方を流る溪流の上手は十間余りの

懸崖になつて居り、そこに巾さが二三間ぐらいの大きな瀑布が、

ゴーツとばかりすさまじい音を立てて、木の葉がくれに白布を懸

けて居りました。

私はどこに一点の申分なき、四辺の清浄な景色に見惚

れて、覚えず感歎の声を放ちましたが、しかしとりわけ私を驚

かせたのは、瀑壺たきつぼから四五間けんほど隔へだてた、とある平坦な崖地がけちの
 上に、私が先刻まで住すんでいた、あの白木造りの小屋こやがいつの
 間まにか移うつされて居たことでした。

『まあ斯こんなところに……。』

わたくしあき

私は呆さけれてそう叫さけびましたが、しかしお爺じいさんは例れいによつてそ
 んな事は当然だと言いつた風情ふぜいで、ニコリともせず斯こう言いわれるの
 でした。――

『これから汝そちはここでみつしり修しゆぎよう行ぎやうするのじゃ。俺わしはこれで
 帰かえる……。』

言ういはが早いはやか、お爺じいさんの白衣びやくいの姿すがたはぷいと烟けむりのように消きえ
 て、私わたくしはただひとりポツネンと、この閑かんじやく寂じやくな景色けしきの中なかに取り

残のこされました。

五十二、瀑布の白竜

たった一人ひとりで、そんな山奥やまおくの瀑布たきつぼの辺へりに暮くらすことになつて、さびしくはなかつたかと仰おつしやるか……。ちつともさびしいだの、気味きみがわるいだのといふことはございませぬ。そんな気持ちきもちに襲おそわれるのは死しんでから間まのない、何も判わからぬ時分じぶんのこと、少しこちらで修しゆぎ行ようがつんでまいりますと、自分の身辺しんぺんはいつも神様かみさまの有難ありがたい御力おちからに衛まもられてゐるような感じかんがして、何所どこに行いつても安心あんしんして居おられるのでございます。しかも今度こんどの私わたくしの

修行場しゆぎやうばは、山やまの修行場しゆぎやうばよりも一段格だんかくの高い浄地じやうちで、そこには大たいそうお立派りっぱな一体たいの竜神様りゆうじんさまが鎮しずまつて居おられたのでした。ある時とき私わたしが一心いつしんに統一とういつの修行しゆぎやうをして居おりますと、誰だれか背後うしろの方ほうで私わたしの名なを呼よぶものがあるのです。『指導役しどうやくのお爺じいさんかしら……。』そう思おもつて不図振ふとふりかえて見みると、そこには六十前後ぜんごと見みゆる、すぐれて品位ひんのよい、凛々りりしいお顔かおの、白衣びやくいの老人ろうじんが黒くろつぽい靴くつを穿はいて佇たたずんでいました。私わたしは一目見めて、これはきつと貴い神かみさまだとさとり、丁寧ていねいに御挨拶ごあいさつを致いたしました。それがつまりこの瀑布たきの白はく竜りゆうさまなのでございました。『俺わしは古ふるくからこの瀑布たきを預あずかつて居おる老人としよりの竜神りゆうじんじゃが、此度縁このたびえんあつて汝そなたを手元てもとに預あずかることになつて甚だ歓はなばしい。一

度汝に逢つて置かうと思つて、今日はわざわざ老人の姿に化けて
出現てまいった。人間と談話をするのに、竜体ではちと対照
が悪いのでな……。』

そう言つて私の顔を見て微笑れました。私はこんな立派な神
様が時々姿を現わして親切に教えてくださるかと思うと、
忝ないやら、心強いやら、自ずと涙がにじみ出ました。――

『これからは何卒よしなに御指導くださいますよう……。』

『俺の力量に及ぶことなら何なりと申出るがよい。すでに竜
宮界からも、そなたの爲めによく取計らえとのお指図じゃ。
遠慮なく訊きたいことを訊いてもらいたい。』

親身になつていろいろとやさしく言われますので、私の方でも

すつかり安心あんしんして、勿もつ体たいないとは思おもいつつも、いつしか懇意こんいな叔父おじさまとでも対座たいざしているような、打解うちとけた気分きぶんになつて了しまいました。

『あの大たいそう無ぶ駄だなことを伺うかがいますが、あなた様さまはよほど永ながくここにお住居すまいでございますか。』

『さア人間界にんげんかいの年数ねんすうに直なおしたら何年位なんねんぐらいになろうかな……。』
と老竜神ろうりゅうじんはにこにこし乍ながら『少すくく見積みつつても三万位まんねんぐらいにはなるであらうかな。』

『三万位まんねん！』と私わたくしはびつくりして、『その間あいだには随分ずいぶんいろいろの変かわつた事件じけんが起おこつたでございましょう……。』

『もともとこちらの世界せかいのことであるから、さまで変かわつた事件ことも

起おこらぬ。最さい初しよここへ参まいつた時ときに蒼あお黒くろかつた俺わしの軀からだがいつの間まにか白しろく変かわつた位くらいのものじや。その中うち俺わしの真ほん実とうの姿すがたを汝そなたに見みせて上あげるとしよ……。」

『それは何時いつでございましょうか。只今ただいますぐおがに拝いたまして戴ただきと
う存ぞんじまするが……。』

『イヤすぐという訳わけにはまいらぬ。汝そなたの修しゆぎ行ようがもう少すこし積つんで、これならばと思おもわれる時ときに見みせるとしよ。』

その時ときはそんな対話はなしをした丈だけでお分わかれしましたが、私わたくしとしては
一時ときも早はやくこの瀑布たきの竜神りゆうじん様さまの本体ほんたいを拝おがみたいばかりに、
それからというものは、一心しん不ふ乱らんに精せい神しん統とう一いつの修しゆぎ行ようをつ
づけました。又場所またばしよが場所ばしよ丈だけに、近頃ちかごろの統とう一いつ状じよう態たいは以前いぜん

よりもずっと深く、ずっと混りなくなつたように自分にも感じられました。

それからどれ位経つた時でございましょうか、ある日俄かに私の眼の前に、一道の光明がさながら洪水のように、どっと押し寄せてまいりました。一たんは、はっと愕きましたが、それが何かのお通報であらうと気がついて心を落ちつけますと、つづいて瀑布の方向に當つて、耳がつぶれるばかりの異様の物音がひびきます。

私は直ちに統一を止めて、急いで滝壺の上に走り出て見ますと、果してそこには一体の白竜……爛々と輝く両眼、すつくと突き出された二本の大きな角、銀をあざむく鱗、鋒を植

えたような沢山の牙……胴の周囲は二尺位、身長は三間余り
 ……そう言った大きな、神々しいお姿が、どつと落ち来る飛沫
 を全身に浴びつつ、いかにも悠々たる態度で、巖角を伝わ
 って、上へ上へと攀じ登って行かれる……。
 眼のあたり、斯うした莊嚴無比の光景に接した私は、感極
 りて言葉も出でず、覚えず両手を合わせて、その場に立ち尽し
 たこととでございました。
 わたくしさえいくたび私に前にも幾度か竜体を目撃して居りますが、この時
 ほど間近く見、この時ほど立派なお姿を拝んだことはございませ
 ぬ。その時の光景はとても私の拙い言葉で尽すことはできません。
 どうぞしか
 何卒然るべくお察しをお願いします……。

五十三、雨の竜神

瀑布たきの修行場しゆぎやうばでは、私が実際わたくしじつさい瀑布たきにかかったかと仰おつしやるか……。かかりは致いたしませぬ。私はただ瀑布たきの音おとに溶とけ込むようにして、心を鎮しずめて坐すわつて居いたままで、そうすると何なんともいえずぬ無我むがの境さかいに誘さそれて行き、雑念ざつねんなどは少しもきざしませぬ。肉にく体いのある者ものには水みづに打うたれるのも或あるいは結構けつこうでございました。が、私わたくしどもにはあまりその効能ききめがないようで……。又指導役またしどうやくのお爺さんじいも『瀑布たきにはかからんでも、その気分きぶんになればそれでよい……。』とのお言葉ことばでございました。

或あの日私わたくしが統一とういつの修しゆぎ行ように疲つかれて、瀑たきつぽ壺とこの所ところへ出でてぼんやり水みづを眺ながめて居おりますと、ここの竜神りゆうじんさま様が、又またもや例れいの白び衣やくい姿すがたで、白木しらきの長ながい杖つえをつきながら、ひよつくり私の傍わたくしそばへお現あらわれになりました。

『丁度ちやうどよい機おり会かいであるから、汝そなたを上うへの山やまへ連つれて行いつて、一ひとつ大たいへんに面おも白しろいものを見みせて上あげようと思おもうが……。』

『面おも白しろいものと言いつてそれは何なんでございますか?』

『自分じぶんについて来くれば判わかる。汝そなたは折角せつかく修しゆぎ行ようの為ためにここへ

寄越よこされているのであるから、この際さいで可たけな彼かを見聞けんぶんして

置おくがよいであらう……。』

もとより拒こばむべき筋合すじあいのものでございませぬから、私わたくしは早さつ

くみじたく
速身支度してこの親切な、老いたる竜神さんの後について出掛けることになりました。

瀑布の右手にくねくねと附いている狭い山道、私達はそれをば上へ上へと登って行きました。見るとその辺は老木がぎっしり茂っている、ごくごく淋しい深山で、そして不思議に山彦のよく響く処でございました。漸く山林地帯を抜けると、そこは最う山の頂辺で、芝草が一面に生えて居り、相当に見晴しのきくところでございました。

『実は今日ここで汝に雨降りの実況を見せるつもりなのじゃ。と申して別に俺が直接にやるのではない。雨には雨の受持がある

……。』

そう言つて瀑布のお爺さんは、眼を閉じてちよつと黙禱をな
 さいましたが、間もなくゴーツという音がして、それがあちこち
 の山々にこだまして、ややしばらく音が止みませんでした。
 と見ると、向うに一人の若い男子の姿が現われました。年の頃
 は三十許、身には丸味がかつた袖の浅黄の衣服を着け、そして膝
 の辺でくくつた、矢張り浅黄色の袴を穿き、足は草履に足袋と
 言つた、甚だ身軽な扮装でした。頭髪は茶筌に結つていまし
 た。

『これは雨の竜神さんが化けて来たのに相違ない……。』
 と目見た時に私はすぐそう感づきました。不思議なもので、いつ
 覚えたともなく、その頃の私にはそれ位の見わけがつくのでした。

お爺じいさんは言葉ことば少なすくに私わたくしをこの若者わかものに引き合あわせた上うへで、
 『今日きょうは御苦勞ごくろうであるが、俺わしのところの修行者しゆぎようじやに一つ雨あめを降ふ
 らせる実じつ況きようを見みせて貰もらいたいのじやが……。』

『承知しょうち致いたしました。』

わかものこころよひう　　直ただちにその準備したくにかかりました。尤もつとも
 若者わかものは快く引き受うけ、直ただちにその準備したくにかかりました。尤もつとも
 準備したくと言いつても別べつにそううるさい手続てつづきのあるのでも何でもござ
 いませぬ。ただ上うへの神界しんかいに真ま心ごころこめて祈願きがんする丈だけで、その祈き
 願がんが叶かなえば神界しんかいから雨あめを賜たまはることのようでございます。つま
 り自然界しぜんかいの仕事しごとは幾段いくだんにも奥おくがあり、いかに係かかりの竜神りゆうじん
 さんでも、御自分ごじぶんの力ちからのみで勝手かつてに雨あめを降ふらしたり、風かぜを起おこした
 りはできないようでございます。

それはさて措き、年の若い雨の竜 神さんは、瀑布の竜

神さんと一緒になつて、口の中で何か唱えごとをしながら、や

やしばらく祈願をこめていました、それが終ると同時に、ぷい

とその姿を消しました。

『あれは今 竜 体に戻つたのじゃ。』とお爺さんが説明して

くれました。『竜 体に戻らぬと仕事が出来ぬので……。そ

の中直に始まるであらうから、しばらくここで待つがよい。』

そんなことを言っている中にも、何やら通信があるらしく、

お爺さんはしきりに首肯いて居られます。

『何か 差 支でも起きたのでございますか？』

『いやそうではない。実は神界から、雨を降らせるに就いては、

どうじかみなりほう
同時に雷の方も見せてやれとお達しが参つたのじゃ。それで今
その手筈てはずをしているところ……。」
『まあ雷かみなりでございますか……。是非ぜひそれも見せて戴いたき度うござい
ます……。』

五十四、雷雨問答

それから間まもなく、私わたくしは随分ずいぶんと激はげしい雷雨らいうの实じつ況きやうを見せ
て戴いたいたのでございですが、外観がいかんからいえばそれは現世げんせで目
撃きした雷雨らいうの光景こうけいとさしたる相違そういもないのでした。先まず遙はるか
向むかの深山みやまでゴロゴロという音おとがして、同時に眼めも眩くらむばかりの

稲妻が光る。その中、空が真暗くなつて、あたりの山々が篠突くような猛雨の為に白く包まれる……ただそれきりのことに過ぎませぬ。

が、内容からいえば、それは現世ではとても思いもよらぬような、不思議な、そして物凄い光景なのでございました。

『雨雲の中をよく見るがよい。眼を離してはならぬ。』

お爺さんからそう注意されるまでもなく、私はもう先刻から一心不乱に深い統一に入つて、黒雲の中を睨みつめて居たのですが、たちまち一体の竜神の雄姿がそこに鮮かに見出されました。私は思わず叫びました。

『あれあれ薄い鼠色の男の竜神さんが、大きな口を開け

て、二本の角を振り立てて、雲の中をひどい勢で駆けて行かれる……。』

『それが先刻爰に見えた、あの若者なのじゃ。』

『あれ、向うの峰を掠めて、白い、大きな竜神さんが、眼に

もとまらぬ迅速さで横に飛んで行かれる……あの凄い眼の色……。』

『それが雷の竜神の一人じゃ。力量はこの方が一段も二段も

上じや……。』

『あれ、雨の竜神さんが、こちらを向いて、何やら相図をし

て向うの方に飛んで行かれます……。』

『それは、そろそろ雨を切上げる相図をしているのじゃ。もう間

もなく雨も雷も止むであらう……。』

はた
果して間もなく雷雨は、拭うが如く止み、山の上は晴れた、穏
かな最初の景色に戻りました。私は夢から覚めたような気分で、
しばらくは言葉もきけませんでした。

ややありて私は瀑布の竜神さんに向い、今日見せられた事
とがら
柄に就いていろいろお訊ねしましたが、いかに訊ねても訊ねて
も矢張り私の器だけのことしか判る筈もなく、従つてあまり御
参考にもならぬかと存じますが、兎も角その時の問答の一部
をお伝えして置きます。――

問『雨を降らすのと、雷を起すのでは、いつもその受持が異
うのでございますか？』

答『それは無論そうじゃ。俺達の世界にもそれぞれ受持があ

る……。』

問『どのような手続きで、あんな雨や雷が起るのでございますか？』

答『さあそれは甚だ六ヶ《むずか》しい……。ひと口に言つて了

へば念力じゃが、むろんただそう言つたのみでは足らぬ。天

地の間にはそこに動かすことのできぬ自然の法則があり、竜

神でも、人間でも、その法則に背いては何事もできぬ。

念力は無論大切で、念力なしには小雨一つ降らせること

もできぬが、しかしその念力は、何は措いても自然の法則に

協うことが肝要じゃ。先刻雨を降らせるにつきても、俺達

第一に神界のお許しを受けたのはそこじゃ。大きな仕事にな

ればなるほど、ますます奥が深くなる。俺達は言わば神と人

との中間の一つの活きた道具じゃ……。』

問『先刻の雨と雷とは、何れもお一人づつで行られたお仕事でござ

いましたか？』

答『雨の方はただ一人の竜神の仕事じやった。汝一人の為め

に降らせたまでの俄雨であるから、従つてその仕掛もごく

小さい……。が、雷の方はあれで二人がかりじや。こればかり

は、いかなる場合にも二人は要る。一方は火竜、他方は水

竜——つまり陽と陰との別な働きが加わるから、そこに初め

てあの雷鳴だの、稲妻だのが起るので、雨に比べると、こ

の仕事の方が遥かに手数がかかるのじや……。』

五十五、母の訪れ

わたくしたき しゆぎようば 私が滝の修行場へ滞在した期間はさして長くもなかった上
 に、あそこは言わば精神統一の特別の行場でございました
 たので、これはと言つて特に申上げるほどの面白い出来事も
 ございませぬ。わたくし 私はあの滝の音をききながら、いつもその音の中
 に溶けこむような気分きぶんで、自分の存在じぶんも忘れて、うつとりとして
 いることが多いのでございました。お蔭様かげさまでそうした修行しゆぎよう
 の結果、私の統一は以前にましてずっと深まり、物を視るにも、
 あれから大へんに楽になつたように、自分にも感じられてまいり

ました。こちらの世界へ来ててもすべては修行次第で、呑気に遊んでいたのでは、決して力量がつくものではないようでございます。実をいうと私などは、可なり執着も強く、しかも自分ではなるべく呑気に構えていたい方なのですが、魂の因縁と申しましようか、上の神様からのお指図で、いつも一つの修行から次ぎの修行へと追ひ立てられてまいりましたために、やつと人並になれたのでございます。考えて見ると随分お恥かしい次第で……。

それはそうと滝の修行中にも、一つ二つの思い出の種子がない訳でもございませぬ。その一つは私の母がわざわざ訪ねて来てくれたことで、それが帰幽後に於ける母子の最初の対面

でございました。

この対面たいめんにつきては前まえ以て指導役のお爺さんじいからちよつと前触さきふれがありました。『汝そちの母人ははびとも近頃ちかごろは漸くようや修行しゆぎようが

積つんで、外出そとでも自由じゆうにできるようになったので、是非一度汝ぜひ どそちに逢あ

わそうかと思つてゐる。何れ近い内いず ちか うちにこちらに見えるであらう：

。』——私わたくしはそれをきいた時は嬉うれしきで胸むねが一ぱいでございます

した。そして母ははに逢あつたらこれも語かたろう、あれも訊ききたいと、生せ

前死後いぜんしごにかけての積つもり積つもれるさまさまの事件じけんが、丁度嵐ちようどあらしのよ

うに私の頭脳わたくしあたまの中に、一度どに押し寄よせて来たのでした。

それにつけても私の眼わたくしめに特とくに力ちからづよ強く浮うかび出いでたのは、前まえに

も申上げた、母ははの臨終りんじゆうの光景ありさまでした。あの見る影みかげもなく、

老いさらばえる面影、あの断末魔のはげしい苦悶、あの肉
 体と幽体とをつなぐ無気味な二本の白い紐、それからあの臨
 終の床の辺をとりまいた現幽両界の多くの人達の集り
 ……。私はその當時を憶い出して、覚え涙に暮れつつも、近
 訪れるこちらの世界の母がどんな様子をしていられるかを、あれ
 か、これかと際限もなく想像するのです。
 すると、それから間もなく、森閑と鎮まり返った私の修行
 場の庭に、何やら人の訪れる気配がしましたので、不図振り向
 いて見ると、それは一人の指導役の老人に導かれた、私のな
 つかしい母親なのでした。

『お母さま!!』

『姫!!』
ひめ

双方から馳せ寄った二人は互に縋りついて了いました。

現在の母の様子は、臨終の時の様子とはびっくりするほ

ど変つて了い、顔もすっかり朗かになり、年齢もたしかに十歳ば

かり若返つて居りました。母の方でも私が諸磯の佗住居に

くすぼり返つていた時に比べて、あまりに若々しく、あまりに

元気らしいのを見て、自分の事のように心から飲んでくれました。

『これほどあなたが立派な修行を積んでいるとは思わなかつ

た。あなたの体からは丁度神さまのように光明が射します……

。』

そんなことを言いながら、右から左からしげしげと私の姿を見

まもるのでした。これも生みの母なればこそ、と思えば、自ずと
 先立つものは涙でございました。

不図気がついて見ると、庭先まで案内の労を執ってください
 った母の指導役のお爺さんは、いつの間にやら姿を消して、す
 べてを私達母子の為すところに任せられたのでした。

五十六、つきせぬ物語り

逢った上は心行くまましんみりと語り合おうと待ち構えてい
 たのですが、さていよいよ斯うして母と膝を突き合わせて見ると、
 ひたぶるに胸が迫るばかりで、思つて居ることの十が一も言葉に

出でず、ともすれば泣きたくなつて仕方がないのでした。

『こんなことでは余りにみつともない。今日は面白く語り合

ねばならぬ……。』

わたくししょうけんめい

私は一生懸命、成るべく涙を見せぬように努めました。が、そ

ははほう

れは母の方でも同様で、そつと涙を拭いては笑顔でかれこれと

はなし

談話をつづけるのでした。

ところとう

『あなたはこちらでどんな境地を通つて来たのですか？』母は真

つさ

先きにそう訊ねました。『最初からここではないようにきいて

たず

居りますが……。』

わたくし

『私はこちらで修行場が三度ほどかわりました。最初は岩屋

しゆぎようば

の修行場、そこはなかなか永うございました。その次ぎが山の

なが

つやま

修行場しゅぎやうば、その時代じだいに竜宮界りゆうぐうかいその他たいろいろの珍めづらしい所ところへ連れて行ゆかれ、又良人またおととをはじめ多くの人達ひとたちにも逢あわせていただきました。現在げんざいこの滝たきの修行場しゅぎやうばへ移うつてからはまだ幾いくらにもなりません……。」

『あなたはまあ何なんという結構けつこうな事ばかりして来こられたことでしよう!!』と母ははは心こころから感心かんしんしました。『この母ははなどは岩屋いわやの修行しゅぎやうだの、山やまの修行しゅぎやうだのと、そんな変かわつたことはただの一ひとつもして来きはしません。まして竜宮界りゆうぐうかいなどと言いつては夢ゆめにだつて見みたこともない……。あなたはたしかに特別とくべつの御用ごようを有もつて生うまれた人ひとに相違そういない……。私わたくしの指導役しどうやくの神かみさまもそんなことを言いつて居おられました……。』

『まさかそうでもございますまいが……。』

『イヤたしかにそうです。いつか時節じせつが来たら、あなたにはきつ
 と何ぞ大事なんだいじのお仕事しごとが授けられますよ。何うぞそのつもりで、今こんご
 後もしつかり修しゆぎやう行ぎやうに精せいを出してください。母などは、他の多ほかおほ
 くの人達ひとたちと同じく、こちらに参まいつてから、産土神様うぶすなのかみさまのお手て
 元もとで、ある一室しつを宛あてがわれ、そこで静しずかに修しゆぎやう行ぎやうをつづけて
 いるだけなのです……。』

『父上ちちうえとは御一緒ごしよではございせんか。』

『一緒しよではありませぬ。現世げんせに居いた時分じぶんは、夫婦ふうふは同じ場所おなばしょに行ゆ
 かれるものかと考かんがえて居おりましたが、こちらへ来きて見みると同棲どうせい
 などと思おもいも寄よりませぬ。魂みたまの関かんけい係けいとやらで、良人おっとは良人おっと、妻つま

は妻と、チャーンと区別がついているのです。もつとも私達
 の境涯でも逢おうと思えばいつでも逢われ、対話をしよう
 おも思えばいつでも対話はできますが……。斯んなことをいうとあな
 たから笑われるか知れませぬが、私は一度指導役の神様に向
 い、あまり心細いから、せめて良人とだけは一緒に住ませ
 て戴きたいと、お願いしたことがあるのです。それでも神様は
 何うあつても私の願いをおきき入れになつてくだらないので、
 その時の私の力落しと云つたらなかつたものです。私は今で
 も時々はいつの時代になつたら、夫婦、親子、兄弟が昔の
 ように楽しく同居することができるのかしらと思われてなりま
 せぬ。あなたにはそんなことがないのですか？』

『ないでもございませぬが、近頃ちかごろ統一とういつが深くふかなつた為ためめか、
 だんだんそうした考かんがえが薄うすらいでまいりました。相そう当とうに修しゆぎ行うが積つんだら、一しよ緒すに棲すむとか、棲すまないとか申もうすことは、さ
 して苦く勞ろうにならないようになつて了しまうのではありませんか。竜り
 宮ゆうぐう界かいの上うえの神かみ様さま達たちの御ご様よう子すを見みても、いふつふも夫ふう婦ふ親おや子こが同ど
 棲うせいして居おられることへいぜいはないようべつべつでござはたらいます。それぞごようれ御用ごようが
 異ちがうので、平へい生せいは別べつ々べつになつてお働はたらきになり、偶たまにしか御一ごしよ緒
 になつて、お寛くわんぎ遊あそばすことがないと申もうします……。』
 『神かみ様さまでも矢張やはりそうなのでござはいますかね……。そうして見み
 るとこの母ははなどはまだ現世げんせの執しゆう着やくが多た分ぶんに残のこつていわける訳わけで、これ
 からはあなたにあやかり、余あまり愚痴ぐちは申もうさぬことに氣きをつけまし

よう。きよう今日は本ほん当とうによいことを伺うかいました。あなたがそんなにまで修しゆぎ行ぎやうが出来たのを見ると、私は心こころからうれしい……。』
 そう言いながらも母ははの眼めには、涙なみだが一つぱい溜たまつて居いるのでした。

五十七、有難い親心

それから訊たずねらるるままに、私わたくしは母ははに向むかつて、帰幽きゆうご後ごこちらの世せ界かいで見聞けんぶんしたくさぐさの物もの語がたりを致いたしましたが、いつも一室しつに閉とじこもつて、単調たんちようなその日ひその日ひを送おくつて居おる母ははにとりては、一々びつくりすることのみ多おほいらしいのでした。最後さいごに

私が、最近滝の竜神さんの本体を拝ましていただいた話を致しますと、母の愕きは頂点に達しました。

『私はこちらの世界へ来て居りながら、ただの一度もまだ竜神さんの御本体を拝ましていただいたことがない。今日はあ

なたを訪れた紀念に、是非こちらの竜神さまにお目通りをしたい。あなたから篤とお依みしてくださらぬか……。』

これには私もいささか当惑してしまいました。果して滝の竜神さんが快く母の依みを諾いてくださるか何うか、私にもまったく見当がとれないのでした。

『とも角も、私から折入ってお願ひして見ることにいたしました。う。しばらくお待ちくださいませ……。』

わたくしたんしんたきつぼ
私は單身瀑壺の側を通つて上のお宮に詣で、母の願望をか

なえさせてくださるようお依みました。

滝の竜 神さんはいつものように老人の姿でお現われにな

り、微笑を浮べて斯う言われるのでした。――

『汝達の談話はよう俺にも聴えて居ました。人間の母子の情

愛と申すものは、大てい皆あつたものらしく、俺達の世

界のようになかなかあつさりはして居らん。それで汝の母人

は、今日爰へ来た序に俺の本体を見物して、それを土産に持

つて帰りたいということのようであるが、これは少々困つた

注文じゃ。俺の方で勿体ぶる訳ではないが、汝の母人の

修行の程度では、俺がいかに見せたいと思つてもまだとても

まともに俺の姿を見ることができぬのじや……。が、折角の依
 みとあつて見れば何とか便宜を図つて上げずばなるまい。兎も角
 ははびと たちつぽ
 も母人を瀑壺のところへ連れてまいるがよからう……。』
 わたくし さつそく しゆきようば はは たちつぽ ほとり つだ
 私は早速修行場から母を瀑壺の辺に連れ出しました。そ
 ふたり りようて あわ しん きがん
 して二人で、両手を合せて一心に祈願をこめて居りますと、や
 さかおと おく たき しふき なか けんらい しろ
 がてどつと逆落しに落ち来る滝の飛沫の中に、二間位の白い女
 よせい りゆうじん や すがた あら
 性の竜神の優さしい姿が現われて、巖角を伝つてすーッ
 うえ き さ
 と上方に消え去りました。

『あれは俺の子供の一人じやが……。』

そう言われて、驚いて振りかえると、滝の竜神さんが、い
 ろうじん すがた
 つもの老人の姿で、にこにこしながら、私達の背後に来て、

佇^{たたず}んで居^おられるのでした。

わたくしあつ きよう 私は厚く今日のお礼^{れい}をのべて母^{はは}を引き合^ひわせました。 竜神^{りゅうじん}

さんはいとど優^{やさ}さしく、いろいろと母^{はは}を労^{いた}わってくださいましたので、母^{はは}もすっかり安^{あん}心^{しん}して、丁度^{ちやうど}現世^{げんせ}でするように私^{わたくし}の身^みの上^{うへ}を懇^{こん}々とお依^{たの}みするのですた。

『不束^{ふつつか}な娘^{むすめ}でございますが、何^どうぞ今^{こん}後^ごとも宜^{よろ}しうお導^{みちび}きくださいますよう……。さぞ何^{なに}かとお世^せ話^わが焼^やけることでございまして……。』

『イヤあなたは良^よいお子^こさんを有^もたれて、大^{たい}へんにお幸^{しあ}福^{わせ}じや。』 竜神^{りゅうじん} 神^{じん}さんというよりもむしろ人^{にん}間^{げん}らしい挨拶^{あいさつ}ぶり。『近頃^{ちかごろ}は大分^{だいぶん}修^{しゆ}行^{ぎやう}も積^つまれてもう一^ひと息^{いき}というところじや。』

人間にんげんには執着しゅうやくが強いので、それを棄すてるのがなかなかの苦勞くろう、

ここまで来るくのには決して生なまやさしい事ことではない……。』

『これから先さきは娘むすめは何どういう風ふうになるのでございますか。まだ他ほかにもいろいろ修しゆぎ行ようがあるのでございましょうか？』

『イヤそろそろ修しゆぎ行ように一段落だんらくつくところじゃ。本人ほんにんが生せいぜんと前大いぜんたいへんに氣きに入いった海辺うみべがあるので、これからそこへ落付おちつかせることになつて居おる……。』

『左様さようでございますか。どんなに本人ほんにんにとりまして満足まんぞくなことでございましょう。』と母ははは自分じぶんのことよりも、私わたくしの前途ぜんとにつきて心こころを遣つかつてくれるのでした。『それについては、私わたくしがあまりたびたび訪ねたずねるのは、却かえつて修しゆぎ行ようの邪魔じゃまになりましようから、

成るべく自分の住所を離れずに、ただ折々の消息をきいて
 楽しむことに致しましょう。その内折を見てこの娘の良人なりと
 訪ねさせていただき度うございます。そうすれば修行をする
 にも何んなに張合いがあることでございましょう……。』
 『イヤそれはもうしばらく待つてもらいたい。』と滝の竜神
 さんはあわて気味に母を制しました。『あの人にはあの人として
 の仕事があり、めいめい為ることが異なります。良人を招ぶのは海
 辺の修行場へ移つてからのことじゃ……。』
 『矢張りそんな訳のものでございますか……。私どもにはこちら
 の世界のことがまだよくのみ込めないのです、ときどき飛んだ失
 策をいたします。何分神様の方で宜しきように……。』

『その点は何うぞ安心なさるやうに……。ではこれでお別れします。』

滝の竜神さんがプイと姿を消し、それと入れ代りに母の指導役のお爺さんが早速姿を現わしましたので、母は名残惜しげに、それでも大して泪も見せず、間もなく別れを告げて帰り行きました。

『矢張り生みの母は有難い……。』

見送る私の眼からはこらへこらへた溜涙が一度に滝のやうに流れました。

五十八、可憐な少女

はは 母に逢つてからの私は、しばらくの間気分が何となく落つかず、
 とういつ 統一の修行をやつて見ても、ツイふらふらと鎌倉で過し
 むすめじだい ありさまめ なかうか みた処女時代の光景を眼の中に浮べて見るようなことが多いのでし
 た。『こんなことでは本当の修行にも何にもなりはしない。
 きば 気晴らしに少し戸外へ出て見ましよう……。』とうとう私は單身
 たき しゆぎようば で 滝の修行場を出かけ、足のまにまに、谷川を伝つて、下方
 した おもて へ下方へと降りて行きました。
 おもて やは おもて 戸外は矢張り戸外らしく、私は直に何ともいえぬ朗かな氣持に
 なりました。それに一步一步と川の兩岸がのんびりと開けて
 ゆき、そこら中にはきれいな野生の花が、所せきまで咲き匂つて

いるのです。『まあ見事な百合の花……。』私は覚えさずそう叫んで、巖間から首をさし出していた半開の姫百合を手折り、小娘のように頭髮に挿したりしました。

わたくし私がそうした無邪気な乙女心に戻っている最中でした、ふとあたりひとけはい不図附近に人の気配がするのに気がついて、愕いて振り返って見ますと、一本の満開の山椿の木蔭に、年齢の頃はやつと十歳ばかりの美しい少女が、七十歳位と見ゆる白髪の老人にともな伴われて佇っていました。

『あれは山椿の精ではないかしら……。』

一たんはそう思いましたが、眼を定めてよくよく見ると、それは妖精でも何でもなく、矢張り人間の小供なのでした。その

娘はよほど良い家柄の生れらしく、丸ポチャの愛くるしい顔に
 はどことなく気品が備わつて居り、白練の下衣に薄い薄い肉
 色の上衣を襲ね、白のへこ帯を前で結んでだらりと垂れた様子
 と言つたら飛びつきたいほど優美でした。頭髮は項の辺で切つて
 背後に下げ、足には分厚の草履を突かけ、すべてがいかにも無
 造作で、どこをさがしても厭味の無いのが、むしろ不思議な位で
 ございました。

兎に角日頃ただ一人山の中に閉じこもり、めつたに外界と接
 する機会のない私にとりて、斯うした少女との不意の会合
 は世にももの珍らしい限りでございました。私は不躰とか、遠
 慮とか言つたようなことはすっかり忘れて了い、早速近づい

て附添つきそいのお爺じいさんに訊たずねました。――

『あの、このお児こさまは、どこのお方かたでございますか？』

『これはもと京きょうの生れきょうじやが、』と老人ろうじんは一向こうす濟すました面持おももちで『ごく幼おきない時分じぶんに父母ふぼに訣わかれ、そしてこちらの世界せかいに来てからかくまで生せい長ちようしたもののじや……。』

『まあこちらの世界せかいで大きおおくなられたお方かた……。私わたくし、まだ一度どもそう言いったお方かたにお目めにかかったことがございませぬ。もしお差さし支つがなければ、これから私の滝わたくしたきの修行場しゆぎやうばまでお出掛でかけくださいますか。ここからそう遠とおくもございませぬ……。』

『あなたの事ことはかねて滝たきの竜りゆう神じんさんうかがから伺おつて居おります……。ではお言葉ことばに従したがつてこれからお邪魔じやまを致いたそうか……。雛子ひなこ、この

姨おばさまに御挨拶ごあいさつをなさい。』

そう言いわれると少しょう女じょはにつこりして丁寧ていねいに頭かしらをさげまし
た。

私わたくしはいそいそとこの二人ふたりの珍客ちんきやくを伴ともないて、滝たきの修行場しゆぎようばへ
と向むかつたのでした。

五十九、水さかずき

お客きやくさまが見みえた時ときに、こちらの世界せかいで何なにが一ばん物もの足りない
かといえ、それは食物たべもののないことでございます。それも神様かみさま
のお使者つかいや、大人おとなならば兎とも角かくも、斯こうした小供こどもさんの場合ばあいには、

いかにも手持無沙汰で甚だ当惑するのでございます。

致方がないから、あの時私は御愛想に滝の水を汲んで二人に薦めたのでした。――

『他に何もさし上げるものとしてございませぬ。どうぞこの滝の水なりと召し上れ……。これならどんなに多量でもございます……』

『これはこれは何よりのおもてなし……。雛子、そなたも御馳走になるがよいであろう。世界中で何が美味いと申しても、結局水に越したものはござらぬ……。』

指導役のお爺さんはそんな御愛想を言いながら、教え子の少女に水をすすめ、又御自分でも、さも甘そうに二三杯飲んで

くださいました。わたくしなが私の永いゆうかいせい幽界生活うちゆう中にもお客きやくさま様と水み杯さかずきを重かさねたのは、たしかこの時限ときぎりのようで、想おもい出だすと自じ分ぶんながら可笑おかしく感かんぜられます。

それはそうとこの少しょうじょ女にょの身みの上うへは、格別かくべつ変かわつた来歴らいれきと申もうすほどのものでもございませぬが、その際さい指導しどう役やくの老人ろうじんからきかされたところは、多た少しょうは現世げんせの人々ひとびとの御参考ごさんこうにもなろうかと存ぞんじますので、あらましお伝つたえすることに致いたしましょう。
 老人ろうじんの物語ものがたるところによれば、この少しょうじょ女にょの名なは雛子ひなこ、生うまれて六歳さいのいたいけざかりにこちらの世界せかいに引き移うつつたものだそ
 うで、その時代じだいは私わたくしよりもよほど後おくれ、帰幽きゆう後ござつと八十年位ねんらいに
 しかならぬとのことでございました。父親ちちおやは相そう当とう高たかい地位ちいの

おおみやびと
大宮人で、名は狭間信之、母親の名はたしか光代、そして雛子は夫婦の仲の一粒種のいとし児だったのです。

指導役のお爺さんはつづいてかく物語るのです。――

『御身も知るとおり、こちらの世界では心の純潔な、迷いの少ないものはそのまま側路に入らず、すぐに産土神のお手元に引きとられる。殊に浮世の罪穢に汚されていない小供は例外なしに皆そうで、その為めこの娘なども、帰幽後すぐに俺の手で世話することになったのじゃ。しかるに困ったことにこの娘の両親は、きつい仏教信者であつた為め、わが児が早く極楽浄土に行けるようにと、朝に晩にお経を上げてしきりに冥福を祈つて居るのじゃ……。この娘自身はすやすやと眠つてい

るから格別かくべつ差さ支しもないが、この娘の指導役をつとめる俺わし
 にはそれが甚だ迷惑めいわく、何とか良い工夫くふうはないものかと頭脳あたまを悩
 ましたことであつた。むろん人間にんげんには、賢愚けんぐ、善悪ぜんあく、大
 小う、高下こうげ、さまざまの等差とうさがあるので、仏教ぶつぎようの方便ほうべんも穴
 勝がちわる悪いものでもなく、迷まよいの深い者、判りわかのわるい者には、し
 ばらくこちらで極楽浄土ごくらくじょうどの夢ゆめなりと見みせて仏式ぶつしきで修しゆぎよう行
 させるのも却かえつてよいでもある。——が、この娘ことしてはそう
 した方便ほうべんの必要ひつようは毛頭もうとうなく、もともと純潔じゆんけつな小供こどもの修
 行ゆぎようには、最初さいしよから幽界ゆうかいの現実げんじつに目覚めめざさせるに限かぎるの
 じゃ。で、俺わしは、この娘こがいよいよ眼めを覚さますのを待まち、服装ふくそう
 などにもすぐに御国振みくにぶりの清きよらかなものに改あらためさせ、そしてその姿すがた

で地上ちじようの両親りやうしんの夢枕ゆめまくらに立たせ、自分じぶんは神かみさまに仕つかえて
 いる身みであるから、仏教ぶつぎやうのお経きやうを上げることは止やめてくださ
 るようにと、両親りやうしんの耳みみにひびかせてやったのじや。最初さいしよの
 間は二人あいだふたりとも半信半疑はんしんはんぎであつたものの、それが三度五度どどと度たび
 重さなるに連つれて、漸ようくこれではならぬと氣きがついて、しばらく
 すると、現世げんせから清きよらかな祝詞のりとの聲こゑがひびいて来るようになりま
 した……。イヤ一人ひとりの小供こどもを満足まんぞくに仕上しあげるにはなかなか並なみた
 大抵いていの苦心くしんではござらぬ。幽界ゆうかいに於おいても矢張り知識ちしきの必要ひつよう
 はあるので、現世げんせと同じように書物しよもつを読よませたり、又小供またこどもには
 小供こどもの友達ともだちもなければならぬので、その取持とりもちをしてやったり、
 精神せいしん統一とういつの修しゆぎ行ようをさせたり、神様かみさまのお道みちを教おしえたり、

またときどき
 又時々はあちこち見^{けん}学^{がく}にも連^つれ出^だして見^みたり、心^{こころ}から好^すきで
 なければとても小^こ供^{ども}の世^せ話^わは勤^{つと}まる仕^し事^{ごと}ではござらぬ。が、お蔭^{かげ}
 でこの娘^こも近^{ちか}頃^{ごろ}はすつかりこちらの世^せ界^{かい}の生^{せい}活^{かつ}に慣^なれ、よく
 わし^{わし}さしず
 俺^{わし}の指^{さし}図^ずをきいてくれるので大^{たい}へんに助^{たす}かつて居^おります。今日^{きょう}な
 ども散^{さん}歩^ぽに連^つれ出^だした道^{みち}すから図^{はか}らずもあなたにめぐり逢^あい、こ
 の娘^この為^{ため}には何^{なに}よりの修^{しゆ}行^{ぎやう}……あなたからも何^{なん}とか言^{こと}葉^はを
 かけ^{かけ}て見^みてくだされ……。』
 そう言^いつて指^し導^{どう}役^{やく}の老^{ろう}人^{じん}はあたかも孫^{まご}にでも対^{たい}する面^{おも}持^{もち}
 で、自^じ分^{ぶん}の教^{おし}え子^こを膝^{ひざ}元^{もと}へ引^ひき寄^よせるのでした。
 『雛^{ひな}子^こさん』と私^{わたくし}も早^さ速^{そく}口^{くち}を切^きりました。『あなたはお爺^{じい}さん
 ふたりき
 と二人^{ふたり}切^きりでさびしくはないのですか？』

『ちつともさびしいことはございません。』といかにもあつさりした返答。^{へんとう}

『まあお偉いこと……。しかし時々^{ときどき}はお父さまやお母さま^{かあ}にお逢い^あしたいでしょう。いつかお逢い^あしましたか？』

『たった一度^どしか逢い^あません……。お爺さん^{じい}が、あまり逢^あつては良^いけないと仰^おつしやいますから……。わたしそんなに逢^あいたくもない……。』

何^{なに}をきかれてもこの娘^この答^{こたえ}は簡^{かん}単^{たん}明^{めい}瞭^{りょう}、幽^{ゆう}界^{かい}で育^{そだ}つた小供^{こども}には矢張^{やは}りどこか異^{ちが}つたところがあるのです。

『これなら修^{しゆぎ}行^{よう}も案^{あん}外^{がい}に楽^{らく}であらう……。』

私^{わたくし}はつくづく肚^{はら}の中^{なか}でそう感^{かん}じたことでした。

六十、母性愛

その日はそれ位のことで別れましたが、後で又ちよいちよいこの二人の来訪を受け、とうとうそれが縁で、私は一度こちらの世界でこの娘の母親とも面会を遂げることになりました。なかなかしとやかな婦人で、しきりに娘のことばかり気にかけて居りました。その際私達の間之交された問答の中には、多少皆様の御参考になるところがあるように思われますので、序にその要点だけに申し添へて置きましょう。

問『あなた様は御生前に大そう厚い仏教の信者だったそ

うでございませうが……。』

答『私どもは別に平生厚い 仏 教の信者というのでもなかつ

たのでございませうが、可愛い小供を亡つた悲歎のあまり、阿弥

陀様にお縋りして、あの娘が早く極楽浄土に行けるように

と、一心不乱にお経を上げたのでございませう。こちらの世界

の事情が少し判つて見ると、それがいかに浅墓な、勝手な

考であるかがよく判りますが、あの時分の私達夫婦はまる

きり迷いの闇にとざされ、それがわが娘の済われるやすがであ

ると、愚かにも思い込んで居たのでした。——あべこべに私ど

も夫婦はわが娘の手で済われました。夫婦が毎夜夢の中に続け

ざまに見るあの神々しい娘の姿……私どもの曇つた心の鏡に

も、だんだんとまことの神の道が朧氣ながら映つてまいり、
 いつとはなしに御神前で祝詞を上げるようになりました。私
 どもは全く雛子の小さな手に導かれて神様の御許に近づくこ
 とができたのでございます。私がこちらの世界へまいる時にも、
 真先きに迎えに来てくれたのは矢張りあの娘でございました。
 その折私は飛び立つ思いで、今行きますよ……と申した事はよ
 く覚えて居りますが、修行未熟の身の悲しさ、それから
 先きのことはさっぱり判らなくなつて了いました。後で神さま
 から伺えば、私はそれから十年近くも眠つていたとのこと、
 自分ながらわが身の臍甲斐なさに呆れたことでございました：

…。

』

問『いつお娘さまとはお逢いなされましたか……。』

答『自分が気がついた時、私はてつきりあの娘が自分の傍に居てくれるものと思ひ込み、しきりにその名を呼んだのでございませぬ。——が、いかに呼べど叫べど、あの娘は姿を見せてくれませぬ。そして不図気がついて見ると、見も知らぬ一人の老人が枕辺に佇つて、凝乎と私の顔を見つめて居るのでございませぬ。やがて件の老人が徐ろに口を開いて、そなたの子供はここに居ないのじゃから、いかに呼んでも駄目じや。修 行が積んだら逢わせてあげぬでもない……。そんなことを言われたのでございます。その時私は、何という不愛想な老人があれはあるものかと心の中で怨みました、後で事情が判つ

で見^みると、この方^{かた}がこちらの世界^{せかい}で私^{わたし}を指導^{しどう}してくださる産^{うぶす}
 土神^{ながみ}のお使者^{つかい}だったのでございまして……。兎^とも角^{かく}も、修^{しゆぎ}
 行^{よう}次第^{しだい}でわが娘^こに逢^あわしてもらえることが判^{わか}りましたので、
 それからの私^{わたし}は、不束^{ふつつか}な身^みに及^{およ}ぶ限^{かぎ}りは、一生^{しやうけんめい}懸命^{しんけん}に修^{しゆぎ}
 行^{よう}を励^{はげ}みました。そのお蔭^{かげ}で、とうとう日頃^{ひごろ}の願望^{ねがひ}の協^{かな}う時^{とき}
 がまいりました。どこをドウ通^とつたのやら途中^{とちゆう}のことは少^{すこ}し
 も判^{わか}りませぬが、兎^とも角^{かく}私^{わたし}は指導^{しどう}役^{やく}の神^{かみ}さまに連^つれられて、
 あの娘^この住居^{すまい}へ訪^{たず}ねて行^いつたのでございまして。あの娘^この歿^{なく}つた
 のは六歳^{むつつ}の時^{とき}でございましたが、それがこちらの世界^{せかい}で大分^{だいぶん}に
 大^{おお}きく育^{そだ}つていたのには驚^{おどろ}きました。稚^{おさ}な顔^{がほ}はそのままながら、
 どう見^みても十歳^{とおくら}位^いには見^みえるのでございまして。私^{わたし}はうれし

やら、悲しいやら、夢中であの娘を両腕にひしとだきか

かえたのでございます……。が、それまでが私の嬉しさの絶

頂でございました。私は何やら奇妙な感じ……。予て考えて

いたのとはまるきり異つた、何やらしみじみとせぬ、何やら物

足りない感じに、はつと愕かされたのでございます……。』

問『つまり軽くて温みがなく、手で触つても力サ力サした感じで

はございませんでしたか……。』

答『全くお言葉の通り……。折角抱いてもさっぱり手応えがない

のでございます。私にはいかに考えても、こればかりは現世の

生活の方がよほど結構なように感じられて致方がござ

いませぬ。神様のお言葉によれば、いつか時節がまいれば、

親子、夫婦、兄弟が一緒に暮らすことになるこのことでございませうが、あんな工合では、たとえ一緒に暮らしても、現世のように、そう面白いことはないのではございませうか：

…。

ふたり 二人の問答はまだいろいろありますが、一と先ずこの辺で端折ることにいたしましょう。現世生活にいくらか未練の残っている、つまり女性達の繰り言をいつまで申上げて見たところで、そう興味もございませうから……。

六十一、海の修行場

まえ 前にも申上げた通り、私が滝の修行場に居りました期間はわりあい短かく、又これと言つて珍らしい話もありませぬ。私は割合に短かく、又これと言つて珍らしい話もありませぬ。私は大体彼所でただ統一の修行ばかりやつていたのでござい
ますから……。

滝の修行時代がどれ位つづいたかと仰つしやるか……。さア自分にはさっぱりその見当がつきませぬが、指導役のお爺さんのお話では、あれでも現世の三十年位には当るであろうとの事でございました。三十年と申すと現世ではなかなか長い歲月でございますが、こちらでは時を量る標準が無い故か、一向それほどにも感じないのでございまして……。

それはそうと、私の滝の修行場生活もやがて終りを告ぐべ

き時ときがめぐつてまいりました。ある日わたくし私が御神前ごしんぜんで深い深い統とういっはいに入はいつて居おりますと、ひよつくり滝たきの竜りゅうじん神じんさんが、例れいのびやくいすがた白衣姿びやくいすがたですぐ間近まじかくお現あらわれになり、斯こう仰おおせられるのでございしました。――

『そなたの統とういっつもその辺へんまで進すすめば先まず大だい丈夫じょうぶ、大たい概がいの仕し事ごとに差支さしつかえることもあるまい。従したがつてそなたがこの上うえここに居おるひつよう必要ひつようもなくなつた訳わけ……ではこれでお別わかれじゃ……。』

言いいも終おわらず、プイと姿すがたをお消けしになり、そしてそれと入れ代いかわわたくしりしどうやくに私の指導役しどうやくのお爺じいさんが、いつの間まにやら例れいの長ながい杖つえをついて入口いりぐちに立たつて居おられました。

私わたくしはびつくりして訊たずねました。――

『お爺さま、これから何所ぞへお引越でございますか？』

『そうじゃ……今度の修行場はきつと汝の氣に入るぞ……。すぐ出掛けるとしよう……。』

あいかわらず

不相変あつさりしたものでございます。しかし、私の方でも

ちかごろ

近頃はいくらかこちらの世界の生活に慣れてまいりましたの

かくべつおどろ

で、格別驚きも、怪しみもせず、ただ母の紀念の守刀を身

だけ

につけた丈で、心静かに坐を起ちました。

おこ

が、それにつづいて起つた局面の急転回には、さすが

わたくしすこあき

の私も少し呆れない訳にはまいりませんでした。お暇乞いの為

わたくしたきりゆうじん

めに私が滝の竜神さんの祠堂に向つて合掌瞑目したの

しゅんかん

はホンの一瞬間、さて眼を開けると、もうそこはすでに滝の

たき

修行場しゅぎようばでも何でもなく、一望千里ぼうれいの大海原おおうなばらを前にした、素晴すばらしく見晴らしみはのよい大きな巖いわの頂点てつぽんに、私とお爺さんわたくし じいと並ならんで立たつていたのでした。

『ここが今度の汝こんど そちの修行場しゅぎようばじゃ。何うじゃ氣きに入いつたであらうが……。』

びつくりした私わたくしが御返答ごへんじをしようとする間まもあらせず、お爺さんじいの姿すがたが又々またまた烟けむりのように側そばから消きえて無なくなつてしまいました。重ねかさ重ねかさの早業はやわざに、私は開わたくしあいた口くちが容易よういに塞ふさがりませんでしたが、漸ようやく氣きを落おちつけて四辺あたりの景色けしきを見みまわした時に、私は三さんたび驚おどろかされてしまいました。何故なぜかと申もうすに、巖いわの上うえから見渡みわたす一帯たいの景色けしきが、どう見みても昔馴染むかしなじみの三浦みうらの西海岸にしがいがんに何所どこやら

似通にかよつて居いるのでございますから……。

六十二、現世のお浚

わたくし
私はうれしいのやら、悲かなしいのやら、自分じぶんにもよくは判わからぬ気き
分ぶんでしばらくあたりの景色けしきに見みとれて居いましたが、不図ふと自分じぶんの住す
居まいのことが気きになつて来きました。

『お爺じいさんは私わたくしの住居すまいについて何なんとも仰おつしやられなかつたが、

一たいそれはどこにあるのかしら……。』

私わたくしは巖いわの上うへからあちこち見みまわしました。

脚き下やつは一帯たいの白砂はくさで、そして自分じぶんの立たっている巖いわの外ほかにも幾いく

つかの大きな巖いわがあちこちに屹きつ立りつして居おり、それにはひねくれ
た松まつその他の常盤木ときわぎが生はえて居いましたが、不ふ図と氣きがついて見みると、
中で一なかばん大きな彼方むこうの巖いわ山の裾すそに、一ひとつの洞窟ほらあならしいものが
あり、これに新あたらしい注連縄しめなわが張はりめぐらしてあるのでした。

『きつとあれが私の住居すまいに相違そうない……。』

私は急いいで巖いわから降おりてそこへ行いつて見みると、案あんに違たがわず巖いわ
山の底そこに八畳敷じよぢきほどの洞窟どうくつが天てん然ねん自然しぜんに出来できて居おり、そし
て其所そこには御神体ごしんたいをはじめ、私わたくしが日頃ひごろ愛用あいようの小机こづくえまでがす
でにキチンと取とり揃そろえられてありました。

一ひと目見めて私わたくしは今度こんどの住居すまいが、心しんから好すきになつて了しまいました。
洞窟どうくつと言いつても、それはよくよく浅あさいもので明あかるさは殆ほとんど戸そ

外と変りなく、そして其所から海までの距離がたった五六間、あ

たりにはきれいな砂が敷きつめられていて、所々に美しい色

彩の貝殻や香いの強い海藻やらが散ばっているのです。

『まるきり三浦の海岸そっくり……こんな場所なら、私はいつ

までここに住んでもよい……。』

私は室を出たり、入ったり、しばらく坐ることも打忘れて小

娘のようにはいやいだことでした。

今日から振り返って考えると、この海の修行場は私の為め

に神界で特に設けて下すったお濠い(おぼい)の場所ともいうべきものな

のでございました。境遇は人の心を映すとやら、自分が現世時代

に親んだのとそっくりの景色の中に犇と抱かれて、別に為すこと

もなくたつた一人で暮らして居りますと、考はいつとはなしに遠
とおむかしはい遠い昔に馳せ、ありとあらゆる、どんな細かい事柄までもは
こころそこよみがえつきりと心の底に甦つて来るのでした。紅い色の貝殻一つ、か
まつかぜひとすかにひびく松風一つが私にとりてどんなにも数多き思い出
たねの種子だったでございましょう！ それは丁度絵巻物を繰り
ひろ拡げるように、物心ついた小娘時代から三十四歳で歿するま
わたくししょうがいでの、私の生涯に起つた事柄が細大漏れなく、ここで復
さらい習をさせられたのでした。

で、この海の修行場は私にとりて一の涙の棄て場所でもあり
さいしよあたりました。最初四辺の景色が気に入つてはしやいだのはホンの束
まあとおもの間、後はただ思い出しては泣き、更に思い出しては泣き、よく

もあれで涙なみだが涸かれなかつたと思おもわれるほど泣ないたのでござい
 した。元がんらわたくし来なみだ私は涙おんないまもろい女いま、今までも未なだ泣くく癖せがとまりませぬが、
 しかしあの時ときほど私わたくしがつづけざまに泣ないたこともなかつたように
 覚おぼえて居おります。

が、思おもい出だす丈だ思おもい出だし、泣なきたい丈だけ泣なきつくした時ときに、後あとに
 は何なんともいえぬしんみりと安やすらかな氣き分ぶんが私わたくしを見舞みまつてくれまし
 た。こんないくじのない者ものに幾いく分ぶんか心こころの落おちつきがで出きて来きたよう
 に思おもわれるのは、たしかにあの海うみの修しゆ行ぎ場やうばで一し生よう涯がいのお浚さら
 をしたお蔭かげであると思おも存ぞんじます。私わたくしは今いまでもあれが私わたくしにとりて何なによ
 り難ありがた有しゆぎい修しゆぎ行やうば場やうばであつたと感かん謝しやせずには居おられませぬ。尚な
 おこことはただ昔むかしの思おもい出での場ばしよ所しよであつたばかりでなく、現げん世せ時じ代だい

に關係のあつた方々との面会の場所でもあり、私は随分
 いろいろな人達とここでお逢いしました。標本として私が彼所
 で実家の忠僕及び良人に逢つた話なりと致しましょうか。格
 別面白いこともございませぬが……。

六十三、昔の忠僕

私がある日海岸で遊んで居りますと、指導役のお爺さんが
 例の長い杖を突きながら彼方からトボトボと歩いて来られました。
 何うした風の吹きまわしか、その日は大へん御機嫌がよいらしく、
 老顔に微笑を湛えて斯う言われるのでした。――

『きようおもが今日は思い掛けない人を連れて来るが、誰であるか一つ当てて見るがよい……。』

『そんなこと、私にはできはしませぬ……。できる筈がございませぬ。』

『コレコレ、汝は何の為に多年精神統一の修行をしたのじゃ。統一というものは斯うした場合に使うものじゃ……。』

『左様でございますか。ではちよつとお待ち下さいませ……。』
 わたくしたは立ちながら眼を瞑つて見ると、間もなく眼の底に頭髮の真つしろ
 白な、痩せた老人の姿がありありと映つて来ました。

『八十歳位の年寄でございしますが、私には見覚がありませんね……』

『今に判る……。ちよつと待つて居るがよい。』

お爺さんはいとも気軽（きがる）にスーツと巖山（いわやま）をめぐつて姿（すがた）を消（け）してしま（しま）いました。

しばらくするとお爺（じい）さんは私（わたくし）が先刻（せんこく）靈眼（れいがん）で見た（み）一人（ひとり）の老人（ろうじん）を連（つ）れて再（ふた）たびそこへ現（あら）われました。

『何（ど）うじや実物（じつぶつ）を視（み）てもまだ判（わか）らんかな。——これは汝（そ）ちのお馴（な）染（じみ）の爺（じい）や……。数間（かずま）の爺（じい）やじや……。』

そう言（い）われた時（とき）の私（わたくし）の頭腦（あたま）の中（なか）には、旧（ふる）い旧（ふる）い記憶（きおく）が電光（でんこう）のよう（よう）に閃（ひら）きました。——

『まアお前（まえ）は爺（じい）やであつたか！　そう言（い）えば成（な）るほど昔（むかし）の面影（おもかげ）が残（のこ）つています。——第一（だいいち）その小鼻（こばな）の側（わき）の黒子（くろこ）……。それが何（なに）より

確かな目標です……。』

『姫さま、俺は今日のようによい事はござりませぬ。』と数

間の爺やは砂上に手をついてうれし涙に咽びながら『夙から姫

さまに逢わせてもらいたいと神様に御祈願をこめていたのでご

ざりますが、霊界の掟としてなかなかお許しが降りず、とうと

う今日までかかってしまいましたのじや。しかしお目にかかつて

見ればいつに変わらぬお若さ……。俺はこれで本望でござりまする

……。』

かんがえて見れば、私達の対面は随分久しぶりの対面で

ございました。現世で別れた切り、かれこれ二百年近くにもなつ

ているのでございますから……。数間の爺やのことは、ツイうつ

かりしてまだ一度もお風評を致しませんでした、これは、むかし鎌倉の実家に仕えていた老僕なのでございます。私が三浦へ嫁いだ頃は五十歳位でもあつたでしょうが、夙に女房に先立たれ、独身で立ち働いている、至つて忠実な親爺さんでした。三浦へも所中泊りがけで訪ねてまいり、よく私の愛馬の手入れなどをしてくれましたものでございます。そうそう私が現世の見納めに若月を庭前へ曳かせた時、その手綱を執つていたのも、矢張りこの老人なのでございました。

だんだんきいて見ると、爺やが死んだのは、私よりもざつと二十年ばかり後だということでした。『俺は生涯病氣という病氣はなく、丁度樹木が自然と立枯れするよう

に、安らかに現世にお暇を告げました。身分こそ賤しいが、後生は至つて良かった方でござります……。』そんなことを申して居りました。

こんな善良な人間でございますから、こちらの世界へ移つて来てからも至つて大平無事、丁度現世でまめまめしく主人に仕えたように、こちらでは後生大事に神様に仕え、そして偶には神様に連れられて、現世で縁故の深かった人達の許へも尋ねて行くとのことでした。

『この間御両親様にもお目にかかせて戴きましたが、イヤその時は欣んでよいのやら、又は悲しんでよいのやら……現世の氣持とは又格別でござりました……。』

爺じいやの口くちからはそう言いった物もの語がたりがいくつもいくつも出でまし
た。最後さいごに爺じいやは斯こんなことを言いい出だしました。

『俺わしはこちらでまだ三浦みうらの殿どの様さまに一度どもお目めにかかりませぬが、
今日きょうは姫ひめさまのお手て引きで、早速さつそく日頃ひごろの望のぞみを協かなえさせて戴いただわけ
にはまいりますまいか。』

『さア……。』

私わたくしがいささか躊躇ためらつて居おりますと、指し導どう役やくのお爺じいさんが直ただち
に側そばから引ひきとつて言いわれました。――

『それはいと易やすいことじゃが、わざわざこちらから出で掛かけずとも、
先方むこうからこちらへ来きて貰もらうことに致いたそう。そうすれば爺じいやも久ひさし
ぶりで御夫婦ごふうふお揃そろいの場面ばめんが見みられるというものじゃ。まさか夫ふ

婦うふが揃そろつても、以前いぜんのように人間臭にんげんくさい執着しゅうじやくを起おこしもしまいと思おもうが、どうじゃその点てんは請合うけあつてくれるかな?』
 『お爺じいさまモ一だい大丈夫じやうぶでございますとも……。』
 とうとう良人おととの方ほうからこの海うみの修行場しゆぎやうばへ訪ねたずて来るくことになつて了しまいました。

六十四、主従三人

間まもなく良人おととの姿すがたがスーツと浪打際なみうちぎわに現あらわれました。服装ふくそうその他たは不あ相い変かわでございますが、しばらく見みぬ間まに幾いくらか修しゆ行ぎが積つんだのか、何所どことなく身みに貫禄かんめがついて居おりました。

『近頃^{ちかごろ}は大へんに御無沙汰^{ごぶさた}を致^{いた}しました。いつも御機嫌^{ごきげん}で何よ^{なに}り結構^{けつこう}でございます……。』

『お互^{たがい}にこちらでは別に風邪^{かぜ}も引^ひかんののでナ、アハハハハハ。そなたも近頃^{ちかごろ}は大そう若返^{わかがえ}ったようじや……。』

二三問答^{もんどう}を交^{かは}して居^いる中に、数間^{かずま}の爺^{じい}やもそこへ現^{あら}われ、私^{わたくし}の良人^{おっと}と久しぶり^{ひさ}の対面^{たいめん}を遂^とげました。その時の爺^{ときじい}やの歡^{よろこ}びは又格別^{またかくべつ}、『お二人^{ふたり}で斯^こうしてお揃^{そろ}いの所^{ところ}を見ると、まるで元^{もと}の現世^{げんせ}へ戻^{もど}ったような氣^きが致^{いた}します……。』そんなこと言^いつて涙^{はな}をすするのでした。

そうする中^{うち}にも、何人^{たれ}がどう世話^{せわ}して下^{くだ}すつたのやら、砂^{すな}の上^{うえ}には折畳^{おりたた}みの床^{しょうぎ}几^ぎが三つほど据^すえつけられてありました。し

かもその中の二つは間近く向き合い、他の一脚は少し下つて背後の方へ……。何う見たつて私達三人の爲めに特別に設けてくれたとしか思えない恰好なのでございます。

『どリア遠慮なく頂戴致そうか。』良人もひどく氣を良くしてその一つに腰を降ろしました。

『こちらへ来てから床几に腰をかけるのはこれが初めてじゃが、なかなか悪るゝ氣持は致さんな……。』

然るべく床几に腰を降ろした主従三人は、それからそれへと際限もなく水入らずの昔語りに耽りましたが、何にしろ現世から幽界へかけての長い歲月の間に、積み積つた話の種でございますから、いくら語つても語つても容易に尽きる模様は

見えないのでした。その間には随分泣くことも、又笑うこともありましたが、ただ有難いことに、以前良人と会った時のような、あの現世らしい、変な気持ちだけは、最早殆んど起らないまでに心がきれいになっていました。私は平気で良人の手を握つても見ました。

『随分軽いお手でございますね。』

『イヤ斯うカサカサして居てはさっぱりじゃ。こんな張子細工では今更同棲してもはじまるまい。』

私達夫婦の間にはそんな戯談が口をついて出るところ

まであつさりした気分が湧いて居ました。爺やの方では一層枯れ切つたもので、ただもううれしくて耐らぬと言つた面持で、黙

って私達わたくしたちの様子ようすを打ち守まもっているのです。

ただ一つ良人ひとにとりての禁物きんもつは三崎みさきの話はなしでした。あちらに見

ゆる遠景えんけいが丁度ちやうど油壺あぶらつぼの附近ふきんに似て居おりますので、うつか

り話頭はなしが籠城ろうじやうじだい時代の事ことに向むかいますと、良人おととの様子ようすが急に沈しずん

で、さも口惜くやしいと言いったような表情ひやうじやうを浮うかべるのでした。

『これは良いけない……。』私わたくしは急いそいで話はなしを他たに外そらしたことでご

ざいました。

困こまつたのは、この時良人ときおととも爺じいやもなかなか帰かえろうとしないこと

で、現世げんせでいうなら二人ふたりが二三日私わたくしの修行場しゆぎやうばに滞たいざい在ざいするよう

なことになるもつとしました。尤もつとも、それはただ気持きもちだけの話はなしでございま

す。こちらには昼ひるも夜よるもないのですから、現世げんせのようにとても幾い

くにち
日とはつきり数える訳には行かないのでございます。その辺が
どうも話が太へんにしにくい点でございます……。

×

×

×

×

海の修行場の話はこれで切り上げますが、兎に角この修行
場は私にとりて最後の仕上げの場所、そして私はこの時に神
様から修行終了の仰せを戴いたのでございます。同時
に現世の方ではすでに私の為めに一つの神社が建立されて
居り、私は間もなくこの修行場からその神社の方へと引移
ることになつたのでございます。

それに就きての経緯は何れ改めてこの次ぎに申上げること

に致^{いた}しましょう。

六十五、小桜神社の由来

ツイうつかりお約束^{やくそく}束^しをして了解^ししましたので、これから私^{わたくし}が小桜神社^{ざくらじんじや}として祀^{まつ}られた次第^{しだい}を物語^{ものがた}らなければならぬ段取^{だんどり}になりましたが、実は私^{じつわたくし}としてこんな心^{こころぐる}苦^{くる}しいことはないのです。ございます。御覧^{ごらん}のとおり私^{わたくし}などは別にこれと申^{もう}してすぐれた器^き量^{りよう}の女性^{おんな}でもなく、又^{また}修行^{しゆぎよう}と言^いったところで、多寡^{たか}が知^しれて居^いるのでございます。こんなものがお宮^{みや}に祀^{まつ}られるというのはたしかに分^{ぶん}に過^すぎたことで、私自身^{わたくしじん}もそれはよく承知^{しやうち}している

のでございます。ただそれが事実である以上、抛なく申上げ
 るようなものの、決して決して私が良い気になつて居る訳でも何
 でもないことを、くれぐれもお含みになつて戴きとう存じます。
 私にとりてこんなしにくい話はめつたにないのでございますから
 ……。

だんだん事の次第をしらべますと、話はずっと遠い昔、私が
 まだ現世に生きて居た時代に遡るのでございます。前にもお話し
 したとおり、良人の討死後私は所中そのお墓詣りを致しまし
 た。何にしるお墓の前へ行つて瞑目すれば、必らず良人のあり
 し日の面影がありありと眼に映るのでございますから、当時の
 私にとりてそれが何よりの心の慰めで、よほどの雨風でもない

限り、めつたに墓参ぼさんを怠おこたるようなことはないのです。『今日きょうも
又またお目めにかかつて来こようかしら……。』私わたくしとしてはただそれ位の
あつさりした心こころ持もちで出掛けたまでのことでございました。こ
の墓詣はかまいりは私わたくしが病やまいの床とこにつくまでずっと一年ねんあまりもつづいた
でございますようか……。

ところが意外いがいにもこの墓参ぼさんが大たいへんに里人さとびとの感激かんげきの種子たねとな
ったのでございます。『小櫻姫こざくらひめは本ほん当とうに烈女れつじょの亀鑑かがみだ。ま
だうら若い身わかみでありながら再縁さいえんしようなどという心こころは微塵みじんもな
く、どこまでも三浦みうらの殿様とのさまに操みさおを立て通とすとは見上みあげたもので
ある。』そんな事ことを言いまして、途とち中ちゅうで私わたくしとすれ違ちがう時ときなどは、
土地とちの男おとこも女おんなも皆みな涙なみだぐんで、いつまでもいつまでも私わたくしの後うしろ姿すがた

を見送るみおくのでございました。

さとびと

里人からそんなにまで慕したつてもらいました私が、やがて病やまいの為ため

めに殮たおれましたものでございますから、その為ために一層そうにんき人氣でが出

たとも

たでも申しましようか、いつしか私わたくしのことを世よにも類たぐいなき烈婦れつぷ

きしよう

……氣性きしょうも武芸ぶげいも人並ひとなみすぐれた女丈夫じよじやうぶでもあるように囃はや

た

し立てたらしいのでございます。その事は後ことで指導しどう役やくのお爺じいさ

うかが

んから伺うかがつて自分じぶんながらびつくりしてしまいました。私は決わたくしけつしてそ

えら おんな

んなに偉えらい女性おんなではございませぬ。私はただ自分じぶんの氣きが済すむよう

すじ おんな

に、一と筋すじに女子おんなとして当り前あたまえの途みちを踏ふんだまでのことなのでご

ざいまして……。

もつと

尤もつとも、最初さいしよは別に私をお宮みやに祀まつるまでの話はなしが出た訳わけではなく、

ときどきおも
 時々思い出しては、野良への往來に私の墓に香花を手向け
 くらゐ
 る位のことだったそうでございますが、その後不図とした事が動
 うき
 機となり、とうとう神社というところまで話が進んだのでござ
 いました、まことに人の身の上というものは何が何やらさっぱり
 けんとう
 見当がとれませぬ。生きて居る時にはさんざん悪口を言われた
 ものが、死んでから口を極めて讃められたり、又その反対に、生
 いぜんえいが
 前榮華の夢を見たものが、墓場に入ってからひどい辱しめを受
 ゆめ
 けたりします。そしてそれが少しも御本人には関係のない事
 とがら
 柄なのですから、考えて見ればまことに不思議な話で、煎じつ
 み
 むれば、これは矢張り何やら人間以上の奇びな力が人知れず
 おくほうはたら
 奥の方で働いているのではないでしょう。少くとも私の場合に

はそうらしく感じられてならないのでございます……。

六十六、三浦を襲った大海嘯

さて只今申し上げました不図とした動機というのは、或る年
三浦の海岸を襲った大海嘯なのでございました。それはめつ
たにない位の大きな時化で、一時は三浦三崎一帯の人家が全滅
しそうに思われたそうでございます。

すると、その頃、諸磯の、或る漁師の妻で、平常から私の
事を大へんに尊信してくれている一人の婦人がありました。

『小桜姫にお願いすれば、どんな事でも協えて下さる……。』

そう思い込んでいたらしいのでございます。で、いよいよ暴風雨が荒れ出しますと、右の婦人が早速私の墓に駆けつけて一心不乱に祈願しました。――

『このままにして置きますと、三浦の土地は皆流れて了います。小櫻姫さま、何うぞあなた様のお力で、この災難を免れさせて戴きます。この土地でお縋りするのはあなた様より外にはござ

りませぬ。』

丁度その時私は海の修行場で不相変統一の修行三昧に耽つて居りましたので、右の婦人の熱誠こめた祈願がいつになくはつきりと私の胸に通じて来ました。これには私も一と方ならず驚きました。――

『これは大へんである。三浦は自分にとりて切つても切れぬ深い因縁の土地、このまま土地の人々を見殺しにはできない。殊

にあそこには良人をはじめ、三浦一族の墓もあること……。一つりゆうじん 竜 神さんに一生懸命祈願して見ましょう……。正しい願い

であるならきつと御神助が降るに相違ない……。』

それから私は未熟な自分にできる限りの熱誠をこめて、三浦の土地が災厄から免れるようにと、竜神界に祈願を籠め

ますと、間もなくあちらから『願いの趣聴き届ける……。』との難有いお言葉が伝わってまいりました。

果して、さしものに猛り狂った大時化が、間もなく収まり、三浦の土地はさしたる損害もなくして済んだのでしたが、三浦以

外の土地、例えば伊豆とか、房州とかは百年來例がないと言
 われるほどの惨害を蒙つたのでした。

斯うした時には又妙に不思議な現象が重なるものと見えまして、
 私の姿がその夜右の漁師の妻の夢枕に立つたのだそうでござ
 います。私としては別にそんなことをしようという所思はなく、
 ただ心にこの正直な婦人をいとしい女性と思つた丈のこと
 でしたが、たまたま右の婦人がいくらか靈能らしいものを有つ
 ていたために、私の思念が先方に伝わり、その結果夢に私の姿
 までも見ることになつたのでございましょう。そうしたことは格
 別珍らしい事でも何でもないのですが、場合が場合とて、それ
 が飛んでもない大騒ぎになつて了いました。

『小桜姫はたしかに三浦の土地の守護神様だ。三浦の土地が今度不思議にも助かったのは皆小桜姫のお蔭だ。現に小桜姫のお姿が誰某の夢枕に立つたということだ……。難有いことではないか……。』

私とすればただ土地の人達に代つて竜神さんに御祈願をこめたまでのことで、私自身に何の働きのあつた訳ではないのでございますが、そうした経緯は無邪気な村人に判ろう筈もございませぬ。で、とうとう私を祭神とした小桜神社がむらびとぜんたいの相談の結果として、建立される段取になつて了いました。

右の事情が指導役のお爺さんから伝えられた時に私はびつ

くりしてしまいました。私は真紅になつて御辞退しました。――

『お爺さま、それは飛んでもないことでございます。私などはまだ修行中の身、力量といい、又行状といい、とてもそんな資格のあろう筈がございませぬ。他の事と異い、こればかりはごじたいもうしあ御辞退申上げます……。』

が、お爺さんはいつかな承知なさらないのでした。――

『そなたが何と言おうと、神界ではすでに人民の願いを容れ、小桜神社を建てさせることに決めた。そなたの器量は神界なにで何もかも御存じじや。そなたはただ誠心誠意で人と神との仲介をすればそれでよい。今更我俣を申したとて何にもならんぞ……。』

『さよう左様な訳(わけ)のものでございましょうか……。』
 わたくし私としては内(ない)心(しん)多大(たいたい)の不安(ふあん)を感じながら、そうお答(こた)えするよ
 り外(ほか)に詮(せん)術(すべ)がないのでございました。

六十七、神と人との仲介

以上(いじょう)のべたところで一通(とお)り話(はなし)の筋(すじ)道(みち)だけはお判(わか)りになつたことと存(ぞん)じます。神(かみ)に祀(まつ)られたといえ、ちよつと大(たい)変(へん)なことのように思(おも)われましようが、内(なか)容(よう)は決(けつ)してそれほどのことではないのでございまして……。

大(だい)体(たい)日(に)本(ぽん)の言(こと)葉(ば)が、肉(にく)眼(がん)に見(み)えないものを悉(ことごと)く神(かみ)と言(い)つて

しま
 了うから、甚だまぎらわしいのでございます。神かみという一字じの中なかには飛とんでもない階かい段だんがあるのでございます。諺ことわざにも上うへには上うへとやら、一つの神界しんかいの上うへには更に一だん高い神界しんかいがあり、その又上またうへにも一層奥そうおくの神界しんかいがあると言いった塩梅あんばいに、どこまで行ゆつても際限さいげんがないらしいのでございます。現在げんざいの私わたくしどもの境きようがい
 涯かいからいえば、最高さいこうのところは矢張り昔むかしから教おしえられて居いるとおり、天照大御神様あまてらすおおみかみさまの知しめす高天原たかまがはらの神界しんかい——それが事実上じじつじようの宇宙うちゆうの神界しんかいなのでございます。そこまでは、一心しんからん不乱ふらんになつて統一とういつをやればどうやら私どもにも接近せつきんされぬでもありませんが、それから奥おくはとても私わたくしどもの力量ちからには及およびませぬ。指導役しどうやくのお爺さんじいに伺うかがつて見みましても、あまり要ようりよ

領^うは獲^えられませぬ……。つまり無い^な訳^{わけ}ではないが、限り^{かぎ}ある器^ち

量^{から}ではどうにもしようがないのでございましょう。

高^{たか}天^{まが}原^{はら}の神^{しん}界^{かい}から一段^{だん}降^{くだ}つたところが、取^とりも直^{なお}さずわれ

われの住^すむ大^{だい}地^ちの神^{しん}界^{かい}で、ここ^こに君^{くん}臨^{りん}遊^{あそ}ばすのが、申^{もう}すまで

もなく皇^{こう}孫^{そん}命^{のみ}様^{さま}にあらせられます。ここ^こになるとずつとわ

れわれとの距^き離^りが近^{ちか}いとも申^{もう}しましうか、御^ご祈^ぎ願^{がん}をこむれば

直^ち接^{よく}神^{かみ}様^{さま}からお指^さ図^ずを受^うけることもでき、又^{また}そう骨^ほ折^ねらず

にお神^{すがた}姿^{おが}を拝^{おが}むこともできます——。尤^{もつと}もこれは幾^{いく}らか修^{しゆ}行^{ぎやう}

が積^つんでからの事^{こと}で、最^{さい}初^{しよ}こち^こらへ参^{まい}つたばかりの時^{とき}は、何^{なに}が

何^{なに}やら腑^ふに落^おちぬことばかり、恥^{はづ}かしながら皇^{こう}孫^{そん}命^{のみ}様^{さま}があ

らゆる神^{かみ}々^{がみ}を統^{とう}率^{そつ}遊^{あそ}ばす、真^{しん}の中^{ちゆう}心^{しん}の御^{おかた}方^{かた}であることさえ

ぞん
 も存じませんでした。『幽明交通の途が杜絶とだえているせい、
 ちかごろ
 近頃の人間はまるきり駄目だめじゃ……。昔の人間にはそれ位
 のことがよく判わかつていたものじゃが……。』——指導役のお爺
 さんからそう言いつてさんざんお叱しかりを受けたような次第しだいでござい
 ました。私達わたくしたちでさえ、すでにこれなのでございますから、現
 世んせの方々が戸惑とまどいをなさるのも或は無理むりからぬことかも知しれま
 せぬ。これは矢張りお爺じいさんの言いわれる通り、この際さい、大いにおお
 んぼつ
 発して霊界れいかいとの交通こうつうを盛さかんにする必要がございましょう。
 それさえできれば斯こんなことは造作ぞうさもなく判わかることなのでござい
 ますから……。

いまさらもうしあ
 今更申上いまさらもうしあぐるまでもなく、皇孫命様こうそんのみことさまをはじめ奉たてまつり、

直ちよく接せつそのお指図さしずの下もとにお働き遊あそばす方々かたがたは何いれも活いき神様がみさま

……つまり最初さいしよからこちらの世界せかいに活いき通とおしの自然しぜん靈れいでござ

います。産土うぶすなの神々かみがみは申もうすに及およばず、八幡様はちまんさまでも、住吉様すみよしさま

でも、但ただしは又また弁財天べんざいてん様の方々かたがたでも、その御本ごほん体たい

は悉ことごとくそうでないものはございませぬ。つまるところここまですが、

真正ほんとうの意味いみの神様かみさまなので、私わたくしどものように帰幽きゆう後神ごかみとして祀まつ

られるのは真正ほんとうの神かみではありませぬ。ただ神界しんかいに籍せきを置おいて

いるという丈だけで……。尤もつも中なかには随分ずいぶん修しゆ行ぎやうの積つんだ、お立り

派つばな方々かたがたもないではありませぬが、しかし、どんなに優すぐれてい

ても人じん靈れいは矢張やはり人靈じんれいだけのことしかできはしませぬ。一つ

くちもう口くちに申もうしたら、真正ほんとうの神様かみさまと人間にんげんとの中ちゆうかん間に立たちてお

取次ぎとりつの役目やくめをつとめるのが人霊じんれいの仕事しごと——。まあそれ位くらゐに考かんが
 えて戴いたけば、大体宜だいたいよろしいかと存ぞんじます。少すくなくとも私わたくしのような未み
じゆく熟なものにできますことは、やつとそれだけでございます。神じん
んじや社まつに祀まつられたからと申もうして、矢鱈やたらに六ヶむずかしい問題もんだいなどを私わたくしの
 ところにお持込もちこみになられることは固かたく御辞退ごじたいいたします。精一せい
 ぱいお取次とりつぎはいたしますが、私わたくしなどの力量ちからで何一つできるもの
 でございましょうか……。

六十八、幽界の神社

かれこれする中うちに、指導役しどうやくのお爺じいさんからは、お宮みやの普請ふしんが、

最^もう大分進^{だいぶんしんこう}行^いして居^いるとのお通知^{しらせ}がありました。――

『後^{あと}十^{じゅう}日^{にち}も経^たてばいよいよ鎮座祭^{ちんざさい}の運び^{はこ}になる。形^{かたち}こそ小^{ちい}さい

が、普^ふ請^{しん}はなかなか手^てが込^こんで居^いるぞ……。』

そんな風評^{ふうせう}を耳^{みみ}にする私^{わたくし}としては、これまでの修^{しゆ}行^{ぎやう}場^{ばう}の引^ひ越^こ

しとは異^{ちが}つて、何^{なん}となく氣^きがかり……。幾^{いく}分^{ぶん}興^{こう}入^いれ前^{まえ}の花^{はな}嫁^{よめ}さ

んの氣持^{きもち}、と言^いつたようなところがあるのでした。つまり、うれ

しいようで、それで何^{なに}やら心^{しん}配^{ぱい}なところがあるのでございます。

『お爺^{じい}さま、鎮座祭^{ちんざさい}とやらの時^{とき}には、私^{わたくし}がそのお宮^{みや}に入^{はい}るので

ございますか……。』

『イヤそれとも少^{すこ}し異^{ちが}う……。現^{うつ}界^{しよ}にお宮^{みや}が建^たつ時^{とき}には、同^{どう}時^じに

又^{また}こち^せらの世^{かい}界^{かい}にもお宮^{みや}が建^たち、そなたとしてはこち^せらのお宮^{みや}の

ほうはい
方に入るのじや。——が、そなたも知る通り現幽は一致、幽
いことただ
界の事は直ちに現界に映るから、實際はどちらとも区別が

つけられないことになる……。』

『現界の方では、どんな個所にお宮を建てて居るのでございま
すか。』

『彼所は何と呼ぶか……つまり籠城中にそなたが隠れてい
かいがん
た海岸の森蔭じや。今でも里人達は、遠い昔の事をよく記
ぼ
憶えていて、わざとあの地点を選ぶことに致したらしい……。』

『では油ヶ壺のすぐ南側に当る、高い崖のある所でございま
あぶらつぼ
しょう、大木のこんもりと茂った……。』

『その通りじや。が、そんなことはこの俺に訊くまでもなく、自

ぶんのぞ
分で覗いて見たらよいであろう。現界の方はそなたの方が本

よく
職じや……。』

お爺さんじいはそんなことを言いつて、まじめに取合とりあつてくださいま
せんのので、止やむを得えずちよつと統一とういつして、のぞいて見みると、果はた
してお宮みやの所在しよざい地は、私わたくしの昔むかしの隠家かくれがのあつたところで、四辺あたり
の模様もようはさしてその時分じぶんと變かわつて居いないようでした。普請ふしんはもう
八分通りも進しん行こうして居おり、大工だいくやら、屋根職やねややらが、何れも忙いそ
がしそうに立たち働はたらいて居みるのが見みえました。

『お爺じいさま、矢張やはり昔むかしの隠家かくれがのあつた所ところでございます。大たいそう
立派りっぱなお宮みやで、私わたくしには勿体もったいのうございます。』

『現界げんかいのお宮みやもよくできて居おるが、こちらのお宮みやは一層手そうてが込こ

んで居おるぞ。もう夙とうに出来上できあがつてゐるから、入はいる前まえに一度そなたを案内あんないして置くおくと致いたそうか……。』

『そうしていただければ何なにより結構けつこうでございますが……。』

『ではこれからすぐに出掛でかける……。』

あいかわらずあいかわらず 不相変じいお爺おやさんのなさることは早急さつきゆうでございます。

わたくしたち 私わたし達は連つれ立だちて海うみの修行場しゆぎようばを後あとに、波打際なみうちぎわのきれいな白砂はくさを踏ふんで東へ東へと進すすみました。右手みぎてはのたりのたりとい

かにも長閑のどかな海原うなばら、左手ひだりてはこんもりと樹木じゆもくの茂しげつた丘おかつづき、どう見みても三浦みうらの南海岸みなみかいがんをもう少しきれいにしたような景色けしき

でございます。ただ海うみに一艘そうの漁船ぎよせんもなく、又陸またおかに一軒けんの人家じんか

も見みえないのが現世げんせと異ちがつてゐる点てんで、それが為ために何なにやら全ぜん

体の景色に夢 幻に近い感じを与えました。

歩いた道程は一里あまりでございましょうか、やがて一つの

奥深い入江を、二つ三つ松原をくぐりますと、そこは鬱

葱たる森蔭の小じんまりとせる別天地、どうやら昔私が隠

れていた浜磯の景色に似て、更に一層理想化したような趣があ

るのです。

不図気がついて見ると、向うの崖を少し削った所に白木造り

のお宮が木葉隠れに見えました。大さは約二間四方、屋根は厚

い杉皮葺、前面は石の階段、周囲は濡椽になつて居りま

した。

『何うじや、立派なお宮であろうが……。これでそなたの身も漸

固かたまつた訳わけじゃ。これから引越ひっこ騒さわぎもないことになる……。』
 そう言いわれるお爺じいさんのお顔かおには、多年たねん手がけた教おしえ児ごの身みの
 振ふり方かたのついたのを心こころから歡よろこぶと言いつた、慈愛じあいと安あん心しんの色いろが湛ただよ
 っおて居おりました。私は勿わたくし体もつたいないやら、うれしいやら、それに又また
 遠とおい地ち上じょう生せい活かつ時じ代だいの淡あわい思おもい出でまでも打うち混まじり、今いま更さら何なんと
 言いうべき言こと葉はもなく、たなだ泪なみだぐんでそこそこに立たち尽つくしたことでござ
 いました。

六十九、鎮座祭

そうする中うちにいいよ鎮座祭ちんざさいの日ひがまいりました。

『げんかい ほう現界の方では今日はえらいお祭まつり騒さわぎじや。』と指導役
 のお爺さんじいが説とききかせてくださいました。『地元じもとの里さとはいうま
 でもなく、三里五里りりの近郷近在きんごうきんざいから大たいへんな人出ひとでで、あの
 狭い海岸せま かいがんが身動きみうごのできぬ有様ありさまじや。往来おうらいには掛茶屋かけちややら、
 屋台店やたいみせやらが大分だいぶんできて居いる……。が、それは地上ちじようの人間にんげん
 界かいのことで、こちらの世界せかいは至いたつて静謐しずかなものじや。俺わし一人ひとりで
 そなたをあのお宮みやへ案内あんないすればそれで事ことが済すむので……。まア
 これまでの修行場しゆぎようばの引越ひっこしと格別かくべつの相違そういもない……。』
 そう言いつてお爺さんじいは一向いこうに取済とりすましたものでしたが、私わたくしとし
 ては、それでは何なにやら少すこし心細こころほそいように感かんじられてならない
 のでした。

『あのお爺さま、』私はどうとう切り出しました。『私一人では

何やら心許のうございますから、お差支なくば私の守

護霊さまに一緒に来て戴きたいのでございますが……。』

『それは差支ない。そなたを爰まで仕上げるのには、守護

霊さんの方でも蔭で一方ならぬ骨折じやった。——もう追ッ

つけ現界の方では鎮座祭が始まるから、こちらもすぐにその

支度にかかると致そうか……。』

毎々申上げますとおり、私どもの世界では何事も甚だ手

取り早く運びます。先ず私の服装が瞬間に変わりましたが、今

日は平常とは異つて、身には白練の装束、手には中啓、

足には木の蔓で編んだ一種の草履、頭髮はもちろん垂髪……甚

ださッぱりしたものでございました。他に身につけていたものといえばただ母の紀念の守刀——こればかりは女の魂でござい
ますから、いかなる場合にも懷から離すようなことはないのござ
います。

わたくしみなり私の服裝が變つた瞬間間には、もう私の守護靈さんもいそ

いそと私の修行場へお見えになりました。お服裝は広袖の白
衣はかまに袴をつけ、上うえに何やら白の薄物うすものを羽織はおつて居おられました。

『今日は良ようこそ私をお召よびくださいました。』と守護靈さん

はいつもの控ひかえ勝ちな態度の中にも心からのうれしさを湛たえ、

『私がこちらの世界へ引移ひきうつつてから、かれこれ四百年にもなりま

すが、その永ながい間に今日きょうほど肩身かたみが広く感じかんられることはただの

一度もございませぬ。これと申すも偏に御指導役のお爺さまのお
 骨折、私からも厚くお礼を申し上げます。この後とも何分宜
 しいお依たのみ申もうしまする……。」

『イヤそう言いわれると俺わしはうれしい。』とお爺じいさんもニコニコ顔が、
 『最初さいしよこの人ひとを預あずかった当座とうざは、つまらぬ愚痴ぐちを並ならべて泣なかれ
 ることのみ多おほく、さすがの俺わしもいささか途方とほうに暮くれたものじやが、
 それにしてはよう爰ここまで仕上しあがったものじや。これから、何なんと言い
 おうが、小桜神社こざくらじんじやの祭神さいしんとして押おしも押おされもせぬ身みぶん分ぶんじ
 や……。早速出掛さつそくでかけると致いたそう。』

お爺じいさんはいつもの通とおりの白びやく衣い姿すがたに藁わら草履ぞうり、長ながい杖つえを突つ
 いて先頭せんとうに立たたれたのでした。

なみうちぎわ ある
浪打際を歩いたように感じたのはホンの一瞬間、私
達はいつしか電光のように途中を飛ばして、例のお宮の社
頭に立っていました。

なかにはい
内部に入つてホツと一息つく間もなく、忽ち産土の神様
おすがた
の御神姿がスーッと神壇の奥深くお現われになりました。そ
ばしよとお
の場所はずいようで近く、又近いようで遠く、まことに不思議な
かん
感じが致しました。

うやうや あたまさ
恭しく頭を低げている私の耳には、やがて神様の御声が凜
ん ひび
々と響いてまいりました。それは大体左のような意味のお訓
とし
示でございました。

いま かみ
『今より神として祀らるる上は心して土地の守護に当らねばなら
まっ
うえこころ
とち
しゅご
あた

ぬ。人民からはさまぎまの祈願が出るであらうが、その正邪
 善悪は別として、土地の守護神となつた上は一応丁寧に祈
 願の全部を聴いてやらねばならぬ。取捨は其上の事である。
 神として最も戒むべきは怠慢の仕打、同時に最も慎むべきは偏
 頗不正の処置である。怠慢に流るる時はしばしば大事をあや
 まり、不正に流るる時はややもすれば神律を紊す。よくよく心
 して、神から托された、この重き職責を果すように……。』
 産土の神様のお訓示が終ると、つづいて竜宮界からの
 お言葉がありました、それは勿体ないほどお優しいもので、
 ただ『何事も六ヶしい事はこちらに訊くように……。』とのこ
 とでございました。

わたくしいまさら
私は今更ながら身にあまる責任の重さを感じると同時に、
限りなき神恩の忝さをしみじみと味わったことでございました。

七十、現界の祝詞

そうする中にも、今日の鎮座祭のことは、早くもこちらの世
界の各方面に通じたらしく、私の両親、祖父母、良人をは
じめ、その外多くの人達からのお祝いの言葉が、頻々と私の
耳にひびいで参りました。それは別にあちらで通信しようとする
意思はなくても、自然とそう感じられて来るのでございます。
近頃は現界でも、電信とか、電話とか申すものが出来て、

こ
斯うした場合によ^{ばあい}く利用^{りよう}されるそうでございますが、こちらの世^せ
界^{かい}でする仕事^{しごと}も大^{だい}体^{たい}それに似^にたもので、た^ただ^だも^もう少^{すこ}し便^{べん}利^りな^なよ
うに思^{おも}われ^れま^ます。『思^{おも}え^えば通^{つう}ず^ずる……』それ^{それ}が^がい^いつ^つも私^{わたくし}ど^どもの
ヤリ口^{くち}な^なのでご^ござ^ざい^いま^まし^して……。

さ^さて^てそ^その^その^の際^{さい}私^{しかん}に感^きじ^じて^て来^きた^た通^{つう}信^{しん}の^の中^{なか}で^では、矢^や張^はり^り良^{おつと}人^との^のが^が一^{いち}
ばん^{ばん}力^{ちから}強^{つよ}く^くひ^ひび^びき^きま^まし^した。『そ^そな^なた^たは^はい^いよ^よ良^{かみ}人^みとし^して^て祀^{まつ}ら
れる^るこ^こに^にな^なり、多^た年^{ねん}連^{つれ}添^そつ^つた^た良^{おつと}人^ととし^して^て決^{けつ}して^て仇^{あだ}や^やお^おろ^ろそ^そか^かに
は^は考^{かん}え^えら^られ^れな^ない。し^しか^かも^もそ^その^の神^{じん}社^{じや}の^の所^{しよ}在^{ざい}地^ちは、あ^あの^の油^{あぶら}壺^{つぼ}
の^の対^{たい}岸^{がん}の^の隠^{かく}れ^れ家^がの^の跡^{あと}と^とや^やら、こ^この^の上^{うえ}と^とも^もし^しつ^つか^かり^りや^やつ^つて^て貰^{もら}い^いま^ま
す^すぞ……。』

兎^{とかく}角^{かく}して^{して}居^いる^る中^{うち}に、指^し導^{どう}役^{やく}の^のお^お爺^{じい}さん^{さん}か^から^ら御^ご注^{ちゅう}意^いが^があ^あり^りま^ま

した。――

『現界げんかいではいいよい御霊鎮めみたましずの儀ぎに取りかかった。そなたは

すぐにその準備したくにかかるように……。』

わたくしみこころ

私の身も心も、その時急ときゆうに引きしまるように覚えおぼました。

『これから自分じぶんはこのお宮みやに鎮しずまるのだ……。』

そう思おもつた瞬しゆん間に、私の姿わたくしがたはいずくともなく消きえて失うせて

了しまいました。

後あとでお爺さんじいから承うけたまわるところによると、私わたくしというものはその時とき

すっかり御幣ごへいの中なかに入はいつて了しまつたのだそうで、つまり御幣ごへいが自分じぶん

か、自分じぶんが御幣ごへいか、その境界さかいが少しも判わからなくなつたのでござい

ます。

その状態じょうたいがどれ位ぐらいつづいたかは自分じぶんには少しも判りわかませぬが、不思議ふしぎなことに、そうして居いる間あいだ、現世げんせの人達ひとたちが奏上そうじょうする祝詞のりとが手てに取るようにはつきりと耳みみに響ひびいて来るのでございます。その後何のちなんかいこ回斯わしきうした儀式ぎしきに臨のぞんだか知れませぬが、いつも同じ状おなじじょうたい態たいになるのでございまして、それは全く不思議ふしぎでございます。

不図ふと自分じぶんに返かえつて見みると、お爺さんじいも、又守護靈またしゅごれいさんも、先せ刻んこくの姿勢しせいのままで、並ならんで神壇しんだんの前まえに立たつて居おられました。

『これで俺わしも一と安心あんしんじや……。』

お爺さんじいはしんみりとした口調くちようで、ただそう仰おツしやられたのみでした。つづいて守護靈しゅごれいさんも口くちを開ひらかれました。――

『ここまで来るのには、御本人の苦勞も一と通りではありませぬが、蔭になり、日向になつて、親切にお導きくだされた神さま方のお骨折りは容易なものではございませぬ。決して決してその御恩をお忘れにならぬよう……。』

その折の私としましては、感極りて言葉も出でず、せき来る涙を払えもあえず、竜神さま、氏神さま、その外の方々に心から感謝のまことを捧げたことでした。

七十一、神馬

鎮座祭が済んでから私は一たん海の修行場に引き上げまし

た。それは小桜神社の祭神として實際の仕事にかかる前
こぎくらじんじや さいしん じつさい しごと まえ
 にまだ何やら心の準備が要ると考えましたからで……。

で、私は一生懸命深い統一に入り、過去の一切の羈絆を断
わたくし しょうけんめい ふか どういつ はい かこ さい きずな た

ち切ることによって、一層自由自在な神通力を恵まれるよう、
き そうじゆうじさい じんつうりき めぐ

心から神様に祈願しました。それは時間にすれば恐らく漸く一
こころ かみさま きがん じかん おそ ようや

刻位の短かい統一であつたと思いますが、心が引緊つている
ときらい みじ どういつ おも こころ ひきしま

故か、私とすれば前後にない位のすぐれて深い統一状態に入
せい わたくし ぜんご くらしい ふか どういつ じようたい はい

つたのでございました。畏れ多くも私として、天照大御神様、
おそ おほ わたくし あまてらすおおみかみさま

又皇孫命様の尊い御神姿を拝し奉つたのは実にその時が最
またこうそのみことさま とうと おすがた はいたてまつ じつ とき さい

初でございました。他にいろいろ申上げたいこともあります
いしょ ほか もうしあ

が、それは主に私一人に關係した靈界の秘事に属しますので、
おもわたくしひとり かんけい れいかい ひじ ぞく

しばらく控えさせて戴くことに致しましょう。

ただ一つここで御披露して置きたいと思ひますことは、神馬の件で……。つまり不図した動機から小桜神社に神馬が一頭新たに飼われることになつたのでございます。その経緯は斯うなのでございます。

わたくし私が深い統一から覚めた時に、思いも寄らず最前からそこに控えて待つていたのは、数間の爺やでございました。爺やは今日の鎮座祭の慶びを述べた後で、突然斯んなことを言い出しました。――

『姫さまが今回神社にお入りなされるにつけては、是非神馬が一頭欲しいと思ひまするが……。』

『ナニ神馬しんめ?』と私はびっくりしまして『そなたは又何またうしてそんな事ことを言い出すのじゃ……。』

『実は姫様が昔お可愛かわいがりになった、あの若月わかつき……あれがこちらの世界せかいに来て居いるのでござります。私は何回かあの若月わかつきに逢あつて居おりますので……。』

『若月わかつきなら私も一度こちらで逢あいました……。』

『もうお逢あいなされましたか……何なんとお早はやいことで……。が、それなら尚更なおさらのことでござります。是非ぜひあの若月わかつきを小桜こぎくらじん神社の神馬しんめに出世しゅっせさせておやり下くださいませ。若月わかつきがどんなに歡よろこぶか知れませぬ。又苟またかりそめ且ひきたにも一つの神社じんじやに一頭とうの神馬しんめもないとあつては何なんとなく引立ちませんでナ……。』

『そんな勝手な事が、できるかしら……。』

『できて、できなくても一応神様に談判して戴きます。これ位の願いが許されないとあつては、俺にも料簡がござります……。』

数間の爺やの権幕と言つたら大へんなものでした。

そこでとうとう私から指導役のお爺さんにお話しすると、意外にも産土の神様の方ではすでにその手筈が整つて居り、神社の横手に小屋も立派に出来て居るとの事でございました。それと知つた時の数間の爺やの得意さと言つたらありませんでした。『ソーれお見なされ姫様、他のことにかけては姫様がお偉い知識れぬが、馬の事にかけては矢張りこの爺やの方が一枚役者が上

でござる……。』

間もなく私は海の修行場を引き上げて、永久に神社の方^{ほう}に引き移^{うつ}りましたが、それと殆んど同時に馬も数間の爺^{じい}やに曳^ひかれて、頭^{あたま}を打振^{うちふ}り打振^{うちふ}り飲^いび勇^{ゆう}んで私の所^{ところ}に現^{あら}われました。それからずっと今日^{こんにち}まで馬は私の手元^{うまわたくしのもと}に元氣よく暮^{くら}して居^おります^が、ただこちらでは馬^{うま}がいつも神社^{じんじや}の境内^{けいない}につながれて居^いる訳^{わけ}ではなく、どこに行^いつて居^おつても、私^{わたくし}が呼^よべばすぐ現^でて来るだけ^でございます。さびしい時は私^{わたくし}はよく馬^{うま}を相手^{あいて}に遊^{あそ}びますが、馬^{うま}の方^{ほう}でもあの大きな舌^{おおした}を持^もつて来^きて私の顔^{かお}を舐^なめたりします。それはまことに可愛^{かわい}らしいものでございまして……。

それから馬^{うま}の呼名^{よびな}でございますが、私^{わたくし}は予^よての念願^{ねんがん}どおり、

わかつき あらた
若月を改めて、こちらでは鈴懸と呼ぶことに致しました。私
が神社に落ちついてから、真先きに訪ねてくれたのは父だの、
母だの、良人だのでしたが、私は何は措いても先ずこの
鈴懸を紹介しました。その際誰よりも感慨深そうに見え
たのは矢張り良人でございました。良人はしきりに馬の鼻面を
撫でてやりながら『汝もとうとう出世して鈴懸になつたか。
イヤ結構結構！俺はもう呼名について反対はせんぞ……
』そう言つて、私の方を顧みて、意味ありげな微笑を漏したこ
とでございました。

七十二、神社のその日その日

まえもうしあ
 前申 上げましたように、兎も角も私は小桜神社を預かる
 身となつたのでございますが、それから今日まで引きつづいて
 ざつと二百年、考へて見れば随分永いことでございます。私の
 つとめ
 任務というのはごく一と筋のもので、従つて格別取り立てて吹
 いちよう
 聴 するような珍らしい話の種とてもありませんが、それでも
 なが つきひ あいだ なに か あと あと
 この永い星霜の間には何や彼やと後から後からさまざまの事件が
 わ
 湧いてまいり、とてもその全部を御伝へする訳にもまいりませぬ。
 なか またげんせ ひとたち いま おも
 中には又現世の人達に、今ここで御漏らししてはならないこと
 すこ
 も少しはあるのでございまして……。

で、いろいろと考へました末、これからあなた方に幾分か御

さんこう 参考になりそうな事柄だけを拾い出して御話しをいたし、そ

ろそろこの拙き通信を切り上げさせて戴こうと存じます。

と 取り敢えず祭神となつてからの生活の変化と言つたような

てん かんたん 簡単に申上げて置こうかと存じます。御承知の通り、

わたくしごと だいたいうえ 大体上の神界と下の人間界との中間に立ちて御

とりつ 取次ぎを致すのでございますが、それでも相当に氣骨が折れま

して、うつかりして居ればどんな間違をするか知れません。修

ようじだい 行時代には指導役の御爺さんが側から一々面倒を見てく

ださいましたから楽でございましたが、だんだんそうばかりも行

かなくなりました。『汝には神様に伺うこともちゃんと教えて

あるから、大概の事は自分の力で行らねばならぬぞ……。』そ

う言いわれるのでございます。又私またくしとしても、いつまでお爺じいさんにばかりお縋すがりするのもあまりに意気いき地じがないように感かんじましたので、よくよくの重じゆう大だい事じでもなければ、めつたに御相談ごそうだんはせぬことに覚悟かくごをきめました。

で、私わたくしとして真先まつさきに工夫くふうしたことは一日いちにちの区画くぎりを附つけること
でございました、本ほん来らいからいえばこちらの世界せかいに昼夜ちゆうやの区別くべつ
はないのでございますが、それでは現界げんかいの人達ひとたちと接せつするの
にひどく勝手かつてが悪わるく、どうにも仕方しかたがございませぬ。何なにしろ人にん
間界かんかいの方ほうでは朝あさは朝あさ、夜よるは夜よるとちゃんと区画くぎりをつけて仕事しごとをし
て居いるのでございますから……。

乃そこで、私わたくしの方ほうでもそれに調子ちようしを合あわせて生活せいかつするように致いた

し、丁度^{ちやうどげんせ}現世^{ひとたち}の人達^{あさお}が朝起きて洗面^{せんめん}をすませ、神様^{かみさま}を礼^ら
 拝^{いはい}すると同じ^{おな}ように、私も朝になれば齋戒^{さいかい}沐浴^{もくよく}して、天^{あまて}
 照大御神様^{たてまつ}をはじめ奉り、皇孫^{こうそん}命^{のみこと}様^{さま}、竜神^{りゅうじん}様^{さま}、又^{また}
 産土神^{うぶすな}様^{さま}を礼^{らい}拝^{はい}し、今日^{きよう}一日^{いちにち}の任務^{つとめ}を無事に勤めさせて下^{くだ}
 さいますようにと祈願^{きがん}を籠めることにしました。不思議^{ふしぎ}なことに
 そんな場合^{ばあい}には、いつも額^{ぬかづ}いている私の頭^{わたくしあたま}の上^{うへ}で、さらつと幣^{ぬさ}の
 音^{おと}が致します。その癖眼^{くせめ}を開^あけて見^みても、別^{べつ}に何も見^みえはしませ
 ぬ。恐^{おそ}らく斯^こうして神界^{しんかい}から、人知^{ひとし}れず私の軀^{わたくしからだ}を浄^{きよ}めて下^{くだ}さる
 のでございましょう……。

夜^{よる}は夜^{よる}で、又^{また}神様^{かみさま}に御礼^{おれい}を申^{もう}上^{しあ}げます。『今日^{きよう}一日^{いちにち}の仕事^{しごと}
 を無事^{ぶじ}に勤^{つと}めさせて戴^{いた}きまして、まことに難有^{ありがと}うございました：

…。『その気持は別に現世の時と些しも異りはしませぬ。兎に角これで初めて重荷が降りたように感じ、自分に戻つて寛ぎますが、ただ現世と異うのは、それから床を敷いて寝るでもなく、たつたひとりで懐かしい昔の思い出に耽つて、しんみりした気分に浸る位のものでございます。

兎に角斯うして一日を区画つて働くことは指導役のお爺さんから大へんに褒められました。『よくそれ丈の考えがついた。それでこそ任務が立派に果される……。』そう仰しやつて戴いたのでございます。

ナニ参拝人の話をいたせと仰つしやるか……宜しうございませ。私もそのつもりで居りました。これからポツポツ想い出して

その御話おはなしをして見ることに致いたしましょう。

七十三、参拝者の種類

神社じんじやの参拝者さんぱいしやと申もうしても、その種類しゆるいはなかなか沢たくさ山さんでございます。近年きんねんは敬神けいしんの念ねんが薄うすらぎました故せいか、めつきり参拝者さんぱいしやの数かずが減へり、又熱心またねっしんさも薄うすらいだように感じかんられますが、昔むかしは大そう真剣しんけんな方かたが多おほかつたものでございます。時勢じせいの变化へんかはこちらから観みて居いると実じつによく判わかります。神霊しんれいの有あるか、無ないかもあやふやな人達ひとたちから、単たんに形式的けいしきてきに頭あたまを低さげてもらいまして、ドーにも致いたし方かたがございませぬ。神詣かみまう

では矢張り真^ま心^{こころ}一つが資本でございます。たとえ神社^{じんじや}へは参詣^{さんけい}せずとも、熱心^{ねっしん}に心で念じてくだされば、ちやんとこちらへ通^{つう}ずるのでございますから……。

さんばいしや なか

参拝者^{さんぱいしや}の中で一ばんに数^{かず}も多く、又一ばんに美^{うつく}しいのは、矢

張り何^{はなん}の註^{ちゅうもん}文^{ぶん}もなしに、御礼^{おれい}に來^こらるる方々^{かたがた}でございまし

よう。『毎日^{まいにち}安泰^{あんたい}に暮^{くら}させていただきまして誠^{まこと}に難有^{ありがと}うござ

います。何卒^{なにとぞ}明日^{あす}も無事^{ぶじ}息災^{そくさい}に過^{すご}せますよう……。』昔^{むかし}はこん

なあつさりしたのが大^{たい}そう多^{おほ}かつたものでございます。殊^{こと}に私^{わたくし}が

神^{かみ}に祀^{まつ}られました当座^{とうざ}は、海嘯^{つなみ}で助^{たす}けられた御礼詣^{おれいまい}りの人々^{ひとびと}

で賑^{にぎわ}いました。無論^{むろん}あの海嘯^{つなみ}で相^{そう}当^{とう}沢山^{たくさん}の人命^{じんめい}が亡^{ほろ}びたの

でございますが、心掛^{こころがけ}の良^よい遺族^{いぞく}は決^{けつ}して恨^{うら}みがましいこと

を申さず、死ぬのも皆^{みな}寿^{じゆう}命^{めい}であるときらめて、心^{こころ}から御^お礼^{れい}
 を述^のべてくれるのでした。私^{わたくし}として見^みれば、自^じ分^{ぶん}の力^{ちから}一つで助^{たす}け
 た訳^{わけ}でもないのをごさいますから、そんな風^{ふう}に御^お礼^{れい}を言^いわれると
 却^{かえ}つて氣^きの毒^{どく}でたまらず、一層^{そうみ}身^みを入^いれてその人^{ひと}達^{たち}を守護^{しゅご}して
 上^あげたい氣^き分^{ぶん}になるのでした。
 斯^こう言^いつた御^お礼^{れい}詣^{まい}りに垂^ついで多^{おほ}いのは病^{びよう}氣^き平^{へい}癒^ゆの祈^き願^{がん}、就^{なかん}
 中^{ずく}小^こ供^{ども}の病^{びよう}氣^き平^{へい}癒^ゆの祈^き願^{がん}でございます。母^ぼ性^{せい}愛^{あい}ばかりはこ
 れは全^{まった}く別^{べつ}で、あれほど純^{じゆん}な、そしてあれほど力^{ちから}強^{つよ}いものは
 めつたに他^{ほか}に見^み当^{あた}りませぬ。それは実^{じつ}によく私^{わたくし}の方^{ほう}に通^{つう}じてまい
 ります。——が、いかに依^{たの}まれましても人^{にん}間^{げん}の寿^{じゆう}命^{めい}ばかり
 は何^どうにもなりませぬ。随^{ずい}分^{ぶん}一^{しん}心^{ふらん}不^ふ乱^{らん}になつて神^{かみ}様^{さま}に御^お継^{すが}り

するのでございますが、死ぬものは矢張り死んで了います。そう
 した場合に平生心懸のよいものは、『これも因縁だから致
 方がございませぬ……。』と言つて、立派にあきらめてくれま
 すが、中には随分性質のよくないのがない訳でもございませぬ。
 『あんな神様は駄目だ……。幾ら依んだつて些つとも利きはしな
 い……。』そんな事を言つて挨拶にも来ないのです。それが又
 よくこちらに通じますので……。矢張り人物の善悪は、うま
 く行つた場合よりも拙く行つた場合によく判るようでございませぬ。
 次に案外多いのは若い男女の祈願……。つまり好いた同志が
 是非添わしてほしいと言つたような祈願でございませぬ。そんなの
 は篤と産土神様に伺いまして、差支のないものにはでき

だはなしまと
 る丈話が纏まるように骨を折つてやりますが、ひよつとすると、
 さいし おとこ しば
 妻子のある男と一緒にいたいとか、又人妻と添はしてくれと
 か、随分道ならぬ、無理な註文もございます。無論私とし
 てはそんな祈願を受附けないばかりか、次第によれば神様に申
 うしあ みせしめ くだ いただ
 上げて懲戒を下して戴きします。もぐりの流行神なら知
 らぬこと、苟くも正しい神として斯んな祈願に耳を傾けるものは
 ぜつたい な おも よろ
 絶対に無いと思えば宜しいかと存じます。
 ほか じぎよう せいこう きがん さいなんよ
 その外には事業成功の祈願、災難除けの祈願等いろいろ
 ろございます。これは何れの神社でも恐らく同様かと存じま
 す。人間はどんなに偉くても随分と隙間だらけのものであり、
 またずいぶん き よわ
 又随分と気の弱いものでもあり、平生は大きなことを申して威

張ばつて居おりまして、まさかの場ばあい合あひには手ても足あしも出ではしませぬ。
 無むろんかみかみ神かみの援たすけ助たすけにも限かぎりはありますが、しかし神かみの援たすけ助たすけがあるのと
 無ないのでは、そこそこに大たいへんな相そう違ちがひがでできます。もともと神しん霊れい
 界かいありての人間にんげん界かいなのでござございますから、今いま更さら人間にんげんが旋つ
 毛むを曲まげて神かみ様さまを無む視しするにも及およびますまい。神かみ様さまの方ほうでは
 いいつもチャーンとお膳ぜん立だてをして待まつて居いて下くださるのでござございま
 す。

それからモひとーもう一あつ申お上おげて置おきたいのは、ああの願がん掛がけ……つ
 ままり念ねん入いりの祈き願がんでござございまして、これは大たいてい人ひとの寢ね鎮しずまつた
 真ま夜よ中なかのものかぎと限かぎつて居おります。そうそうした場ばあい合あひには、むろん私わたくしの
 方ほうでもよく注ちゆう意いういしてきあいて上あげ、夜よ中なかであるから良いけないなど

とは決して申しませぬ。現世でいうなら丁度急病人に呼

び起されるお医者様と言つたところでございましょうか……。

まだまだ細かく申したら際限もありませぬが、参拝者の種

類はざつと以上のようところでございましょう、これから

ふたみつわたくして二つ三つ私の手にかけて実例をお話して見ることに致しますが、

その前にちよつと申上げて置きたいのは、それ等の祈願を聴く

場合の私の気持でございます。ただぼんやりしていたのでは聴き

漏しがありますので、私は朝になればいつも深い統一状態に

入り、そしてそのまま御弊と一緒にたうのでございます。

その方が参拝者達の心がずつとよく判るからでございます。

つまり私の二百年間のその日その日はいつも御弊と一体、夜分

さんばいしやとだえ
参拝者が杜絶た時分になつて初めて自分にかえ
ると言つた塩梅なのでございます。
はんばい

ではこれからお約束の事例に移ります……。

七十四、命乞い

ここに私が神社に入つてから間もなく手にかけて事件がござ
いますから、あまり珍らしくもありませぬが、それを一つお話し
いたして見ましよう。それは水に溺れた五歳位の男の児の生命を
助けたお話でございます。
たすはなし

その小供は相当地位のある人……たしか旗本とか申す身分
こどもそうとうちいひと

ひとせがれ
 の人の悴でございました、平生は江戸住いなのですが、お附きの
 じよちゆう
 女中と申すのが諸磯の漁師の娘なので、それに伴れられ
 てこちらへ遊びに来ていたらしいのでございます。丁度夏のこ
 とでございましたから、小供は殆んど家の内部に居るようなこと
 はなく、海岸へ出て砂いじりをしたり、小魚を捕えたりして
 遊びに夢中、一二度は女中と一緒に私の許へお詣りに来た
 こともありました、普通なら一々参拝者を氣にとめることもな
 いのですが、右の女中と申すのが珍らしく心掛のよい、
 しんじんあつこ
 信心の熱い娘でございましたから、自然私の方でも目を掛ける
 ことになったのでございます。現と幽とに分れて居りましても、
 人情にかわりはなく、先方で熱心ならこちらでもツイそ

の真心まごころにほだされるのでございます。

すると或る日あひ、この小供こどもの身に飛とんでもない災難さいなんが降ふつて湧わ

いたのでございます。御承知ごしょうちの方かたもありましようが、三崎みさきの西に

海岸しかいがんには巖いわで囲かこまれた水溜みずたまりがあちこちに沢山たくさんありまして、

土地とちの漁師りようしの小供達こどもたちはよくそんなところで水泳みずおよぎを致いたして

居おります。真黒まっくろく日ひに焦やけた軀からだを躍おどり狂くるわせて水みずくぐりをして

いるところはまるで河童かつぱのよう、よくあんなにもふざけられたも

のだと感心かんしんされる位くらいでございます。江戸えどから来きている小供こどもはそ

れが羨うらやましくて耐たまらなかつたものでございましょう、自分じぶんでは泳およげ

もせぬのに、女じよちゆう中ちゆうの不在るすの折おりに衣服きものを脱ぬいで、深い水溜みずたまり

の一つひとつに跳とび込こんだから耐たまりませぬ。忽たちまちブクブクと水底みずそこに沈しず

んで了しまいました。しばらく過すぎてからその事ことが発見はっけんされて村むらじ

中ゆうの大騒おおさわぎとなりました。何なにしる附近ふきんに医師いしらしいものは

居いない所ところなので、漁師りようしたち達が寄よつてたかつて、水みずを吐はかせたり、

焚火たきびで暖あためたり、いろいろ手てを尽つくしましたが、相当そうとう時刻ときが経たつ

ている為ために何どうしても氣息いきを吹き返かえさないのでした。

いよいよ絶望ぜつぼうと決きままった時ときに、私の許わたくしもとへ夢中むちゆうで駆かけつけた

のが、例れいのお附つきの女じよちゆう中ちゆうでございました。その娘こはまるで半はんき

狂乱きやうらん、頭髮かみを振り乱みだして階段かいだんの下もとに伏ふしまろび、一生懸命しよけんめい

泣なき乍なら祈願きがんするのでした。――

『小桜姫様こぎくらひめさま、どうぞ若様わかさまの生命いのちを取りとめて下くださいませ：

。私わたくしの過失おちで大切だいじの若様わかさまを死しなせて了しまつては、ドーあつても

この世よに生き永ながらえて居おられませぬ。たとえ私の生命いのちを縮ちぢめまし
ても若様わかさまを生いかしていただきます。小供こどもの時分じぶんから信心しんじんして
居おわたくしでございます、今度こんどばかりは是非私の願ねがいをお聴きき入れ下
さいませ……。』

わたくしほう　こころ　き　どく　おも
私の方でも心から氣の毒に思いましたから、時ときを移うつさず一生懸
命んめいになつて神様かみさまに命乞いのちごいの祈願きがんをかけましたが、何分なにぶんに
も相当手遅れになつて居おりますので、神界しんかいから、一応おうは駄目
であるとお告つげでございました。しかし人間にんげんの至誠しせいと申もうすもの
は、斯こうした場合ばあいに大した働きをするものらしく、くしびな神かみの
力ちからが私から娘むすめに、娘から小供こどもへと一道だうの光ひかりとなつて注そそぎかけ、と
うとう死しんだ筈はずの小供の生命いのちがとりとめられたのでございました。

まった にんげん 全く人間はまごころ一つが肝要で、一心不乱になりますと、からだ 軀
 の内部から何やら一種の靈氣と申すようなものが出て、普通では
 とてもできない不思議な仕事をするらしいのでございます。
と 兎に角死んだ筈の小供が生き返ったのを見た時はみ 私自身も
こころ 心から嬉しうございました。まして当人はよほど有難かつたら
さつそく しく、早速さまざまのお供物を携えてお礼にまいったばかりで
 なく、その後も終生私の許へ参拝を欠かさないのです。
 こんなのは善良な信者の標本と言つても宜しいのでござい
 ましょう。

七十五、入水者の救助

今度は一つ夫婦のいさかいから、危く入水しようとした女
 のお話を致しましょうか……。大たい夫婦争いにあまり感心し
 たものは少のうございまして、中には側で見ている方が却つて心
 苦しく、覚え顔を背けたくなる場合もございます。これな
 ども幾分かその類でございまして……。

或る日一人の男が蒼白な顔をして、慌てて社の前に駆けつけま
 した。何事かしらと、じつと見て居りますと、その男はせか
 せかとはずむ呼吸を鎮めも敢えず、斯んなことを訴えるのでした。

『神さま、何うぞ私の一生の願いをお聴き届け下さいませ……。』

わたくしにようぼうめ 私わたくしの女房にゆうすい奴めが入にゆうすい水すいすると申もうして、家出いえでをしたきり皆かいもく目行ゆ
 方かが判わからないのでございます。神様かみさまのお力ちからでどうぞその足留あしどめ
 をしてくださいますよう……。実際じっさいのところ私わたくしはあれに死しなれ
 と甚はなはだ困こまりますので……。私わたくしが他所よそに情婦おんなをつくりましたのは、
 あれはホンの当座とうざの出来心できごころで、心しんから可愛かわいいと思おもっているのは、
 矢張りやは永年ながねん連れ添そつて来た自家きうちの女房にようぼうなのでございます：
 …。ただ彼女あれが余あんまり嫉妬やきもちを焼やいて仕方しかたがございせんから、
 ツイ腹はら立だちまぎれに二つ三つ頭あたまをどやしつけて、貴様きさまのような奴やつ
 はくたばつて了しまえと呶鳴どなりましたが、心の底こころは決けつしてそうは思おもつ
 ていないのでございます……。あんなことを言いったのは私わたくしが重ちゆう
 畳じよう悪わるうございました。これに懲こりまして、私わたくしは早速さつそく情婦おんなと手て

を切りまします……。あの大切な女房に死なれては、私はもう

この世に生きてゐる甲斐がありませんね……。』

この男は三崎の町人で、年輩は三十四五の分別盛り、そ

れが涙まじりに斯んなことを申すのでございますから、私は可笑

しいやら、氣の毒やら、全く呆れて了いました。でも折角の依

みでございますから、兎も角も家出した女房の行方を探つて

見ますと、すぐその所在地が判りました。女は油ヶ壺の断崖の上

に居りまして、しきりに小石を拾つて袂の中に入れて居るのは、

矢張り本当に入水するつもりらしいのでございます。そし

てしくしく泣きながら、斯んなことを言つて居りました。――

『口惜しい口惜しい！ 自分の大切な良人をあんな女に寝たら

れて、何で黙つて置けるものか！ これから死んで、あの女に憑
 依いて仇を取つてやるからそう思つて居るがよい……。』

平生はちよいちよい私のところへもお詣りに来る、至つて温和
 な、そして顔立もあり悪くはない女なのでございますのに、
 嫉妬の爲めには斯んなにも精神が狂つて、まるきり手がつけられ
 ないものになつて了うのでございます。

見るに見兼ねて私は産土の神様に、氏子の一人が斯んな事
 情になつて居りますから、何うぞ然るべく……と、お願いしてや
 りました。寿命のない者は、いかにお願いしてもおきき入れ
 がございませぬが、矢張りこの女にはまだ寿命が残つて居た
 のでございましょう、産土の神様の御眷族が丁度神主の

ような姿すがたをしてその場ばに現あらわれ、今いましも断崖がけから飛び込こまうとす
 る女にようぼう房まえの前に両手りようてを拡ひろげて立ちたはだかつたのでございます。
 不意ふいの出来事できごとに、女にようぼう房おもは思おもわずキヤツ！ と叫さけんで、地面じべた
 に臀餅しりもちをついて了しまいましたが、その頃ころの人間にんげんは現いま今の人間にんげん
 とは異ちがいまして、少すこしは神かみごころがございますから、この女おんなもす
 ぐさまそれと氣きがついて、飛とんだ心得こころえ違ちがいをしたと心こころから悔悟かいご
 して、死しぬることを思おもいとどまつたのでございました。
 一方ぽつたくしほう私わたしの方はたではそれとなく良人おつとの心こころに働はたらきかけて、油あぶら壺つぼの断が
 崖けの上うえに導みちびいてやりましたので、二人ふたりはやがてバツタリと顔かおと顔かお
 を突つき合あわせました。

『ヤレヤレ生いきていてくれたか……何なんと難有ありがたいことであらう：

∴。』

『これというのも皆神様のお蔭……これから仲よく暮しましよ

う……。』

『俺が悪かった、勘弁してくれ。』

『お前もこれからわたしを可愛がって……。』

二人は涙ながらに、しがみついていつまでもいつまでも離れよ

うとしないのでした。

その後男はすっかり心を入れかえ、村人からも羨まるほど

夫婦仲が良くなりました。現在でもその子孫はたしか彼地に

栄えて居る筈でございます……。

七十六、生木を裂れた男女

あまり多愛たあいのないお話はなしばかりつづきましたので、今度は少しばかり複雑こみいったお話はなし……一つ願掛けのお話はなしを致して見みましょう。この願掛けにはあまり性質たちの良よいのは少すくなございます。大たいていは男に情婦おんなができて夫婦仲ふうふなかが悪わるくなり、嫉妬やきもちのあまりその情婦おんなを呪のろい殺ころす、と言いったのが多おほいようで、偶たまには私わたくしの所ところへもそんなのが持もち込まれることもあります。でも私わたくしとしては、全然ぜんぜんそう言いった厭いやらしい祈願きがんにはかかあり合あわないことにして居おります。呪咀のろいが利きく神かみは、あれは又別またつで、正ただしいものではないのでございませぬが、生憎あいにく話はなしの種子たねとしてあるは或あるはその方ほうが面おも白しろいか存ぞんじませぬが、

わたくしにもと
私の手許には一つもその持ち合わせがございませぬ。私の存じて
居りますのは、ただきれいな願掛けのお話ばかりで、あまり面
白くもないと思います。一つだけ標本として申上げること
に致しましょう……。

それは或る鎌倉の旧家に起りました事件で、主人夫婦は漸
く五十になるか、ならぬ位の年輩、そして二人の間にたった一
人の娘がありました。母親が大へん縹緖よしなので、娘もそれ
に似て鄙に稀なる美人、又才気もはじけて居り、婦女の道一と通
りは申分なく仕込まれて居りました。此が年頃になったの
でございしますから、縁談の口は諸方から雨の降るようにかか
りました。が、俚諺にも帯に短かし褌に長しとやら、なかなか思

う壺つぼにはまったのがないのでございました。

すると或あ時とき、鎌倉かまくらのある所ところに、能狂言のうきようげんの催もようしがありま

して、親子三人連れでその見物けんぶつに出掛けました折おり、不図間近ふとまじかの

席せきに人品じんぴんの賤いやしからぬ若者わかものを見かけました。『これなら娘むすめの

婿むことして恥はずかしくない……。』両親りょうしんの方ほうでは早くもそれに目め

星ぼしをつけ、それとなく言葉ことばをかけたりました。娘むすめの方ほうでも、ま

んざら悪い氣持わるきもちもしないのでした。

それから早速人さつそくひとを依たのんで、だんだん先方せんぼうの身元みもとを査しらべて見み

ると、生憎男あいにくおとこの方ほうも一人息子ひとりむすこで、とても養子ようしには行ゆかれない身み

分ぶんなのでした。これには双方そうほうとも大へんに困こまり抜き、何とか良よ

い工夫くふうはないものかと、いろいろ相談そうだんを重ねかさねましたが、もとも

おとこほう おんなき
と男の方でも女が気に入って居り、又女の方でも男が好きだった
ものでございますので、最後に、『二人の間に子供ができたならそ
れを与る』という約束が成り立ちまして、とうとう黄道吉
日を選んでめでたく婿入りということになったのでした。

夫婦仲は至つて円満で、双方の親達も大そう悦びま
した。これで間もなく懐胎つて、男の児でも生れれば、何のこと
はないのでございますが、そこがままならぬ浮世の習いで、一年
経つても、二年過ぎても、三年が暮れても、ドウしても小供が生
れないので、婿の実家の方ではそろそろあせり出しました。『こ
の分で行けば家名は断絶する……。』——そう言つて騒ぐので
した。が、三年ではまだ判らないというので、更に二年ほど待つ

ことになりましたが、しかしそれが過ぎても、矢張り懐胎の氣配
 もないので、とうとう実家では我慢がし切れず、止むを得ないか
 ら離縁して帰つてもらいたい、ということになってしまいました。
 二人の仲はとても濃かで、別れる氣などは更になかったのでご
 ざいますが、その頃は何よりも血筋を重んずる時代でございまし
 たから、お婿さんは無理無理、あたかも生木を裂くようにして、
 実家へ連れ戻されて了つたのでした。今日の方々は随分無
 理解な仕打と御思いになるか存じませぬが、往時はよくこんな事
 があつたものでございまして……。

と 兎に角斯うして飽きも飽かれもせぬ仲を割かれた娘の、その後
 の歎きと言つたら又格別でございました。一と月、二た月と経

つ中^{うち}に、どことはなしに軀^{からだ}がすっかり衰^{おとろ}えて行き、やがて頭腦^{あたま}が少し^{すこ}おかしくなつて、良人^{おとと}の名^なを呼^よびながら、夜中^{よなか}に臥床^{ふしどこ}から起き出^だしてあるきまわるようなことが、二度^ども三度^ども重^{かさ}なるようになつて了^{しま}いました。

保養^{ほよう}の爲^{ため}に、この娘^{むすめ}が一人^{ひとり}の老女^{ろうじよ}に附添^{つきそ}われて、三崎^{みさき}の遠^{とお}い親戚^{しんせき}に當^{あた}るもの離座敷^{はなれざしき}に引越^{ひっこし}してまいりましたのは、それから間^まもないことで、ここではしなくも願掛^{がんが}けの話^{はなし}が始^{はじ}まるのでございます。

七十七、神の申子

或る夜社頭の階段の辺に人の気配が致しますので、心を鎮め
 てこちらから覗いて見ますと、其処には二十五六の若い美しい女
 が、六十位の老女を連れて立つて居りましたが、血走った眼に
 洗い髪をふり乱して居る様子は、何う見ても只事とは思われな
 いのでした。

女はやがて階段の下に跪いて、こまごまと一伍一什を物語つ
 た上で、『何卒神様のお力で子供を一人お授け下さいませ。そ
 れが男の子であろうと、女の子であろうと、決して勝手は申しま
 せぬ……。』と一心不乱に祈願を籠めるのでした。

これで一通り女の事情は判ったのでございますが、男の方
 を查べなければ何とも判断しかねますので、私はすぐ其場で一

層深い精神統一状態に入り、仔細にその心の中まで探つて見ました。すると男も至つて志操の確かな、優さしい若者で、彼の女などには目もくれず、堅い堅い決心をして居ることがよく判りました。

これで私の方でも真剣に身を入れる氣になりましたが、何分にも斯んな祈願は、まだ一度も手掛けたことがないものでございまして、何うすれば子供を授けることができるのか、更に見当がとれませぬ。拠なく私の守護靈に相談をかけて見ましたが、あちらでも矢張りよく判らないのでございました。

そうする中にも、女の方では、雨にも風にもめげないで、初夜頃になると必らず願掛けにまいり、熱誠をこめて、早く子供を

授^{さず}けていただきたいとせがみます。それをきく私は全く気が^きで
ないのでございました。

とうとう思^し案^{あん}に余^ありまして、私は指^し導^{どう}役^{やく}のお爺^{じい}さんに御^ご相^{そう}談^{だん}をかけますと、お爺^{じい}さんからは、斯^こんな御^ご返^{へん}答^じがまいりまし
た。――

『それは結^け構^{こう}なことであるから、是非^{ぜひ}子供^{こども}を授^{さず}けてやるがよい。
但^{ただ}しその方^{ほう}法^{ほう}は自分^{じぶん}で考^{かん}えな^がければならぬ。それがつまり修^{しゆぎ}
行^{よう}じゃ。こちらからは教^{おし}えることはできない……。』

私^{わたし}としては、これは飛^とんでもないことになつたと思^{おも}いました。
兎^とに角^{かく}相^{あい}手^てなしに妊^{にん}娠^{しん}しないことはよく判^{わか}つて居^おりますので、
とりあへずわたくしねんりき
不^ふ取^と敢^{かん}私^{わたし}は念^{ねん}力^{りき}をこめて、あの若^{わか}者^{もの}を三^み崎^{さき}の方^{ほう}へ呼^よび寄^よせ

ることに致いたしました……。つまり男おとこにそう思おもわせるのでござい
ますが、これはなかなか並なみ大たいていの仕事しごとではないのでございま
て……。

さいわ 幸さいわいにも私わたくしの念ねん力りきが届とどき、男おとこはやがて実家さとから脱ぬけ出だして、

ちよいちよい三崎みさきの女おんなの許もとへ近ちかづくようになりました。乃そこで今度こんど

は産うぶ土すなの神様かみさまに願ねがいして、その御計おはからいで首尾しゅびよく妊にん娠しん

させて戴いたきましただが、これがつまり神かみの申もう子しごと申もうすものでござ

いましょう。只ただその詳くわしい手続てつづきは私わたくしにもよく判わかりかねますので

……。

これまで先しず仕事ごとの一段落だんらくはつきましたようなものの、ただこ

の俣まに棄すて置おいては、折角せつかくの願掛がんがけが協かなったのか、協かなわらないの

かが、さつぱり人間の^{にんげん}方^{ほう}に判^{わか}りませんので、何とかしてそれを
 先^{せん}方^{ほう}に通^{つう}じさせる工夫^{くふう}が要^いるのでございます。これも指^し導^{どう}役^{やく}
 のお爺^{じい}さん^{さん}から教^{おし}えられて、私^{わたくし}は女^{おんな}が眠^{ねむ}つてい^いる時^{とき}に、白^{しろ}い珠^{たま}を
 かみさま^{さま}から授^{さず}かる夢^{ゆめ}を見^みせてやりまし^した。御^ご存^{ぞん}じの通^{とお}り、白^{しろ}い珠^{たま}
 はつまり男^{おとこ}の児^この徴^{しるし}号^{ごう}なのでございま^まして……。

女^{おんな}はそれからも引^ひきつづいてお宮^{みや}に日^{にっ}参^{さん}しまし^した。夢^{ゆめ}に見^みた
 白^{しろ}い玉^{たま}がよほど気^きがかりと見^みえまして、いつもいつも『あれは何^ど
 ういう訳^{わけ}でございますか？』と訊^{たず}ねるのでございま^ましたが、幽^{ゆうめ}
 明^{いこう}交通^{つう}の途^{みち}が開^{ひら}けてい^いない為^{ため}に、こればかりは教^{おし}えてやる
 ことはできないので甚^{はなは}だ困^{こま}りました。——が、その中^{うち}、妊^{にん}娠^{しん}と
 い^いうことが次第^{しだい}に判^{わか}つて来^きたので、夫婦^{ふうふ}の歓^{よろこ}びは一^ひと通^{とお}りでなく、

三崎みさきに居いる間あいだは、よく二人ふたりで連つれ立だちてお礼れいにまいりました。

やかて月満つきみちて生うまれたのは、果はたして珠たまのような、きれいな男おとこの

児こでございしました。俗ぞくに神かみの申もうし子は弱よわいなどと申もうしますが、決けつ

してそのようなものではなく、この児こも立派りっぱに成人せいじんして、父ちちお

親やの実家じつかの後あとを継つぎました。私わたくしのところわたくしにまいる信者しんじゃの中なかで

は、この人達ひとたちなどが一番手堅ばんてがたかつた方ほうでございまして……。

×

×

×

×

斯こう言いつた実話じつわは、まだいくらでもございますが、そのおうわ

さは別べつの機おり会ゆづに譲ゆづり、これからごく簡かん単たんに神々かみがみのお受持うけもちにつ

きて、私わたくしの存ぞんじて居いるところを申もうし上あげて、一ひと先まずこの通つう信しん

を打ち切らせていただきとうございます。

七十八、神々の受持

神々のお受持と申しまして、これは私がこちらで実地に見たり、聞いたりしたところを、何の理窟もなしに、ありのまま申上げるのでございますから、何卒そのおつもりで書いて戴きます。こんなものでも幾らか皆さまの手がかりになれば何より本望でございます。

現世の方々が、何は措いても第一に心得て置かねばならぬのは、産土の神様でございましょう。これはつまり土地の御

守護しゅごに当あたらるる神様かみさまでございまして、その御本体ごほんたいは最初はじめから活いき通とおしの自然しぜん霊れい……つまり竜神様りゅうじんさまでございます。現げんに私しどもの土地とちの産土様うぶすなさまは神明様しんめいさまと申もう上げて居おりますが、矢張やはり竜神様りゅうじんさまでございまして……。稀まれに人霊じんれいの場合ばあいもあるようにお見受みうけしますが、その補佐ほさには矢張やはり竜神様りゅうじんさまが附ついて居おられます。ドーもこちらの世界せかいのお仕事しごとは、人霊じんれいのみでは何彼なにがにつけて不便ふべんがあるのではないかと存ぞんじられます。さて産土うぶすなの神様かみさまのお任務しごとの中なかで、何なにより大切たいせつなのは、矢張やはり人間にんげんの生死せいしの問題もんだいでございます。現世げんせの役場やくばでは、子供こどもが生うれてから初はじめて受附うけつけますが、こちらでは生うれるずっと以前いぜんからそれがお判わかりになつて居おりますように、何なんにしましても、一ひ

とり 人間が現世に生れると申すことは、なかなか重大な事
 とがら 柄でございますから、右の次第は産土の神様から、それぞ
 うえ かみさま とど 上上の神様にお届けがあり、やがて最高さいこうの神様のお手許ま
 たつ ても達するとの事でございます。申すまでもなく、生れる人間
 かな ひとり ひとり 守護霊が附けられますが、これも皆上の神
 い 界からのお指図で決められるように承つて居ります。
 さしず それから人間が歿なる場合にも、第一に受附けてくださるの
 にんげん なく ばあい だいい 第一に受附けてくださるの
 やは うぶすな かみさま 誕 生のみが決してそのお受
 が、矢張り産土の神様で、 誕生 のみが決してそのお受
 持ではないのでございます。これは氏子として是非心得て置
 ち かねばならぬことと存じられます。尤もそのお仕事はただ受附け
 くだ 下さるだけで、直接帰幽者をお引受け下さいますのは大國
 ちよくせつきゆうしや ひきう くだ 国

ぬしのみことさま

主命様でございます。産土神様からお届出がありますと、

おおくにぬしのみことさま

大国主命様の方では、すぐに死者の行くべき所を見定め、

てきとう

そしてそれぞれ適当な指導役をお附けくださいますので……。

しどうやく

指導役は矢張り竜神様でございます。人霊では、ややも

にんじようみ

すれば人情味があり過ぎて、こちらの世界の躰をするのに、あ

おもしろ

まり面白くないようでございます。私なども矢張り一人の竜

じん

神さんの御指導に預かったことは、かねがね申上げて居りま

とお

す通りで、これは私に限らず、どなたも皆、その御世話になるの

わたくしかぎ

でございます。つまり現世では主として守護霊、又幽界では

しゆ

主として指導霊、のお世話になるものとお思いになれば宜しう

ございます。

尚なお生死せいし以外いがいにも産土うぶすなの神様かみさまのお世話せわに預あずかることは数かず

 限りもぎございませぬが、ただ産土うぶすなの神様かみさまは言いわば万ばん事の切き

 りもり盛もりをなさる総受附そううけつけのようなもので、実じつ際さいの仕事しごとには皆みなそれ

 ぞれ専門せんもんの神様かみさまが控ひかえて居おられます。つまり病氣びょうきには病びょう

 気き直なおしの神様かみさま、武芸ぶげいには武芸専門ぶげいせんもんの神様かみさま、その外世界ほかせかい中ちゅう

 のありとあらゆる仕事しごとは、それぞれ皆受持みなうけもちの神様かみさまがあるの

 でございます。人間にんげんと申もうすものは兎角とかく自分の力ちから一つで何なんでもで

 きるようかんに考かんえ勝がちでございますが、実じつは大だいなり、小しょうなり、皆みな蔭かげ

 から神々かみがみの御力おちから添ぞえがあるのでございます。

 さすがに日本国にっぽんこくは神国しんこくと申もうされるだけ、外国がいこくとは異ちがつて、

 それぞれ名なの附ついた、尊とうい神社じんじやが到いたる所ところに見出みいだされます。それ

等の御本体を調べて見ますと、二た通りあるように存じます。

一つはすぐれた人霊を御祭神としたもので、檜原神宮、香

しいのみや、めいじじんぐう

椎宮、明治神宮などがそれでございます。

又他の一つは活

みさま、ごさいじん

神様を御祭神と致したもので、出雲の大社、鹿島神宮、霧

しまじんぐうなど

島神宮等がそれでございます。ただし、いかにすぐれた人

霊が御本体でありまして、その控えとしては、必らず有

力な竜神様がお付き遊ばして居られますように……。

いまさらもうしあ

今更申上ぐるまでもなく、すべての神々の上には皇孫

ことさま

命様がお控えになつて居られます。つまりこの御方が大地の

しんれいかい、しゅさいしん

神霊界の主宰神に在しますので……。更にそのモー一つ奥に

あまてらすおおみかみさま

は、天照大御神様がお控えになつて居られますが、それは高

ひか

かまがはら

天原……つまり宇宙の主宰神に在しまして、とても私ども

から測り知ることのできない、尊い神様なのでございます……。

神界の組織はざつと右申上げたようなところでございます。

これ等の神々の外に、この国には観音様とか、不動様とか、

その他さまざまなものがございしますが、私がこちらで実地に調べ

たところでは、それはただ途中の相違……つまり幽界の下層

に居る眷族が、かれこれ区別を立てているだけのもので、奥の

方は皆一つなのでございます。富士山に登りますにも、道はいろ

いろつけてございます。教えの道も矢張りそうした訳のものでは

なからうかと存じられます。では一と先ずこれで……。

(完結)

青空文庫情報

底本：「靈界通信 小桜姫物語」潮文社

1985（昭和60）年7月31日第1刷発行

1998（平成10）年7月31日第9刷発行

底本の親本：「靈界通信 小桜姫物語」心霊科学研究会出版部

1937（昭和12）年2月初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※横組み中のダブルミニユートには、底本では、JIS X 0213規格票の、縦書き用字形が用いられています。

入力：浅野和三郎・著作保存会（泉美、老神いさお、MUPさんら）

校正：POKEPEEK2011

2012年9月18日作成

2014年6月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

霊界通信 小桜姫物語

浅野和三郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>